

Digital_Dream!

睡眠タイム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

以前から考えていた『バンドリ×デジモン』のクロスオーバーです。
若し御時間があったら、お手柔らかに御願致します。

目次

予告 (Remake版)	1
第1部	
プロローグ2015	9
第1話 再会2020	17
第2話 電腦語り2020	49
第3話 星のカリスマ2020	65
第4章 白蝶の歌姫、白き竜と共に。	78
第5話 夕日の恐竜	94
第6話 蒼月と赤陽	113
第7話 青薔薇乱舞	125
第8話 希望と恐竜と笑顔の新ティマー	152
第9話 熊とミミックと常識人な新ティマー	170
ドン10話 ねこかあいどる	192
第11話 嫉妬の大号令	217
第12話 Route BLUE	236
第13章 海月とペンギンと青い迷宮心 (ラビリンスハート)	265
第14話 発酵恐竜2020	287
ドン15話 ちさとのみちもいっぱから	313
第16話 完全襲来2020	339
第17話 昆虫パーソナリティ2020	369
第18章 才女の受難、白の完全乱舞	388
第19話 進撃、発酵紅竜2020	430

予告（Remake版）

「私の名前は戸山香澄！」

花咲川女学園に通う高校2年生！

幼い頃、星の鼓動を聴いて以来、キラキラドキドキするものを探し、そして見つけたのがバンド！

世界は今、『大ガールズバンド時代』と呼ばれ、ガールズバンドが大流行しているの。

私も、Gt.のおたえこと花園たえ、Ba.のりみりんこと牛込りみ、そしてとある一件で知り合い、共に同じ共通の経験を持つDr.のさーやこと山吹沙綾、Key.の市ヶ谷有咲の5人で、『Poppin' Party』と言うバンドを組んでるんだ！

そして私達のポピパ以外にも、色んなバンドが人気を博している。

幼馴染5人組で組んだ王道ロックバンド、『Afterglow』

事務所に所属してるメンバーで組んだアイドルバンド、『Pastel*Palette』

1人1人の確かな実力に裏付けされたプロ顔負けの本格派ロックバンド、『Roselia』

世界を笑顔にすることを目標とした異色のバンド、『ハロー、ハッピーワールド！』

名門お嬢様学校「月ノ森女子学園」の1年生で結成されたヴァイオリンを交えたシンフォニックな曲を奏でるバンド、『Morphonica』

バンドをやったおかげで、こんなにもたくさんバンドと出会い、友達も増えて、本当にバンドと出会えて良かった。

そして、私。

ううん。

私を含めた5人の少女達には、もう一つ感謝している事がある。

それは私達5人にとって、とても大切な存在であり、嘗て一緒に冒険をし、そして再会を約束して別れたパートナーの存在。

5年の歳月が経った今でも、再会は出来ていないけど、私達5人は、あの日以来、『みんな』の事を忘れた事は無い。

再会を信じて、私達5人は今日もキラキラドキドキする毎日過ごしている。

そして何時もの様に、ライブハウス『CIRCLE』に集まった私達各6バンドの皆。

だけど。

何時もの日常は、突然壊れた。

『キシヤアアアアアアアアアアッ!!』
『グオオオオオオオオオオオオッ!!』
『キヤオオオオオオオオオオオッ!!』
『シエエエエエエエエエッ!!』

「な、何なのアレ!？」

「大きなクワガタに、緑色の怪獣!？」

「それに真つ黒な鳥さんに緑のヤドカリさんもいるよ!!」

でも特に驚いたのは、『あの世界』を冒険した私、有咲、紗夜さん、日菜さん、ましろちゃんの5人。

「有咲!! 紗夜さん!! 日菜さん!! ましろちゃん!! アレって…」

「嘘だろ…!? なんで『デジモン』がこの世界に!？」

「と、とりあえず皆さんを避難させないと!!」

「皆!! 危ないから逃げて!!」

「透子ちゃん!! つくしちゃん!! 伏せて!!」

パニックになる他の皆を守る為に、私達5人はそれぞれ行動を起す。

「みんな、大丈夫?」

「正直…少しキツイかな?」

「こんな時、アイツ等が今の私達を見たら、何て言うだろうな…」

「でも…だからって…」

「自分達だけ逃げるなんて事をしたら、皆に合わせる顔がないわよ…」

!!」

そして無情にも振り下ろされようとする魔の手。

「香澄!!」

「有咲ちゃん!!」

「紗夜(さん)(氷川さん)!!」

「日菜ちゃん(さん)!!」

「シロ(ましろちゃん)(しろちゃん)(倉田さん)!!」

誰もが絶望の様子を浮かべていたその時。

「メタルキャノン!!」

「シルクスレット!!」

「ティアーシユート!!」

「コロナフレイム!!」

「ベビーフレイム!!」

「ドルモン…?」

「ワームモン…?」

「…ルナモン?」

「本当にコロナモンなの…?」

「ハックモン…だよね?」

「香澄!! 大丈夫!」

「やつと会えたね…あーちゃん」

「紗夜…随分大きくなったね」

「よう日菜! 元気だったか?」

「久し振りだな、ましろ」

私達の前に現れ、ピンチを救ったのは、嘗て共に冒険をしたパートナー達。

「行くよ！ ドルモン!!」

「おっけー！ 香澄!!」

「ワームモン、久し振りで悪いけど、一緒に戦ってくれるか？」

「大丈夫だよ、あーちゃん」

「ルナモン…貴方の力を貸して!!」

「ええ勿論…。だって私は紗夜のパートナーだもん!!」

「コロナモン!! 久し振りに『るんっ』てしていくよー!!」

「おう、せっかくの再会がてら、一発決めてやるぜ!!」

「お願いハックモン!! 皆を守る為に私に力を貸して!!」

「無論だましろ。私は君の為なら、どんな時だって力になるさ」

「ドルモン進化！ ドルガモン!!」

「ワームモン進化！ ステイングモン!!」

「ルナモン進化！ レキスモン!!」

「コロナモン進化！ ファイラモン!!」

「ハックモン進化！ バオハックモン!!」

パートナーデジモン達との協力で、現れた敵デジモンを倒した私達5人。

「貴女達は一体、戸山さんや紗夜達とどういう関係なの？」

「紗夜先輩!! ルナモンをモフモフさせて下さい!!」

「お、おたえちゃん!」

「俺達は『デジタルモンスター』、通称『デジモン』って言う生き物で、香澄達のパートナーデジモンなんだ」

『デジタルモンスター?』

「うん。そして、私達5人は昔、ブイモン達と一緒に『デジタルワールド』を冒険した仲間なんです」

「そこから先は、私達と『彼』が話すわ」

「まりなさんに牛込先輩? 如何して此処に?」

今回の一件が切っ掛けで後日、私達5人とブイモン達の関係と過去を知った他のガールズバンドの皆。

「**「「大ガールズバンド時代?」」**」

「僕達は…ポピパ専属のマスコットデジモンになる!!」

「ルナモンと言ったわね…貴方も紗夜と同様、Roseliaに全てを懸ける覚悟はあるかしら?」

「紗夜…とってもカッコ良い…」

「俺もテンションが上がってくるぜ!!」

「ましろ…これが君の…いや、Morfonicaの音楽…素敵だな」

再会への喜び、新たな日常に胸を膨らませながら、キラキラドキドキな音楽を奏でるパートナーデジモンと私達。

「**●●●様!!** つい先程、私の配下のデジモンを現実世界の方にアライズさせました!!」

「トヤマ・カスミ…嘗てDigital Worldを救ったと言う
その実力、高みの見物とさせて貰うわ♪」

しかしその一方で、デジタルワールドと人間界の境界の壁に起きた
異変の影響で、私達の世界に次々とやってくるデジモン達。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『ギャオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『キシャアアアアアアアアアア!!』

『フハハハハ!!』

「マズイ!! よりにもよって完全体じゃねーか!!」

「……ドルガモンが戦っているのに……パートナーの私が逃げる訳には
いけないよー!」

「私達Roseliaの音楽を汚そうとするのなら……容赦しないわよ
……!!」

「よくしく! そつちがそうくるなら、こつちも同じ土俵でいつちや
うよく!!」

「自分の為だけに、月ノ森の皆を傷付けた貴方を…私は絶対に許さな
い!!」

そして、その一方で新たな出会いをする人達も…。

「貴方、若しかしてデジモンね!!」

「わわわわっ!! 一体君は何なの!?!」

笑顔の波状攻撃とそれに振り回される希望…。

「若しかしてお前…オイラの仲間なのか!？」

(あく、このデジモンもこころ達と同じタイプだな…)

邂逅する2匹の熊…。

「決めた!! 今日から俺はアネゴの子分になるぜ！」

「ちよっ…勝手に決めないでよ!!」

赤いメツシユと小さな恐竜…。

「私の事は如何でもいいから、貴女だけでも逃げて!!」

「駄目!! 目の前の傷付いている相手を見捨てて、自分だけ助かろうなんて…そんなの私には出来ないよ!!」

エゴサーチアイドルと白き聖なる獣。

「ブイモン。…貴方はRoselia…いえ、私に全てを懸ける覚悟はあるかしら？」

「友希那…うん。僕は…僕自身の全てを懸けるよ!!」

青薔薇の歌姫と可能性を秘めき青い小竜。

これ等の出会いは、双方にどのような影響を与えるのか？

今、ガールズバンドと電腦世界の生命体との物語が、幕を開ける。

第1部

プロローグ2015

これは、とある5人の少女達の冒険の物語。

舞台はデジモンと言う電腦世界の生命体達が存在するデジタルワールドと呼ばれる世界。

嘗てこの世界は、とある1体の悪のデジモンの存在によって平和が脅かされていました。

そんな時、このデジタルワールドに5人の少女達が召喚されてしまいました。

1人目は、幼い時に星の鼓動を聴いたと言う少女。

2人目は、見た目とは裏腹に男勝りな口調と毒舌だけど、本当は素直になれないだけの少女。

3人目は天才肌の妹にコンプレックスを抱えた双子の姉で、自他共厳しくも、心優しく思いやりのある少女。

4人目は双子の妹で、明るく社交的であらゆる分野において圧倒的な才覚を示す天才肌な反面、人の心の機微に鈍く、空気の読めない発言をしたり、直接的すぎる物言いや無自覚に人の心を逆撫でしてしまうのが玉に瑕な少女。

5人目は、少し引っ込み思案だけど、豊かな想像力を持つ白い少女。

デジタルワールドを守護するデジモンから、今のデジタルワールドの現状を知った5人は、悪のデジモンの野望を打ち砕く為、それぞれのパートナーデジモン達と共に、冒険の旅を始めました。

星の少女と龍の如く強い生命力と秘めたる可能性を持った獣型デジモン。

金髪の少女と気弱で臆病な性格の昆虫型デジモン。

双子の姉と月の化身とも言われる哺乳類型デジモン。

双子の妹と太陽の化身とも言われる正義感が強く純真で無邪気な性格の獣型デジモン。

引っ込み思案な白い少女と白く輝く冒険好きな小竜型デジモン。

5人の少女とそのパートナーデジモンは、全く見た事も聞いた事もない知らない世界に、最初は戸惑い、時に不安になったり衝突し合いながらも、長い冒険の中で、仲間達とお互いに深い信頼関係で結ばれていきました。

そして、悪のデジモンの首領との最後の戦い。

星の少女は黒き鎧を纏った聖騎士。

金髪の少女はデジタルワールドに5体しか存在しないとされている

いる勢力の一角を担う昆虫戦士。

双子の姉は12の神の勢力の一角である月の女神。

双子の妹は同じく12の神の勢力の一角である太陽神。

白い少女は白き鎧を身に纏った聖騎士。

5人の少女は、最強の姿と化したそれぞれのパートナーデジモンと共に立ち向かいました。

しかし悪のデジモンの首領の力は、デジタルワールドに存在する未知の抗体を取り込んだ事で、想像以上の物と化していました。

未知の抗体でより強力になった悪のデジモンの首領の『憤怒』の力の前に、一度は絶望の淵にいました。

しかし、星の少女と白い少女だけは絶望に屈する事無く、尚もパートナーデジモンと共に立ち向かいました。

その時、彼女達の強き想いが奇跡を起こしたのです。

黒き鎧を纏った聖騎士は聖なる剣と白い羽を身に纏った『超究極体』と呼ばれる姿。

白き聖騎士は全身の装甲を刃に変え、より攻撃に特化した姿。

2人の聖騎士は聖なる力の全てを使い、激闘の果てに等々悪のデジモンの首領を倒す事に成功しました。

こうして、5人の少女達とパートナーデジモン達との活躍で、デジタルワールドに再び平和が訪れたのでした。

☆☆

ある場所に10人の影がある。

「ドルモン…」

「僕も…香澄の事を、絶対に忘れないよ」

「ワームモン…その…今までありがとな…」

「あーちゃん…此方こそ有難う。向こうでも元気でね…」

「紗夜…私は、紗夜と出会えて本当に楽しかったよ…」

「ルナモン…貴女の事は決して忘れないわ。 …貴女も元気でいてね」

「日菜。今度また逢えたら、また日菜と一緒に、デジタルワールドを冒険しような…」

「コロナモン…うん！ 約束だよ！」

「ましろ。君と過ごした冒険の日々は、とても幸せだった。

どうか元気だな…」

「ハックモン…今まで有り難う…」

それぞれお互いを見つめ合う5組の顔は、笑顔であるけれど、その目からは涙が流れていた。

そして5人の少女達は、元の世界に戻るゲートを進んでいく。

「香澄くく!! 何時か、また何時か会えたら、その時は、一緒にキラキラでドキドキする物を探そうねくく!!」

その時、ドルモンが自身のパートナーである少女に向けて、大声で叫んだ。

「…っ…うん!! 約束だよドルモン!!」

その少女——戸山香澄は大声で再会の約束を交わす。

その言葉を最後に、彼女達の姿はこの世界から消えた。

こうして、5人の少女とパートナーデジモン達の冒険の物語は、一旦の幕を閉じた。

☆☆

「…んっ…ふああ…」

窓のカーテンから差ししてきた日光の眩しさで、目を覚ます。

「…懐かしい夢だったなあ…」

その時、私の後ろから声が掛けられた。

「お〜い香澄、起きてるか？」

声の主は、私のバンド仲間であり、同時にあの冒険を共にした仲間の1人でもある有咲こと市ヶ谷有咲だった。

「あ、有咲。おはよう〜」

「婆ちゃんが朝食出来たから、呼びに来たんだよ」

「ああ、うん。今行くね〜」

そう言えば自己紹介がまだだったね。

私の名前は戸山香澄。

花女こと花咲川女学園に通い、この春から高校2年生になる。

何故私が有咲の家にいるかと言うと、昨日から私は彼女の家に『お泊まり会』と言う形で泊まりに来ているからだ。

その後、私達は朝食を食べ終えて学校への支度をし、現在登校中の身だ。

「ねえ有咲。今日ね…懐かしい夢を見たんだ」

「夢？」

「うん…。ドルモン達の夢…」

「…そっか、あれからもう『5年』も経つんだよな…」

「有咲はワームモンの事、忘れてなんか無いよね？」

「当たり前だろ。お前や私だけじゃねえ。紗夜さんや日菜さん、それにましろだって、あの冒険の事を忘れている人何て1人もいねえよ」

「…うん。そうだね」

そう言つて、私は制服のポケットから赤いボディと金色の縁取りの機械…ディーアークを取り出して見つめる。

ドルモン。

若し願いが叶うのなら。

貴方にまた会いたいな。

そして、有咲の呼び声に呼び戻された私は再び歩き始めた。

あの冒険から5年。

5人の少女達は、それぞれの日々を過ごしていた。

しかし、再会の約束は未だ果たされていない。

第1話 再会2020

とある会場。

そのステージの上に立っているのは、5人の少女達。

「皆——!! 盛り上がってる——!?!」

ボーカル担当の少女の言葉で、会場から一斉に歓声が沸き上がる。

「それじゃあLastの1曲、楽しんでいこう!」

再び、観客の歓声が会場を支配する。

「No…:てんでダメね」

そんな中1人だけ、彼女達に対して、小さな声で否定的な感想を呟く人物がいた。

ピンク色の髪に、猫耳を彷彿させるヘッドホンを付けた中学生らしき少女は、彼女達の演奏をつまらなさそうに眺めていた。

『随分と不服そうだね』

そんな中で聞こえた別の声。

しかしその声は、この少女にしか聞こえていない。

「衣装と派手なPerformanceだけに力ばっか入れて、肝心の演奏技術が疎かになっている様じゃ、流行りに乗っかってバンドを始めましたって言うのが見え見えよ」

「っいつその事、この力であの子達をDeleteしてしまおうかしら」
「と思う自分を抑えながら、会場を後にした。」

☆☆

「それで、貴方の話は本当なの？」

『…ああ。彼女達はかつて、僕の同郷を倒し、世界を救った——言わば『救世主』や』

「●●●様〜！」

そんな2人の会話に割って入る様に1人の少女が現れる。

「●●●！いきなり吃驚するじゃない！」

「申し訳御座いません!! でも、マンシヨンのほうにも、●●●様がいらつしやらなかったの、此方も心配しましたよ!!」

「No, 分かったわ! 分かったから離れなさい!」

安堵感から抱き付いてくるピンクと水色の派手な配色のツインテールの少女を、ヘッドホンの少女が何とか抑える。

「●●●、あんまり●●●を困らせちゃだめだよ」

ツインテールの少女に続く様に現れた背の高い大人びた雰囲気
の黒髪の少女が、ヘッドホンの少女に声を掛ける

「…全く…帰るわよ●●●●●」

「宜しいのでしょうか？ ライブの途中だったのでしょうか？」

「衣装と派手なPerformanceを重視して、肝心の演奏を疎
かにしている様なバンドのライブなんて、最後まで聴くだけ時間の無
駄だわ」

ヘッドホンの少女はそのまま立ち去り、ツインテールの少女と黒髪
の少女もその後が続くのだった。

(…今はまだ、本格的に動く時では無い。精々何も知らず、この平和な
時間を楽しむがいい)

次の瞬間、3人の少女の影がほんの一瞬だけ、全く異なる姿と化す
も、直ぐに元に戻る。

その様子を、空の満月だけが見ていた。

☆☆

時は現代。

世間では、少女達による音楽バンド……『ガールズバンド』が圧倒
的なまでに人気を博していた。

人々は今の様子を挙って、『大ガールズバンド時代』と評した。

☆☆

4月中旬の水曜日。

「皆く!! おはよう——!!」

「おはよう香澄」

「おはよう、香澄ちゃん」

「おはよう、香澄」

香澄の挨拶に、背の高い黒髪の少女と大人しそうな少女、そして黄色いリボンが特徴のポニーテールの少女が返事を返す。

「ちよま、ちよつと待てー!」

その直後に、金髪ツインテールの少女——市ヶ谷有咲が遅れてやって来た。

「有咲、ビリっけつだ」

「うるせー!」

「あははは。まあ、取り敢えず学校に行こっか」

ポニーテールの少女の一声で、彼女達は再び歩き始めた。

☆☆

そして放課後。

「…それにしても、主催ライブか…」

有咲の住居兼営業店の質屋『流星堂』の敷地内にある蔵に、香澄の
眩きが小さく響く。

香澄は有咲、背の高い黒髪の少女——花園たえ、大人しそうな少女
——牛込りみ、そしてポニーテールの少女——山吹沙綾の5人と、中
等部の頃から、『Poppin', Party』と言うガールズバンドを
組んで活動していた。

そんな彼女達が高校2年生に進級してから、1週間が経った日の
事。

ひよんな事から知り合った『朝日六花』と言う後輩の少女からの依
頼で、彼女がバイトをしている『Galaxy (ギャラクシー)』と言
うライブハウスのリニューアルオープン記念ライブへ参加し、其処で
同じく参加をしていた知り合いのバンドである『Afterglow
w』『ハロー、ハッピーワールド!』『Roselia』『Morf
onica』と共に、記念ライブを無事成功させた。

しかしライブ終了後、Roseliaが主催ライブを開催すること
を発表したことをきっかけに、香澄もPoppin', Partyで主
催ライブを開催することを宣言し、そして今に至るのだった。

「全く…あの場で思いつ切り宣言しちまったけど、何か考えあんのか？」

「無い！」

「威張って言うんじゃねえ!!」

「はい！ オツちゃん達を呼んで、一緒に『花園ランドパーティー』をしよう」

「それもうライブ関係ねえだろ！」

香澄とたえの発言に対し、有咲の容赦無いツツコミが飛んだ。

「あはは…香澄もだけど、おたえのうさぎ好きもいい勝負になる程の凄さだね…」

沙綾は苦笑混じりに、目の前のやり取りに対して評価する。

「あ、あの…」

「どうしたの、りみりん？」

『主催ライブ』もそうだけど、金曜日の『C i R C L E (サークル) 開店1周年記念ライブ』の方もやらないと…」

『C i R C L E 開店1周年記念ライブ』。

2日後の金曜日は、香澄達がお世話になっているライブハウス『C i R C L E』が開店して1周年となる日で、香澄達ポピパの面々も日頃何かと御世話になっている事もあり、恩返しの意味合いを込めて、この記念ライブに参加する事にしたのだった。

「はっ…そうだった。『花園ランドパーティー』の事に夢中で忘れてた…」

「おたえ…お前なあ」

「でも主催ライブの事もそうだけど、今は『C i R C L E』のライブの方に集中しよう」

「そうだね…開店1周年だし、日頃御世話になっているまりなさん達の為にも、絶対に成功させたいもん!!」

香澄の強い意気込みに、皆が頷いた。

そしてその後、ポピパの面々は残り時間を徹底的に練習に費やして、その日は解散となったのだった。

☆☆

そして2日後の当日の金曜日。

香澄達は、馴染みのあるライブハウス『C i R C L E』に来ていた。

ガラン、と扉を開ける音が響く。

「いらっしやい。待ってたよポピパの皆♪」

「こんにちはまりなさん。ところで他のバンドの皆は？」

「それなら…」

「おーい！ポピパの皆ー！」

『C i R C L E』のオーナーの女性——月島まりなの台詞を遮り、アイズブルーのショートヘアの少女——香澄達の『ポピパ』と同じガールズバンドの1つである『P a s t e l * P a l e t t e s』こと通称『パスパレ』のギター担当——氷川日菜が、香澄達の方に駆け寄って来た。

「日菜！　いきなり割り込んだら駄目じゃない！　…ポピパの皆さんもまりなさんも、本当にごめんなさい」

そして更に日菜の後ろから、彼女の姉——同じくガールズバンドの1つである『R o s e l i a』のギター担当——氷川紗夜が現れ、日菜を窘めると同時に香澄達とまりなに対して、日菜の行動に対しての謝罪をする。

「あはは…日菜さんは相変わらずですね…」

更にその背後にいた白髪の少し気弱な少女——香澄達の後輩で、同じくガールズバンドの1つである『M o r f o n i c a』のボーカル担当——倉田ましろが苦笑混じりに言葉を発する。

「日菜さんに紗夜さん！　ましろちゃんもこんにちは！」

香澄が返事を返す。

「おたえ、りみ、沙綾。　悪いけど先に行ってくれねえか？」

「了解。　それじゃあ先に行って、準備してるね」

有咲の言葉を了承した沙綾は、たえやりみを連れて、控え室の方へ向かって言った。

「…さて、私と日菜。それに香澄に有咲にましろ。こうして5人で集まるのも、久し振りかしら」

紗夜が砕けた口調で言葉を紡ぐ。

基本的に紗夜は、実妹である日菜以外に対しては、名字＋『さん』付け&敬語で喋るが、今の様にこの5人で一緒にいる時は、このような砕けた形の口調にしている。

「そうですね…この所、皆それぞれの生活が忙しかったのも、ありませんから…」

「そう言えば私、今日『ドルモン』の夢を見たんですよ」

「わ、私も実はハックモンの夢を…」

「あはは。何だか5年前の『あの冒険』が昨日の事みたいに見えるな
〜」

「5年…もうそんなに経つのね…」

そう言つて紗夜は、スカートのポケットから、ターコイズブルーの縁取りのデューアークを取り出す。

それを見た4人も、自身の持つデューアークを取り出した。

香澄の持つ赤いボディと金色の縁取りのデューアーク。

有咲の持つライトグリーン色の縁取りのデューアーク。

日菜の持つライトイエローの縁取りのディーアーク。

そして、ましろの持つライトブルーのボディと白い縁取りのディーアーク。

5人共通の『パートナー』との『絆』の象徴が目の前にあった。

「香澄ちゃん、有咲ちゃん、紗夜ちゃん、日菜ちゃん、ましろちゃん」

その時、事の様子を見守っていたまりなが、声を掛けてくる。

「今更こんな事を言っても許してくれないかもしれないけど、『あの時』は本当に御免なさい。

本当なら、私達がしつかり『彼ら』と共に管理・守護しなきゃいけなかったのに…結果的に貴女達を巻き込んでしまった」

「まりなさん…謝らないで下さい。確かに最初は、分からない事や不安な事だらけで、投げ出したい気持ちになった事もありました。

…でも、『あの冒険』があったから、私達はこうして皆と出会えたんです」

「そうですよ。私だって香澄やましろ達、それにワームモンと出会わなかったら、ずっとぼっちのままでした」

「私も日菜も『あの冒険』があったから、こうして和解し、今の私達がいるんです」

「そうだよ。誰もまりなさんの所為だなんて思っている人なんて、

此処にはいないよ」

「だから…自分を責めないで下さい」

「香澄ちゃん…皆…有り難う」

まりなは静かに感謝を返した。

☆☆

その後まりなと別れ、香澄達5人は控え室のドアを開けて中に入ると、其処には既にポピパの面々以外に見知った顔触れの姿があった。

「おっ、香澄と有咲も来たね!!」

「あつ香澄さんに有咲さん、今日は宜しく御願いますね」

香澄達の存在に気が付いた茶髪のギャル風な見た目の少女と眼鏡を掛けた少女——それぞれ紗夜が所属する『Roselia』のベース担当と、日菜が所属する『パスパレ』のドラム担当——今井リサと大和麻弥の2人が声を掛けてくる。

「リサさん、麻弥さん！ 此方こそ、今日は宜しく御願います！」

香澄も3人に挨拶を返す。

「か～すみ～!!」

「か～く～ん!!」

すると今度は金髪の少女とボーイッシュな少女——同じくガール

ズバンドの一角である『ハロー、ハッピーワールド!』こと通称『ハロハピ』のボーカル兼リーダーとベース担当である弦巻ことと北沢はぐみが現れる。

「ハッピー!」

「ラッキー!」

「スマイル…!」

「「イエーイ!!」」

香澄は2人と共に、『ハロハピ』独特の掛け声を取った。

「…本当に、ウチのこころ達が何時も御世話になっていきます…」

(奥沢さん…すっかりあの2人の『保護者役』が染み付いてるな…)

同じく『ハロハピ』メンバーの1人である帽子の少女——奥沢美咲の苦勞振りを、有咲は察していた。

「おう。 ちちらの方も相変わらざるの勢いですな」

「みたいだね」

「おやおやく、若しかして蘭も、あの中に一緒に混ざりたいのかな？」

「なっ…そんなんじゃないし!!」

同じく香澄達の様子を見ていたガールズバンドの1つである『Afterglow』のギター担当——青葉モカが、同じく様子を見ていた幼なじみでボーカル担当の少女——美竹蘭を弄り、それに対して蘭は慌てて否定する。

「遅くなってしまってすみません。 湊さん」

一方紗夜は、真っ先に自身のバンドメンバーのいる方に向かい、『Roselia』のリーダー兼ボーカル担当の少女——湊友希那に謝罪

の言葉を述べる。

「別に気にして無いわ。調子の方はどう?」

「問題は無いです」

「おくい、シロちゃん」

「あつ、七深ちゃん」

ましろが声のした方に振り向くと、ましろと同じ『Morfonica』のベース担当——広町七深が来るのが見えた。

「ははは。七深はシロにべったりだな」

「ううう…。私、めっちゃめっちゃ緊張しちゃっているよ」

そんなましろと七深の様子を、同じ『Morfonica』のメンバーで、ギター担当の透子とリーダー兼ドラム担当のつくし、そしてバイオリン担当の八潮瑠唯がそれぞれの反応を示しながら、見つめていた。

☆☆

「みんなー! 準備は良い? そろそろライブの開始だよー!」

それから1時間後、まりながライブの開始を告げに現れる。

「皆、何時も御世話になっている『CIRCLE』やまりなさん達のためにこのライブ、絶対に大成功させよう!!」

香澄の言葉にRoselia、Afterglow、Pastel

*Palette、ハロー、ハッピーワールド!、Morfonic
aの面々が頷く。

「あの輝く景色へ」

「それじゃあ笑顔でっ!」

「いつも通りっ」

「最っ高のステージに!」

「全身全霊で」

「いつくよーっ!」

そして各バンド達は、それぞれの音楽を自身達のライブで奏でる。

一見バラバラで個性的な感じに思えるその音楽はとても美しく、会場にいる観客やまりな達『CIRCLE』スタッフの面々の心を幸せと楽しい気持ちで満たしていた。

こうして、『CIRCLE開店1周年記念ライブ』は文字通りの大成功で幕を下ろしたのだった。

☆☆

「皆、今日のライブ御疲れ様! 本当に有難う!」

ライブを終えて控え室に戻ってきた6バンドの面々に、まりなが労いの言葉を掛けてくる。

「有難う御座いますまりなさん!! 今日のライブ、私達も本当に楽しかったです!!」

その後6バンドの面々は、各自ライブの話題で暫しの談笑を繰り広げていた。

——ドオオオオオオン!!

その時、それは突然起こった。

『C i R C L E』全体を、巨大な衝撃音と振動が支配する。

「な、何!?! 一体何なの!?!」

「若しかして、これも演出の一環なの!?!」

「違う…!! こんな演出の予定なんて無いわ!!」

ガールズバンドの面々からの疑問の声を、まりなは即座に否定する。

——グオオオオオオン!!

「!!」きやあああああああつ!!「!!」

その直後、爆発音と悲鳴が響き渡った。

「!! 外の方からだわ!!」

気付いたまりなが一目散に出口に向かって駆け出し、香澄達もその後続く。

そして会場の外を見渡すと、中央辺りに双肩から巨大なツノを生やした緑色の恐竜と、4本の腕を生やした真っ赤なクワガタムシ。

そして突然の事に混乱し、逃げ惑う観客達の姿があった。

『キシヤアアアアアアアアアッ!!』

『グオオオオオオオオオオオッ!!』

「な、何なのアレ!？」

「大きなクワガタに、緑色の怪獣!？」

『キャオオオオオオオオオオオッ!!』

『シエエエエエエエエエッ!!』

そして更に2体の泣き声に呼応するように、空から真っ黒な燃え盛る翼をもった巨鳥、そして奥から背中に大きな貝殻を背負った緑色の生物が現れた。

「見て!! 真っ黒な鳥さんに緑のヤドカリさんも出て来たよ!!」

「ふ、ふええええ!!」

存在に気が付いた『パスパレ』のボーカル兼リーダー——丸山彩の声に、『ハロハピ』のドラム担当——松原花音は驚きの声を上げる。

誰もが慌てふためく中、香澄、有咲、紗夜、日菜、ましろの5人は人一倍驚きの様子を浮かべていた。

「有咲!! 紗夜さん!! 日菜さん!! ましろちゃん!! アレって…」

「嘘だろ…!?」　なんで『デジモン』がこの世界に!?!」
「と、とりあえず皆さんを避難させないと!?!」

その時、緑色の恐竜——タスクモンが逃げ惑う観客達に襲い掛かるうとしていた。

「「きゃああああああああつ!!」」

それを見た5人とまりなは、動揺する他のガールズバンドを尻目に、真っ先に行動する。

「止めて——!!」

そう叫んで、香澄は近くに落ちていた小石をタスクモンに投げつけた。

そしてその小石は、タスクモンの右手辺りに命中し、タスクモンは視線を香澄の方に向ける。

「ッ!　皆さんは早く避難してください!　ここは私達が何とかします!」

「皆!!　危ないから逃げて!!」

「「は、はい!」」

香澄と日菜の言葉に従って、観客達は『C i R C L E』の中に避難する。

紗夜も香澄と同様に真っ赤なクワガタムシ——クワガーマンに対し、小石を投げて注意を引き付け、有咲とまりなは観客達を誘導する。

「凄い…香澄達、あそこまで冷静に対処している」

「それにしても…一体あの生き物達は何なのかしら？」
「戸山さん達は、『デジモン』って呼んでいたわね…」

他のガールズバンドの面々は、目の前で起こっている状況と香澄達への疑問で、冷静な判断が出来ない状態であった。

「さあ、皆さんも早く避難を…っ!!」

真っ先に他の観客達の避難を終えましたが、他のガールズバンドの面々を避難させようとしたが、その時緑色の怪獣——モリシエルモンが、硬い貝の中に手足をしまい、回転しながら突進してきた。

「皆!! 避けて!!」

ましろの叫びで他のガールズバンドの面々は何とか避けるも、辺りに衝撃が響き渡る。

「あ、危なかった…」

「何て威力なの…あんなの喰らったりでもしたら一溜りもないわ…」

その時、今度は黒い巨鳥——セーバードラモンが空中から襲い掛かって来た。

そして真っ先に気が付いたましろが、セーバードラモンの視覚の先にいた透子とつくしに対して叫ぶ。

「透子ちゃん!! つくしちゃん!! 伏せて!!」

2人を庇ったましろに、セーバードラモンの爪が僅かに掠り、彼女の衣装の背部を切り裂く。

「『シロ（ましろちゃん）（しろちゃん）（倉田さん）!!』」

Morfonicaの4人の声が響く。

「シロ、大丈夫か!？」

「大丈夫：少し掠っただけだから：」

「大丈夫じゃないよ!! 背中から血が出てるよ!!」

「うわあっ!」

「くうう!」

その時、タスクモンとクワガーモンの攻撃の衝撃で香澄と紗夜が吹き飛ばされて来た。

「香澄!!」

「お姉ちゃん!!」

其処へ有咲と日菜が駆け寄ってくる。

顔や衣装が汗や泥で汚れ、ボロボロになっている様子を見るに、その後必死である2体に抵抗していたのだろう。

そして視線を向けると、目の前には4体のデジモン達が此方を敵意のある目で睨んでいた。

「みんな、大丈夫?」

「正直：少しキツイかな?」

香澄の問い掛けに、日菜が痩せ我慢で答える。

「こんな時、アイツ等が今の私達を見たら、何て言うだろうな…」

5人の脳裏に、嘗て共に過ごしたパートナーの姿が映る。

「でも…だからって…」

「自分達だけ逃げるなんて事したら、皆に合わせる顔がないわよ…!!」

その時、タスクモンの右腕が無情にも振り下ろされた。

「香澄!!」

「有咲ちゃん!!」

「紗夜(さん)(氷川さん)!!」

「日菜ちゃん(さん)!!」

「シロ(ましろちゃん)(しろちゃん)(倉田さん)!!」

『一巻の終わり』

この光景を見ていた香澄達5人以外のガールズバンドのメンバーの誰もが、この言葉を脳裏に過らせていた。

「メタルキャノン!!」

「シルクスレッド!!」

「ティアーシユート!!」

「コロナフレイム!!」

「ベビーフレイム!!」

(…ああ、これが所謂『走馬燈』って物なんだね…)

だが幾ら待っても自分達の体に何の衝撃も無い事に疑問を抱いて、閉じていた目を開くと、見えた光景に思わず声を出す。

「…え？」

其処には何故か、右手を抑えるタスクモンの姿。

だが驚いたのは、それではなかった。

香澄達5人の目の前には、小さな5体の生物達の姿があった。

紫色の体毛に覆われ、額に赤い三角形の結晶を付けた獣。

尻尾にリングを付けた緑色の幼虫。

額に三日月の模様が入った兎。

全身を真っ赤な体毛に覆われたライオンの子供を彷彿させる見た目の獣。

赤いマントを身に着けた全身の白い竜。

「香澄!! 大丈夫!？」

香澄達は、最初は夢を見ているのではないかと言う気持ちだった。

何故ならその5体は、彼女達にとってとても大切で、もう二度と逢えないと思っていた存在。

「ドルモン…?」

「ワームモン…?」

「…ルナモン?」

「本当にコロナモンなの…?」

「ハックモン…だよな?」

香澄達ははつきりと意識が覚醒し、痛みも忘れて5体の下へ駆け寄った。

「ドルモン!! 本当にドルモン何だよな!?!」

「うん!! そうだよ香澄!!」

「…:…つ、ドルモーン!!」

香澄の問い掛けに対するドルモンの返答で、改めてドルモンが其処にいる事を実感したのか、目に涙を浮かべ、ドルモンに抱き付いた。

それは、有咲達も同じだった。

「ワームモン!!」

「やっと会えたね…あーちゃん」

「随分大きくなったわね、紗夜」

「久し振りね…ルナモン」

「よう日菜！ 元気だったか？」

「…っ…勿論に決まっているじゃん！ コロナモン！」

「久し振りだな、ましろ」

「ハックモン……………」

『ギャオオオオ!!』

その時、怒声に近い叫び声が響き渡る。

5組はハッと、叫び声のした方に振り向くと、其処には此方を睨み付けるタスクモンの姿があった。

「…皆」

「そうだな、私達にはやる事があつたんだった」

「再会の喜びを楽しむ前に、先ずはあのデジモン達を何とかしないとね」

香澄達は再度、自分達が置かれている状況を前に、会話を交わす。

「香澄（有咲ちゃん）（紗夜）（日菜ちゃん）（シロちゃん）!!」

その時、今までの状況に漸く落ち着いて来た他のガールズバンドの面々が、声を掛けて来た。

「沙綾…りみりん…おたえ…皆…」

「戸山さん…貴女達は一体何者の？ あの怪物達やその子達は一体…」

「初めまして！ 僕、ドルモン！」

「しや…喋りました…」

「湊さん、白金さん、それに皆さん。安心して下さい。この子達は私達のパートナーであり、味方です」

紗夜が皆を宥めた後、5人は自身のデイーアークを取り出し、改めてタスクモン達の方に向ける。

「タスクモン。 成熟期。 恐竜型デジモン。 ウイルス種。 必殺

技は『パンツアーナックル』

「クワガーモン。 成熟期。 昆虫型デジモン。 ウイルス種。 必殺

技は『シザーアームズ』

「モリシエルモン。 成熟期。 軟体型デジモン。 データ種。 必

殺技は『パイルシエル』と『マインドフォッグ』

「セーバードラモン。 成熟期。 巨鳥型デジモン。 ワクチン種。

必殺技は『ブラックセーバー』

香澄がタスクモン、有咲がクワガーモン、日菜がモリシエルモン、ましろがセーバードラモンのデータをそれぞれ確認し、前に出る。

「行くよ！ ドルモン!!」

「おっけー！ 香澄!!」

「ワームモン、久し振りで悪いけど、一緒に戦ってくれるか？」

「大丈夫だよ、あーちゃん」

「ルナモン…貴方の力を貸して!!」

「ええ勿論…。だって私は紗夜のパートナーだもん!!」

「コロナモン!! 久し振りに『るんっ』てしていくよー!!」

「おう、せっかくの再会がてら、一発決めてやるぜ!!」

「お願いハックモン!! 皆を守る為に私に力を貸して!!」

「無論だましろ。私は君の為なら、どんな時だって力になるさ」

—EVOLUTION

Dアークの画面にそう表示されると、Dアークが眩い光を放つ。

その光がドルモン達5匹を包み、5匹達自身が光を放った。

「ドルモン進化! ドルガモン!!」

「ワームモン進化! ステイングモン!!」

「ルナモン進化! レキスモン!!」

「コロナモン進化! ファイラモン!!」

「ハックモン進化! バオハックモン!!」

光の中から現れた5匹はそれぞれ、藍色の体毛を持つ翼を生やした獣竜、人型の形態をした緑の昆虫、両手にグローブを身に着けた兎の獣人、その身に炎を宿した翼の生えた獅子、赤いマントを身に纏い、より成長した白き恐竜へと、その身を変化させていた。

「見て！ 姿が変わったよ！」

「あつ、ウサギさんだー！」

デジモンの進化を初めて目の当たりにし、『Afterglow』のベース担当である上原ひまりとたえが声を上げる。

特にたえはレキスモンの姿を見て、自身の好きな物の一つである『兎』と認識し、興奮を抑えきれない状態だった。

「行くぞ（行くよ）皆!!」

「!!!」
「ああ（ええ）（うん）（はい）!!」
「!!!」

香澄とドルガモンの掛け声と共に、各自それぞれの相手に向かって行く。

「ハアアアアー!!」

バオハックモンがセーバードラモンに攻撃を仕掛けるが、セーバードラモンは直ぐに急上昇して交わした後そこから急降下し、バオハックモンも立ち向かい、激しい激突を起こす。

そしてそれは一瞬後の事だった。

「ウオオオオオー!!」

「グエエエエエー!!」

バオハックモンとの激突で力負けをしたセーバードラモンが吹っ飛ばされ、バランスを崩した。

「今だよ!! バオハックモン!!」

ましろの言葉を受け、バオハックモンはセーバードラモンに向かって駆け出し、両手の爪を構える。

「ファイフクロス!!」

鋭い爪による斬撃で両断されたセーバードラモンは、悲鳴を上げる間も無く、そのままデータの粒子になって消えていった。

「ウオオオオ!!」

「フツ!! ハツ!! ムーンナイトキック!!」

一方此方では、ファイラモンとレクスモンの2体とモリシエルモンの戦闘が行われていた。

力押しของファイラモンと素早い動きのレクスモンの息の合ったコンビネーション攻撃の前に、モリシエルモンも次第に追い詰められていき、疲弊の色が見られていた。

「シエエエエエエエエエッ!!」

焦ったモリシエルモンは、再び硬い貝の中に手足をしまい、回転しながら突進する。

「!! 来るわよ!!」

「ああ!!」

レクスモンの言葉で、ファイラモンも自身の爪に炎を纏って、モリシエルモンに対抗する。

「ファイラクロー!!」

そのまま2体の技が、激しく拮抗し合う。

「グウウウウウ…!!」

「ファイラモ——ン!!」

「日菜…!! ウオオオオ!! 負ける気がしねえ!!」

日菜の呼び声に応える様に、ファイラモンは己の持つ全力でモリシエルモンを拮抗の末に押さえつける。

「シエエ!?!」

「喰らいやがれ!! ファイラボム!!」

「シエエエエエエエエエ!!」

そしてそのまま動揺するモリシエルモンに対し、ゼロ距離から無数の火炎弾を喰らわせた。

唯でさえ威力の高い火炎弾を無数、しかもゼロ距離から喰らったモリシエルモンは、断末魔と共にデータの粒子になって消えたのだっ
た。

「キシヤアアアアアアアアッ!!」

「フッ!」

クワガーモンは4本ある腕で攻撃をしてくるが、ステイングモンは紙一重でその攻撃を躲す。

そしてクワガーモンの懐へ飛び込み、

「ムーンシューター!!」

其処にエネルギー弾の連続攻撃を炸裂させる。

「ギシャアアアアツ!」

連続攻撃の痛みに、クワガーモンは堪らず転倒する。

「ヘルスクイーズ!!」

ステイングモンはその隙を付き、今度は頭部の触角を伸ばし、クワガーモンの体を締め付けた。

「ギツ…ギユオオオ!」

ステイングモンの『ヘルスクイーズ』で体力を吸い取られるクワガーモンは、苦痛の声を上げる。

「ギャオ…ギャオ…」

数分後に漸く苦痛から解放されたクワガーモンには、かなり疲弊している様子だ。

「有咲、どうする?」

「止めを刺せ!!…って言いたい処だけど、この状態じゃあ…もう勝負は付いてるし、これ以上はなあ…」

「有咲ちゃん、これ以上の戦いは私も無用だと思うわ。 だから…」

そう言って、まりながノートパソコンの開く。

「分かりましたまりなさん。 スティングモン、クワガーモンをこつちに」

まりなの考えを察した有咲はスティングモンに指示を出し、スティングモンは指示通りにクワガーモンを運ぶ。

「それじゃあ行くぞ。 デジタルゲートオープン!!」

するとまりなのノートパソコンから白い閃光が現れ、それに包まれたクワガーモンはデジタルゲートの中に消えていった。

「グオオツ!!」

「行け! ドルガモン!」

「グワアツ!」

香澄の声に応える様に、ドルガモンはタスクモンに立ち向かう。

「グオオツ!!」

そこからタスクモンは、必殺技のパンツァーナックルを喰らわせようとするが、ドルガモンは間一髪急上昇し、その一撃を避ける。

「ウオオオオ!!」

「グオオツ!!」

そしてドルガモンはそこから急降下して、全身の力を込めた突進をタスクモンに浴びせ、喰らったタスクモンはそのまま痛みで倒れる。

「よーし!! 其処だ!!」

「やっっちゃえー!!」

2体の戦いを観戦していた『Afterglow』のドラム担当——宇田川巴と彼女の妹で『Roselia』のドラム担当——宇田川あこが声を上げる。

「凄い…それに香澄ちゃん達のあの様子、パートナーデジモン達と呼ばれたあの子達と強い信頼関係で結ばれているのが、初めて会う私にも分かるわ」

同じく観戦していた『パスパレ』のベース担当の金髪の少女——白鷺千聖は、香澄達とドルガモン達夫々のパートナーデジモン達の姿に、双方の強い信頼関係を感じていた。

そして再び急上昇したドルガモンは、止めの必殺技を放つ。

「パワーメタル!!」

ドルガモンの口から放たれた巨大な鉄球がそのままタスクモンに直撃し、そのまま押しつぶされたタスクモンはデータの粒子になって消滅した。

「…ふう」

香澄は戦いの終わりを感じて一息つく。

そして同じく戦いの終わりを確認したドルガモンが地上へ降り、香澄は優しく出迎えた。

「香澄…」

「ドルガモン…」

「「「香澄（ちゃん）（さん）！！」」」

その時、同じ様に戦いを終えた有咲達がそれぞれのパートナーデジモン達と共にやって来る。

「有咲…紗夜さん…日菜さん…ましろちゃん…」

そして集まった5人は、その様子を見ていた他のガールズバンドの面々を見つめる。

「皆に全て話すよ。 私達とドルモンの関係から今までの事を」

戦いが終わった辺り一面に、香澄の決意が込められた言葉が、静かに強く反響した。

第2話 電腦語り2020

翌日。

東京のとある一角に存在する大住宅。

此処は、とんでもなく裕福な大富豪一家『弦巻家』——その御息女のこころが住む屋敷。

この家の大広間の一室には、香澄、有咲、紗夜、日菜、ましろ以外の6大ガールズバンドのメンバー全員が揃っている。

あの後、再会したパートナーデジモン達と共にタスクモン達を退けた香澄達は、状況を見たまりなに促されて『C i R C L E』を後にして、ライブの打ち上げパーティーをする予定だった『弦巻家』の屋敷に行き、そして今に至るのであった(尚、打ち上げパーティーに関しては、他のメンバー達の様子を見て、ドルモン達との関係の説明も兼ねて翌日する事になった)。

「2人共、良く眠れた?」

「うん、何とか…。おたえちゃんは?」

「全く問題無し。それよりもあの『ルナモン』をモフモフして、花園ランドの一員にしたい」

「お…おたえちゃん、ある意味逞しいね…」

「沙綾、たえ、りみ!」

声の聞こえた方を振り向くと、其処には蘭を筆頭に『A f t e r g

low』の面々が揃っていた。

「蘭…それにモカ達も…」

「いやはや、昨日はライブだけでなく色んな意味で大変でしたな〜」

「私、今でもあの出来事は『夢』何じゃないかなって思っちゃうんだ…」

「アタシもひまりと同意見さ」

「私も…ひまりちゃんと巴ちゃんと同じかな…」

辺りを見回すと、『Roselia』、『パスパレ』、『ハロハピ』、『モニカ』の面々も、同じバンドのメンバー同士の者もいれば、千聖と花音の様に、異なるバンドのメンバー同士で昨日のデジモンの件で会話を交わす者もいた。

やがて時計の時間が10時になった時、6大ガールズバンドのメンバー全員とは別の場所で待機していた香澄達5人が、それぞれのパートナーデジモン達と共に大広間に現れた。

「香澄…有咲…」

沙綾の眩きを他所に、香澄達が口を開く。

「皆、待たせちゃってごめんね。約束通り、私達とドルモン達の事について話すよ」

「戸山さん。単刀直入に聞くわ。その子達は何者なの？そして、戸山さんや紗夜達とどういう関係なの？」

友希那がこの場にいるガールズバンドの仲間達が抱いている疑問を、代表で香澄達とドルモン達に問い掛ける。

「香澄…此処は僕達が話すよ」

「ドルモン…」

そしてドルモン達は、友希那達の前に立つ。

「改めましてですが初めまして。 僕、ドルモンです」

「初めまして…。 ワームモンです」

「私はルナモン」

「そして俺はコロナモン！ 宜しくな！」

「私はハックモンだ」

「そして」

「……僕（私）（俺）達、デジタルモンスターことデジモン（です）（だぜ）！！」「……」

「デジタル…モンスター？」

「デジモン…？」

彩と蘭が聞きなれない風な感じで反応を返す。

他の面々も、似たり寄ったりな反応を示していた。

「私達デジモンは、コンピュータネットワーク上の電脳空間に生息する生命体なのだ」

「えーっと、それって要するにあこ達がプレイしている『NFO』のゲームに登場するモンスター達みたいな存在って事なの？」

「ううん。 確かに『コンピュータの中にいる生命体』と言う意味では似ていると、決められたプログラムだけの行動しかしない『NFO』のモンスターと違って、デジモンは人工知能を持っているから、自分の意志や考え、感情などに従って行動する事が出来るんだ」

あこの疑問に対して、日菜が分かり易く説明をする。

「凄いわ!! じゃあドルモン達はコンピュータの世界からやって来た『妖精さん』達なのね!!」

「『ネットワークの世界の住人』…実に儂い存在だね」

「パソコンの世界のデジモン達には、コロツケが好きな子達もいるかな」

「ふ…ふええ」

「いやそんな単純な物で纏められる存在じゃないと思うのですが…」

「こころと薫とはぐみの3人の発言に、花音は混乱し、美咲は思わずツツコミを入れる。

「それで…如何して香澄ちゃん達はその『デジモン』達について詳しく知っているの?」

「はい。私と有咲、そして紗夜さんと日菜さんとましろちゃんの5人は、5年前に『デジタルワールド』に行き、其処でドルモン達と出会って、一緒に冒険したからです」

「冒険?」

つぐみが疑問の言葉を零す。

「そこから先は、私達と『彼』が話すわ」

その時、大広間の扉が開き、其処からまりなと大学生位の女性が入ってくる。

「お姉ちゃん!?!」

「りみ、久し振りだね。それに香澄ちゃん達も元気そうね」

その女性ーりみの姉で、嘗てガールズバンドの1つ『Glitt er*Green』のギター&ボーカル担当ー牛込ゆりの登場にりみは驚く。

何せ、彼女は高校卒業後は、海外の大学へ留学していたので、この場に現れた事に驚きの声上がるのも無理も無かった。

「まりなさんに牛込先輩？ 如何して此処に？」

「ゆりちゃんは、私が事情を話したら、『彼』と一緒に説明の為に同席させてほしい」と言って、海外からゲートを通じて来たのよ」

「あの…お姉ちゃん、『彼』って…？」

「落ち着いてりみ。ちゃんと説明してあげる」

そして彼女は懐から、香澄達のものーアークとは異なる形の青色のデジヴァイス——D-3を取り出して翳すと、D-3の画面が光りだし、其処からホログラフイが出現する。

「えええ!? 何、何なの!?!」

リサが驚愕した様子を見せる。

『久し振りだな。 タイマーの少女達よ』

そして現れたのは、稲妻の様な形の青い一本角の青龍の様な見た目のデジモンだった。

「」「チンロンモン!!」「」

香澄達はその存在の名前を呼ぶ。

「香澄達、このデジモンと知り合いなの？」

「確かに知り合いと言えば、知り合いだけど…」

蘭の問い掛けに、香澄達は若干の苦笑を浮かべる。

『改めて名乗ろう。私はチンロンモン。デジタルワールドを守護する存在であり、彼女達を呼んだ存在である』

『『デジタルワールドを守護する存在』って事は……つまりデジタルワールドの……『神様』と言う事ですか？』

『『『神様?!』『』』』』』

チンロンモンの言葉から、その正体を悟った燐子の発言に、香澄達5人と燐子を除いた6大ガールズバンドのメンバーは、驚愕の声を上げる。

「厳密に言えば少し違うんだけどね…」

ゆりさんは苦笑する。

「で…でも、何でお姉ちゃんがそんな凄いデジモンとそんなに親しいの？」

「それは……『彼』が私のパートナーだからよ」

「ゆりさんがですか!？」

「私だけじゃないわ。グリグリの皆は、香澄ちゃん達より前の——所謂『先代ティマー』なの」

「そして私は、彼と共にデジタルワールドの管理を行うエージェント

よ」

2人の正体を知った香澄達以外のガールズバンドのメンバーは、その事に対して驚きの様子だった。

『話を戻そう。全ての始まりは、この世界の時間で言えば5年前の事——平和だったデジタルワールドに『奴』が現れた事が切っ掛けだった』

「「「「『奴』?」」」」

そしてチンロンモンは自身のデジコアの1つを光らせ、其処からの映像を見せる。

其処に映っていたのは、背中に2枚の黒い翼を生やし、頭には2本の角を生やした恐ろしい形相と容姿をした異形の存在だった。

「何あれ…」

「若しかして…あれもデジモン何ですか?」

『『奴』の名はデーモン。『デジタルワールドの完全支配』を目論んだ魔王型デジモンよ』

千聖とつぐみの疑問にゆりが答える。

「私は他の3体の仲間達と共に奴と闘ったが、奴の暗黒の力によるデジタルワールドへの悪影響を少しでも抑える為に力を使用した事によって、弱体化していた私達は奴の配下のデジモンによって、全員封印されてしまった」

「そして、私は何とかして彼等の封印を解き、そして奴——デーモンを倒して、再びデジタルワールドを救ってくれる存在を探して、信号を送り続け、そしてそれを聞いた5人の少女達がデジタルワールドに

やって来た…」

チンロンモンとまりなの言葉で察した友希那達が、香澄達5人の方に視線を向ける。

「うん。それが私、有咲、紗夜さん、日菜さん、ましろちゃんの5人です」

「そして、私達はそれぞれのパートナーデジモン達と出会い、共に冒険し、そしてデーモンを倒して、再びデジタルワールドの平和を取り戻し、皆とまた再会を約束して、別れたんだ…」

香澄とましろは、他のガールズバンドのメンバー達の様子に対して答えた。

その様子から他のガールズバンドの面々には驚きの様子が見られた。

「…1つ聞いていいかしら？」

友希那が徐に発言する。

「戸山さん達は、どうして彼処まで必死だったの？」

香澄達は元々自分達からデジタルワールドに行った訳では無く、謂わば『巻き込まれた』だけである。

普通なら、不満の1つ2つ、最悪投げ出したくなるだろう。

友希那はその様な疑問を抱いたからこそ、この様な問い掛けをしたのだった。

「…確かに、不安は無かったって言ったら嘘になります」

「最初は殆ど人が、『何で自分達がこんな目に遭わなくちゃいけないの？』、『早く元の世界に帰りたい』って、何度も思っていました」

「でも、ルナモン達と出会い、一緒に冒険する内に、彼等も私達と同じ様に、この世界を一生懸命生きている事を理解しました」

「その姿を見ていたら、段々この『デジタルワールド』の全てが、とても大切に思えてきたんだ」

「だから最終的に、私達は自分達でこの道を進む事を決めたんです」

香澄達は友希那の問いに、強くはつきりと答えた。

「そうなのね…」

友希那は、何か納得した様な様子だった。

「皆…隠しててゴメンね」

「謝らないで香澄ちゃん。私も友希那ちゃんも、此処にいる皆は、誰も騙された何て思っていないよ」

「寧ろ助けてもらって、御礼を言わないといけない位だよ」

彩と花音は、香澄達にその旨を伝えた。

「丸山さん、松原さん。有り難う御座います」

紗夜は静かに、感謝の言葉を返した。

「所でチンロンモン、何で急に現実世界にデジモンが現れたの？」

『おそらく考えられるとするなら…何らかの要因でゲートが開いてしまったか…若しくは…』

「まさか…誰かがゲートを強制的に開けたと言う事ですか？」

紗夜が『そのまさかの可能性』を言及する。

『それは分からぬ。ただはつきり言えるのは、私は今回の一件がこれで終わるとは、どうしても思えぬのだ』

チンロンモンの言葉に、この場の誰もが驚きの様子を浮かべていた。

「私やまりなさんも、その点は調査していくわ。香澄ちゃん達も気を付けてね」

「分かりました」

香澄達5人は頷いた。

☆☆

「…それじゃあ、改めて『CiRCLE（サークル）開店1周年記念ライブ』兼ドルモン達との交流会パーティーを始めるわよ!!」

こころの発言と同時に、パパパンというけたたましい音が鳴り響き、クラッカーが乱射される。

あその後、香澄達は兼ねてより予定した1日遅れの『CiRCLE開店1周年記念ライブ』とルモン達との交流を兼ねたパーティーを行っていた（因みにチンロンモンはあその後、再び去って行き、ゆりはまりなど香澄達からの御厚意に甘えてパーティーに参加している）。

「紗夜先輩!! ルナモンをモフモフさせて下さい!!」

「うえくん!! 紗夜くん!!」

「お、おたえちゃん!」

「花園さん!? コラ、待ちなさい!!」

「おたえ——!! オメーは何やってんだ——!!」

「待つてよあーちゃんく!!」

「は、初めましてゆりさん! わ、私、『Morfonica』で、ド、ドラムとリーダーを担当してる二葉つくしです! あ、あの『グリグリ』のボーカルをた、担当していたゆりさんに出会えて、大変光栄です!」

「ふふっ。 貴女達の事はましろちゃんから聞いているよ。 此方こそ宜しくね」

「は、はい! 喜んで!」

「おお、私達の事を知ってくれてるなんて、とても嬉しいねえ」

「はははっ。 ふーすけの奴、緊張して滅茶苦茶噛みまくってるじゃん」

「この人が『グリグリ』のボーカル…映像で見えるのに比べて、感じる風格が全然違うわ…」

「貴方がコロナモンだよな? 初めまして! まん丸お山に彩りを!

まるやみや…じゃなくて、丸山彩だよ!」

「おお! アンタが日菜の友達だな! 『太陽の貴公子』ことコロナモンとは、俺の事だぜ! こっちこそ宜しくな!」

「ふふっ。 彩ちゃん、コロナモンにすっかり気に入られたみたいだね」

「『太陽の貴公子』…とってもカッコいいです!!」

「いやはや、何と言うか…彩さんや日菜さん並に個性的なデジモンさんですね…」

(奇遇ね麻弥ちゃん。 私も同じ事を思ったわ)

(コロナモンって…ライオンの子供みたいな見た目ね…ライオンは猫科…にやあくんちゃんデジモン…悪く無いわね…)

(あはは…あれは十中八九『猫のデジモン』の事を考えているんだろうなあ…)

「ねえりんりん！ 若しかしてあの『デーモン』って言うデジモンの他にも、『魔王のデジモン』がいたりするのかな？」

「そうだね…きつと、他にもあこちゃんの想像している『魔王のデジモン』もいると思うよ…(ルナモンのあの見た目…今度の新しい衣装を作る時の参考にしようかな…)」

それぞれ思い思いの様子を過ごす中、香澄とましろは少し離れた所で皆の様子を見ていた。

「バンドの皆もデジモン達も、楽しそうに過ごしてるね」

「はい…。正直、不安な気持ちもあったけど、皆がハックモン達を受け入れてくれて良かったです」

「香澄〜！」

すると其処に別行動をしていたドルモンとハックモンの2体が出来てくる。

「ドルモン！ 楽しんでる？」

「うん！ 僕、とつても楽しいよ！」

「ドルモンの奴、さつきも桃色の少女に抱きつかれていたり、金髪の少女達と変わった掛け声を合わせていたり、結構な人気者ぶりだったぞ」

同行していたハックモンの言葉に、香澄達は安堵感を覚えていた。

「…ドルモン。 ましろちゃん。 ハックモン。 絶対に皆の事を守っていこう」

「「うん（はい）（ああ）」」

香澄の言葉にドルモン達は頷く。

その後、香澄達は何事も無く平和で楽しい一時を十分満喫したのだった。

☆☆

——デジタルワールドの何処か

「ぐわああ!!」

激しい爆音と衝撃が辺り一面に響き、兎の様な見た目のデジモン——アンティラモンは敵の攻撃で吹っ飛ばされた。

「くううう…」

「…格下の完全体とは言え、流石は『四聖獣』に仕える『デーヴァ』の一体。此処まで粘るとは、多少は出来る様だな」

全身の痛みをこらえ、何とか起き上がるアンティラモン。それを見る背中に羽を生やし、右手に剣を持った相手のデジモンは、その様子に対して多少の嘲りを含めた評価を下す。

「…何故だ？ 正義と平和を愛する聖騎士の一角である筈の汝が、何故この様な蛮行を!？」

「今のデジタルワールドは不安定な状態…無能な『四聖獣』共より、『あの方』の圧倒的な力によるデジタルワールドの統治が遥かに得策だ」

「違う!! それはただの『支配』なり!! 強すぎる力は争いの元だ!!」
「…最早、これ以上の問答は無意味…」

そう言った相手のデジモンは、右手に持った剣を頭上に上げ、そのまま弧を描き振り下ろす。

「うああああ!!」

其処から放たれた無数の刃を浴び、アンティラモンは苦痛の声を上げ、其の尻崩れ落ちた。

「止めだ…」

そのまま右手に持った剣を降り下げ様とする敵のデジモン。

「Stop!!」

その時、辺りに制止の音が響き渡る。

声のした方を見ると、其処にはピンク色の髪に、猫耳を彷彿させるヘッドホンを付けた中学生らしき少女の姿があった。

「●●●? 如何したの急に?」

すると先程戦っていた相手のデジモンから、先程とは違い、大人びた雰囲気女性の声が聞こえた。

『四聖獣』に仕える『デーヴァ』の一体…その力をここでDeleteするのは、実に惜しいわ」

「お世辞は結構…煮るなり焼くなり止めを刺すなり、汝達の好きにしろ」

「ええ…私の好きにさせてもらおうわ…●●●●●●!!」

「はい、●●●●●●様!!」

すると少女の横に、2本の杖を持った白いドレスに纏った妖精の姿をしたデジモンが現れる。

「…何をする気だ?」

「大丈夫。痛い思いはさせませんよ」

そう言つてその妖精デジモンは、右手に所持した虹色の花の杖をアンティラモンに向けると、其処から7色のオーラを浴びせた。

「う…う…」

アンティラモンは気力を振り絞つて必死で抵抗するが、それも空しく、数秒後に気を失った。

「貴女のそのPowerは、私達の為に有効に活用させてもらおうわ。今はせいぜいのんびり眠っていなさい…」

ピンク色の髪の少女は、思惑の込められた不敵な表情でアンティラモンに語り掛けたのだった。

一方アンティラモンと少女とのやり取りを見ていた羽付きのデジモンの片割れの人格の少女は、その様子を眺めていた。

「『デーヴァ』…」

「確か『神様』と言う意味だっけ」…と、少女は考える。

「『兎の神様』…か」

ふと、昔離れ離れになった『幼馴染』の少女の事を思い出す。

兎が好きな彼女がこのデジモンに会って、大喜びする光景が脳内に浮かび、その様子に微笑ましい気持ちになる。

「…『花ちゃん』。元気にしてるかな？」

少女の呟きは誰にも気付かれる事無く、空気に消えていった。

第3話 星のカリスマ2020

チュン…チュン。

「う…うくん」

日曜日。

小鳥の囁りを聞いた香澄が目を覚ます。

「…あれ？ ドルモン？ ドルモン？」

隣で寝ていたドルモンの姿がない事に気づき、香澄は意識をはつきりさせて行く。

「ドルモン!? 何処にいるのドルモン!？」

香澄は机の下やクローゼットの中など、自分の部屋のあらゆる所を探すも、何処にもドルモンの姿は無かった。

(…若しかして、今までドルモンと一緒にいたと思っていたのは、私の『夢』だったのかな?)

一瞬そんな考えがふと通り、香澄はそのまま下のリビングへと向かう。

「ドルモーン!!」

「美味しい！ お母さん、このご飯とっても美味しいよ！」

「ふふ。好きだけ食べていいわよ」

「もうお母さん…気前いいんだから…」

「…あれ？」

リビングにやってきた香澄が、目の前の光景に間の抜けた声を出す。

「あら香澄、おはよう。朝御飯もう出来てるから、良かったら食べちやいなさい」

「あ…うん」

母のに促され、香澄は席に付く。

「それにしても随分変わった動物ね…」

「お姉ちゃん、この子一体何処から拾って来たの？」

「え…えくと…」

香澄は自身の母である香織と妹の明日香の2人からの問い掛けに、如何答えたら良いのか目を白黒させながら困っていた。

「ふふっ…いいわよ」

あまりにもあっけなく了承されたことで、香澄は呆気に取られる。

「お母さん…そんなに簡単に了承しちゃったけど…いいの？」

「香澄…若しかして、『元居た場所に返して来なさい』って言われると思ってるの？」

「ふえ!? あの…その…」

「安心なさい。家は特にペット禁止なんて事は無いわよ。…そりゃ確かに、貴女がいきなりこの子を連れて来た事やこの子が人間の

言葉を喋る事には吃驚したわ。 …けど」

香織は唐突にドルモンの頭を撫でながら、言葉を続ける。

「この子の目や貴女の事を楽しそうに喋る様子を見ていたら、とても悪い子には見えないし…何より、貴女の事を心の底から信頼しているのが分かるわ」

「お母さん…」

「それによく見れば、結構可愛いじゃない。 こんなに可愛い子なら、追い出す所か逆に大歓迎よ♪」

この言葉を聞いた香澄は、昨日の弦巻家のパーティーの時も、ひまわりやこころなどと言った他のガールズバンドの面々達からも結構な人気者ぶりだったと言うハックモンの言葉を思い出していた。

「それに明日香だつて…さっきまでずっとこの子の事をモフモフしていたのよ」

「ちよ…お母さんってばー!」

香織の暴露に顔を赤らめる様子を見せる明日香の姿に、香澄は温かい眼差しを向ける。

何はともあれ、香澄は母からの了承を得た事に安堵するのだった。

☆☆

「…もう、いなくなっちゃってびっくりしちやったもん」

『ごめん。 香澄が気持ち良さそうに眠ってたから、起こすのも悪いかなあって…』

「あはは…香澄もドルモンも大変だったね…」

「うんうん。ドルちゃんのもフモフはひーちゃんやつぐもメロメロでしたからなく」

その後朝食を食べ終えて、ドルモンと一緒に（因みにその際には、まりなが新しく追加した格納機能を使用してDアーク内部にドルモンを格納した）に商店街の方に出掛けた香澄は、途中でりみとぼったり出会い、其の仮沙綾の家兼商店街のパン屋である『やまぶきベーカリー』に向かい、沙綾とパンを買いに先に来店したモカに出会い、上記の会話に至るのだった。

「そう言えば、ドルモンもそうだけどおたえちゃんも昨日は結構大変だったね…」

「ああ…」

りみの言葉に、香澄と沙綾は思い出した様に言葉を合わせた。

昨日のパーティーの際、たえは紗夜のルナモンに対してかなり夢中な様子で、度々自身のウサギ達の楽園である『花園ランド』の一員にしようとして、追いかけていたのだった（尚その際、有咲と紗夜の2人からもこっぴどく叱られた）。

「おたえの兎好きは、天下一品級の物ですなく」

「その後、『じゃあ紗夜さんも一緒に『花園ランド』の一員になりませんか?』って誘う程だったのを見ると、よっぼドルナモンに夢中になっちゃったんだね…」

「紗夜さん達…これからも苦労しそうだね…」

その会話を聞き、香澄は『若し今後ルナモンが進化したら、進化した姿を見る度に、おたえのルナモンへの関心が高まるんだろうなあ』と内心想っていた。

「そう言えば、香澄はこの後どうするの？」

「うーん、今日は特に予定は何も無いなあ……」

「あ、それじゃあ、ドルモンにこの商店街を案内するのはどうかな？」

「確かに……ドルモンは此処に来るのは初めてだし……とっても良いかも！」

「それじゃあ……って言いたいけど、私はまだ家の店番があるから、無理何だよね……」

「それじゃあ、私が一緒に付いていくね」

「モカちゃんも今日はこれと言って予定は特に無いから、御一緒してもいい……？」

「勿論だよ！ りみりん、沙綾！ 有り難う！」

香澄は改めて、2人に感謝の言葉を述べるのだった。

☆☆

その後、りみと沙綾からの提案を受け、香澄はドルモンに商店街の案内を兼ねて、りみとモカと共に（尚、沙綾は店番担当の為、別れた）商店街を散策した後、現在近くの公園で休憩をしていた（因みにドルモンは現在、Dアーク内部から外に出されている）。

「如何だった、ドルモン？」

『うん！ 色んなお店や人達に出会えて、とても楽しかったよ』

「おお。 その様な感想を聞くと、案内した甲斐があつて、此方も嬉しいですね」

「ドルモンが楽しめて良かったね、香澄ちゃん」

「りみりんもモカも有り難う！」

香澄は改めて、2人に感謝の言葉を申し上げた。

平和で和やかな一時が、香澄達の間を流れた。

そして——香澄が何気なく空を見上げた瞬間だった。

「!! 2人共避けて!!」

香澄のいきなりの叫び声に、りみとモカは咄嗟に香澄と共に避けると、先程彼女達がいた場所に激しい爆音と砂塵が舞い上がった。

「おお?」

「な、何今の!?!」

りみとモカの2人が、突然の事に戸惑いを見せた後、香澄に合わせて視線を空の方に向ける。

「キキキキキッ!!」

其処には、尾の部分にガトリング砲を付けた蛾の様な見た目の異形の姿があった。

「あれって…デジモン?」

その見た目から、3人は相手がデジモンである事に気づき、3人と異形の間ドルモンが割って入り、3人を守る様に相手の異形を威嚇していた。

「モスモン。　アーマー体。　昆虫型デジモン。　必殺技は『モル

フォンガトリング』…」

香澄は自身のDアークで、相手のデジモンの情報を調べる。

すると、モスモンは再び尾のガトリング砲を動かそうとしていた。

「ツ!! メタルキャノン!!」

咄嗟にドルモンは牽制の為に口から鉄球を放つが、モスモンは空中へ飛んで躲す。

「キキヤアアア——!!」

邪魔された事に怒ったモスモンは、再度尾のガトリング砲を今度は香澄達の方に向けて、そのまま大量の弾丸を放った。

「香澄——!!」

ドルモンは香澄達がいる方へ向かってダッシュする。

「うああああ——!! ダッシュユメタル!!」

ドルモンも負けずと口から大量の小さな鉄球を吐き出す。

小さな鉄球はモスモンの放った弾丸に命中して爆炎を起こすが、それでも打ち漏らした数発の弾丸が香澄達に降り注ぐようとしていた。

「危な——い!!」

咄嗟にドルモンは全身の力を込めてジャンプし、香澄達と数発の弾丸の間に割って入った。

——ドドドドド

「うわああああ!!」

其の仮数発の弾丸はドルモンに全て命中し、ドルモンはそのまま叫び声を上げて倒れた。

「ドルモン!!」

香澄は直ぐにドルモンの下へ駆け寄った。

「ドルモン！　ねえしっかりして！　ドルモン！」

香澄はドルモンに必死で呼び掛ける。

「ん…香澄…」

すると香澄の呼び掛けに、ドルモンが痛みを堪えながら応じた。

「！　ドルモン！　大丈夫!？」

「心配…しないで…。　少し…掠っただけだから…」

「ドルモン…」

そしてドルモンは何とか起き上がり、再びモスモンを見据える。

「香澄…僕を進化させて…」

「…でも、その体で進化したら…」

「確かに体への負担は大きいよ…。

でも…僕にとっては…香澄達を

守れない事の方が…何十倍苦しいよ…」

ドルモンの言葉を聞いた香澄は、暫くの間長考した後、言葉を発した。

「分かったよドルモン。 …でも無茶はしないでね…」

「うん…」

—EVOLUTION

Dアークの画面にそう表示されると、Dアークが眩い光を放ち、そのままドルモンを包み、光を放った。

「ドルモン進化！」

「キキヤア——!!」

するとモスモンはさせるかと言わんばかりに、尾のガトリング砲から無数の弾丸を放ってきた。

そしてモスモンの目の前で、激しい爆音と砂塵が舞い上がった。

「キキキ…」

目の前の状況を見て、自身の勝利を確信し、不敵な笑みを浮かべるモスモン。

「キャノンボール!!」

だが次の瞬間、叫び声と共に突然出現した鉄球の直撃を喰らい、モスモンは大きく吹き飛ばされた。

「ギツ…ギツ…」

突然の状況に混乱するモスモンの前に、藍色の体毛を持つ翼を生やした獣竜——ドルガモンが現れる。

「ギギツ!? ギギャアア!!」

モスモンは目の前の相手が、先程止めを刺した筈のドルモンが進化した姿である事に気づき、憎悪の感情を込めて尾のガトリング砲から無数の弾丸を、再度ドルガモンに向けて放つ。

「グルアアアアア——!!」

しかしドルガモンは野性の獣の如く大きな叫び声を上げながら、真正面から無数の弾丸を物ともせず突っ込んでいた。

「ギギツ!?」

モスモンはその様子を見て、更に尾のガトリング砲から無数の弾丸を放つも、ドルガモンは尚も苦しむ様子を見せずに突っ込んで来る。

「ギギ…ギギ…」

「キャノンボール!!」

「ギギャアアア!!」

そのままドルガモンは動揺して動きを止めたモスモンに対して、口から放った鉄球を炸裂させ、諸に喰らったモスモンは大きく吹っ飛ば

された。

「ギギ…ギギ…」

「グルルル…!!」

「ギッ!! ギギー!!」

モスモンは今のドルガモンの姿から、底知れぬ恐怖と勝てない事を本能的に理解し、逃走を凶った。

勿論ドルガモンは見逃す気など無く、口の中に自身のエネルギーを込める。

「パワーメタル!!」

そのままそのエネルギーを大型の鉄球に変えて、モスモンに向けて放つ。

「――」

そのまま大型の鉄球の直撃を浴びたモスモンは悲鳴を上げる間もなく、データの粒子になって消滅した。

戦いの終わりを確認したドルガモンは地上へ降りると直ぐに光に包まれ、ドルモンの姿へと退化した。

「ッ!! ドルモン!!」

香澄達は直ぐにドルモンの傍に駆け寄る。

「ドルモン!! しっかりしてドルモン!! 死んじやだよ!! ドル
モーン!!」

香澄は必死にドルモンに呼びかける。

「か…香澄…」

「ドルモン…?」

「体力…結構使っちゃって…喉も渴いちゃったし…お腹も空いちやつ
たよ」

ドルモンは途切れ途切れの状態で、香澄に言葉を返した。

「ドルモン…っ、良かった…っ、良かったよ!!」

香澄は大泣きしながら、ドルモンの無事な様子に安堵するのだっ
た。

☆☆

「…あれが、あいつ等の実力か…」

公園から少し離れたの木の影から先程迄の一部始終を見ていた人
影が呟く。

『俺としちゃあ暇潰しには丁度いい見世物だったかな』

そんな中で聞こえた別の声。

しかしその声は、この人影にしか聞こえていない。

「今日は随分大人しいじゃねーか…」

『まあ、このところ殆ど『雑魚掃除』ばっかしかしてねーからな。…でも、あいつ等に関しては、さっきの戦いを見てたら気が変わったわ。』

∴『潰し甲斐がある』ってな』

「だからって、今戦おうなんて考えるんじゃねえぞ。 ●●●の奴

からも緊く言われてんだからな」

『へいへい。 了解しましたよ〜っ』

そんな会話を交わしながら、その人影は香澄達に気付かれない様にそっと立ち去ったのだった。

第4章 白蝶の歌姫、白き竜と共に。

此処は、ましろ達 Morfonica の面々が通っている月ノ森女子学園。

創立100年の由緒ある中高一貫の名門お嬢様学校である。

月曜日の朝と言う事もあり、校門前はこの学園の生徒達の姿がちらほら見られる。

「倉田さん、広町さん。 御機嫌よう」

「御機嫌よう…」

「御機嫌よう…うう…この休み明けの学校への憂鬱さは、何時になっても辛い物だねえ…しろちゃん」

「あはは…そうだね」

七深の発言に対し、ましろはどう返答すればよいのか分からず、苦笑と相槌で返す。

「ふむ…ここがましろの通っている学校か……」

ましろのDアーク内部からその様子を伺っていたハックモンは、興味深々に呟く。

「お〜い、シロ！ 七深〜！」

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 透子ちゃん！」

すると後ろから、2人の姿に気が付いた透子とそれを追い掛けるつくし、そして瑠唯の3人がやって来る。

「透子ちゃん。それにつくしちゃんに溜唯も、御機嫌よう」

「御機嫌よう」

「倉田さん、広町さん。御機嫌よう」

自分達の学校で、何時も見慣れた風景。

「ねえ、聞いた？ 昨日の事？」

その時、唐突に聞こえた声に5人が一斉にその方へ視線を向ける。

「何々、何かあったの？」

「昨日、近くの公園の方で、物凄い衝撃と大きな音がしたんだって！」

「何それ〜？」

「他の人達の話だと、その直前まで銃弾が飛び交う様な音や気味の悪い声も聞こえたって話もあるんだって」

「そう言えば、金曜日にも『C i R C L E』の辺りで怪物騒ぎがあったそうよ」

「何でも、緑色の恐竜と羽の生えた竜が戦っていたんだって」

「私の友達にも『C i R C L E』に行ったら子供がいるんだけど、その子が見たのは、黒い鳥と白い恐竜だったんだって！」

「この所、随分物騒な事が起こるよね…」

「若しかして…この所目撃された怪物達って…宇宙人が送り込んだ侵略用の怪物なのかな？」

「まさか〜」

それを聞いていたモニカの面々の中で、真っ先に透子が反応を見せた。

「うわあ…随分広まっちゃっているなあ…」

「透子ちゃん！ そりゃあ、あれだけの騒ぎになっちゃったからね…」
「しろちゃん…大丈夫？」

「うん…」

七深の呼び掛けに、ましろは一言だけ返す。

「そろそろ行きましょう。これ以上あんな噂話を聞いていても、此方にとっても時間の無駄な上に、倉田さんも可哀想だわ」

瑠唯の言葉に賛同する様に、モニカの面々はその場を後にし、それぞれ自分達のクラスへと向かって行った。

☆☆

昼休みになり、5人は学校の庭園で昼食を取りながら、会話を交わしていた。

「…皆、今朝はごめんね…」

「気にしないで倉田さん。ハックモンが悪いデジモンじゃ無い事は、あの時助けられた私達自身、良く理解しているわ」

「心配するなましろ。私もドルモン達も、この人間界でのデジモン達の脅威からましろ達を守る為に戦うと決めた時から、今朝の生徒達の様な事情を知らない者達から、否定的な反応を返されるのは、ある程度理解はしていたから、別に気にしてはいないさ」

「瑠唯さん…ハックモン…本当に有難う…」

ましろは瑠唯とハックモンの言葉に対し、改めて礼を述べる。

「ねえねえ、見ていて思ったけど、しろちゃんのデジヴァイスの色っ

て、何だかモニカの衣装みたいだね」

「そう言われて見ると、確かにそんな感じがするよな」

七深と透子の言葉を聞いたましろは、自身のDアークの見る。

確かにMorfonicaの衣装は白と青系の色の物が多い事もあり、彼女も2人の発言に対して、一理あると内心で思う。

「私とましろ…うん、私達や香澄とドルモン達にとって、デジヴァイスは『人間とパートナーデジモンの絆』の象徴だ。でも2人の言葉を聞くと、確かに私もこのデジヴァイスの色が、モニカの『絆』の象徴と言う意味合いに思えてくるよ」

ハックモンも納得の表情で、2人の言葉に対して肯定的な様子で話す。

「おおっ！ つまりあたし達5人は、所謂『運命に導かれて集まった者達』って訳か！」

「もう透子ちゃんったら…直ぐ調子に乗るんだから…」

つくしが透子に対してツツコミを入れ、溜唯は何時もと変わらない無表情で見つめ、七深は微笑ましく見つめる。

「ましろ…モニカのメンバーは、本当に良い人達だな」

「うん…私も皆に出会えて良かったって思うよ」

“こんな平和でありふれた日が、ずっと続いていてくれたら良いな

”

ましろとハックモンは今のこの一時を過ごしながら、そんな想いを抱いていた。

——ドオオオオン

突然、辺り一面を爆発音が響き渡る。

「な、何!? 今の音!？」

「『キヤアアアア——!!』」

「! 向こうの方だ!」

ハツクモンの声を聞き、5人は悲鳴の聞こえた方へ向かう。

「キキヤアアア——!!」

そして悲鳴の発生源であるグラウンドに着くと、其処には手に巨大な棍棒を持った深緑の小柄な鬼と慌てて逃げる女子生徒達の姿があった。

「おお。鬼さんだね」

「いやいや!! あれどう見てもデジモンじゃん!」

七深に対して、透子のツツコミが炸裂する。

「皆!! 危険だから早く逃げて!!」

「う、うん……!」

ましろの言葉を聞いて、残りの生徒達も慌てて逃げる。

「ハックモン！」

「ああ！」

そして他の生徒達がいなくなったのを確認したましろは、直ぐにハックモンをリアライズし、自身のDアークで相手のデジモンの情報を調べる。

「シャーマモン。 成長期。 鬼人型。 ウイルス種。 必殺技は

『シャーマハンマー』…」

するとシャーマモンは、手に棍棒を持ち、此方へ襲い掛かって来た。

「キキヤアアア——!!」

「させるか！」

それに対してハックモンは、ましろ達の前に出て、両手の強靱な爪でその攻撃を受け止める。

「クウウウウ…!!」

「ギギギギギギ…!!」

やがて拮抗の末に、2体は一旦互いに距離を離す。

「ベビーフレイム！」

「ギギヤツ！」

その際、ハックモンは口から小型の火球を放ち、突然の不意打ちを喰らったシャーマモンは、思わず苦痛の声を上げる。

「良し！ 決まった！」

その様子を見ていた透子が声を上げる。

「攻めさせてもらおうぞー！」

シャーマモンに接近したハックモンは、其処から両手の爪での連続攻撃を浴びせる。

「ギギ……」

シャーマモンの口から苦痛の音が漏れる。

「ベビーフレイム！」

「ケキヤアア！」

そして至近距離から放たれたハックモンの口からの火球によって、シャーマモンは吹っ飛ばされた。

「もう勝負は付いている。大人しくデジタルワールドへ帰るんだ」

もうこれ以上の戦闘は無意味である事を悟り、ハックモンはシャーマモンを説得する。

☆☆

『おやおや…随分あっさりした戦いだね…』

「まあ…正直成長期のデジモンを送り込んだ所で、Battleの結果何である程度、想像していたけど」

誰もいない月ノ森の校舎の屋上。

其処から先程の戦闘を観察していたヘッドホンの少女は、彼女自身の中の『もう1つの存在』に対して、さも当然の如く言葉を返す。

『だけど…僕達もこのまま黙ってこの戦闘を見ている気はさらさら無いのさ』

「そうよ。今こそ『これ』の能力の性能を試す絶好のChanceなんだから♪」

そう言って、少女は懐から取り出した機械…：黒いボディと水色の縁取りのDアークを取り出し、それを頭上に掲げた。

— DARKNESS EVOLUTION —

そして頭上に掲げたDアークからの光は、そのままシャーマモンの下へと向かって行った。

☆☆

「！ 皆！ あれ見て！」

七深の声で上を見ると、見た事も無い光が現れ、そのままシャーマモンに向かって行く。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

光に包まれたシャーマモンは、大きな雄叫びと共に光に包まれる。

やがて光が消えると其処にいたのは、背中に巨大な骨を背負った金色の猿人だった。

「ギギヤアアアアアアア——!!」

「な、何なの急に!？」

「進化しただと…!？」

ましろは直ぐに自身のDアークで、相手のデジモンを確認する。

「ハヌモン。 成熟期。 獣人型。 ワクチン種。 必殺技は『如意ボーン』と『怒髪天（どはつてん）』…」

その時、ハヌモンは一瞬の内にハックモンとの距離を詰め、そのまま背中に背負っていた骨を使って、ハックモンを殴り飛ばした。

「グウウ!!」

「ハックモン!!」

そしてハヌモンはそのまま、ゆっくりとましろ達の方へと近付いて来る。

「ど、どうしよう!？」

「あう…流石の広町もこれは不味いと思うなあ…」

「落ち着きなさい。 仮に若し逃げようとしたら、間違い無く直ぐ捕まっつてあのデジモンの餌食になるのが目に見えるわ」

「何で溜唯はこんな状況でも平然としてられるんだよ!？」

危機的状況の中でも、動揺する様子を見せない溜唯に対して、透子のツツコミが入る。

(…確かに溜唯さんの言う通りだ。 今この場から逃げたりしたら、相手は確実に私を追い掛けるだけでなく、周りにも被害が出ちゃう…それに)

ハックモンが飛ばされた方向に視線を向けるましろ。

(ハックモンを見捨てる何て…絶対に出来ない!)

暫くして、一陣の風が吹き抜ける。

「ギギヤアアア——!!」

ハヌモンが叫び声と共に飛びかかり、他の4人が『これまでか…』と言う思いで目を瞑る。

「ハックモ——ン!!」

ましろの声が大きく響く。

——ドコンツ!!

辺りに衝撃音が響く。

「んっ…」

暫くして、自分達の身に何も異変が無い事に気付き、ましろ以外の4人が目を開ける。

「ギギャア!!」

其処には、自分達とは逆に攻撃を受けて悲鳴を上げたハヌモンと、攻撃をしたと思われる白き恐竜——バオハツクモンがいた。

「行くよ、バオハツクモン」

ましろの呼び掛けに、バオハツクモンは静かに頷く。

「ギギギ——!!」

ハヌモンが手に持った骨を伸ばして攻撃する。

しかしバオハツクモンは難無く躲し、その様子を見て更に苛立ったハヌモンは骨の伸縮による連続攻撃を繰り返すも、対するバオハツクモンはそれを最小限の動きで全て躲す。

「凄い…」

「ええ。回避する際の動きに全く無駄が無いわ…」

その様子を見ていた七深と瑠唯がバオハツクモンの戦う姿に対し、感嘆とした様子で呟く。

「ギギャアア——!!」

等々怒りが最高潮に達したハヌモンは、伸縮させた骨を上振り上げ、其処からバオハツクモンに振り下ろそうとする。

「ファイフロース!!」

しかしバオハックモンは、それを両手の爪で切り裂いて破壊する。

「ギギ!? ギ…ギギヤアアア!!」

ハヌモンは破壊された自身の骨を手に取り、驚愕の様子で見た後、やけくそ気味に全身の金属質の体毛をバオハックモンに向けて打ち出す。

「一気に決めるぞ」

其の俣バオハックモンは金属質の体毛の攻撃も気にせず、一気に駆け出す。

「ドドラグレスバイカー!!」

バオハックモンの両足からの斬れ味鋭い刃がハヌモンの体を両断する。

「ギギギ…」

「…御免なさい。でも、私は貴女の事を決して忘れないから。だから…ゆっくり眠って下さい」

2人は理解していた。

シャーマモンーハヌモンは確かに人に害を与えた。

でも彼もまた、望んでもいないのに無理矢理進化させられて暴れさせられたりされた『被害者』でもあったのだと。

そのままハヌモンはデータの粒子となって消えていき、ましろとバオハックモンはそれを静観するのだった。

☆☆

「……随分と上機嫌だね」

とある一室で、『もう1つの存在』の声がヘッドホンの少女の耳に響く。

「Yes. このデジヴァイスの『デジモンへの強制進化』能力のExperimentは、概ねではあるけど成功したわ。それに比べれば、今回の『損失』なんて寧ろ安い物よ」

ヘッドホンの少女の余裕な感じの台詞が返される。

「此方の準備と力は着実に拡大しているけど、焦りと油断は禁物だよ。『戦い』も…『音楽』もね」

「…of course. 現状の戦力で『四聖獣』達に挑むのが自殺行為な事位、十分承知しているわ…。今の私達の課題は3つ。あの『兎の神様』の戦力としての使い方。最後の1枠での『究極体クラスの強さのデジモン』…そして、『最強のギタリスト』よ。…若しこの『最強の音楽と最強の勢力』が完成すれば…ふふっ、全世界の間達とデジタルワールドの全てのデジモン達が私達の下に跪く光景が目に見えかねてるわ」

「そうだね…人間にデジモン。僕はこの世に生きる全ての生命に対して愛おしく、そして幸せになってほしいと思っている。だからこそ『そんな世界』を作る為に…、君の力が必要な

んだ」

「…そうね。『大ガールズバンド時代』と『デジタルワールド』。この2つに私達が以下に絶対的且つ崇高な存在か、思い知らせてあげるわ。アハハハハハ…!!」

(フッフ…実に素晴らしい。僕の目的が叶うその時まで、音楽を奏で続けてるんだね。小さくて可愛い哀れなお人形さん(●●●●))

『もう1つの存在』の内心に秘めた賞賛と嘲笑の混じった本音の思いに気付かないまま、少女の笑い声が一室に響くのだった。

☆☆

数日後。

「皆、用意は良い?」

「私は何時でも大丈夫よ」

「あたしも大丈夫だよ♪」

「広町の方もOKだよ」

つくしの問い掛けに対して、瑠唯、透子、七深の3人が順番に答える。

「シロちゃんの方は?」

「うん…。何とか大丈夫だよ」

ましろもつくしの問い掛けに返事を返すが、ライブ本番と言う事もあって、緊張しているのがDアーク越しのハックモンにも分かった。

「ましろ。正直、私は音楽の事に関してはあまり詳しくないから上手くは言えないが…大切なのは、『どんな時も自分を信じて、全力でやる』と言う事だと思う」

「…うん、そうだね」

「私は君のパートナーだ。ましろが決めた道を全力を持って支えたいんだ」

「有難う、ハックモン」

そして5人はステージに上がる。

ステージを見渡すましろは、観客達の中に香澄と有咲、そして氷川姉妹の姿を見付ける。

(香澄さん…。有咲さん…。紗夜さん…。日菜さん…。見て

いて下さい、私の…ううん、私達『Morfonicaの全力』を！)

そして、マイクを持った透子の台詞でMCが始まる。

「皆さん、ごきげんよー！。あたし達、Morfonicaです
!!」

「ど、どうも…ご機嫌よう…」

「あはは。ふーすけ、滅茶苦茶緊張してんじゃん！」

「しよ…しょうがないじゃん！こんな大在の人達に囲まれているんだもん！」

「ごめんごめん。それじゃ、ボーカル担当のシロからも一言宜しく
！」

そう言って、透子はマイクをましろに手渡した。

「こんにちは。ボーカル担当の倉田ましろです。ライブを始める前に、皆さんにお話ししておきたい事があります。実は私はこのラ

イブの数日前に、昔離れ離れになってしまった『大切な友達』と再会をしました。その友達は事情があつてこの場に姿を現しています。私が、私の想いがその子に届く様に全力で歌いたいと思います」

そしてライブが開始される。

(ましろ…これがMorphonicaの音楽…君の想いが強く心に伝わってくるよ)

Dアークの内部空間越しからましろ達Morphonicaの面々が奏でる音楽を聴き、ハックモンは笑顔を浮かべる。

「香澄。今のましろ、何だかとってもいい笑顔をしてるね」

「うん。音楽や演奏からも、Morphonicaの全力、そしてましろちゃんのハックモンへの強い想いが伝わるのが私にも分かるよ」

一方で、ライブを観戦している香澄とDアーク内部のドルモンも、Morphonicaのライブで感じた事を語り合う。

こうして晴天の空の下を背景に、ましろ達Morphonicaのライブは大盛況に終わったのだった。

第5話 夕日の恐竜

とある公園。

頭部の髪の毛の片方に赤いメッシュを施した少女——ガールズバンドの1つ『Afterglow』のボーカル担当の美竹蘭とそれに対峙する小柄の黄色い恐竜、そしてその様子をパンの入った袋を持って見守るモカ。

今この場所は、緊張した空気に支配されていた。

「何だお前！ 片方だけ真っ赤なんて変な頭しやがって！」

「はあ？ トカゲみたいな顔したアンタに言われたくないんですけど！」

「この顔は生まれ付きだ！ それに、俺には「アグモン」って言うちゃんとした名前があるんだぞ！」

「おう、白熱してますな〜」

「って言うかモカ！ アンタは一体どっちの味方なの!?!」

モカのマイペース且つ呑気な発言に対し、蘭がツツコミを入れる。

「ゴチャゴチャ五月蠅えな！ 女だからって容赦しねえぞ！」

「…っ、アンタこそ、モカに手を出す様な事したら承知しないから！」

蘭とアグモンの間を、一陣の風が吹き抜けた。

「行くぞ!! ウオオオオオ——!!」

アグモンが駆け出すと同時に、右腕を振りかざしてくる。

「…っ」

これが若し巴だったら、逆に殴り返しそうな気がするが、残念な事に彼女は偉そうに啖呵を切ってしまった反面、腕っ節に関してはそこまで強くは無い。

でも、若し自分がこの場から逃げたら今度はモカに被害が来るかもしれないと思うと、彼女の中に『逃げる』と言う選択をする考えは無かった。

蘭は目を瞑りながら、そんな事を考える。

「ロップイヤールリップル!!」

「な、何だ!? ウワアアア!」

突然、聞き覚えのある声とアグモンの驚きと悲鳴の混ざった声が耳に入り、蘭は目を開ける。

「痛ててて…! いきなり何すん…!」

「ティアーシュート!」

「だべしっ!」

目を開けると、今度は綺麗な水球がアグモンの顔面に直撃し、アグモンは間拔けな声を上げてその場に崩れ落ちた。

「ルナモン、もういいですよ」

「分かったわ」

蘭は声の聞こえた方向へ振り向く。

「全く…幾ら青葉さんに危害が及ばない様にする為とはいえ、無防備でデジモンに挑むのは危険ですよ、美竹さん」

其処にいたのは、アイスブルーの髪をした冷静な雰囲気少女——
紗夜と彼女のパートナーであるルナモンだった。

「紗夜さん…如何して此処に？」

「羽沢さんの喫茶店に向かう道中、貴女達の罵声が聞こえて来たから、唯事ではないと察して、急いでルナモンと共に駆け付けたと言う訳です。それにしても…美竹さん達は、如何して此処に？」

紗夜は気絶したアグモンを一目した後、蘭に問い掛ける。

「それは…」

そして蘭はこの状態になるまでの経緯を説明する。

話によると、蘭は次のライブの為の新曲の作詞が終わった為、リラックスがてら出掛けている道中に偶々モカと出会い、そのままこの公園に立ち寄った。

この公園は蘭達 Afterglowのメンバー達にとって、幼少期の頃よく遊んだ事もあって、ついモカと会話が弾んでしまっただけで話している最中、近くの茂みから物音がしたので見てみると、そこからアグ

モンが現れ、冒頭の所に発展したとの事だった。

「成程…以前似た様な事をした私自身も偉そうに言える立場ではありませんが…若し私達が来なかったら、最悪の場合、大怪我の可能性だってあるんですよ」

「うっ…すみませんでした」

紗夜からの正論の指摘に、蘭は素直に謝罪する。

そしてそのまま紗夜とルナモンは、再び気絶したアグモンの方へ向き直る。

「それにしても紗夜…蘭の話聞く限りだと、偶然ゲートを通ってこの公園に来たらしいけど…」

「ええ。今は気絶してるからいいけれど、かと言ってこのまま放置しておく訳にもいかないわね」

そう言って紗夜はスカートの中から、自身の所持する縁取りのディーアークを取り出すと、それをアグモンに向ける。

すると彼女のディーアークから、眩い光が放たれ、そのままアグモンはディーアークの中へ吸い込まれていった。

「おお。中々便利ですなあ」

「ルナモン。アグモンの見張りを御願いな」

「分かったわ」

そしてルナモンも、ディーアークの中へ吸い込まれていく。

その後、蘭達3人は『CIRCLE』の方に向かうもまりなが不在だった事もあり、紗夜自身の当初の予定だったつぐみの喫茶店に向か

い、彼女に事情を説明するのだった。

「それでその子が、蘭ちゃん達が出会ったデジモンさんの?」
「うん…。それでそいつがあたしのメッシュを『変な髪』とか言っ
て来たから……」

紗夜のDアークの内部でルナモンと共にいるアグモンは、先程から
画面越しにじーっと此方を見ている。

「いや、それにしてもさっきの公園での蘭の姿、つぐにも見せたかっ
たね」

「モカ!!」

「あはは…」

蘭とモカのやり取りに、つぐみは苦笑を漏らす。

「…所で紗夜さん。アグモンは一体、どうなっちゃうんでしょうか
?」

「そうですね…。状況の様子から見ても、まだ被害は出た様子にあ
りませんから、倒さずに『ゲートを開いてデジタルワールドに帰す』。

…今の所はこれが最適の方法だと、私とルナモンは思います」
「そうですね…」

その時、自身のスマホが音を鳴らしているのに気付いた蘭がスマホ
を見ると、ひまりからの電話だったので、直ぐに電話に出る。

「もしもしひまり?」

『蘭!? 良かった〜!』

「どうしたの急に? って言うか今バイトじゃなかった?」

『それが…』

——ドオオオン

突然、スマホ越しから大きな音が響き、そのまま連絡が途絶えた。

「ひまり!? ひまり!」

呼び掛けに何の応答を示さないのを見た蘭は、直ぐにスマホをポケットに仕舞い、そのまま駆け出す。

「蘭(ちゃん)!!」

『紗夜! 私達も!』

「ええ。 さっきの電話の上原さんの様子に大きな音…ただ事じゃないわね…!」

そう言って、つぐみの方を向く。

「羽沢さん! これ、コーヒーの代金です!」

そしてつぐみに自分の飲んだコーヒーの代金を支払うと、そのまま蘭の後を追うのだった。

☆☆

蘭達がつぐみの喫茶店にいた頃と時を同じくして、『Afterglow』の残りのメンバーであるひまりと巴は、近くのファーストフード店でバイトの最中であつた。

「そういえば、巴とバイトのシフトが被るのって、久し振りだよな」
「そういえば、最後に一緒のシフトだったのって、2週間位前だった

な」

そんな他愛も無い軽い会話を交わしながらも、2人は業務をこなし
ていく。

学生生活に時たまのバイトをしながら過ごす日常。

一見、何処にでも見られる『何時も通り』のありふれた日常。

でも、Afterglowの面々にとって、『何時も通りの日常』と
は、とても大切な宝物の様な物だ。

だから、彼女達は今日もその『何時も通りの日常』を、精一杯生き
ていく。

——ドオオオン

突然、巨大な音と振動が襲う。

「な、何だ!?!」

「若しかして地震!?!」

「大丈夫!?! ひまりちゃん! 巴ちゃん!」

突然の事に戸惑う2人に、客として来ていたまりなが声を掛ける。

「まりなさん! アタシもひまりも何とか大丈夫です!」

「2人共、外に行くわよ!」

そのまま3人は、他の客達と共に外に出る。

「ブモオオオオ!!」

外に出ると其処には、左手が機械化されている2足歩行の牛の様な見た目の異形の存在が、唸り声を上げて立っていた。

「フハハ！ 暴れろ！ 暴れまくって、お前の恐ろしさを人間共に思い知らせてやるのだ！」

その右隣には、真つ赤な体と右手に三つ又の鎗を持った悪魔を彷彿させる見た目の異形の姿があった。

「あれはデジモン!?!」

まりなが相手の正体に気付いて叫ぶ。

「ん？ 何だ女？ 私達の事を知っているのか？」

悪魔の姿のデジモンが3人の存在に気付いて近付いて来る。

「名前がまだだったな。私の名前はブギーモン。そして後ろの方はミノタルモン。以後お見知りおきを」

「この騒ぎはテメーらの仕業か！ 一体何が目的何だ!?!」

「おく怖い怖い。目的…？ そんな物、我々の力で、人間界を戦慄と恐怖で蹂躪する為に決まっているのではないか。今まではゲートを適当に開いていたただだったが、今回は『あのお方』の命で、私自身がこうしてやって来たのだ」

巴からの問い掛けに、ブギーモンは若干煽りつつも返答する。

『ゲートを適当に開いていた』…って、じゃあ今までデジモン達がこ

の世界に現れていたのも貴方の仕業だったのね!？」

ブギーモンの言葉から察したまりなが、声を上げる。

「フッフ…勿論。 全ては私達の主である『あのお方』の目的を成就する為の第1歩として、この人間界を先程申しした通り、戦慄と恐怖で蹂躪し尽くしてやるのだ! 行け! ミノタルモン!」
「ブモオオオオオ!!」

ブギーモンに命じられたミノタルモンは、『デモンズアーム』を装備した自身の左手を、3人に向かって振り下ろす。

「巴ちゃん! ひまりちゃん!」

まりなは咄嗟に2人を連れて、その場から離れる。

——ドゴオオオン!!

ミノタルモンの左手の『デモンズアーム』が、先程まりな達がいた所に命中し、その衝撃で地面に激しい亀裂を起こす。

「あ…あ…」

「な…何つう破壊力だよ…」

その様子を見たひまりと巴は、驚愕の様子をでている。

「ブモオオオオオオ!!」

ミノタルモンは避けられた事への怒りから、更に大きな唸り声を上げて、此方に近付いて来る。

「ティアーシュート！」

その時、ミノタルモンの顔面に綺麗な水球が命中する。

「巴！ ひまり！」

「まりなさん！」

3人が後ろを振り向くと、其処へ蘭と紗夜とルナモン、そしてその後にはモカとつぐみの2人が此方に駆け付けて来るのが見えた。

「蘭！ それに紗夜さんにルナモン！」

「モカにつぐも…！ た、助かったあゝ」

「紗夜ちゃん！」

「まりなさんも、無事で良かったです」

3人の無事を確認した紗夜とルナモンは、改めて視線をブギーモン達の方に向ける。

「…ルナモンを連れて水色の女…成程、お前達が『あのお方』の言っていた5人の内の1人か…」

「紗夜ちゃん気を付けて！ あのデジモンはゲートを開いて、この人間界を征服しようとしているの！」

まりなは先程ブギーモンから聞いた話を、簡略して紗夜に説明する。

「成程…どうやら貴方には、色々と聞かなければいけない事が色々あるみたいね…」

「ほぎけ！ 幾らお前達でも、『2対1』のこの状況で、どうにかなる

「思っているのか!?!」
『だったら、俺も加勢するぜ!』

その時、紗夜のDアークの内部越しで双方の会話を聞いていたアグモンが、勝手に彼女のDアークから飛び出して来た。

「なっ…貴方!?!」

「ええ!?! 何あの子!?!」

突然出現したアグモンに、紗夜と初めて会うひまりは、驚きの声を上げる。

「何だお前は? 関係無い奴はすっこんでいろ!」

「嫌なこった! 俺はお前みたいなヘラヘラしながら平気で『弱い者虐め』をする奴、大っ嫌いだ!」

アグモンはブギーモンの言葉に真っ向から反論する。

「アンタ…どうして…」

『負ける』って思ってるのか? でも例え状況が悪かったとしても、俺は目の前で困っている奴を見捨てる何て事、絶対したくねえんだ!」

蘭の問い掛けに、アグモンは堂々とした様子で返答した。

「…っ、ああ…もう!」

蘭は半端ヤケクソ気味にアグモンの下に駆け寄る。

「美竹さん…」

「お前…」

アグモンと紗夜は、蘭の突然の行動に驚く。

「ちよつとそこの全身唐辛子みたいなアンタと凶体のデカイ牛！」

「なつ…全身唐辛子だど!?!」

「あたしはひまり達を本気で傷付け様としたアンタ達を絶対許さない！」

蘭の宣言的な発言に、アグモンは笑みを浮かべる。

「へへへ…お前、結構度胸あるじゃん」

「アンタが目の前で困っている奴を見捨てる何て事しない様に、アタシだって友達をこんな目に遭わされて黙っていられる訳ないよ！だから…アンタの力を貸して！」

「…へへ…良いぜ、お前のその話、乗った！」

「それと…あたしには、『赤メツシユ』でも『お前』でも無くて、『美竹蘭』って言うちゃんと名前があるの！」

『蘭』…いい名前だな…!」

出会ってまだ間もないのに、蘭とアグモンはまるでずっと前から一緒にいるかの様な雰囲気を他の『Afterglow』のメンバーは感じ取っていた。

その時、蘭とアグモンの目の前に白い光の球体が出現する。

「!・ 蘭ちゃん!・ それを手に取るのよ!」

まりなの言葉に従い、蘭は白い光の球体——緋色の縁取りのDアーク——を手に取る。

「これって…デジヴァイス?」

「あれって…香澄ちゃんや紗夜さん達が持っていた物だよね？」
「って言う事は、あの黄色い恐竜が蘭のパートナーって言う事？」

Dアークを手にした蘭、そしてその様子を見ていたつぐみとひまりが、それぞれ反応する。

「美竹さん…いえ、蘭さん。そしてアグモン」

すると様子を静観していた紗夜が、蘭に語り掛ける。

「それを手にしたと言う事は、貴女達はこれから先、デジモン達との戦いに巻き込まれる事になります。その覚悟はありますか？」

「…正直、『怖くないか?』と聞かれたら、『怖い』と思っています。

…でも、それ以上に、モカやひまり、巴やつぐみ達と『何時も通りの日常』を過ごせなくなるのは、もっと嫌なんです！ だからあたしは、モカ達や皆で過ごす『何時も通りの日常』を守りたい！」

紗夜の問い掛けに、蘭は正直な胸の内の想いをはっきり宣言する。

「…それが貴女の答えなのね…蘭さん…共に戦いましょう」

「…っ、はい！」

その答えに納得した様子を見せた紗夜の言葉は、蘭とアグモンへの信頼が強く感じられた。

「ハハハ…そこまで行ってくるのなら、こっちも容赦はしませんよ!!」
「ブモオオオオオオ!!」

ブギーモンとミノタルモンの言葉を聞き、2人は改めて自身のパートナーと共に対峙する。

「ミノタルモン。 成熟期。 獣人型デジモン。 ウイルス種。 必殺技は『ダークサイドクエイク』」
「ブギーモン。 成熟期。 魔人型デジモン。 ウイルス種。 必殺技は『デスクラッシュ』」

蘭と紗夜はDアークで2体のデータをそれぞれ確認する。

「行くわよルナモン！」

「ええ！」

「アグモン！」

「何時でも行けるぜ！」

— EVOLUTION

Dアークの画面にそう表示されると、Dアークが眩い光を放ち、2体を包み込んだ。

「アグモン進化！」

そのまま巨大化し、頭部の甲殻や体も全身凶器の様に発達し、より攻撃的よりな恐竜へと姿を変えていく。

「ジオグレイモン!!」

「ルナモン進化!! レキスモン!!」

一方ルナモンも両手にグローブを身に着けた兎の獣人——レキスモンへと進化する。

「凄い…これがアグモンの進化…」

「おお。大きくなったねえ」

蘭とモカはアグモンの進化した姿を、驚嘆の様子で見ると。

「キエエエ!!」

そこからブギーモンが、武器の三つ又の鎗を持って襲いかかる。

「ハアアアア!!」

一方のレキスモンも跳躍して、グローブを付いた拳で対抗する。

暫くの拮抗を繰り返した後、双方は距離を置いた。

「蘭さん！ ブギーモンは私とレキスモンが引き受けます！ 其方の

方は任せました！」

「分かりました！」

するとミノタルモンが、左手の『デモンズアーム』を振り上げて襲って来る。

「ブモオオオ!!」

「ウオオオオ！」

しかし、ジオグレイモンが猛烈な突進を浴びせ、ミノタルモンは大きく吹っ飛ばされる。

「お前の相手は俺だ！」

「…ッ！ ブモオオオオオオ！」

激高したミノタルモンは再度襲いかかり、ジオグレイモンも負けじと対抗する。

「ブモオオ…!!」

「オオオオ…!!」

(ジオグレイモン…)

蘭や他のアフグロの面々にまりなも、両者の拮抗を固唾を飲んで見る。

「オオオオオオ!!」

拮抗を制したのはジオグレイモンだった。

ジオグレイモンはミノタルモンの懐に一気に入ると、そのまま自身の頭を潜り込ませ、そこから一気に力を込めて、頑丈な頭部でミノタルモンを投げ飛ばした。

「ブモオオオ!？」

「今がチャンスだ!」

巴が叫ぶ。

「行っけえええええええ——!!」

「メガフレイム!!」

蘭の声を聞き、ジオグレイモンは口の中に溜めたエネルギーを、巨大な炎の球体にして放つ。

「ブオツ!? ブモオオオオオ——!!」

それを浴びたミノタルモンは、炎に包まれながら断末魔と共にデーターの塵と化して消えていった。

「やったぜー!」

「ウイナ〜、蘭&ジオグレイモン〜」

巴とモカから、安堵の声が上がった

「ミノタルモン!!」

その様子を見ていたブギーモンは、信じられない様子で見ていた。

「ムーンナイトキック!!」

「グオツ…!」

その隙を付いて、レキスモンが強力なキックが炸裂し、ブギーモンの口から苦悶の声が漏れる。

「チツ…! 此処は分が悪い…!」

そう言つてブギーモンは右手を翳すと、そこから黒いトンネルを彷彿させる空間——ゲートが現れる。

「逃がさないわ!」

「邪魔をするな!」

ブギーモンはそう吐き捨て、自身の武器の鎗を投げつけた。

「クッ！」

咄嗟に拳で弾くレキスモンだが、ブギーモンはその隙にゲートへと逃げ込む。

それを確認すると、ゲートは役目を終えたかの如く消滅した。

「レキスモン！」

「紗夜：御免なさい。逃げられちゃった…」

「気にする事無いわ。貴女もお疲れ様」

紗夜はレキスモンに労いの言葉を掛けながら、アフグロの面々とまりながいる方へと目を向ける。

「決めた!! 今日から俺はアネゴの子分になるぜ！」

「ちよつ：勝手に決めないでよ!!」

「おお、蘭にも等々そんな立場にまで成長したんですねあ」

「番長な蘭：何か良いかも…！」

「つて、モカもひまりも何納得してんの!？」

「ははは。何だかあここに振り回されてる時を思い出しまうなあ」

「ふふふ…」

「もーっ！ 巴もつぐみも笑わないですよ！」

彼女達とアグモンのやり取りに見守るまりなど同様、紗夜と退化したルナモンも穏やかな眼差しで見守るのだった。

☆☆

「蘭く。こつちこつちく」

「ちよつとモカ、気を付けなよ」

数日後。

あたしとモカは、ライブに向けての練習の為、『』に向かっていた。

『蘭達のライブかあ…すっげー楽しみだなあ…』

所持している緋色のDアークの内部にいるアグモンの楽しそうに想像する様子が、あたしにも分かった。

あたし達の過ごす『何時も通り』に加わった『新しい色』。

「…何だか、悪くないかも」

「おお、今の蘭何だかとってもエモイですなあ〜」

「変な事言っていないで、さっさと行こう」

あたし達が過ごす『何時も通り』。

あたしはそんな日々、そして共に過ごすモカ達をこれからも守りたい。

内心でそんな決意を抱きながら、改めて『何時も通り』の日常の幸せを、充分に享受した。

第6話 蒼月と赤陽

時と場所は少し遡る。

「申し訳御座いませんでした、●●●様」

ブギーモンは、自身の主である『存在』に対して、謝罪の言葉ともに跪く。

「まさか連れて行ったミノタルモンが、パートナー関係を結んだばかりの人間とデジモンにやられるなど…」

「…それだけデジモンと人間との『絆』は厄介な物だと言う事か…」

ブギーモンの報告を聞いたその『存在』は、警戒心を更に強めていた。

「もういい…今更過ぎた事を責めた所で、時間の無駄だ。もう下がっていい。…それと、もう元の姿に戻ってもいいよ、ブギーモン」

「御意」

その言葉と共に、ブギーモンの姿が全身の黒く妖しい光と共に姿を変える。

そこにいたのは、頭部に2本の角、背中に赤い翼を生やし、顔の部分に巨大な単眼を宿した白い悪魔の様な姿のデジモンだった。

そしてそのデジモンは、直ぐに姿を消した。

『大ガールズバンド時代』：●●●からある程度は聞かされて、最初は『人間達の流行りの文化』と言う認識しかなかったけど…嘗ての

5人の少女達がそれぞれの形で活動している事といい、新しくティマーとなった少女がガールズバンドの関係者だった事といい…『ガールズバンド』と言うのは、デジモン達を惹き付ける何かを持っているのか？)

彼は内心、『ガールズバンド』への疑念、興味、警戒の3つが混ざった心境で、先程ブギーモンがいた場所を見ながら、思考に耽るのだった。

☆☆

場所は変わって、氷川家の2階の紗夜の自室。

其処では、紗夜とルナモンが窓越しから満月を眺めていた。

「綺麗な満月ね…」

「ええ…とつても気持ち良いわ」

「こうしていると、デジタルワールドにいた時の夜を思い出すわね」

元々、月の観測データと融合して生まれたルナモンにとって、月は自身の生みの親の様な存在である為、とても喜んでいるのが紗夜には分かり、またルナモン自身も紗夜自身の声色に込められた喜びの感情を感じ取っていた。

「紗夜もライブの方、お疲れ様」

「有り難う…ルナモン」

「…それにしても紗夜、香澄達の事は…」

ルナモンが言及したのは、今日のライブ終了時でのポピパとRos

eliaの会話の事だった。

今回のRoseliaの主催ライブでは、ポピパの面々が主催ライブの参考の為に、Roseliaのメンバーで唯一人花女に通っている燐子からの誘いを受ける形でゲストバンドとして参加していた。

ライブ自体は大盛況に終わったのだが、問題はその後だった。

「でも…、同じ事…、出来るかなって…。」

「同じ事…」

「でも！ 私達も絶対ライブします！ いつか、頑張ってRoseliaの皆さんみたいに！」

ライブ終了後、Roseliaの主催ライブの圧倒的な凄さの前に、香澄は不安な心境も見せつつも直ぐに前向きな姿勢で決意を述べる。

「その努力に、意味はあるの？ Poppin' Party、あなた達、主催ライブする覚悟が足りていない。」

しかしそんな彼女達を前に、友希那は厳しい指摘を下ろしたのだった。

紗夜のディーアークの通してその様子を見ていたルナモン自身、『仲間』として困っている香澄達の事を、何とか助けてあげたいと言う気持ちから、つい言及したのだった。

「ルナモン、貴女の気持ちも分かるわ。でも、これは香澄達Poppin' Partyの『問題』。彼女達の道は最終的に彼女達自身が決める事よ」

「紗夜…」

「それに、湊さんは口では厳しく言っているけど、あれは湊さんなりに香澄達の事を思っただけだよ」

ルナモン自身、紗夜を通してRoseliaのメンバーになってまだ日が浅い事もあって少し誤解しているが、紗夜はRoseliaの活動を通して、友希那の音楽に懸ける想いや姿勢を見ていたからこそ、あの厳しい指摘の中に、彼女なりの香澄達への優しさが込められているのが分かった。

「私達に出来るのは、香澄達を信じて見守る事だけ。それに香澄があんな事で簡単に諦める程の子じゃないのは、デジタルワールドで一緒に冒険した貴女だって知っているでしょ？」

「…そうね。ポピパの皆もきつと自分達なりの『答え』を見付けるに違いないわね…」

そして再度、夜空の満月を見上げる。

其処から放たれる月光は、まるで安心感を与えるかの如く、2人を強く優しく照らすのだった。

☆☆

「おはよう御座います。　その貴女、ネクタイが曲がっていますよ」
「す、すみません…」

数日後、その日の紗夜は朝早くから羽丘の校門前に立って風紀委員の仕事の一貫である『挨拶運動』を行っており、その際に登校してきた生徒の見出し並みのチェックも平行して行い、その際1人の羽丘生徒のネクタイの乱れに気付き、それを直していた所だった。

『うわあ…紗夜、気合い入ってる…』

デューアークの内部からその様子を見るルナモンは、紗夜の気の入り様に興味心身だった。

☆☆

『美味え——!!』

「あはは！ コロナモン、すっかりそのカップラーメンの虜になっちゃってるね〜」

昼休みの生徒会室。

デューアークの内部空間で、自身の愛用食である『プロテインラーメン』のカップ麺を美味しそうに食べる様子を見ながら、日菜の楽しむ声が響く。

「コロナモン、カップ麺が好きな貴女の気持ちも分かるけど、ジャンクフードばかり食べていると、栄養的に良くないわよ」

『何だよ！ 紗夜だつてこの間のライブの打ち上げの時、ファミレスでポテトを3箱平らげてたつて聞いたぞ〜』

「なっ…!?! 何処からそんな情報を…:~:~:~!?!」

(御免なさい紗夜……)

うっかりその事をコロナモンに話してしまった情報元のルナモンは、内心紗夜への謝罪をしつつ、下手なとぼちちりを回避する為、黙々と食事をする。

「それにしても、まさか蘭ちゃんがティーマーになるなんてね」
「ええ…あれは、私もかなり驚いたわ…」

日菜の予想外だと思いつながら、妙に楽しさを含んだ発言に、紗夜も自身の気持ちを吐露する。

「ねえねえお姉ちゃん。蘭ちゃんの事を考えたらさ、今後もガールズバンドのメンバーから、あたし達や香澄ちゃん達みたいにパートナーデジモンを持つ子達も出てきたりするじゃないかな？」
「それは…」

紗夜自身、口では言い淀んでいるが、嘗てデジタルワールドを冒険した自分達5人が、こうして『ガールズバンドのメンバー』として再び集まった事もあって、日菜の発言も強ち否定出来ないと言う気持ちがあった。

「…お姉ちゃん、若しかして『ガールズバンドの皆を巻き込んでしまつて、申し訳無い』って、思っている？」

「…っ！…日菜、貴女…」

『あたしはお姉ちゃんと血を分けた実の妹だよ』って言うのもあるけど、それに、今のお姉ちゃんの様子を見たら、何を考えているのか何て、ある程度分かっちゃうよ」

「…それなら、貴女にも分かるでしょう。私の考えている『最悪な想像』を…」

紗夜はまりなから聞いたブギーモンの話と実際に戦った時の様子から、考えていた事があった。

「あの時、ブギーモンはまりなさん達に対して言っていたのよ」

「今まではゲートを適当に開いていただけだったが、今回は『あの

お方』の命で、私自らがこうしてやって来たのだ”

「あの台詞から見て、ブギーモンの背後には間違い無く『大きな存在』がいる。…彼奴が忠実に従っている事やゲートを容易に開ける事を考えても、その『大きな存在』は間違いなく『究極体』クラスの強さを持っているのは明白よ…」

「それだけじゃないわ…。私も戦っていて感じていたんだけど彼奴…本気を出していなかった様に思えたのよ…。何と言うか…敢えて成熟期の姿で現れたって感じなの…」

「んだよく。相手が究極体で来るんなら、こっちも究極体で対抗すりゃいいじゃねえか!」

コロナモンの『やられたらやり返す』的な発言に、紗夜とルナモンは思わず呆れ半分に溜め息を吐いた。

「そう言う単純な問題じゃないわ。私達5人の場合だったらまだしも、美竹さんはティマーになってまだ少ししか経っていないのよ。それに私達だって、四六時中他のガールズバンドの皆と一緒に居られる訳じゃないの」

例えば若しパートナーデジモンがいるメンバーが誰もいない状態で、他のガールズバンドがデジモンに襲われる様な状況が起こったなら。

そう考えると、紗夜自身がネガティブな事を思ってしまうのも無理も無いのだった。

「…確かにお姉ちゃんの考えもある程度、理解は出来るよ。でも、あたしはガルパの皆を守りたいな」

「…日菜」

「確かにあたし達は、『デジタルワールドを冒険してデーモンを倒し

て、平和を取り戻したよ』：でもだからって、別に特別な力を使える様になった訳でも、神様みたいに偉くなつた訳でも無いよ。あの戦争だつて、多くのデジモン達が犠牲になって、その中には私達が仲良くなつたデジモンだつていた」

紗夜の脳裏に、今まで出会つたデジモン達の姿が浮かぶ。

「正直、拒絶されてもしょうがないのに：それでもパスパレの皆やつぐちゃんは、私とコロナモンを巻き込まれる前と変わらない姿勢で接してくれた。その時あたしは、『皆の事を守りたい』って強く思ったんだ」

「日菜だけじゃねえよ。俺だつて、日菜達や彼奴等との毎日が一緒に過ごす内に、すつげえ楽しいって思える様になつたんだ。だから、俺も守りたいんだ。彼奴等の事を」

日菜とコロナモンの言葉を聞いた紗夜は、優しそうな表情を浮かべた。

「日菜：：コロナモン：御免なさい。私、『守る』って言っておきながら、結局は自分勝手な思い込みや罪悪感を理由に、放棄しようとしていたわ：：本当に最低ね…」

「そんな事無い。紗夜は優しいわ。だつて紗夜は、何時も皆の事を考えて、それでこうやって悩みながらも前に進んで来たじゃない」
「ルナモン：：」

「辛い事や困っている事があつたら、一人で抱え込まないで。だつて私は、紗夜のパートナーだもん。どんな時だつて私は紗夜の味方であるわ」

「：有り難う、ルナモン」

「：さっ！ 辛気臭い話は此処までにして、ほらこれも食えよー！」

そう言つてコロナモンは、紗夜とルナモンに自身が保存している

『プロテインラーメン くビタミンCたっぷり version』を差し出す。

「いえ…これ以上食べると眠くなりそうだから、止めておくわ」

「私も紗夜と同じく…」

「オイ！ 其処は普通貰って食べるのが、『テンプレ』じゃねえのかよ!？」

「アハハ！ 何だかコントみたい！」

一部始終を見た日菜が楽しそうに笑う。

その後、時計の針が昼休み終了の5分前である事に気付いた紗夜が慌てるも、その際に日菜から『もうこの時間なら間に合わなさそうだから、5限はこのまま此処でサボっちゃおうよ♪』と提案され、紗夜自身も渋々『…今回だけよ』と了承し、そのまま2人は自分達のパートナーデジモンと共に、5限終了のチャイムが鳴るまで、生徒会室で静かな一時を過ごすのだった。

☆☆

「アアアアアア!! もう信じられない!! 何が『プロデューサー』なんて必要ないわ』よ!!」

とあるマンションの一室。

其処で猫耳を彷彿させるヘッドホンを付けた少女が、怒りを露わに叫んでいた。

「チュチュ様〜!! 落ち着いて下さい〜!!」

「あんな屈辱的な思いを受けて、このまま黙ってなんていられる訳無いでしょ!!」

その傍らでピンクと水色の派手な配色のツインテールの少女が、ヘッドホンの少女——珠手ちゆ（通称チュチュ）を必死で宥めようとしている。

（おやおや…チュチュ、先程から随分荒れているね。　パレオ…君の苦勞も察するよ）

『謎の影』——●●●●●●●●●●は、内心そう思いつつチュチュと——彼女の お供兼キーボード担当のツインテールの少女——鳩原令王那（れおな）（通称パレオ）のやり取りを見ていた。

やがて気の済むまで吠えまくり、ある程度の落ち着きを取り戻した チュチュは、言葉を再び発した。

「フフフ…い　いいわよ。　私の『プロデューサー』を蔑ろにしたら、ど のような Outcome になるのか、思い知らせてあげるわ…！」

『そうだねチュチュ。　私達はいずれデジタルワールドと人間界、双 方の頂点に立つ存在だ。　あの様な愚かな振る舞いをした報いは、 ちゃんと与えないといけないね』

●●●●●●●●の言葉に更に気を良くしたチュチュは、満足そうな笑みを 浮かべる。

『——●●●●●』

『御意』

●●●●●●●●の呼び声に応じた巨大な単眼の悪魔姿のデジモンが姿を 現す。

「●●●。私の『プロデュース』をTrashと評価したあのRoseliaの奴らに、相応の制裁を与えて来るのよ！」

「ハッ。畏まりました」

チュチュの怒りの籠もった様子から発せられた命令に、悪魔姿のデジモンは顔色一つ変えずに了承の意を示す。

「チュチュ様！ その一件、このパレオも力をお貸しします！」

すると側で話を聞いていたパレオも志願者の如く、割り込んで来た。

「No. 唯でさえ、此方は戦力的もまだまだ足りない状態よ。特にあなたは私達の貴重な戦力の一角。幾ら究極体の力があるとはいえ、若し今の状況で『あの5人』を相手にしたら、今後にも影響が出るわ」

「ううう…ではせめて、私の配下の者をそちらの方に加勢させても宜しいでしょうか？」

『ハハハ。チュチュ、彼女は本当に君想いの良い存在じゃないか』

「…:Yes, I get it. パレオ、貴女の加勢、感謝するわよ」

「有り難う御座います！ チュチュ様！」

「フフフ…制裁を受けたRoselia…いいえ、ミナト・ユキナの惨めで無様な様子が楽しみでしょうがないわ…アハハハハ!!」

チュチュの怪しげな笑い声が響いた。

☆☆

此処は近くの公園の茂みの中。

不意にパチパチ…と言う音が小さく鳴る。

次の瞬間、其処に小さな白い光の渦が発生し、中から丸い物体が現れる。

そして白い光の渦は、まるで役目を終えたかの如く、徐々に小さくなっていき、そのまま消滅した。

誰も人がいない夜の時間帯の公園での出来事。

その様子を夜空に輝く星と月だけが、静かに見守っていた。

第7話 青薔薇乱舞

「ハア…ハア…もう何なのよ…!!」

誰もいない夜道の中を、1人の少女の今の現状に対するうんざりした声が響く。

友達4人と一緒にガールズバンドの活動をしていた彼女は、ボーカールを担当していた。

活動して、まだ2、3ヶ月程しか経っていないが、それでもお客さんからの評判もそこそこあったし、本格的に活動を広げ始めた矢先にこの事態だ。

「さおり…胡桃…」

既に犠牲になったベース担当とキーボード担当のメンバーの事が脳裏に浮かぶ。

「舞と一葉…大丈夫かな？」

同時にはぐれてしまったギター担当とドラム担当のメンバーの少女の名前を呟きながら、辺りを見回す。

「…………ふう…………何とか逃げ切れたみたいね…」

「何から逃げ切れたって？」

突如聞こえて来た声に、背筋がゾクツとしながらも、少女は声の聞こえた方を向き、『ヒツ…』と小さく。

「見いく付けた〜♪」

目の前にいたのは、真っ赤な体と右手に三つ又の鎗を持った悪魔——ブギーモンの姿だった。

「あ…あ…」

「可哀想に…：今や君はもう独りぼっち。しかし安心したまえ。君も他の4人と同様に仲良く裁きを受けるのだ♪」

その言葉と同時に、ブギーモンの背後から巨大な影が現れる。

彼女はブギーモンの今の発言で、途中で別れた2人も既に犠牲になってしまった事を悟ってしまい、次は自分が同じ目に遭う恐怖で言葉が上手く出なかった。

「やれー！」

ブギーモンの命令を合図に、巨大な影の目が光り、緑色の光線が彼女に向けて照射された。

「キヤアアアアアア——！！」

少女の悲鳴が轟く。

それから数分後、光の照射が終了すると、其処にいたのは、先程の光線を浴びて、石像と化した少女だった。

「ハハハ！ 見事なまでに良い姿になったではないか！」

ブギーモンは上機嫌に言って、石像と化した少女を所々撫で回した。

ブギーモンがこのガールズバンドを狙った理由は、単純に言えば『実験』だった。

無論、最終的な目的はRoseliaなのだが、念には念を入れて、『実験』と言う形で襲ったのである。

その時、ブギーモンの背後にいる黒い影の隣に、新たな黒い影が現れる。

「フッフ…。 さて…次は等々、本命に仕掛ける時だな。 お前達も油断はするなよ」

ブギーモンの言葉に、背後の2体の黒い影が無言で頷く。

そしてそのまま、3体はその場から姿を消す。

石像と化した少女だけが、何の反応のせず、静かにその様子を見ていた。

☆☆

「ニヤ〜♡」

「ミィ〜♡」

「ふふふ。喧嘩しないで仲良く食べるのよ」

とある公園のスペースの一角。

友希那はそこに住んでいる猫達に餌を与えながら、それを食べる猫達の様子を優しそうな表情で見ながらも、内心ではこの前出会ったチュチュの事について、考え込んでいた。

(…それにしても、あの子…)

“何でダメなの!? 私のプロデューサーで最強のバンドになれるのに!”

あの時見せた必死そうな様子や表情から、友希那自身も彼女の音楽への強い情熱を感じていた。

勿論友希那自身は、『プロデューサー』と言う存在自体を完全に否定しているつもりは無い。

けれど彼女にとつての『Roseliaの音楽』とは、自分達自身の力で創造し、奏でていく物だと考えている。

(誰かに命令されて創った曲を、ただ演奏し、歌うだけの音楽なんて、そんなの『Roseliaの音楽』何かじゃない)

友希那の『Roselia』、そして『音楽』に懸ける決意は相当な物だった。

「ニィ〜♪」

その時、一匹の猫の鳴き声が友希那の耳に届いたので、声の聞こえ

た方を向くと其処には1匹の猫が茂みの中で何かを触ったり転がしているのが見えた。

気になった友希那は、其処に近付いて猫が先程から弄っている物の正体を見て眩く。

「卵…?」

其処にあつたのは、全体が青一色の卵だった。

「何なのかしらこの卵?」

無論、猫の卵では無いのは分かる。

しかし、こんな色の卵を友希那は今まで見た事が無かった。

(若しかして、私の知らない新種のにゃんちゃんかしら?)

実際、『CIRCLE開店1周年記念ライブ』の一件でデジモンの存在を認知した友希那は、デジモンと言う未知の存在がいるのだから、自身の知らない新種の猫が存在しても可笑しくは無いと考えた。

若しこの場に他の誰かがいたら、間違い無くツツコミを入れられそうな状況ではあるが、残念な事に今この場には、猫を除いて友希那1人しかない。

「ミャ〜」

不意の鳴き声に足下を見ると、先程卵を弄っていた猫が、心配そうな様子で此方を見ていた。

「大丈夫。この卵は、私が持ち帰るから、あなた達は安心して、この場所で過ごしていいのよ」

友希那は猫達の頭を撫でながら語り掛け、その後は拾った卵と共に、自宅へと帰路するのだった。

☆☆

ヴーヴーヴー

「んっ…」

あの後、自室で作曲作業をキリの良い所で終わらせベッドに入って就寝した友希那は、翌朝になって自身のスマートフォンバイブ音で、朦朧ながらも意識が覚醒する。

ゴソゴソ

その時、彼女はふと自身の胴回りに違和感を感じた。

「んう…リサ…？ 止めなさい…」

友希那は最初、リサがてつきり自身悪戯で胴回りを触っているのかと思った。

ゴソゴソ

しかし、相手は友希那の制止を無視して尚も胴回りを触り続けているので、流石にこれはリサではないと気付き、それによって友希那も

はつきりと意識を覚醒した。

(…落ち着きなさい。相手はたった1人よ)

そして数秒後、友希那は意を決して、行動を起こした。

「いい加減にしなさい！ このド変態野郎！」

そう叫んで、布団を思いつ切り目繰り上げた。

「…は？」

布団を目繰り上げて見た目の前の光景に、友希那は思わず間抜けな声を出した。

「zzzz…zzzz…」

其処には、頭に2本の青い触角を生やした奇妙な青い体色の生物が、呑気にスヤスヤと眠っていたのだった。

「んっ…フヤアアア…」

やがてその生物は、目を覚ますと友希那を見て喋る。

「おはよ(・ω・)」

「おはよう…」

2人の間を、暫しの沈黙が流れる。

「いや誰よ!!?」

我に返った友希那はツツコミ返した。

「友希那!? 一体どうし……た……の……?」

其処へ丁度友希那を起こしに来たりサが部屋に入って来て、目の前の光景をポカンとした様子で見る。

「おはよ（・ω・）」

一方、青い体色の生物はリサの状況を意に介さず、呑気に挨拶する。

やがてリサはズガズガと友希那の下に行き、そのまま肩を掴んで深刻な様子で問い掛ける。

「友希那答えて。相手は誰? どんな汚い手で孕ませられたの?」

「落ち着きなさいリサ。私だって、何が何だか分からないのよ…」

ベッドに座る青い体色の生物を尻目に、リサを何とか宥めて数秒後、何とか落ち着いたリサと共に友希那は、ベッドの上の青い体色の生物に向き合い、会話をする。

「あなたは誰?」

「ボク、チビモン」

「チビモン…あなた一体どうやって私の部屋に侵入したのかしら?」

「え、ボクをこの部屋に入れたのは友希那じゃん」

「は?」

その直後に背後から聞こえるリサの色々と喚く声を無視して、友希那は暫し、思考の海へ落ちた。

そして数秒後、何かに気付いた様子でチビモンを見る。

「あなた若しかして、昨日の卵から生まれたの？」
「うん！ 友希那が温めながら一緒に寝ていて、気が付いたらこうして生まれたんだよ。」

チビモンは嬉しそうな様子で友希那に言った。

「フフフ…友希那を孕ませたクズ野郎…アンタみたいなこの世における『癌細胞』は、『敗者に相応しいエンディング』をプレゼントするよ…フフフ…」

「ねえねえ友希那。 何であの人は、さつきから怖そうな顔でブツブツ言っているの？」

「チビモン、見ちゃいけないわ」

そう言って友希那はチビモンの視界を遮った。

その後、友希那は30分位の時間を掛けて、どうにかリサを正気に戻すのだった。

☆☆

「なる程。 恐らく湊さんが公園で拾ったのは、デジタマですね」

友希那の話を聞いた紗夜が納得した様子で言う。

あの後、友希那は来週のライブに向けての練習の為、リサと共にCIRCLEに来ていた（因みにチビモンは、ぬいぐるみのフリをさせて同行させた）。

そしてその後、既に来ていた紗夜達とまりなに事情を説明し、今に至るのだった。

「『デジタマ?』」

「その名の通り、デジモンの卵よ。基本的にデジモンは皆、このデジタマから生まれて成長し、死んだらデジタマに戻ってまた生まれるの…」

「それって…所謂『輪廻転生』と言う物かしら?」

まりなの言葉を聞いた友希那は、先程から紗夜のルナモンと戯れるチビモンを見ながら問い掛ける。

「その様な物だと考えても構いません」

「それにしてもチビモンのあの様子、すっかり打ち解けてるみたいだね」

リサの視線の先を見ると、そこにはチビモンとルナモンの2体が仲良く交流を深めていた。

「ボク、チビモン!」

「私はルナモンよ。宜しくね、チビモン!」

「うん! ルナモンのお姉ちゃん!」

その瞬間、ルナモンは自身の身体中に、稲妻が走り渡る程の衝撃を感じた。

「…ねえチビモン。今のもう一度、言ってみてくれないかしら?」

「? どうしたのお姉ちゃん?」

「はううう!!」

チビモンの愛くるしい様子は、ルナモンにとって心をときめかせる

物があるらしい。

「フツフツフ…お姉ちゃん…いいわ…！　今の内にこの子には、KK
L（賢い可愛いルナモン）の魅力をたっぷり理解させるわ…」

「ねえ、ルナモンは何をさつきからブツブツ言っているの？」

「あこ。　あれは見ちゃいけないものだよ」

（リサ…貴女も『注意出来る立場』じゃないでしょ…）

（『隣子お姉ちゃん』…とつてもいいな…あこちゃん、若しあこちゃんが私の妹になりたいのなら、私は何時でも歓迎するよ…）

（何でかしら…今の白金さん…ルナモンと同じく…とんでもない方にトリップしている様な気が…）

その後、各自は正気に戻って練習を開始するのだった。

「わあああ…皆、音楽がとっても上手なあ…」

「フフフ…そうでしょう。　紗夜達の音楽は正に『天からの舞い降りた』と言う表現がしっくりくる位、凄い物なのよ！」

「ルナモン…貴女が威張って言う事じゃないでしょ…」

「あはは…そう言われると逆に反応に困っちゃうなあ…」

「でも…不思議と悪い気もしないわね…」

「きやく♪」

そう言って友希那はチビモンの頭を撫でる。

「あれ？　チビモンの体が光ってるよ」

あこの言う通り、チビモンは体を光り輝かせ

、次の瞬間には一回り大きい青色の小竜へと姿を変えていた。

「何？　何が起こったの？」

「チビモンが進化したみたいね…」

そして紗夜は自身のDアークを取り出して情報を調べる。

「ブイモン。 成長期。フリー種。 小竜型デジモン。 必殺技は『ブイモンヘッド』と『ブンブンパンチ』」

「へへへ。 改めて宜しく、友希那。 ……友希那？ 如何したの友希那？」

ブイモンの呼び掛けに友希那は全く反応しない。

「如何やら、混乱してフリーズしちゃったみたいですね…」

「わーん！ 友希那——！ 死なないでよ——！」

「勝手に湊さんを殺さないで下さい…」

フリーズした友希那を如何にか正気に戻した後、5人は再び練習を行い、その後は各々解散となった。

☆☆

そして、ライブ当日。

友希那達Roseliaの面々は、会場の控え室にて最後の調整を行っていた。

「皆、準備はいいかしら？」

「アタシは何時でもOKだよ♪」

「あこの方も、問題無しです!! 今回のライブも絶対に成功ね、りんりん!!」

「うん。 そうだね…あこちゃん」

リサとあこと燐子がそれぞれの会話を交わす。

「湊さん」

不意に紗夜が友希那に呼び掛ける。

「若しもの時は、私とルナモンが皆さんを守ります。だから……」
「紗夜」

紗夜の言葉を遮り、友希那が言葉を発する。

「貴女の気持ちは確かに有り難いわ。でも、1人で抱え込もうと何てしないで。貴女は『ティマー』でもあるけど、同時に『Roselia』のメンバーなのだから」
「湊さん…有り難う御座います」

そしてRoseliaのライブが開始した。

『CIRCLE（サークル）開店1周年記念ライブ』の時よりも、よりレベルアップした圧倒的な友希那の歌唱力と紗夜達各楽器担当の演奏力、そしてこれら2つの要素が絡まって奏でられる音楽が、観客達を魅了し、会場を熱狂の渦に巻き込み、今回のライブも見事大成功に収めたのだった。

「皆、今日のライブでの応援、有り難う。私達Roseliaは、これからも頂点を目指し、私達の音楽を極み続けるわ」

友希那のマイク越しでの決意表明に、観客達の歓声の声が上がった。

「ハハハ…。それでは、此処からは我々のステージだ」

突然、謎の声が響き渡る。

「!! 皆避けて!!」

Dアークの中のルナモンの声を聞いた5人は慌てて移動すると、先程の場所に何か突き刺さった。

「な、何!?!」

リサの疑問の声に応じる様に天井から現れたのは、覆面を被り、植物の葉を身に纏った忍者の様な見た目の異形だった。

「ハハハ、そう簡単にやられてしまつては格好悪いから、仕方がないか!」

そしてその異形の背後から、ブギーモンが現れる。

「ブギーモン!」

「紗夜さん、アイツを知っているんですか?」

「そう言えば、其処の彼女以外は、会うのが初めてだったな。私はブギーモン。去るお方達の為、この人間界の侵略を実行する者だ」

するとただ事では無いと理解した観客達の歓声が、一気に悲鳴に変わった。

「皆さん、逃げて下さい!!」

「皆逃げて——!!」

紗夜とあこの呼び掛けに応じる様に、観客達は一気に会場の出口へと駆け出し、それから数分後には、会場はRoselia5人とブギーモン達しか残っていないと言う状況になった。

「ルナモン！」

「ええ！」

紗夜は自身のDアークからルナモンをリアライズし、同時に相手の忍者デジモンの情報を調べる。

「シユリモン。アーマー体。突然変異型デジモン。必殺技は

『草薙』と『紅葉おろし』…」

「紗夜！ 私を進化させて！」

「分かったわ！」

—EVOLUTION

「ルナモン進化!! レキスモン!!」

Dアークの光を浴びて、ルナモンはレキスモンへの進化を完了する。

「…参る…！」

そう言うや否やシユリモンは自身の右手を伸ばし、その先の手裏剣を回転させて攻撃をして来た。

「ティアーアロー！」

咄嗟に攻撃を回避して、そのままレキスモンは攻撃を仕掛けるが、シユリモンは空いた左手の手裏剣を回転させてレキスモンが放った氷の矢を切り裂き、そのままレキスモンに襲い掛かるも、レキスモンも再度回避し、両者は互いに距離を取った。

「ハハハ…！ 絶好のチャンスとは、正にこの事！ やれ！」

その言葉を合図にRoseliaの5人の背後から緑色の光が現れる。

「！ 危ない！」

その時、紗夜のDアークからブイモンがリアライズし、咄嗟に全身の力を込めて、友希那と紗夜に体当たりをし、2人は乱暴な形ではあるが、その場から離れる。

「ペトラファイヤー!!」

その直後に、緑色の光が残りの3人に向かって命中する。

「「キヤアアアアアアア!!」」

そして光線をそのまま浴びたりサ達は、その数秒後には3人揃って物言わぬ石像と化してしまった。

「リサー！ あこー！」

「白金さん！」

「チツ！ 逃げられたか！」

すると先程緑色の光が発射された場所から、白い体色の鶏を様な見た目のデジモンが現れた。

「…随分元気が良い物だなと…」

しかしブイモンの奮闘も空しく、片手で止められてしまう。

「友希那を……Roseliaの皆を……虐めるなあああ——
!!」

するとブイモンの動きを抑えていた筈のブギーモンの片手が徐々に押され始めた。

「何……?」

「ウワアアアアア——!!」

そこからブイモンはブギーモンの顔面に、思い切り力を込めた渾身の頭突きを浴びせた。

「ガフツ!」

ブギーモンはそのまま地面に崩れ落ちる。

「ハア……ハア……」

「チツ……貴様、余程死にたい様だなあ……!? コカトリモン! このクソ生意気なチビを八つ裂きにしてしまえ!!」

「クエエエエエエ!!」

コカトリモンの攻撃の手がブイモンに迫ろうとする。

「危ない!」

其処へ友希那が駆け付け、ブイモンを抱えて間一髪の所でコカトリモンの攻撃を回避した。

「友希那…大丈夫？」

「それはこっちの台詞よ！ 何であんな無茶を…」

「俺…友希那やRoseliaの皆が好きだから…だから守りたかった…」

「ブイモン…貴方」

そして意を決し、友希那はコカトリモンの前に立った。

「その鶏野郎！ これ以上Roseliaの皆やブイモンを傷付けるのなら、私がシメるわよ！」

友希那の声が強く響き渡った。

その時、友希那とブイモンの目の前に白い光の球体が出現する。

「これは…」

友希那は白い光の球体——董色の縁取りのDアークを手に取る。

「やはりそうでしたか…」

紗夜は確信していたのか、納得した様子で2人を見ていた。

Dアークを手にした友希那は、ブイモンに向かい合って問い掛ける。

「ブイモン。…貴方はRoselia…いえ、私に全てを懸ける覚悟はあるかしら？」

「友希那…うん。俺は…俺自身の全てを友希那に懸けるよ!!」

そして友希那はブイモン、隣に立った紗夜はレキスモンと共にブギーモン達の方に向かい合って対峙する。

「よくも私達のステージを……ここまで滅茶苦茶にしてくれたわね……！」

「Roseliaの音楽を……これ以上アンタ達に汚させはしないわ!!」

「チツ……そこまで言うなら徹底的なまでに地獄へ突き落としてやろう！ コカトリモン！ シュリモン！」

「クエエエエエ!!」
「御意」

ブギーモンの命令されたコカトリモンとシュリモンの2体が襲い掛かる。

「行くわよブイモン！」

「うん！」

—EVOLUTION

「ブイモン進化!!」

Dアークの光を浴びたブイモンは、その身を鋭い牙や爪を持ったより大きな青い体色の竜へと変えていった。

「ブイドラモン！」

「ブイモン……それが貴方の決意なのね……」

「ブイドラモン。 成熟期。 幻竜型デジモン。 ワクチン種。 必

殺技は『ブイブレスアロー』』

友希那はブイドラモンの姿にブイモン自身の強い決意を感じ取り、紗夜はDアークでブイドラモンの情報を調べる。

「進化したからと言って調子に乗るなよ！」

「ブイドラモン！ シュリモンは私が引き受けるわ！」

「分かった！」

「湊さん、私達は今井さん達を」

「ええ」

そして2体は各自の相手と戦闘を開始する。

「紅葉おろし！」

「ムーンナイトボム！」

シュリモンが右手を伸ばし、その先の手裏剣を回転させて攻撃を仕掛けるが、レキスモンは両手のグローブから発生させた水の泡を投げつけて、その隙に空中へジャンプする。

「ムーンナイトキック…」

「甘いわ！」

其処から急降下のキックを繰り出そうとするも、先にシュリモンが伸ばした左手に捕まってしまい、その勢いで地面に叩き付けられてしまう。

「グッ…！」

「最早これまでだな。大人しくこの『草薙』の錆になるがよい…！」

シュリモンは右手で背中の大手裏剣の『草薙』を持って此方に近付

いて来る。

両者の間を緊迫とした空気が流れる。

「止めだ！」

シュリモンが『草薙』を振り下ろそうとした瞬間、レキスモンは両手をシュリモンに向けた。

「!？」

「この距離なら、防ぎ様が無いでしょー！」

そしてそのままグローブから発生させた水の泡を、シュリモンの顔に向けて放った。

「ぐっ…！」

「ハアアアア!!」

「グアッ！」

そして更にシュリモンの顔面に強烈な拳の一撃をお見舞いし、拘束の緩んだ左手から脱出する。

「今度はこっちが止めを刺す番よ！ ティアアアロー！」

即座に背中の突起から美しい氷の矢を引き抜き、シュリモンに放つ。

「グオオ!! 無…無念!!」

全身を氷の矢で射抜かれたシュリモンは、そのままデータの塵と化して消えていった。

☆☆

「ウオオオオオ——！」

「クエエエエエ——！」

一方、ブイドラモンはコカトリモンと激しいぶつかり合いを繰り返していた。

「ペトラフアイヤー！」

「ウオツ！」

咄嗟に左に避けるも、運悪く左腕に命中し、その部分が石化してしまふ。

「クエエ……」

「それなら、これでも喰らえ！」

「クエエブ!？」

それを好機と見たコカトリモンは、再度ペトラフアイヤーを放とうとするが、ブイドラモンの石化した左腕に顔面を殴られた事で、攻撃を中断してしまふ。

「へへへ…良い物手に入れちゃったぜ…！　オラオラオラオラオラオラオラ！」

「クエー！　ギャブ！　クエデブ！　クエラバ！　クエブフオ！」

そのままブイドラモンは石化した左腕による連続攻撃をコカトリモンに叩き込んだ。

「クエ…クエエエエ…」

数分後、其処には連続攻撃を浴びて瀕死に近い状態のコカトリモンがいた。

「くっ…これは不味い！」

状況の不利を悟ったブギーモンは、ゲートを開いて逃亡した。

「ブイドラモン！」

「行くぞ！ ブイブレスアロー！」

ブイドラモンの口から、光輝く矢の形の光線が放たれた。

「クエエエエエエエー！」

直撃を受けたコカトリモンは、断末魔と共にデータの塵と化して消えていった。

「やりましたね、湊さん」

「ええ」

コカトリモンが倒された事により、石像と化していたリサ達も元の姿に戻った。

「あ…」

「元に戻った！」

「友希那〜！ 紗夜〜！」

3人の姿を見た友希那と紗夜だったが直ぐに視線を逸らし、元に

戻ったブイモンとルナモンも目を隠す。

「どうしたの？」

「いえ…その…目のやり場に困るので…」

紗夜の言葉にリサ達は自分の体に視線を移すと、見慣れた自身の裸が目に映っていた。

「「「イヤアアアアアアアアアア(キャアアアアアアアアアア) (ウワアアアアアアアアア)——!!」」」

数秒後、3人の悲鳴が会場の跡地に響いた。

☆☆

「はあ…この前は酷い目にあつた〜」

「でも、私達以外誰もいなかったじゃない」

「友希那や紗夜は無事だったからいいけど、アタシとあこと燐子はあの後帰る時、必死だったんだからね！」

それから数日後、友希那はブイモンやリサと共に『C i R C L E』へと向かっていた。

『へへへ…』

「ブイモン…随分嬉しそうな顔しているわね…」

『俺は友希那のパートナーでもあるけど、同時に友希那のファンだよ。だって友希那の歌っている姿、とつても格好良いんだもん』

「…有り難う、ブイモン」

(今の友希那の笑顔、何だか小さい頃を思い出しちゃうな〜)

2人の様子を見ながら、リサは内心そんな事を考えながら、微笑ましく見ていた。

暫くして、不意に友希那の足が止まる。

「友希那?」

「…にゃーんちゃん…」

「へ?」

リサが友希那の視線の先を見ると、其処には黒いフードを身に纏い、背中に鞆を背負った黒猫がいた。

しかしその黒猫——ブラックテイルモン(Uver.)は友希那達を気にも止めずにそのまま歩いて行った。

「…行くわよ、ブイモン」

『え?』

「あのにゃーんちゃ…黒猫は間違い無くデジモンよ…見失う前にモフモフ…何とかするわよ(そしてできる事なら、あの子をRose liaの新メンバーに…)」

そう言うと友希那は駆け出した。

「ちよつと友希那!? 待ってよ友希那ってば〜!」

暫くして我に返ったりリサも、暴走する友希那を止める為に慌てて駆け出すのだった。

尚、友希那とリサが『CIRCLE』に到着し、そこから紗夜の説

教を受けるのは予定時間から20分程過ぎた後の事であった(因みに
ブラックテイルモン(Uver.)はあの後見失ってしまい、友希那が
更に落ち込む要因になったのは言うまでもない)。

第8話 希望と恐竜と笑顔の新テイマー

「ふええ…此処は何処なの〜?」

とある場所。

誰もいないこの場所で、不意に何者かの声が聞こえる。

「とにかく、何とかして元の世界に戻らないと…」

そう呟きながら、その声の主は再び、姿を消した。

「さあ皆! 今日『笑顔パトロール隊』、出動よ!!」

商店街の一角に、こころの元気な一声が響き渡る。

「ああ…こころ。今日も笑顔が輝いていて、とても偉いね…」

「えへへ。はぐみも沢山の笑顔を見付けられる様に、頑張つてパトロールするよ!」

薫とはぐみも何時も変わらない様子で、こころに伝える。

「市ヶ谷さんにワームモン、それに二葉さんも…本当にごめん…」

「いや、そんな別に…。むしろ奥沢さんもあの3人のテンションに付いていける辺り、ある意味尊敬するよ…」

（あーちゃん…何だか何時も以上に疲れた様子だな…。よし、今日は何時以上に僕がしっかり支えよう!）

「い、いえ…ハロハピの皆さんの普段の様子や活動を、この様な形で体験出来る何て…私にとつてもいい経験です！」

「あはは…つくしちゃんもそう畏まらなくていいよ……」

花音もそんなつくしの様子に優しく対応する。

因みに何故有咲とつくしがこの場にいるのかと言うと、2人で話込んでいた時に偶々道に迷っていた花音に出会い、彼女をハロハピメンバーの下に送った所、そのままこのころの勢いに押され、『特別隊員』と言う形で、参加したからである。

その後7人(＋1匹)は、商店街を始め様々な場所をパトロールしながら、現在広場の方で休憩を取るのだった。

「ん、今日も沢山の笑顔が見れて良かったわ！」

「うん！ はぐみ達も嬉しくて、最高の気持ちだよ！」

『笑顔』…それは生きとし生ける者達誰もが持つ『宝物』…ああ…とても儂いね…」

「全くあの3人ったら…市ヶ谷さん達、大丈夫？」

「あ…ああ…な…何とか…」

『あーちゃん大丈夫!? 何処か怪我でもしたの? お腹が空いたの?』

「落ち着けワームモン…私はもう小学生じゃねえから…安心しろ……」

「ふふふ…ワームモン、何だか有咲ちゃんの保護者みたいだね…」

「これが…ハロハピの活動…」

各自はそれぞれの会話に花を咲かせながら、休憩を過ごしていた。

カサカサ……。

「あら？ 何かしら？」

その時、近くの草むらで何か動く音を聞いたところが音のした所に近付いた。

「はあく、少し疲れたから休もう…」

そこにいたのは、オレンジ色の長い耳をした哺乳類の様な見た目の生物だった。

「どうかしたの？」

「ふえ!？」

突然現れたところの存在に、パタモンは思わず驚いた様子を見せた。

「その姿……貴方、若しかしてデジモンさんね!!」

「わわわわっ!! 一体君は何なの!？」

パタモン自身、いきなり現れたところの存在、そして何故デジモンの事を知っているのかと言う疑問など……様々な要素を前に、脳内が混乱している状態だった。

「……………」

すると其処に美咲を筆頭にした他のハロハピの面々、更に後ろから有咲とワームモンとつくしの3人がやって来た。

「美咲！ 見て見て！ 此処にデジモンさんがいるわ！」

そう言つて、こころは皆にパタモンを紹介する。

「何……何なの……？」

「この子がころんの見付けたデジモンさん？ とっても可愛いね！」

「おやおや……若しかして迷子になってしまったのかな？」

「ちよつとちよつと……その子が困っていますよ……」

「ふええ……」

ころんに加え、現れた見知らぬ人間達に遭遇した事もあつてパタモンは更に混乱していた。

「あのデジモンは……？」

「あれはパタモンだよ」

「パタモン？」

「ああ。私達もデジタルワールドを冒険していた時に会った事があつてな……」

つくしの問い掛けにワームモンと有咲が丁寧に答える。

特に有咲に関しては、デジタルワールドを旅していた時の事を思い出していて、少し懐かしむ様子を見せていた。

「そう言えば、あなたの名前は？」

「パ……パタモンです……」

「パタモンね！ あたしころん！ そしてこっちにいるのは、美咲にはぐみ、それに薫に花音よ」

「ど……どうも……」

「宜しくね、パタモン！」

「ああ……儂いねえ……」

「よ……宜しくね……」

「う……うん……」

「それと彼処にいるのは、有咲とワームモンとつくしよ」

「こ、こんにちは…」

「こんにちは。ワームモンです」

「こつちこそ宜しくな」

パタモンに簡単な自己紹介をした後、こころが問い掛ける。

「ところでパタモンは、どうしてこの公園にいたのかしら？」

「うん…。僕がデジモンワールドを飛んでいた時に、急に目の前に真っ黒な丸い形の穴が現れて…気が付いたらこの場所にいたの…」

「あーちゃん、『真っ黒な丸い形の穴』って…」

「間違い無く『デジモンゲート』だな」

話を聞いた有咲とワームモンは、『真っ黒な丸い形の穴』の正体とパタモンの状況を代々察した。

(一体デジタルワールドで何が起きているんだ…?)

有咲は内心で疑問の様子を見せていた。

——ドオオオン!!

「ふえ!?!」

「な、何?!」

突然の地響きに花音と美咲が困惑した様子を見せると、不意に周りが暗くなったので上を見上げると其処には、巨大な青い体色の恐竜の姿がいた。

「!!!キヤアアアア (ウワアアアア) ——!!!」

「凄いわ! 今度は恐竜さんが出て来たわ!」

「ああ…今日は何て儂い急展開が続く日何だろうか…」
「おーい恐竜さーん！ どうしたのー？」

突然現れた青い恐竜に対して、花音と美咲とパタモンは悲鳴を上げ、こころと薫とはぐみ（美咲曰わく『ハロハピの3バカ』の3人は、それぞれ何時もの様に個性的な反応を見せていた（最も薫に関しては、若干青ざめた様子を見せているが）。

「アイツは……！」

有咲は自身のDアークで、相手のの情報を調べる。

「アロモン。 アーマー体。 恐竜型。 必殺技は超高熱の熱風を吐き出す『ダイノバースト』……！」

「ハロハピの皆さーん！ 早く逃げましょうー！」

つくしは状況を見て、慌ててこころ達に呼び掛ける。

「貴方もデジモンさんね！ そんなに怖い顔をしてたら良くないわ！

ほら、笑顔になりましょう♪」

「ちよつとこころ?!」

「こころちゃん（先輩）!?!」

しかし、こころはアロモンの攻撃的な姿勢も意に介さずに尚も語り掛け、その様子に美咲と花音とつくしは、啞然とした様子を見せた。

「ギャオオオオオ——!!」

しかしアロモンは叫び声を上げながら巨大な顎を開き、こころに迫ろうとした。

誰もが最悪の光景を想像し、目を瞑る。

「ムーンシューター！」

次の瞬間、一発の光弾がアロモンに命中した。

「グオオオ…！」

「大丈夫か？」

ハロハピの声の聞こえた方向を振り向くと、其処にはステイングモンの姿があった。

「ま…間に合った…」

有咲の口から焦りと安堵の混じった様子の声が出た。

「グオオオオオ——！！」

アロモンは先程のステイングモンの一撃に余程御立腹だったらしく、一層怒りの籠った様子で雄叫びを叫んだ。

「ステイングモン！」

「ああ。ムーン…！」

「ダメよ!!」

その時、こころが両者の真ん中に立ち塞がった。

「「「「」」」」 (ちゃん) (「こころん) (先輩) !? 「「「」」」

こころの突然の行動にハロハピのメンバーとつくしが驚愕の声を上げた。

「弦巻さん…」

「この子はまだ何も悪い事はしていないわ!! 幾らデジモンだからって、見た目だけで判断して攻撃するなんて…そんなのとっても可哀想よ!」

そう言ってこころは再度アロモンの方を向く。

「大丈夫よ。 此処には貴方を傷付けようとする物や人は存在しないわ。 だから落ち着いて頂戴…」

「グオオオオオ——!!」

しかしこころの言葉に意を介さず、アロモンは口から超高熱の熱風を吐き出した。

「「「「」」」」 (ちゃん) (「こころん) (先輩) !! 「「「」」」

ハロハピの面々とつくしは目の前の光景に叫び声を上げ、こころを庇おうとステイングモンが飛び出そうとする。

「ウワアアアアア——!!」

その時、小さな何か有谁よりも一早くこころの下に向かって行き、彼女に向かって体当たりをした。

それによって、アロモンが放った熱風は当たる事無く通り過ぎた。

「あれは…」

「ハア…ハア…」

有咲が視線を向けた先には、パタモンとそころの姿があった。

「パタモン…大丈夫…」

「馬鹿！」

突然、そころの言葉を遮ってパタモンが怒鳴った。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!! どうしてあんな危険な事したの!? 一歩間に合わなかったら死んでいたかもしれないんだよ！」

そころは突然怒鳴りだしたパタモンを、ただ茫然とした様子で見ている。

「まだほんの少ししか経っていないけど…それでも僕はこの世界で初めて出来た『友達』が危険な目に遭うのは嫌なんだよ！」

2人の間を沈黙した空気が流れる。

「パタモン」

暫くしてそころが口を開く。

そしてパタモン自身も、不意に温もりを感じる。

「ごめんなさい。そして…有り難う」

「ギャオオオ——！」

大声の聞こえた方を向くと、アロモンが先程以上に怒りの籠もった雄叫びを上げながら、此方を睨み付けていた。

「そうだったわ。　この子を笑顔にしないとね」

「こころ……」

「勿論、私一人だけじゃないわ。　……パタモン、若しあなたさえ良ければ……アタシと一緒に、世界に笑顔を届ける冒険をしないかしら？」

「こころ……僕はまだ『世界に笑顔を届ける』って言うのが良く分からない部分もあるけど……それでも僕は……こころの願いを……一緒に叶えて行きたい！」

パタモンはこころの問い掛けに、自分の正直な想いをはっきりと答える。

「……有り難う、パタモン。　一緒に世界に笑顔を届けましょう！」

「うん！」

その時、こころとパタモンの目の前に、白い光の球体が出現し、こころが手を伸ばして取ると、白い光の球体は——レモンイエローの縁取りのDアークへと変化したのだった。

「あれって……デジヴァイス？」

「それじゃあ、パタモンがこころんのパートナーって事？」

「ふ……ふええ……」

「人間とパートナーデジモンの絆の象徴である『デジヴァイス』……」

ああ、夢いね……」

美咲を筆頭にハロハピメンバーは目の前の光景に対し、それぞれ思いの反応を見せる。

「弦巻さん。 1つ聞いていいか？」

すると様子を見ていた有咲がステイングモンと共に近付き、こころに問い掛ける。

「弦巻さんは、デジモン達に対してもハロハピのライブの時の様に『笑顔を届ける』と言う主旨を言ったよな？」

私達人間の様に、デジモン達だって全員が私のワームモンや弦巻さんのパタモンみたいな穏やかな奴だけじゃねえ。中には今のアロモンやこの前の『記念ライブ』の時の奴等みたいに凶暴な性格の奴だっている。

そんな奴らを前にしても弦巻さんは、『デジモン達に笑顔を届けたい』と思っているのか？」

「有咲……確かに貴女の言っている事も全く理解出来ない訳でも無いわ。 ……でも、見た目や姿だけで『悪いデジモン』って決める偏見的な考え方、アタシには出来ないわ。 アタシは……『デジモンの皆にも笑顔を届けたい』。 例え周りから何百回も何千回も嘲笑されたら、裏切られ様としても……この考えや想いを捨てる気は無いわ」

こころは優しい雰囲気を出しつつも、普段の様子からは考えられ無い程、真剣な眼差しで有咲の問い掛けに答える。

「……それが弦巻さんの決意か……」

有咲は納得した様子を見せる。

「グオオオオオオ——！」

叫び声の方向を向くと、アロモンが先程と変わらず攻撃的な様子で此方を見ていた。

「弦巻さん。他の皆は私とステイングモンに任せて、思う様に動いてくれ」

「分かったわ有咲」

そして、こころはパタモンと共にアロモンの前に立つ。

「行くわよパタモン！」

「任せてこころ！」

——EVOLUTION

「パタモン進化!!」

Dアークからの光を浴びたパタモンは、その身を変化させる。

哺乳類の様な姿から人型に変化し、やがて光が消滅すると、其処には背中に光り輝く6枚の翼を生やし、神々しいまでの純白の衣を身に纏った天使がいた。

「エンジエモン！」

「まあ！パタモンは天使さんだったのね！」

「ははは…。アンタの臆さず堂々といられるその姿勢には、見ているこっちも改めて感服させられちゃうよ…」

「エンジエモン。 成熟期。 天使型。 ワクチン種。 必殺技は『ヘブンズナツクル』…」

エンジエモンの姿を見たこころはまるで新しい玩具を見つけた子供の様に燥ぎ、美咲はそんなこころの様子に半分呆れた様な様子を見せ、有咲は自身のディーアークでエンジエモンの情報を調べる。

「グオオオオオオ——！」
「フツ！」

アロモンは頭部を前に倒して水平の姿勢を取り、そのまま突進をしてくるが、エンジエモンはこころを抱き抱えてそのまま同じく有咲とつくしを抱えたステイングモンと共に、空中へと回避し、そのまま美咲達のいる所に着地し、こころを下ろした。

「大丈夫だった、こころ？」
「ええ。 平気よ」

こころの安全を確認したエンジエモンは、そのまま再度アロモンに向き合う。

「グオオオオオオ——！」

するとアロモンは口から超高熱の熱風『ディノバースト』を吐き出す。

「こころには指一本触れさせはしない！ ゴツドタイフーン！」

エンジエモンは自身の持っている『ホーリーロッド』の中央部を握ってプロペラ状に高速回転させ、其処から金色の竜巻を発生させてアロモンの熱風を相殺した。

「グオ!? グウ…」

アロモンはその様子を見て動揺し、動きが少し鈍ってしまう。

「ハアアアアー！」

エンジエモンはそこから瞬時にアロモンに近付き、『ホーリーロツド』による突きの連続攻撃を浴びせる。

「グオオ…」

「行くぞ…」

頃合いを見たエンジエモンは自身の拳に聖なる力を集める。

「ヘブンズナツクル!!」

「グオオオオオオオ——！」

そしてエンジエモンは黄金に輝く拳から強力な聖なる光束を放ち、それを喰らったアロモンは苦痛の声を上げながら吹っ飛ばされた。

「グウウ………」

「まだやると言うのなら、今度は容赦しない」

そう言つてエンジエモンは再度拳に聖なる力を集め様とする。

「待って!!」

その時、こころが制止の声を上げる。

「こころ？」

「この子は何も悪くないわ。いきなり知らない場所に来てしまって、興奮していただけなのよ。だから倒すなんて可哀想よ」
「…分かった」

するとエンジエモンは両手に聖なる力を集めて、そのまま斜め上に揚げた。

「ホーリーレクト！」

そして其処からアロモンに右の手のひらを前に突き出して、先程集めた聖なる力を浴びせる。

「グウウウウ…グオ？」

すると聖なる力を浴びたアロモンは、先程と違い大人しい様子でキョトンとした様子を見せていた。

「凄い…さっきまであんなに凶暴だったのに、今はあんなに大人しくなっている」

「あの光…優しくとつても温かい」

「とても優しいね…」

「はぐみもあの光を見てたら、何だか元気になって来たよ！」

先程エンジエモンの放った聖なる力を見たハロハピの面々は、思い思いの言葉を発する。

「有咲先輩…私、今の様子を見てたら、ハロハピの『世界を笑顔に』って言うコンセプトに懸ける弦巻さんの強い想いが、少しだけ分かった

様な気がします…」

「あーちゃん…僕も感じたよ。あの子の強い思い…」

「そっか…御疲れ様、ワームモン」

つくしもポツリと眩き、有咲も退化したワームモンを抱き抱え、優しく頭を撫でた。

その後アロモンは弦巻家の黒服達と事情を知ったまりなさんの協力によって、『CiRCLE』の脳空間に作られたデジモンの保護施設に送り届けられたのだった。

☆☆

「さあみんな、今日のライブも皆に笑顔を届けられる様に頑張りますよう！」

数日後。

ハロハピの面々は幼稚園のイベントにゲストライブの為に参加していた。

「ああ…今日は最高に盛り程の気持ち良い日だね…」

「えへへ。はぐみも一生懸命頑張ってるよ！」

「ふ…ふええ」

「花音さん、落ち着いて下さい」

こころの掛け声に、他の4人もそれぞれの反応を返す。

「それじゃあ、行くわよ!!」

「「「ああ（うん）!!」」」

そして5人はステージへと向かって行った。

☆☆

「これがハロハピのライブか……」

ステージ裏の目立たない所からこころ達のライブを見ていたパタモンが呟く。

パタモン自身、ガールズバンドに関してはまだまだ分からない事だらけである。

「…皆、とっても楽しそう」

けれど、こころ達のライブを見ている幼稚園の子達の笑顔を見ていて、自分も楽しそうな気持ちになっているのが分かる。

（こころ……出会ってまだ少ししか経っていないけど……これから宜しくね）

パタモンは内心そう呟きながら、ライブを観賞するのだった。

その頃、幼稚園のグラウンドの草木の茂みの中から、こっそりハロハピのライブを見ている小さな影があった。

(彼奴…)

その小さな影の視点はステージ——厳密に言えば、ステージに立つピンク色の熊——ミッシェルを見ていた。

(デジモンなのに、人間と一緒に音楽をやっている…。 きっと良い人間に出会ったんだな…。 決めた。 オイラもあの人間達とコミュニケーションを取ろう)

その決心すると、その小さな影は周りに気付かれない様にその場を後に去って行くのだった。

第9話 熊とミミックと常識人な新テイマー

「皆〜！ 今日も元気かな〜？」

ある日の商店街。

1匹のピンクの熊が愛嬌のある声で呼び掛ける。

「ミツシエルだ！」

「ミツシエル〜！ 握手して〜！」

ミツシエルと呼ばれるピンクの熊の声に反応した子供達が、続々と寄って来る。

「は〜い！ 皆順番に握手してあげるから仲良くしてね〜！」

そう言っつて、ミツシエルは優しく丁寧な姿勢で、子供達と握手をしていった。

「あ、あの…ミツシエルさん！」

唐突に声を掛けられたので、後ろを振り向くと、其処にはましろ、そして彼女の隣には眼鏡を掛けた大人しそうな見た目の少女——朝日六花（通称ロック）の姿があった。

「…やあ！ 君も僕と握手をしたいのかな？」

ミツシエル——もといミツシエルに扮している美咲は直ぐに気を取り直して、何時も通りの様な形式でましろに応対する。

「はい！ 宜しく御願います！」

ましろは嬉しそうな様子でミッシェルとの握手会に参加する。

『この商店街におけるミッシェルの『人気者』ぶりの大きさには……本当に驚かされるな……』

ましろのDアークの中にいるハックモンは商店街のミッシェルの人気者ぶりの大きさに驚きの様子を見せながら、ましろとミッシェル（美咲）のやり取りを見ていた。

その後も商店街でのミッシェルとの『握手会』のイベントは、特に問題も無く無事に成功に終わったのであった。

だが美咲自身、全く気付いていなかった。

イベントの時から、自分の事を見ている小さな影がいた事——
|。

☆☆

「ふう……いやあ、本当に子供って元気だよなあ」

イベント終了後、美咲は控え室で1人呟く。

（そう言えばこの子（ミッシェル）とも……出会ってもう1年も経つんだよな……）

今思い返して見れば、本当に驚きの連続だった。

去年の1年生の春、『高額料金』と言う項目に惹かれ、そこから軽い気持ちでこの着ぐるみバイトを受け、そこからこころに出会い、半ば強引な形でハロハピに加入した。

初めは、こころを筆頭にした各メンバーの破天荒な言動などに気苦
労の毎日で滅入る事が多かったけど、今では気苦労が絶えないながら
も、逆そんな毎日が不思議と楽しいと思える自分がいる。

若しあの時、このバイトを受けなかったら、自分の高校生ライフは、
今とは360・違った物になっていたのかもしれない。

美咲はそう思いながら、この一年間を振り返っていた。

「おい。おい、聞こえるか？」

不意に美咲しかいない控え室に、見知らぬ声が響く。

美咲が声のした方向を振り向く。

「よう」

其処にいたのは、後ろ向きに帽子を被った黒い熊だった。

「ウェアアアア!？」

美咲は思わず素っ頓狂な声を上げた。

「なあ……」

「な…何でしょうか？」

美咲は思わず身構える。

「お前……」

2匹の熊の間に、沈黙が流れた。

「若しかしてお前…オイラの仲間なのか？」

「はい!？」

「その見た目…：オイラには分かるぞ。 お前もオイラと同じでこの世界に迷い込んだじゃったクチ何だろ？ いやあ、この世界に来て早二週間、オイラ嬉しくって…：嬉しくって…：ウツウツウツウ（つ、つ）」

（あ——…：若干ベクトルの違いはあるけど…：このデジモン、こころ達と同じタイプの雰囲気を感じるなあ……）

美咲自身、相手の正体がデジモンである事と同時に、こころやはぐみに似た雰囲気のを内心で感じ取っていた。

「大丈夫ですか!？」

その時控え室のドアが開き、ましろがハックモンとロックを連れて入ってきた。

「倉田さん…： ハックモンに朝日さんも…」

「何だお前ら？ 話の途中の割り込みは良くないんだぞ!」

「ひい!? あの熊さん、本物な上に人の言葉を喋っておる!? ましろちゃんの白い恐竜さんと言い、『東京』って魔境か何ぞなの!？」

混乱するロックをよそに、ましろは自身のディーアークで相手の情報
報を調べる。

「ベアモン。 成長期。 獣型。 ワクチン種。 必殺技は『小熊正
拳突き』…」

「邪魔するなら容赦しないぞ！ 小熊正拳突き！」

ましろたちを敵と認識したベアモンは、自身の拳を打ち込もうと飛
び掛かって来る。

「危ない！ フィフスラッシュュ！」

ハックモンが咄嗟に自身の強靱の爪による攻撃をベアモンの拳に
ぶつける。

数秒の拮抗の後、両社はいったん距離を取った。

「お前中々やるな！ 次は…「スト——ツプ！」何だよ急に？」

「いや此処控え室だから！ こんな所で暴れたら迷惑が掛かるでしょ
！」

「美咲の言う通りだ。 此処で私達が争っても何の意味も無い」
「…分かったよ。 ごめん」

美咲とハックモンの言葉を聞いたベアモンは直ぐに落ち着きを見
せ、謝罪の言葉を述べた。

「ふう…良かった〜」

ましろもその様子を見て、安堵の声を出す。

「あははは…熊や恐竜が普通におる辺り…やっぱ東京って…岐

「卓よりも進歩しておるんだなあ……」

後ろを振り返ると、ロックが先程から光景による衝撃に脳内がパニックになっているのか、混乱した様子を見せていた。

「これ…説明しないといけないよね…」

「その様だな…」

ましろとハックモンは互いに顔を見合わせて呟いた。

☆☆

「デジモン…そんな生き物がある何て…しかも、こここの所の怪獣騒ぎもその『デジモン』達の仕業……」

その後、如何にか落ち着いたロックは、ましろとハックモンからデジモンの事に関して説明をされ、状況を理解した。

「まあ、あたしもついこの間まで全く知らなかったから、朝日さんがそんな気持ちを抱くのも分かるよ……」

美咲（勿論、ミッシェルの格好は解いている）も今のロックの様子にデジモンと出会ったばかりの頃の自分を重ね合わせたのか、同意の姿勢を見せる。

「そうそう。オイラだって人間界に来た頃は、右も左も全く分からない状態で苦労したもんだよ」

「アンタは何しれつと会話に混ざってんのさ……」

「まあまあ、『同じ釜の飯を食った熊』だし、其処は目を瞑ってよ」

「いや、あたし達出会ってまだ1時間しか経ってないし、それ以前に同じ釜の飯も食べてないから！」

美咲のツツコミが、普通に会話に混ざるベアモンに入る。

「ハックモン……どう思う？」

「ふむ……今の所、見た感じでは悪意は感じられ無いが……」

「そうだよね……。それにしても……」

「ああ……」

『行くわよ美咲！』

『ちよつ……待ってよ！』

(妙なデジャヴを感じるのは、気のせいなの(かな)(だろうか)……?)

美咲とベアモンの様子を見ていたましろとハックモンは、妙なデジャヴを感じていた。

「それにしても、ベアモンは？」

「そうだね……取り敢えず……」

「オイラ、美咲ん家行くよ！」

ましろの言葉が終わらない内に、ベアモンは即答で美咲の所に行く事を告げる。

「ちよつ……いきなりそんな事言われても……」

「そんな寂しい事言わないでくれよ……。『袖摺り合うも多生の熊』って言うじゃないか……」

ベアモンは寂しそうな感じで、美咲に訴え掛ける。

「ええ……」

「大丈夫。 オイラの『熊力（くまりよく）』に誓って、迷惑は掛けないからなあ」

「いや『熊力』って何!? ……はあ、分かったよ。 但し絶対に家では大人しくしている事! これだけは守ってよ!」

「応! オイラの『熊力』に掛けて守るぜ!」

美咲はツツコミを入れつつ、ベアモンのうるうるとした表情を見て、溜め息を吐きつつも了承するのだった。

「えっ……でも、若し美咲さんに何かあったら……」

「いやあ……この子、見た感じ悪い子じゃなさそうだし……それに……いや、何でもないよ」

美咲は何か言い掛け様としてが、直ぐに止めた。

「美咲さん?」

「大丈夫だよ倉田さん」

「……分かりました。 そう言うのでしたら、美咲さんにお任せします」

美咲の様子を見て、ましろの方も彼女にベアモンの事を任せる事を決めた。

「それじゃあ、美咲の家へ……レッツゴーだ!」

ベアモンは楽しげな様子で歩き出した。

「ちよつと! あたしの家はあっちだから! あーもうっ!」

美咲は慌ててベアモンを追い掛けて行った。

「ましろ。 私達もそろそろ家に帰ろう」

「うん……そうだね。 ロックちゃん、それじゃあまたね」

「えっ、う……うん」

そしてましろとハックモンも、ロックに別れを告げて帰路に向かった。

(『デジモン』…か)

ロックはましろとハックモンの姿を暫く眺めながら、内心で『デジモン』の事に付いて考えていたのだった。

☆☆

「はあ、漸く落ち着いてきた…」

「大丈夫美咲？ 蜂蜜でも食べるかい？」

「いや……今は蜂蜜は……ちよつと……」

「あはは…美咲ちゃん、相当疲れているみたいだね…」

「昨日ベアモンが家に来てから、色々と賑やかだった物でして……」

美咲の様子を見ていた花音が、彼女の苦労を察して苦笑いを浮かべている。

「ハックモン……」

『ましろ、私も今同じ事を考えていた処だ』

一方でましろとハックモンは何かを察した様子で、美咲とベアモン

のやり取りを見ていた。

「何と言うか……ベアモンは約束した通り大人しくしていたんですけど……あたしが『ミッシェルの友達』って紹介した所為もあって、妹と弟がかなり喜んでしまつて……その後、『ベアモンと一緒に寝たい!』と言われたりして、結構な賑わいだつたんです……」

「オイラ、ミッシェルの人気振りが、昨日の様子で全身に染み付いちまう程理解したよ……」

口で苦勞した風な事を言いつつも、ベアモン自身の表情は満更そんな様子も無く、寧ろ楽しそうであつた。

『! 皆避けるんだ!』

その時何かに気付いたハックモンの鋭い声が響き、皆が慌てて移動すると、先程まで居座つていたベンチに紫色の光線が命中し、ベンチを破壊した。

「ふええええ!?!」

「ちよつと、何なのいきなり!?!」

「! 見て下さい!」

花音と美咲は突然の事に混乱しながらも、ましろの言葉で光線の来た方向を見る。

「ミミッツ……ミミミニ……」

其処には左腕に銃を装備し、目をギョロギョロと動かしている檻の様な見た目の異形の姿があつた。

「あれって…若しかしてデジモン？」

美咲が相手の正体に気付き、ましろは自身のデューアークで相手のデジモンの情報を調べる。

「ミミックモン。 成熟期。 突然変異型デジモン。 ウイルス種。

必殺技は『ヒンダーマイアズマ』と『デッドショット』……」

「ミミ……」

「くっ…ベビーフレイム！」

するとミミックモンは再び左腕の銃——『デッドショット』から光線を放つも、ハックモンは咄嗟に口から火球を放って相殺する。

「ティーンラム！」

そして即座に尻尾をドリルのように回転させて、ミミックモンに突っ込む。

「ミミ……！！」

するとミミックモンは、ハックモンに対して霧を吐き出した。

「グアア…！！」

「ハックモン！」

ミミックモンの霧を真正面から受けたハックモンは、苦痛の声を挙げながらその場に倒れた。

「ミミ………トモダチ………ミミ……」

ミミックモンはそのままハックモンの方へと近付いて行く。

「小熊正拳突き！」

「ミミツ……！」

その時、小さな影がミミックモンに一撃を浴びせ、そのままミミックモンは吹っ飛ばされた。

「今のは……？」

「大丈夫か？」

小さな影の正体であるベアモンが声を掛ける。

「ミミミミミ！ ミミミミミ！」

「止める！ これ以上やるなら、オイラが相手になってやるぞ！」

「ミミミミ——！」

ミミックモンは再度左腕の銃から光線を放ってくるが、ベアモンはそれを避けるとダッシュでミミックモンに近付いて行く。

「ミミミ……！」

「同じ手は喰わないぞ！」

「ミツ……！」

「エエエエイ！」

「ミミミミミ——！」

そして再び『ヒンダーマイアズマ』を放とうとするミミックモンに対し、片手で砂を掛けて視界を塞ぎ、其処に体当たりを浴びせて吹っ飛ばした。

「見たか！ オイラの『熊力』！」

「す、凄い……」

「……初めての戦闘とは言え……成熟期のデジモン相手に彼処まで戦える何て……」

ベアモンの戦いぶりを見ていたましろとハックモンは、その様子に驚いていた。

「ミミック……！」

その時、ミミックモンの動きに気付いた美咲がベアモンの下に駆け出す。

「ミミック——！」

「！ 危ない！」

美咲はそのままベアモンを抱きしめ、ミミックモンの攻撃を間一髪で回避した。

「美咲！」

「ま……間に合った……ウツ！」

「美咲ちゃん、血が……！」

美咲の左袖の肩の部分から少量の血が出ている事に気付いた花音が声を挙げる。

「美咲……」

「大丈夫……。少し掠っただけだから……」

「何で……何でこんな無茶を！」

ベアモンの問い掛けに、美咲は暫くして答える。

「…似ているんだ」

「へっ？」

「アンタを見ているとね…あたしの大切な子の事が頭に浮かぶんだ」

「大切な子…？？」

「無邪気で好奇心旺盛でいつも目をキラキラ輝かせていて…だけど人の事を良く見ていてね…。特にあたしの事何か…ほぼ的確に言い当てていて、その度にドキツとしていた」

「美咲さん…」

「美咲ちゃん…」

ましろと花音は美咲の言っている『大切な子』が誰なのか察し、ハツクモンと共に静かに見守っていた。

「…最初は無理矢理付き合わされて…はつきり言つて内心迷惑って思っていたけど、一緒に過ごしていく内に…花音さんやはぐみや薫さん、他のガールズバンドの皆と出会って、当たり前前の毎日が不思議と楽しいと思える様になって…その子に感謝しているんだ」

美咲の話をベアモンは黙って聞いている。

「そして…その子がこの前今みたいにデジモンに襲われそうになった時に言ったんだ」

『確かに貴女の言っている事も全く理解出来ない訳でも無いわ。』

「…でも、見た目や姿だけで『悪いデジモン』って決める偏見的な考え方、アタシには出来ないわ。アタシは…『デジモンの皆にも笑顔を届けたい』。例え周りから何百回も何千回も嘲笑されたり、裏切られ様としても…この考えや想いを捨てる気は無いわ』

「それを聞いた時のその子の様子を見たら…あたしもその子の想いを一緒に叶えたいって、内心想ったんだ…ははは、あたしって変なのかな？」

「……そんな事ない。 オイラ、美咲と出会ってまだ短いけど、美咲がとつても優しくくて、誰かの笑顔の為に一生懸命になれる奴だって言うのが充分伝わっているよ。 だから……オイラも美咲と一緒に、『その子の想い』を叶える手伝いをさせてよ！」

「ベアモン……」

その時、美咲とベアモンの目の前に白い光の球体が出現した。

「これは……」

美咲が白い光の球体に手を伸ばすと、その光の球体は——マドンナブルーのボディとマゼンタの縁取りのディーアークへと変化した。

「あれって、こころちゃんの時と同じ……。 それじゃあ、ベアモンが美咲ちゃんのパートナー……」

「ミミミミミ——！」

叫び声を聞いた美咲とベアモンが振り返ると、ミミックモンが興奮した様子で此方を睨んでいた。

「……行くよベアモン！」

「うん！ オイラ達の熊力、アイツに見せてやろう！」

— EVOLUTION

「ベアモン進化!!」

Dアークからの光を浴びたベアモンは、その身を変化させる。

小柄だった体格は一回り大柄な物となり、光が消滅すると、其処には鋭い爪と牙を生やした精悍な顔付きのグリズリーの様な見た目のデジモンがいた。

「グリズモン！」

「これがベアモンの進化した姿…」

「グリズモン。 成熟期。 獣型。 ワクチン種。 必殺技は敵の攻撃の力を利用して、逆に急所について一撃で倒す大技『当身返し』……」

花音はグリズモンの姿を感嘆し、ましろは自身のデューアークでグリズモンの情報を調べる。

「乗って、美咲！」

「うん！」

「ミミック——！」

「フツ！」

ミミックモンは左腕の『デッドショット』から光線を放つが、グリズモンは美咲を自身の背中の上に乗せると素早く回避し、そのまま安全な場所に美咲を降ろした。

「ミミック——！」

するとミミックモンは、霧を吐き出してきた。

「グリズモン！」

「ああー！」

美咲の言葉でグリズモンはジャンプして、ミミックモンの霧を回避した。

「凄い……美咲ちゃんとグリズモン、息がぴったり合ってる……」

「はい……出会ってまだ短いけど、美咲さんもグリズモンもお互いに深く信頼し合っている様子が強く伝わって来ます……」

花音とましろは、美咲とグリズモンの様子を見ながら呟く。

「ミミックミ——！」

ミミックモンは等々自棄を起こし、そのままグリズモンの方へ向かって行き、自身の右手を振り下ろそうとする。

「フツ！」

「ミミック!?!」

「当身返しー！」

「ミミック——！」

グリズモンはミミックモンの右手の攻撃を受け止めるとその力を利用して、逆にミミックモンの急所に大技を炸裂させて吹っ飛ばした。

そしてその様子を見たグリズモンは、ベアモンの姿に退化した。

「ベアモン！」

「やったな美咲！」

「うん……」

「美咲（ちゃん）（さん）！」

其処へ花音達が駆け付け、美咲達はミミックモンの方を見る。

「ミツ…ミツ…サミシイ…トモダチ…ホシイ…」

「あのデジモン…若しかして『友達』が欲しかったのかな？」

ミミックモンの様子を見た花音が眩き、美咲達も事情を察する。

「よし……」

「ベアモン？」

「おくい、ミミックモン！」

するとベアモンは徐にミミックモンに近付き、美咲も後を追う。

そしてベアモンはミミックモンに声を掛けた。

「ミミン？」

「お前の事情や気持ちは良く分かったよ。けど、だからってあんな乱暴なやり方はダメだよ」

「ミミン……」

「もう2度とあんな事しないって約束出来る？」

「ミ…ミミック！」

「よし！ じゃあ、はい！」

「ミミン？」

「今日からオイラと美咲は、お前の『友達』だ！ これはその『誓いの握手』だ！」

「ミミン！」

それを聞いたミミックモンは自身の右手で、差し出されたベアモンの手と握手した。

「ほら、美咲も……」

「もうっ……はい」

そして美咲も同じ様に手を差し出し、ミミックモンと握手を交わす。

「ミミニー！」

「ミミックモン……あんなに喜んでる」

「ああ……先程まで敵対していたのが、嘘の様みただ……」

ましろとハックモンは思い思いにその様子を見ていた。

そしてその後、ミミックモンは『CIRCLE』の電腦空間に作られたデジモンの保護施設に送り届けられたのだった。

☆☆

「さあ、ハロハピ作戦会議よ！」

「ああ！ オイラの熊力、ハロハピのライブを盛り上がる作戦に喜んで力になるよ！」

弦巻家の一室に……とベアモンの声が響く。

「……とベアモン、すっかり意気投合してるね……」

「うん……何だか……ところが2人に増えたみたい……」

「あははは……（こっちは逆に美咲ちゃんが2人になった感じがするなあ）」

花音は美咲とパタモンを見ながら、苦笑いを浮かべた。

後日、美咲はこころ達3人にベアモンの事を紹介した。

特にこころはベアモンと意気投合し、美咲は内心『3馬鹿が4馬鹿になった』と思った。

(でも……不思議と悪く無いな……それに)

美咲はこころ達の方を眺めながら思う。

(……やっぱり……あたし、こころの事が……)

少し前からこころに抱いていた『密かな想い』を自覚する。

(まあ……今は焦ってもしょうがないか……)

「美咲——！」

こころの声を聞いた美咲は、その意識を再び『ハロハピ作戦会議』の方に向けるのだった。

☆☆

「……はあく……」

此処はライブハウス『Galaxy』。

其処でバイトをしているロックは、カウンターの席に座って物思いに耽っていた。

(ましろちゃん……凄かったなあ……)

あの時の様子を見たロックはましろが一瞬、自分が知っているましろとは別人に思えた。

そして彼女とハックモンの関係見た事と過去を聞いて、両者の深い関係を知った。

「デジモン……か」

「どうしたんだよ？」

「はひい!？」

突然聞こえた声に後ろを振り返ると、其処にはスケバン風の威圧的な外見をした金髪の少女——この『Galaxy』のオーナーの娘である佐藤ますき(通称マスキング)がいた。

「ますきさん……」

「悪い。さつきからブツブツ言っている姿が気になっちゃってな」

「いえ……此方こそすみません」

「調子悪いんなら、今日は休むか？」

「い、いえ! 何でもありません! と、取り敢えず掃除をして来ま——す!」

そうやってロックはその場を離れた。

『アイツ……デジモンの事知っていたな』

不意にますきに別の声が語り掛け、彼女は懐から声の発信源である機械——黒いボディと金色の縁取りのデューアークを取り出した。

「如何するつもりだよ?」

「……暫くは様子を見るしかねえな……チュチュ達には、一応後で伝えておくわ……」

「……分かった」

その言葉を最後に、ますきは自身のDアークを再び懐に仕舞った。

(ロック……若しかしたら……いや、今は考えても仕方が無いか……)

そう思いながら、ますきはドラムの準備に取り掛かったのだった。

ドン10話　ねこかあいどる

時は少し戻り、友希那がティマーになった日の夜の事。

「アアアアア——!!　もう何てBadな事なのよ——!!」

マンションの一室にチュチュのイライラした叫び声が響き渡る。

「折角Roseliaの連中共に報復する予定だったのに、肝心の目的も果たせずに返り討ち……おまけにあのミナト・ユキナまでティマーになったですって……!?!」

本つ当にBad過ぎて叫びたくもなるわよー!!」

「チュチュ様〜!」

「チュチュ……気持ちには分かるけど、そんな大声出したって、現実には変わらないよ……」

「グググ……」

パレオと黒い長髪と長身が特徴の少女の言葉に、チュチュは反論出せずに口を噛み締めていた。

「所でチュチュ。　お前ここ数日、作曲の傍ら何かしていた様だけど、一体何やってたんだよ?」

先程から黙って様子を見ていたますきが、思い出したかの様にチュチュに問い掛ける。

「……まあ、丁度完成もしていた処だし、貴女達にも見せてあげるわ」

そう言つてチュチュは自身のノートパソコンを立ち上げ、3人に画面を見せた。

「キヒヤヒヤヒヤ——!!」

其処に映っていたのは、頭部に無数の茸を生やしたナメクジを女性のような感じにした見た目のデジモンがいた。

「何だよ……この茸と蛞蝓（なめくじ）をごっちゃにした奴は……」

「この子はモルスクモン。私が創り出した『オリジナルデジモン』の第1号よ!」

「『オリジナルデジモン』?」

チュチュの『オリジナルデジモン』と言う発言に3人が疑問の声を上げる。

「Yes. 前々から私は考え、そして気付いたの……『Originality』が無いと言う事に!」

「チュチュ……ごめん、言っている事が全く分からないんだけど……」

「これまで私達が送り込んだ配下のデジモン達は、全員トヤマ・カスミ達5人の冒険者組からして見れば、今までデジタルワールドの冒険で出会った子達ばかりだし、尚且つミナト・ユキナやミタケ・ランなどついこの間ティマーになった子達は、冒険者組や各自所持しているこのデジヴァイスを通じて、此方のデジモン達のPersonal Dataを知る事が出来た……」

そう言ってチュチュは徐にポケットから、自身の所持するデータークを取り出す。

「But、彼女達——特に『あの5人』も今までデジタルワールドで会った事の無いデジモンを登場させる何て、早々出来る訳が無い……。ならこっちがそう言うデジモンを『作ってしまえばいい』……そう考えたの」

「成程……確かにそれは一理ありますね……」

チュチュの言葉に、パレオが納得した様子を見せる。

「元々デジモン達は、名前の如く様々なDataから生まれた生命体……。だからこそ、私自身もプロデューサーとしての血が騒いでしまつてね……。息抜きの傍らで、実験を重ねた結果、こうして今その第1号を完成に成功したのよ」

チュチュは自信に満ちた様子で、モルスクモンをアピールしていた。

「何となくは分かったのですが……」

「何よ?」

「うん……。どうしてその……。こんなゲテ……。個性的なデザインのデジモンなのかな?」

(レイヤ……。お前今明らかに『ゲテモノ』って言おうとしたよな?)

「も、文句言わないでよ! 初めての事だったし、これでも結構苦労したのよ! (言えない……。失敗続きで、つい自棄を起こして適当に『キノコ』と『蛞蝓』のDataを組み込んだら、あっさり完成した何て……。)」

チュチュは内心そう思いながら、何とかメンバー達を落ち着かせて話を再開する。

「と、ともかく、次はこの子を送り込むわよ!」

「ゲヒャー!」

「さあ私のオリジナルデジモン。存分に暴れ、この世界に私達RASの凄さを伝えてくるのよ!」

「ゲヒャヒャー——!」

「ねえ……ますき」ボソ

「奇遇だなレイ……」ボソ

(正直、……今回のデジモンに対して、不安しか感じないんだけど……)

(とは言ってもなあ……それにさっきのチュチュ……思いつ切り目が泳いでいたよな……)

最終的にレイヤとますきは、『今回は様子を見守る』と言う形で結論付けながら、モルスクモンとチュチュを見るのだった。

☆☆

「それじゃあ、休憩に入りま——す！」

とある某所。

其処には多くの人間が集まり、何かの作業をしていた。

「はあ……凄く緊張した〜」

「あはは。あたしは特に緊張しなかったなあ〜。寧ろ今の時点で安定して撮影が進んでいる方が珍しいなあって感じかな？」

「まあ、パスパレが結成されてもう1年も経ちますし、今日の事だつて、きつと皆さんの成長した結果の表れだと、ジブンは思います」

「日々精進。これもブシドーの一貫です！」

「皆、この調子で後半の撮影も頑張りましょう」

「二「うん（はい）（はいッス）（ハイ）！」」

その作業のメインであるPastel*Palettesの面々は、上記の会話を交わしながら、休憩に入った。

この日パスパレの5人は、仕事の関係で少し遠くにある自然溢れる広場にやって来ており、今は前半部分の撮影が終わった所であった。

「うめ——！」

「はい！ 正に日本のソウルフードと呼ぶ程、お米は偉大だと思います！」

「あはは。 イヴちゃん、すっかりコロナモンと意気投合してて何だか「るんっ♪」ってするなあ！」

「でも皆さんと一緒に食べる御飯って、何時も以上に美味しく感じられますから、ジブンも大好きですよ」

日菜の隣でコロナモンがお握りを頬張りながら叫び、それに同調するイヴを見た日菜とも楽しそうな様子で見ている。

「それにしても……私達がコロナモン……デジモン達と知り合ってもう1ヶ月が経つんだよね」

「そうね、彩ちゃん」

「それにしても千聖ちゃん、この間の『アレ』は結構大変だったね〜」
「……ええ。 今までの人生の中で、全精神力を使ったのは……あれが初めてよ」

日菜の言葉を聞いた千聖は、諦めと疲れが混ざり合った様な表情で回想した。

『ウへへ……。 ねえねえお姉ちゃん。 俺、この世界に来て偶々見掛けた時から、お姉さんのファンだったんだ……。 だから俺とデートしない？』

『イヤアアアアア——！！』

数日前、久し振りのオフの日だった事もあって、馴染みの場所である『羽沢珈琲店』へお茶をしに行く道中、千聖は自分に馴れ馴れしい様子の声が気になって振り返ると、ギョロ目と剥き出しの歯が特徴の蛞蝓の様なデジモン——ヌメモンが自分にナンパを仕掛けに来ており、千聖自身もヌメモンへの生理的な嫌悪感から、必死になって逃げたのである（尚、ヌメモンはその後、偶々散歩中の日菜とコロナモンの手で気絶させられ、最終的に『CIRCLE』の電腦空間に作られたデジモンの保護施設に送り届けられた）。

「そ……それはとんだ災難でしたね……」

「ええ……デジモンって……あんな変なものもあるのね……」

「まあ、ヌメモンは綺麗な女の子には、滅法弱いからなあ」

「……千聖、お家に帰る」

「早まつちや駄目だよ千聖ちゃん!？」

千聖の軽いキャラ崩壊を前に、彩は慌てた様子で引き止めた。

「安心して千聖ちゃん。 若し何か合ったら、あたしとコロナモンが何とかするから♪」

「日菜の言う通りだぜ千聖! 『太陽の貴公子』と言われた俺が、パスパレの事をカツコ良く守って見せるぜ!」

「……本当に?」

千聖がウルウルとした様子で日菜とコロナモンを見る。

「ああ任せろ! 俺のこの『太陽の拳』の前には、どんな奴にも負けはしねえし、あらゆる女のハートもイチコロにしちまうんだぜ!」

「それで『太陽の貴公子』なのね……」

「あ——! その目全く信じてねえな! 俺が本気で進化すればなあ、どんな女も目ん玉ハートマークにしちまう程のカッコいい姿になる

んだぞ〜!」

((((コロナモンの本気の進化……)))

『ハッハッハ！ さあ子猫ちゃん達！ この私が来たからには、『太陽の貴公子』の名に賭けて君達を守ってみせるよ!』

『『『『キヤー! コロナモン様!』』』』

『ハッハッハッハッハッハ……!』

((((何だか物凄く『薫さん(薫)』の雰囲気を感じる……)))

彩達4人の脳裏に、薫の様な性格のコロナモンが浮かんでいた。

バキッ

「ひっ? な、何なの?」

「向こうの草むらから聞こえましたね……」

「もしや『不審者』ですか!?!」

「取り敢えず見てこよーぜ!」

「アタシも行くよ、コロナモン!」

「ちよつと、日菜ちゃん!」

そして、コロナモンと日菜、慌てる彩を筆頭に全員で音のした方に近付いて行った。

「誰だ!?!」

そう言っつて、コロナモンが草むらを勢いよく掻き分けると、其処には折れた小枝、その近くに金色の首輪を付けた白い獣が、傷だらけの状態で倒れていた。

「あれは……プロットモンだ！」
「えっ？　だ、大丈夫？」

それを見た彩が真っ先に駆け寄り、無事の安否を確認する。

「うっ……」

「見た所、かなり弱っているみたいですね……」

「取り敢えず、ロケ用の車まで運んだ方がいいね」

「早く急ぎましょう！」

「コロナモン、何か感じる？」

「……いや……今の所、俺とプロットモン以外、特にデジモンの気配は感じられねえ……」

「そっか……私達も行くよ」

日菜とコロナモンは、そのまま先に行った彩達の後を追って駆け出しました。

☆☆

「うっ……うん？」

「あっ、気が付いた？」

プロットモンが意識を取り戻した事に彩が気が付く。

「貴女は……？」

「そう言えば、まだ名前を言って無かったね。　私は丸山彩。　それに日菜ちゃんとコロナモン、千聖ちゃんに麻弥ちゃんにイヴちゃんだよ」

「此処は……何処なの？」

「此処は達が使っているロケ用のキャンピングカーの中で、貴女は近くの草むらの中で倒れていて、それを私達が見付けて此処まで運んで来たのよ」

千聖がプロットモンに、今までの状況を説明する。

「そうだったのね……。助けてくれて有り難う」

そう言ってプロットモンは、キャンピングカーの扉の方へと向かうとする。

「あ、駄目だよ！ その体じゃあ……」

「助けてくれた事には感謝するわ。……でも、貴女達を危険に晒す訳にはいかないわ」

「でも……。『ウオオオオ！』な、何!?!」

彩が再度プロットモンに声を掛けようとした時、突然それを遮る様に叫び声が響き、彩達は直ぐにキャンピングカーの外へ出る。

「ウオオオオオ！」

「へハハハハ！」

「ワイー！」

パスパレの面々の前に広がっていたのは、異様な光景だった。

ある者は大声を上げながら他のスタッフと殴り合いをし、他の者も地面に座ってヘラヘラ笑っていたり寝転がっていたりと、現場は正に『阿鼻叫喚』とも言う有様だった。

「な……。何なのこれ？」

「早く止めましょう！」

「止めて下さい皆さん！」

千聖はその光景を唾然と見ており、麻弥とイヴはスタッフ達を止めようと必死に動いていた。

「この様子……『アイツ』が等々此処まで来たのね……！」

「『『アイツ』?』」

「ゲヒヤヒヤヒヤ！」

その時、不気味な声が響き渡ってきたので、彩と千聖、日菜とコロナモンが声の聞こえた方を向くと、其処にはこの騒ぎの元凶であるモルスクモンが姿を現した。

「あれってデジモン!？」

「あら〜? まだ残っていたのね〜。アンタ達もアタシの力の餌食にしてあげるわ!」

「この状況……貴女の仕業ね!」

「御名答。アタシはモルスクモン。そう言う訳で……クレイジー スポワシヤワー!」

そしてモルスクモンは頭部から大量の紫色の飽子を放ち、麻弥とイヴに浴びせる。

「ワアアア (キヤアア)!!」

「麻弥ちゃん! イヴちゃん!」

紫色の飽子を浴びた麻弥とイヴは暫くすると、彩達の方に近付いて来た。

「麻弥ちゃん……? イヴちゃん……?」

彩が2人に恐る恐る声を掛ける。

「! 危ない!」

「ブシドー!」

「わっ!」

何かに気が付いたプロットモンが叫ぶと同時に、イヴが手に持っていた木の棒を叫び声と共に振り上げ、彩は間一髪で避けた。

「フヘヘヘヘ……」

「ブシブシブシ……」

目の前の2人はまるで壊れたラジカセの如く同じ言葉を繰り返して呟きながら、不気味な様子で近付いて来た。

「麻弥ちゃん!? イヴちゃん!? 一体どうしちゃったの!?!」

「お、おお……2人共、物凄え表情をしてやがる……。まるで仮○ラ

イ○ーの怪人みてーだ……」

「うくん……あれって絶対、アイドルがファンに見せちゃ駄目な奴だね」

「日菜ちゃんもコロナモンも呑気な事を言ってる場合じゃ無いでしょ!」

千聖が思わず日菜とコロナ蒙ンの様子に対し、ツツコミを入れる。

「フヘヘ——!!」

「ブシド——!!」

そして麻弥とイヴの2人が、彩とプロットモンに襲いかかった。

「わーっ!」

彩は咄嗟にプロットモンを抱き締め、その儘逃げ出した。

「フへへへへ……」

「ブシブシブシ……」

「待った——！」

彩達の後を追おうとする麻弥とイヴを日菜が両手を広げて足止めした。

「フへへ——！！」

「ブシド——！！」

「2人には悪いけど、此処で足止めさせてもらおうよ！」

麻弥とイヴは標的を日菜に変えて再度襲い掛かるが、日菜は最低限の動きで2人の攻撃を躲す。

「ゲヒヤヒヤヒヤ！ それじゃあ、アタシはあの子達を追うわ！」

モルスクモンはそう言っただけで麻弥とイヴにその場を任せ、彩とプロットモンを追った。

「日菜ちゃん！ あのデジモンが！」

「コロナモン！」

「任せろ！」

日菜の指示を受けて、コロナモンもモルスクモンの後を追って行った。

「……さて、彩ちゃん達の事を考えて、速攻で何とかしないとね！」

コロナモンの姿が茂みの奥へと消えていくのを見届けた日菜は、再び麻弥とイヴを如何にかするべく行動するのだった。

☆☆

「ハア……ハア……」

「待ちなさい——い！」

あれから彩はプロットモンを抱き締めて、モルスクモンから逃げた。

「あっ……い！」

だが等々疲れによって、足が纏れて転んでしまう。

「あ痛たた……あ、御免ねプロットモン。大丈夫だった？」

「それはこっちの台詞よ！」

プロットモンが彩の言葉に思わず声を上げる。

「サデイスティックデイソリユーション!!」

するとモルスクモンが、頭部に生やした茸からカラフルな配色の液体を放射して来た。

それに気付いた彩とプロットモンは何とか回避する。

「わっ！」

しかし回避の際に、液体の僅かな一滴が彩の衣装の袖の部分に掛かり、そこに穴が開く。

「フフフ……。気を付けないとヨーグルトになっちゃうわよ」

モルスクモンは、嘲笑の意を込めた忠告を彩達に放った。

「パピーハウリング！」

プロットモンは口から超高音の鳴き声を放った。

「ハッ！」

しかしモルスクモンはその攻撃を、全く意に介さない様子で振り払い、更に片腕をゴムの様に伸ばしてプロットモンに巻き付け、そのまま締め上げた。

「ウウウ……い！」

「プロットモン！」

「アハハ！ このまま絞め殺してあげるわ！」

モルスクモンはプロットモンが苦しむ姿を見て、上機嫌な様子を浮かべている。

「プチプロミネンス！」

その時モルスクモンの背後から真っ赤に燃えた丸い物が現れ、そのまま当たりを炸裂させた。

「ガハッ……！」

力が緩んだ隙を付いてプロットモンも、モルスクモンの腕から脱出した。

「大丈夫か!？」

「コロナモン！」

「日菜に言われて、俺だけ先にこっちに向かう様に言われて来たんだよ」

「フフフ……パートナーを置いて来て、態々こっちに来るなんて……愚策としか思えないわね……」

「日菜はこの程度で苦労する程軟じゃねーよ。俺は自分でも頭良くねーって自覚してっから、『馬鹿』呼ばわりされても構わねえ。でもなあ、日菜の事を悪く言うのだけは許さねえぞ！」

コロナモンは、啖呵を切って返した。

「ほぎくんじゃないわよー！」

モルスクモンは、再度自身の片腕を伸ばしてくるも、コロナモンとプロットモンは、その攻撃を交わす。

「コロナツクル！」

コロナモンは炎を纏った自身の拳で殴りかかろうとする。

「甘い！」

「グハッ！」

しかしモルスクモンは、右のもう片方の腕を伸ばしてコロナモンを弾き返した。

「パピーハウリング！」

「だから無駄って言うてるでしょー！」

其処へプロットモンが再度超高音の鳴き声を放つも、モルスクモンはまた振り払う。

「くう……」

するとプロットモンは足から崩れる様に倒れる。

ある程度回復したとは言え、それでもまだ治った訳では無く、逆に此処まで堪えられた事の方が奇跡だったのだ。

それを好機と見たモルスクモンは、先程コロナモンを弾き飛ばした右腕を伸ばして、プロットモンを彩のいる所に弾き飛ばした。

「アアア！」

「プロットモン！」

彩はプロットモンに駆け寄る。

「彩……貴女だけでも逃げて……」

「えっ？」

「私は大丈夫……それに無関係な貴女をこれ以上巻き込む訳には……」

「ウフフ……矍然殺しにしてあげるわ……」

モルスクモンは再び片腕を鞭の様に伸ばし、プロットモンは目を瞑った。

「キャアアアア！」

その時悲鳴が響き渡る。

プロットモンは自身に何の痛みが無い事を疑問に抱いて目を開き、茫然とした。

「ううう……」

其処にいたのは、苦痛に表情を浮かべる彩の姿だった。

それで同時に、先程の悲鳴が彩が自分を庇ってモルスクモンの攻撃を受けた事による物だと悟った。

「どうして……」

「アハハ……そっちがその気なら、先ずはアンタから始末してあげるわ！」

それを見たモルスクモンは、今度はもう片方の腕を伸ばして、今度は左右順番に連続に振り回して攻撃をするも、彩は痛みを堪えてプロットモンを庇い、背中越しにその攻撃を受け続けた。

「何をやっているの……？ 止めて！ そんな事したら貴女が死んでしまうわ！」

「……出来る訳無いよ」

「どうして……？」

「私は……皆に夢を与える様なアイドルになりたい。

若し今此処で貴女を見捨てて逃げたら……一生後悔するし、夢だつて叶えられない。」

……目の前の傷付いている相手を見捨てて……自分だけ助かろう
する何て……そんなの私には出来る訳無いよ!!」

「彩……」

プロットモンは彩の言葉とその姿勢に衝撃を受けた様子を見せた。

「感動的な話ね〜! だけど……今から死ぬ貴女が語ったってそんな
の無意味なのよ!」

そしてモルスクモンの『トドメの一撃』とも言える攻撃が降り降ろ
されそうになり、彩とプロットモンは目を瞑った。

その時、双方の間を割る様に眩い光が現れた。

「な、何!? キヒャアアア!!」

眩い光の前にモルスクモンはそのまま吹っ飛ばされる。

「彩! その光を掴め!」

コロナモンの声を聞いた彩が言われるままに目の前の光を掴むと、
彼女の手にはチェリーピンクの縁取りのディーアークがあった。

「これは日菜ちゃんの物と同じ物……」

「キヒャアアア——!!」

奇声の方を向くと、モルスクモンが此方を睨み付けていた。

「彩!」

プロットモンの声を聞き、彩は頷いた。

— EVOLUTION

彩のディーアークの画面にそう表示されると、ディーアークが眩い光を放ち、プロットモンを包み込んだ。

「プロットモン進化！」

光に包まれたプロットモンは二足歩行になり、尻尾が長く伸び始め、そして光が収まると其処には尻尾に金色のリングを付けた一匹の猫がいた。

「テイルモン！」

「これが……プロットモンの進化した姿……」

彩はその様子を見て、ポツリと眩く。

「進化したからって、調子に乗るんじゃないわよ!!」

「サディステイツクデイソリユーション!!」

モルスクモンは頭部に生やした茸からカラフルな配色の液体を再度放射したが、テイルモンは身軽な動きで回避した。

「チツ……素早しっこいわね」

「ネコパンチ！」

テイルモンがモルスクモンに対して自身の拳による一撃を放つも、モルスクモンは両腕をクロスして受け止めた。

「良い一撃ね……」

「クツ……」

「……でも悲しいけどパワー不足なのよね〜!!」

「ウワア!!」

モルスクモンは両腕に力を込め、テイルモンを逆に押し返した。

「テイルモン!!」

「さて……今度こそアンタ達を仲良くヨーグルトにしてあげるわ……」

モルスクモンはゆっくりと此方に近付いて来る。

「サデイスティック……「ファイラボム!」ゲヒャア!」

その時横から現れた火炎弾によつて、モルスクモンは大きく吹っ飛ばされた。

「お待たせ2人共!!」

彩とテイルモンが火炎弾の放たれた方向を向くと、其処には日菜とファイラモンの姿があった。

「日菜ちゃん! ファイラモン!」

「助かったわ……有り難う」

安堵の様子を浮かべたテイルモンは、そのまま崩れ落ちた。

「テイルモン!」

「大丈夫。少し力が抜けちゃっただけよ……」

「良く此処まで頑張ったね。彩ちゃんを守ってくれて有り難う」

「此処から先は俺達に任せてくれ」

日菜とファイラモンが視線を向けた先には、先程吹っ飛ばされたモルスクモンが起き上がる様子があった。

「クソオオ……！ アンタ達良くもやってくれたわね……！」

「モルスクモン！ 此処から先は私達のステージだよ！」

「お前が馬鹿にした俺と日菜の絆と力、見せてやるぜ！」

「ほごきなさい！」

モルスクモンは再度、頭部に生やした茸からカラフルな配色の液体を放射して来た。

「ファイラモン！」

「ああ！ ファイラボム！」

ファイラモンは火炎弾を放って相殺し、それによって煙が辺り一面に広がる。

「クツ……何処にいるの？」

「ファイラモン！」

モルスクモンは上を向くと其処には全身に炎を纏い、此方に急降下するファイラモンの姿があった。

「なっ!？」

「フレイムダイブ！」

「ゲヒャアアア!!」

ファイラモンの攻撃でモルスクモンは再び吹き飛ばされる。

「っ……強い……」

その様子を見た彩はポツリと呟く。

「見たか！　これがテメーの馬鹿にした日菜と俺の力だ！」

「……キヒャアア……おのれええええ——！！」

憎悪の籠もった叫び声を挙げながら、モルスクモンは此方に向かって突撃して来る。

「ファイラモン！」

「ああ！　一気に決めるぜ！」

ファイラモンは自身の前足に炎を纏って駆け出す。

「ファイラクロー！！」

そしてそのまま炎を纏った前足でモルスクモンの胴体を引き裂きながら、胴体を貫いた。

「アッアッアッアッアッ！！」

胴体を貫かれ、中心部に風穴を空けたモルスクモンはそのまま全身を炎で燃やされながらデータの粒子と化して消滅していった。

「うっ……」

「彩ちゃん!?!」

そして安心感によって彩も全身の力が抜けてしまい、そのまま倒れた。

「日菜！ 2人の様子は!？」

「大丈夫。 気を失っているだけだよ」

「そっか……。 しっかし無茶したもんだぜ。 あの時アイツの攻撃を直接体で受ける何て……」

「でも私も彩ちゃんと同じ立場だったら、 同じ事をしていたと思う。

……だから彩ちゃんの気持ち、 とつても分かるもん」

（日菜も充分『良い意味』で変わったな……。 最初の頃のお前が懐かしく思えてくるぜ）

「さて……。 千聖ちゃん達も心配しているし、 そろそろ戻ろっか!」

「ああ、 そうだな!」

日菜の言葉を受けたファイラモンは2人と1匹を自身の背中に乗せ、 千聖達のいる場所へと戻って行った。

☆☆

「ふう……」

「彩、 お疲れ様」

数日後。

事務所でパスパレメンバー達とレッスンをしていた彩は休憩時間になった事もあって一息付き、 ディーアークの中のテイルモンはそんな彼女に労いの言葉を掛ける。

「私はアイドルの事は素人だから上手く言えないけど……。 今日のレッスンの動き、 とても良かったと思うわ」

「はい。 ジブンも彩さんの今日のレッスンの動きは、 目を見張る物を感じました」

「えへへ……有り難うテイルモン、麻弥ちゃん」

彩はディーアークの中のテイルモンと麻弥に感謝の言葉を述べる。

「彩ちゃん。何か雰囲気が変わったわね」

「そうかな？」

「ハイ！ ワタシも雰囲気は少し変わった様に思えます」

「そう言われても特にピンとこないかなあ……。 あ、でも」

「どうかしたの？」

千聖が彩の言葉に疑問の声を挙げる。

「私ね、テイルモンと出会って『皆に夢を与える様なアイドルになりたい』って言う自分の目標に付いて改めて考えて決めたの。

『私の活動を通じて、人やデジモンさん達に『この世界は誰もが自由に優しい世界何だよ』って思える夢を与えるアイドルになりたい』

彩は自身の中に抱いた想いを語った。

「……人やデジモン達に『この世界は誰もが自由に優しい世界だ』って思える夢を与える、か」

「えっ……と？ 変かな？」

「そんな事無いわ。 とっても良い夢よ」

「うん！ 言葉の1つ1つに彩ちゃんの想いが込められてる感じが、『るんっ』てする！」

「俺も彩の夢に賛成だぜ！」

「テイルモン……日菜ちゃん……コロナモン……」

彩は3名の言葉に目を潤ませた。

「何だかジブン……とつても感動しました」

「はい。ワタシもアヤさんの夢を全力で応援したいです！」
「私自身、自分の今までの芸能活動の事もあって、否定的で冷めた目線で生きてきたけど、今の彩ちゃんの手紙を聞いていたら、不思議と『そんな夢を皆に知ってほしい』って思えてくるわ」

千聖達3人も彩の手紙から、彼女の成長を感じていた。

「……それじゃあ、そろそろ練習を再開しようか！」

「うん（ええ）（はいッス）（ハイ）!!」

彩の手紙で、パスパレの面々は練習を再開した。

因みに練習の様子を偶々見た事務所のマネージャーは、『この時の彼女達の見せた笑顔は、まるで億単位の価値がある宝石が唯の石ころに思えてしまう程の輝きを感じる』と内心思ったそうだった。

第11話 嫉妬の大号令

「ズルい！」

ある日の昼休みの事。

蘭達 Afterglow の面々が、自身達の通う羽丘女子学園の屋上で何時も通り昼食を食べていた時、突然ひまりが叫んだ。

「ひまりちゃん？」

「どうしたんだよひまり？」

「アグモンだよ！ アグモン！」

巴とつぐみの問い掛けに、ひまりがアグモンの名前を挙げて答える。

「アグモン……アンタまさかひまりに何かちよっかい掛けたんじや……」

『違うよ！ 俺、ひまりに何にもしてねーよ！』

蘭の問い掛けに、アグモンは慌てディーアークの画面越しから身の潔白を叫ぶ。

「蘭にはアグモンがいてズルい！」

「へっ？」

突然今度は自分の名前が出て来たので、蘭はつい変な声を出してしまっ。

「だって……他のバンドの子達とパートナーデジモン達の様子を見て

たら、羨ましいんだもん……」

ひまりの言葉に蘭達4人は考える。

ポピパには、香澄と有咲。

Roseliaには、友希那と紗夜。

パスパレには彩と日菜。

ハロハピにはこころと美咲。

モニカにはましろ。

そしてアフグロには蘭。

確かに自分達の知り合いのガールズバンドで、これだけパートナーデジモンを持つメンバーがいると言うのもある意味不思議と言えるだろう。

「つまり……ひーちゃんは、蘭や香澄達みたいに自分もパートナーデジモンが欲しいって事〜?」

ひまりの発言から、彼女の言いたい事を察したモカが確認する様に問いかける。

「そうだよ！ 蘭や香澄達だけにパートナーデジモンがいるのって、何だか不公平だもん！」

「いや……いきなりそんな事言われても……アタシだって分からないよ」

蘭とアグモンにとっては、ひまりの発言は『無茶苦茶』な物である。

そもそも香澄、有咲、紗夜、日菜、ましろの5人は特殊な事情からパートナーデジモンと出会い、逆に蘭、友希那、彩、こころ、美咲の5人はひよんな偶然からパートナーデジモンと出会った形。

全員最初から『今のひまり』と同様、『パートナーデジモンが欲しいと願った』からパートナーデジモンを得た訳では無いのである。

更に言えば、蘭を含め香澄達パートナーデジモンがいるメンバーは、『ガールズバンドのメンバー』であると言う点を除けば、基本的に何処にでもいる『普通の女子高生』なのである。

その為、蘭やアグモンにとっても、いきなり『パートナーデジモンが欲しい』と言われても、無理難題な相談であった。

「あはは…ひまりちゃん、蘭ちゃんも困っているよ…」

「そう言うつぐだって、最初に紗夜さんのルナモンや日菜先輩のコロナモンに会った時、滅茶苦茶キラキラした目で見ていたよな……」
「もう、巴ちやくん／＼／＼」

つぐみは巴の発言に、顔を赤らめた。

『所でモカはさつきから何描いてんだ?』

アグモンはモカの動作に疑問を抱き、問い掛ける。

「じゃーん。 出来ました〜」

暫くして、モカが描いていた物を蘭達に見せる。

「モカ……何これ？」

「フッフッフ……ひーちゃんのデジモンを考えてみたのだよ蘭君」

モカの書いたスイーツをゆるキャラ風にした感じのキャラの絵を見た蘭の問いに、モカは科学者の様な口調で答える。

「『ひまり（私）（ちゃん）のパートナーデジモン？』」

「その名もスイーツひーちゃんモン。必殺技は全身の力で相手にのし掛かる『ひーちゃんえいえいおプレス』だよ」

「も——っ！ モカってば——！」

顔を真っ赤にしたひまりの怒声が屋上に響いた。

「あはは……でも、こうしてアグモンと一緒に過ごしてから、私も『デジモン』が、自分の生活の中ですっかり『当たり前前の存在』になっちゃっている様に思えるかな……」

「確かにつぐの言う通りですな」

「……………」

「ひまり？ どうしたんだ？」

「えっ？ いやっ……何でも無いよ」

巴の言葉に、ひまりは慌てた様子で返答した。

「皆。もう直ぐチャイム鳴りそうだし、そろそろ戻ろう」

その後、蘭の言葉でAfterglowの面々は急いで片付け、そのまま教室へと戻って行った。

☆☆

「はあく……」

数日後、メンバー達の各用事の関係で練習が休みの中、1人用事が無かったひまりは歩きながら溜め息を吐いた。

「どうしたら、私にもパートナーデジモンが出来るんだろう?」

数日前の昼休みの屋上での会話後、ひまりは紗夜や日菜を始め、パートナーデジモンを持つている他のガールズバンドのメンバーにも、同じ様な事を聞いてみるも、殆ど返答に困った様子を見せると言う結果だった。

「あれ? ひまりちゃん?」

不意に後ろを振り向くと、其処にはりみの姿があった。

「りみ? どうして此処に?」

「今日は練習が休みだったから、少し近くのお店に用事があって、それを終わらせた所だよ……ひまりちゃんはどうして此処に?」

「う……うわくん、りみく! 話を聞いてよ〜!」

「ひゃあ! ひ、ひまりちゃん!」

突然泣きついてきたひまりの姿に、りみは戸惑うばかりだった。

☆☆

「そっか……そんな事があったんだ……」

あの後2人は近くの広場のベンチで、飲み物を片手に会話をしていた。

「だって……蘭や友希那先輩に……ここに美咲に彩先輩、それに香澄やましろに有咲に紗夜先輩と日菜先輩……これだけガールズバンドのメンバーにパートナーデジモンを持つている子が沢山いるのを見たら……何だか仲間外れにされちゃった気持ちになっちゃったんだもん……」

ひまりは寂しそうな様子で、りみに現状の事に対しての心境を吐露する。

「うん……つまりひまりちゃんは、自分にもパートナーデジモンが欲しいって事何だよね？」

「駄目なの？」

「ひまりちゃんの気持ちは分かるんだけど……ただ……」

「ただ……何？」

「何だろう……今のひまりちゃんの話聞いてみると……私には『パートナーデジモンが欲しい』と言うより……『蘭ちゃんのアグモンへの嫉妬』に聞こえちゃったんだ……」

「へっ？ 嫉妬？」

ひまりは今のりみの意外な発言に対して、疑問の声を上げる。

「うん……私が思うんだけど……ひまりちゃん、本当は『寂しかったんじゃないかな』？」

『『寂しい』？』

「私ね、Afterglowの皆の何時もやり取りやライブを見てみると、皆本当に『何時も通り』って言うのを大切にしているんだなって思うの……。でも『デジモン』と関わって、そして蘭ちゃんがアグモンと出会ってパートナーになったりと色んな事があって……ひ

まりちゃんは『今まで過ごした何時も通りの日々』が変わってしまうのが嫌だったんじゃないかな?」

ひまりはその言葉を聞いて、ここの所の自分達の様子を振り返る。

『蘭〜! 俺にもその玉子焼き1つくれよ〜!』

『ちよっ……いきなり出てこないで!』

『ははっ。 何だか2人共兄妹みたいだな』

『トモちんの言うですなく。 蘭が妹でアグモンはお兄さんって感じかな〜?』

『いや今の状況見たら、普通逆でしょ!』

『いや〜、何だか蘭は妹みたいな雰囲気があるんだよな〜』

『うんうん。 モカちゃん、何だかこの前読んだ漫画の『四葉』を思い出しちゃったよ〜』

『いや『四葉』って何!? アタシってクローバーか何かとそっくりなの!?!』

『蘭ちゃんが妹……悪くないかも……』

『つぐみ、どうしたんだ?』

『な、何でも無いよ! ねっ、ひまりちゃん。 ……ひまりちゃん?』

『うえ……何?』

『さつきからボーっっているけど大丈夫?』

『あ、ううん。 ごめん! 蘭がクローバーって話だったよね!』

『ひーちゃん……保健室で休む?』

『大丈夫かひまり?』

『大丈夫! 大丈夫だからね! 風太郎!』

『いや、誰だよ風太郎って……』

言われて見れば、確かにここ最近の自分は何処か『寂しさ』を感じる事が多いと思っていた。

特にアグモンと蘭のやり取りを見ると、『寂しさ』に加え『別の

感情』を感じてしまう。

「…あっ」

でも今のりみの言葉で、ひまりは自覚した。

いや、寧ろ本当は気付いていた。

けど、ずっと気付かない振りをしていた。

「そっか…私、寂しかったんだ…」

ひまりがポツリと呟く。

彼女にとって、Afterglowの面々と過ごす『何時も通りの日常』は掛け替えのない『大切な物』だった。

でも『デジモン』と知り合い、そして一番大切な幼なじみでもあった蘭が『パートナーデジモン』を得た姿を見た時、初めは全く気にして何かいなかったのに、暫く経つて急に彼女との間が見えない壁で隔たれた様な物を感じる様になってしまった。

自分が欲しかったのは、蘭を始めとしたAfterglowの面々と過ごす『何時も通りのありふれた日常』。

『パートナーデジモンが欲しい』と言うのは結局建前でしか無かったのだと、ひまりはこの時自覚した。

「グオオオオ——!!」

その時大声と共に、2人に向かって鋭い何か飛んできた。

それに気付いた2人はベンチから移動すると、その直後に飛んできた何かによつて、ベンチが跡形も無く破壊された。

「な、何今の!？」

ひまりが突然の事に動揺していると、重い足音を響かせながら先程の攻撃を行ったであろう存在——背中に無数の刃を刃を生やした四足歩行の恐竜が現れた。

「あれってデジモン!？」

「逃げようひまりちゃん!」

2人は慌てて逃げ出し、それを見た恐竜は彼女達の方へと足を進めて行った。

「グオオオオオ——!!」

すると相手の方も逃げるひまり達に向けて、背中に生えた無数の刃を再度飛ばしてきた。

「危ない!」

咄嗟にりみを抱き締めて、横に交わすも左腕と左足の方を僅かに掠る。

「くうう……!」

「ひまりちゃん!」

「だ、大丈夫……!　こんなの……掠り傷だよ……!」

心配するりみに安心させようと、ひまりは痛みを我慢し、作り笑いではあるが自身が無事である事の意味を見せる。

「グルル……！」

相手のデジモンは嘲笑の様子を浮かべてながら、一歩ずつゆっくりと此方へ近付いてくる。

「りみ……今すぐ私を置いて逃げて……」

「え？ でも……」

「このままじゃ、2人共あのデジモンの餌食に去れちゃう……。だったら、無事なりみだけでも逃げて……！」

そんな会話をしている内に、等々近くまで来ていた相手のデジモンは、2人を捕食しようと口を開けた。

2人は思わず目を閉じた。

「メタルキャノン!!」

「ベビーフレイム!!」

その時、突如聞き覚えのある声が耳に届き、その次に苦痛の様子を含んだ声が聞こえた。

2人は目を開けると、其処には苦痛な様子の相手デジモンと見知った2体の姿があった。

「大丈夫か？」

「アグモン……それにドルモンも……？」

「ひまり——！」

「りみりん——！」

声の方に視線を向けると、蘭と香澄の2人が此方に近付いてくるのが見えた。

「蘭……香澄……」

「2人共、大丈夫？」

「私は大丈夫だけど……ひまりちゃんが……！」

蘭と香澄が来た事の安心感からか、ひまりは再度振り返した痛み表情を引きつらせた。

「ひまり！ その傷……」

「大丈夫……。ただの掠り傷だから、落ち着いて……」

ひまりの言葉を聞いても、蘭の表情は曇ったままだった。

「グオオオ!!」

唸り声の方を向くと、先程のドルモンとアグモンの攻撃から態勢を立て直した恐竜型デジモンが、此方を睨み付けていた。

「ステゴモン。 アーマー体。 剣竜型。 必殺技は『シエルニードルレイン』」

香澄が自身のデューアークで相手デジモンの情報を調べる。

「香澄！」

「うん！」

「待って！」

香澄とドルモンが進化の準備をしようとした時、蘭が2人を制止する。

「蘭ちゃん？」

「このデジモンは、アタシに任せて」

「蘭……」

「香澄、ドルモン、ゴメン。でもこれは、アタシの手で片付け無いといけないって思ったの……」

「……分かった。ドルモン」

「うん」

香澄とドルモンは、蘭とアグモンにその場を譲る様に下がった。

「行くよアグモン！」

「よっしゃ——！」

—EVOLUTION

「アグモン進化！」

デューアークから放たれた光を浴びたアグモンはそのまま巨大化し、頭部の甲殻や体も全身凶器の様に発達し、より攻撃的よりな恐竜へと姿を変えていく。

「ジオグレイモン!!」

そしてジオグレイモンは、そのままステゴモンの方へ向かって行

く。

「さ、私達もー!」

香澄の言葉を受けて、3人はドルモンと共に避難する。

(蘭……)

避難したひまりの目の前では、ジオグレイモンがステゴモンと激しいぶつかり合いを行っていた。

その側では、蘭がジオグレイモンに時折声を掛けながら、2体の戦闘を見ていた。

その時、ひまりの脳裏に過去の記憶が過った。

『お前のあたま、へんないろしてんな!』

『おれたちがキレイにしてやるよ!』

『やだ! やめてよ!』

幼い頃、ひまりは自身の髪の毛の事で一部の子供から苛められたのが原因で、このピンクの髪の毛にコンプレックスを抱いていた。

何時もは巴が追い払ってくれたけど、この日は巴はおろか、モカやつぐみをいない為、調子に乗った悪ガキ達が、何時も以上にしつこく苛めて来ていた。

『やめてー!』

その時大きな声が聞こえたので、振り返ると其処には蘭の姿があつ

た。

『らんちゃん……』

『なんだあおまえ?』

『ひまりちゃんを……いじめるな!!』

(あ……)

ひまりはその瞬間、自分の中の真っ暗な気持ちが急に真っ白に晴れていくのを感じた。

『ひまりちゃん……だいじょうぶ?』

『ごめんねらんちゃん……わたしがこんなへんないろのかみなんかしているから……』

『そんなこといわないで。ひまりちゃんのかみ……わたしはすきだよ』

(何だ……答えは最初っから目の前にあつたんじゃん……)

蘭はあの頃から全く変わっていなかった。

Afterglowのボーカルであろうがアグモンのティマーであろうが、そんなの全然関係無い。

人見知りで口数が少なく、気が強く負けず嫌いによく周りから誤解されがちだけど、とつても友達想いの優しい少女。

それが上原ひまりの知る『美竹蘭』なのだ、ひまりはその事を痛感していた。

「香澄！　ひまりが泣いているよ！」

「えっ!?　大丈夫ひまりちゃん！」

「ううん……大丈夫、大丈夫だから……」

一方でジオグレイモンとステゴモンの戦いも、決着が付きそうな状態だった。

ジオグレイモンはまだある程度の余裕を見せるのに対し、ステゴモンは既に息がかなり上がっていた。

「ジオグレイモン！」

「ああ！」

ジオグレイモンの口の中に炎が溜まっていく。

「グオオオオオ!!」

ステゴモンは邪魔をしようと、必死に此方に向かって来た。

「メガ……バースト!!」

そしてジオグレイモンは、口の中に溜め込んだ炎を一気に放射した。

「グオオオオオ!?!」

炎に飲み込まれたステゴモンは、そのままデータの塵と化して消滅していった。

やがてジオグレイモンはアグモンの姿に退化した。

「お疲れアグモン」

「ああ」

「らーっーん！」

ひまりが蘭とアグモンの所へ向かって来た。

「ひ、ひまり？」

「御免ね蘭〜！ 私、蘭の事誤解しちゃってて！」

「落ち着いてひまり、取り敢えず怪我の方を……」

その後、ひまりの事を何とか落ち着け、怪我の手当ての為に4人はひまりの家へと向かったのだった。

☆☆

数日後。

ライブハウス『CIRCLE』の一室にて、Afterglowの面々が演奏する激しい音楽が、丁度フェードアウトを迎えた。

「よっしゃ！ 今の所、良い感じだったな！」

「うん！ 何だか今日は、皆とのリズムがぴったりだったなっと思えたよ！」

「モカちゃんも何だか何時も以上に、自分の想いを込めた演奏が出来たよ〜」

巴達3人の様子を見ていた蘭とひまりも、満足した様子を浮かべていた。

「この調子なら、今度の商店街のお祭りのライブも、上手く行きそうだね！」

「うん。でも油断は禁物。次も今の調子で行ける様に、私達も頑張ろう」

「……そうだね」

其処へ他の3人が、近付いて来た。

「ひまりちゃん、怪我の方は大丈夫？」

「大丈夫！ 少し切っちゃったけど、日常生活には支障は無いつて、お医者さんも言っていたし！」

「そっか……でも無理はしないでね」

「分かってるつて！ あつ、そうだ蘭！」

「えっ、どうかした？」

「この後、モールに行かない？ 新しい服を買おうと思ってるの！」

「別に良いけど……」

「あつそうだ！ せっかくだから、アグモンにも見て貰おうよ！」

『俺も？ 服の事何か全く分かんねーけどいいの？』

「良いの良いの！ 昼休みの時の謝罪やこの前助けて貰った事のお礼もしたって思っていたから！」

『……分かった！ 無粋だけど、俺もお供するよ』

「うん！」

暫く様子を見ていたモカがポツリと呟く。

「ひーちゃん、何だか今日は何時も以上にアグモンに積極的に絡んでいるね〜」

「でも今のひまり、何だか憑き物が落ちた感じがしていて、良い表情を

してるってアタシは思うけどな」

「うん。私も巴ちゃんと同じ事を思ってたよ」

3人の見詰める先には、Afterglowの代名詞と言える『何時も通り』の日常の風景があった。

『蘭く、俺腹が減ったよ〜!』

「アグモン……アンタね……」

「フッフッフ……それじゃあアグモンには、私のお気に入りのお店にも連れて行くよ!」

『本当かひまり!?!』

それを聞いたアグモンは、蘭のディーアークから出て来た。

「ちよつ、勝手に出て来ないでよ!」

「あらら? 蘭、若しかして妬いてる?」

「なっ……べ、別に妬いてないし!」

「おう。やきもちを焼く蘭もエモいですなあ」

「モカ——!」

蘭の大声が響く。

(こうしていると、今の『何時も通り』も悪くないなあ)

数日前のステゴモンの一件が今の吹っ切れの要因なのだろうと、ひまりは内心考えていた。

「如何したんだひまり?」

「……うん、何でもないよ! それじゃあ片付けて行こっか!」

「おお!」

(私にも何時か蘭みたいパートナーデジモンが出来たら、こんな関

係が築けたらいいな〜)

そんな事を思いながら、ひまりは片付けに取り掛かったのだった。

第12話 Route BLUE

「行け！ ダークリザモン！」

「ヴオオオオオ!!」

「行くわよブイモン！」

「ああ！」

とある日の事。

友希那はブイモンやリサと共に『CIRCLE』に向かう途中、ブギーモン達の襲撃を受けていた。

— EVOLUTION

「ブイモン進化！ ブイドラモン！」

そして進化したブイドラモンとブギーモンの命令を受けたダークリザモンの戦闘が開始される。

「友希那……」

リサは心配な様子で見ている。

「とどめよ。 ブイドラモン！」

「ブイブレスアロー!!」

「ルヴオオオオ!?」

ブイドラモンの口から放たれた超高熱の熱線による直撃を受けた

ダークリザモンは、そのままデータの粒子となって消滅した。

「チツ……覚えていろ！」

ブギーモンは捨て台詞を吐いて撤退して行った。

ブギーモンの撤退を見届けた後、ブイドラモンはブイモンの姿に退化した。

「大丈夫？ 友希那」

「この程度、大した事じゃないわ」

「友希那！」

リサは直ぐに友希那とブイモンの元に駆け寄った。

「ご免なさいリサ。 紗夜達に連絡をしてから行くわ」

「で、でも……」

「次のライブの事を考えたら、休んで何かいられないわ。 ブイモンの方は大丈夫かしら？」

「俺は大丈夫だけど……」

「なら行くわよ。 ブイモン、有り難う。 ゆっくり休んで頂戴」

そう言つて友希那は、ブイモンを自身のディーアークへ戻し、紗夜達への連絡を済ませた後、再び『CIRCLE』への道を歩いて行った。

「あつ……待つてよ友希那！」

その後にリサも慌てて友希那を追い掛ける。

（友希那……）

胸中に不安を抱いたまま、リサは友希那の事を見つめていた。

☆☆

『CIRCLE』のスタジオの一室において、音楽がフェードアウトする。

「はあ、緊張した〜」

「大丈夫？ あこちゃん？」

「うん。今まで心に溜まった物が一気にドバァって解放されちゃったって感じかな？」

燐子の問い掛けに、あこが自身の感じた物を話す。

「湊さん……」

「紗夜、お疲れ様。今日の演奏、良い具合だったわ」

「はい……」

「どうしたのかしら？」

「……失礼を承知の上でお訪ねしますが……湊さん、少し痩せましたか？」

友希那には紗夜の言葉の意味が一瞬理解出来ず、きよとんとした様子を見せた。

「……そうかしら？」

「はい。食事や睡眠の方は大丈夫ですか？」

「失礼ね。紗夜には私がそんな人間に見えるのかしら？」

「そう言う訳では無いのですが……」

「なら何？」

『友希那……焦って無い？』

「焦る？ 私か？」

紗夜のデイナーアーク内部のルナモンからの問い掛けに、友希那は疑問で返す。

「はい……今の湊さんからはその……焦燥感を感じるんです。ライブの時期が近いと言うのもありますが……それとはまた『別の意味』から来てる様に思えます」

「……」

紗夜からの指摘に、友希那は沈黙を見せる。

「友希那……そうなの？」

「……別にリサには関係無いわ」

「え……？」

友希那の言葉にリサは戸惑いの様子で問い掛けた。

「何で……何でそんな事を言うの？ 私……友希那が困っているのなら力になりたいって思っているのに……」

「……リサの気持ちは正直嬉しいわ。でも……これに関しては貴女を巻き込む訳にはいかないの……」

そう言うと友希那は、ドアを開けて部屋を出て行った。

「待ってよ友希那！」

リサの声だけが虚しく部屋に響き、あごと燐子も目の前で起きたやり取りにただ戸惑っている。

『どうするの？ 紗夜……』

「宇田川さん、白金さん。今井さんの事を頼みます。湊さんは私
が……」

「分かりました」

そう言って紗夜は友希那を追って部屋を出て行った。

「湊さん」

部屋を出て直ぐの所で友希那を見つけた紗夜が声を掛ける。

「紗夜……」

それから暫く2人は何かを話し合った後、部屋に戻ってくるも、その後の練習での演奏は不安定な面が目立つ形と言う結果で終わりを迎え、そのまま解散となった。

「紗夜！」

自宅へ帰ろうとする紗夜とルナモンをリサが呼び止めた。

「何ですか今井さん？」

「さつき友希那と何を話していたの？」

「……申し訳ありません。これに関しては私達の口からは言う事は出来ません」

「そう……何だ……」

「でもこれだけは言わせて下さい。湊さんは貴女の事を常に大切に想っています」

「私も紗夜や友希那達と一緒に会話の場にいたけど、友希那が語った想いに嘘や偽りは感じられなかったわ」

「では、これで失礼します」

そう言い、紗夜とルナモンは立ち去って行った。

「友希那……」

リサの小さな呟きだけが、空気中に虚しく消えていった。

☆☆

「はぁ……」

休日のある日、特にする事も無く歩くリサの口から溜め息が零れる。

友希那はRoseliaのリーダー&ボーカルとして活動する傍らに加え、紗夜や香澄達と共にデジモン関連の事件の対処も行っている。

リサ自身も、出来るなら友希那の事を支えたかった。

だがRoseliaの活動と違い、デジモンの事となれば危険性が付き物であり、そうなれば無防備なリサは足手纏いにしかならないと言うのが実情であった。

(アタシ……一体どうしたらいいんだろう?)

リサは内心抱えた自身の悩みへの答えを見つけれない儘、トボトボとした様子で歩いた。

暫くして自身の現在地が何処なのか気になって辺りを見渡したりサは、とある場所を見て表情を変えた。

(此処……)

そしてリサは何かに通られる様に、その場所へ足を進めて行く。

やがて暫く歩いたりサは、其処で目に入った光景を見て足を止めた。

「やっぱり……」

其処は、リサと友希那が幼少期の頃によく来ていた場所だった。

(懐かしいなあ……。 此処でアタシと友希那、それに友希那のお父さんと一緒に音楽のセッションをしたんだっけ)

リサの脳裏に幼少期の頃の思い出が浮かんでくる。

(あの頃の友希那は唯純粹に音楽が好きで、アタシもそんな友希那の隣で一緒に音楽をするのが好きだったんだよね)

しかし父の一件を切欠に、友希那は変わってしまった。

『自身が愛した父の音楽を周囲に認めさせる』

友希那はその為に大好きな『音楽』を『復讐の道具』として利用した。

“『そう言えば聞いた？ あのバンド解散したんだって』”

“『そうなんだ。あのバンドって急に音楽の雰囲気が変わってから、何だかダサくなっちゃったもんね——』”

“『あんなゴミみたいな音楽しか作れないなんて……きつとあのバンドの人達、表向きはカッコ良く振る舞っているけど、裏では素行の悪い事していたんだろうね』”

“『それってヤバイ薬とか!?!』”

“『いや、きつと売春とかでしょ！ だってこの間、そのバンドのプロデューサーやマネージャーが売春で捕まったってニュースで言ってたし……』”

中学の頃、友希那のお父さんのバンドが解散してから暫くして、友希那にとって『バンドを解散に追い込んだ元凶』とも言える人達が警察に逮捕された事もあって、友希那のお父さんは『自身の音楽を否定される』だけでなく、『犯罪者』の汚名を着せられると言う不幸も味わった。

幸い『犯罪者』の汚名は濡れ衣だった為に直ぐ晴れたけど、友希那自身の目的は『自身が愛した父の音楽を認めさせる』では無く『お父さんの全てを否定し、挙句に泥塗れの汚名を着せたこの世界への復讐』へと大きく広がっていった。

常に交流のあったアタシは、友希那の『この世界に対する憎悪』が痛い程分かっていたのに、結局逃げてしまった。

だから Roselia に加入した時、アタシは友希那の全てを理解し、分かち合える『存在』になろうと強く誓った。

でもこここの所、ブイモンや紗夜達と一緒にデジモン達の脅威に立ち向かう友希那の姿とこの前言われた言葉で、私の中にあった不安と寂

しきはより強くなっていった。

「見つけたわ！」

その時背後から知らない声が聞こえたので振り返る。

「アナタね！　ここの所この公園で悪さをしているのは！」

其処には頭に葉っぱを生やした埴輪みたいな表情をした見た事も無い生き物が中に浮かびながら此方を見ていた。

「待って！　公園で悪さって……」

「惚けないで！　此処の公園の植物を傷付けたり燃やしたりする何て、アンタ以外誰がやるって言うのよ！」

ピンク色の生物の言葉を聞いて周りを見ると、確かに所々に焦げ付いた所や刃物で鋭く切り裂かれた様な後が見られた。

「いやアタシ知らないよ！　そもそも彼処までの事、アタシ一人で出来ると思う？」

「うっ……た、確かに言われて見れば……」

「若し良かったらアタシも犯人探しを手伝うよ！　そうすればお互いに納得するでしょ？」

「……分かったわ。　でも私はまだ貴女を完全に信じた訳じゃないから。　其処は忘れないでね」

「分かっているよ。　……そう言えばまだ名前を言ってなかったね。

アタシはリサ。　貴女は？」

「……ララモン」

「そっか……宜しくねララモン！」

リサの様子にララモンは、まだ戸惑うばかりであった。

「キキイイイ——！」

その時、辺りに甲高い鳴き声が響いた。

「な、何!？」

「！ 危ない!！」

ララモンが咄嗟に突き飛ばし、それと同時にリサのいた所に大きく
抉られた痕跡が出来る。

「大丈夫?」

「あ、有り難う……」

「キキイ——!！」

声の方向を向くと、其処には両手に白い翼を生やした女性の様な見
た目の異形がいた。

「いけない! ハーピモンよ!」

「ハーピモンって……デジモン!？」

「キキイ——!！」

ハーピモンは再び風を操って真空刃を作り出し、リサとララモンに
向けて放った。

「キヤアアア——!！」

リサとララモンは何とか回避するも、真空刃の衝撃の余波で吹っ飛ばされてしまう。

ハーピモンはそれを面白く思ったのか、リサ達に向けて集中的に攻撃を行いだした。

「ナッツシユート！」

「キキヤア——！！」

ララモンは咄嗟に反撃するも、ハーピモンは真空刃でララモンが放った固い木の実を、まるで豆腐を切るかの如く切断して相殺した。

「ダメ……全然効いてないわ……」

「ど……どうしよう……?」

「キキヤア——！」

そんなリサ達を見たハーピモンは再度、彼女達に襲い掛かって来る。

もう駄目だと思った2人は目を閉じる。

「ブイブレスアロー！」

その時両者の間を光線が走り、ハーピモンは少し下がった。

「今の……「リサ！」ッ！」

声の方向を見ると、其処には此方に来る友希那とブイドラモンの姿があった。

「友希那……」

「大丈夫リサ？」

「う、うん……。何とか」

そして友希那達が視線を向けた先には、殺気立った様子で此方を見るハーピモンの姿があった。

「ハーピモン。アーマー体。幻獣型デジモン。必殺技は『ウインドシーカー』……」

「キキヤア——！」

「ブイドラモン！」

「ああ！」

ハーピモンが此方へ突進してくるも、ブイドラモンがそれを受け止める。

「キキキキキキ……！」

「くうううう……！」

やがてこれ以上の拮抗は無意味と悟ったのか、ハーピモンは体勢を変えてブイドラモンに蹴りを喰らわせて脱出し、距離を取った。

（相手は空中戦が得意。飛行能力を持たない此方には不利だわ。何とか地上戦に持ち込まないと……）

（友希那……）

友希那はハーピモンの特徴を冷静に観察しながら策を練る一方、リサはララモンと共にそんな彼女を心配な様子で見ている。

「グオツ!？」

その時横から赤い炎が飛んできて、命中したブイドラモンは苦悶の声を上げる。

「ブイドラモン！」

「友希那！ あれ！」

友希那がリサの声を聞き、赤い炎が飛んで来た方を見ると、其処には全身を炎に包んだ赤い山椒魚の様な見た目の異形がいた。

「サラマンダモン。 アーマー体。 両生類型。 ウィルス種。 必殺技は『ヒートブレス』と『バックドラフト』……」

友希那は自身のデューアークで相手の情報を確認する。

「ハーピモンの真空刃とサラマンダモンの炎……此処の公園を荒らしていたのは、コイツらだったのね……」

ララモンは2体のデジモンの攻撃から、公園荒らしの真実を悟った。

「ガアアア——！」

「クツ！」

「キキキ——！」

「グアア！」

サラマンダモンは再び口から灼熱の炎を吐き出し、ブイドラモンは何とか回避するが、その直後にハーピモンの放った。

「ブイドラモン！」

「大丈夫だ……！」

そう言つてブイドラモンは態勢を整え直し、再度2体の方に向かつて行く。

「……リサ、貴女はその子を連れて逃げなさい」

「友希那!?!」

リサは友希那の発言に戸惑う。

「リサ。貴女にはこれまで沢山助けられて来たわ。小さい頃、そしてRoseliaの事に関しても……」

「友希那……」

「……でも同時に沢山迷惑を掛けて傷付けてしまったわ。あの時も……」

“ 『ペトラファイヤー!!』 ”

“ 『キヤアアアアアアア!!』 ”

「……石になった貴女の姿を見てデジモンとの戦いの危険を知って、貴女を巻き込ませたく無いと思つたわ。だから、紗夜にしか話さなかつたのよ」

友希那の言葉に、リサは息を飲んだ。

「私自身……不器用なのは分かっているわ。でも……リサが傷付く姿を見るのは……もつと辛いの」

「そう……だつたんだ……」

友希那は例え仲が険悪になつたとしても、リサの事を守りたかつた。

“ 『湊さんは貴女の事を常に大切に想っています』 ”

“ 『私も紗夜や友希那達と一緒に会話の場にいたけど、友希那が語ってた想いに嘘や偽りは感じられなかったわ』 ”

リサは紗夜とルナモンが言った言葉の意味が漸く理解した。

「グオオ！」

「！ ブイドラモン！」

友希那はブイドラモンの元へと駆け出した。

「くうう……」

「ブイドラモン！ 大丈夫？」

「言っただろ……こんな痛み……クツ……大した事無いさ……っ！

友希那！」

その時ハーピモンが友希那に対して攻撃の構えを見せていた。

(もう駄目ね……)

友希那は動きを止めた。

「止めて——！」

その時ハーピモンの体に小さな石が当たる。

友希那とブイドラモンが声の聞こえた方を向くと、其処にはリサの姿があった。

「これ以上友希那達を傷付けるんなら、アタシが相手になってやるんだから！」

そう言っけてリサはハーピモンに対して、地面に落ちている小石を投げ付け始める。

「止めてリサ！ 危険よ！」

「リサ！ クッ！」

ブイドラモンは何とかリサの下に向かおうとするが、サラマンダモンの妨害もあって動けなかった。

「キキヤア——！」

そしてハーピモンの方も、狙いをリサに対して攻撃態勢に入る。

「ナッツシュート！」

だが今度は無数の固い木の実が降り注ぎ、ハーピモンは咄嗟に自身の羽の生えた腕で防御する。

「今の……」

「大丈夫!？」

リサが振り向くと、其処にはララモンの姿があった。

「どうして……」

「ハーピモンは力は強くは無いけど、獰猛なデジモンなの！ あのままだったら八つ裂きにされてる所よ！ ……それと」

不思議そうな様子のリサを前に、ララモンは一拍置いて言う。

「……さつきは疑ってしまったって御免なさい。貴女のブイドラモンのテイマーを心配する様子を見てたら……悪い人に思えなくて……それにこのまま誤解したままなのも嫌だったから……」

そんなリサはララモンを優しく抱き締める。

「有り難うララモン……」

「リサ！」

其処へ友希那が駆け付ける。

「リサ！ 何て無茶を……。 此処は私に任せて貴女は……」

次の瞬間、乾いた音と痛みが友希那の頬を走った。

リサの方を見ると、リサは目尻に涙を浮かべながら此方を睨んでいた。

「リサ「バカ！」」

友希那の言葉を遮り、リサは叫ぶ。

「バカバカバカ！ 友希那のバカ！」

「リサ……」

「如何して友希那は1人で何でも無理して抱え込もうとするの!?

……アタシ……『迷惑』だ何て言った？ アタシは自分の意思で友希那の側にいるって決めたの！」

「……」

「リサが傷付く姿を見るのはもつと辛い」って言ったよね？ アタシにとっては友希那に若しもの事があつたらって考えたら、そっちの

方が辛いの！ ……アタシが……友希那を想う気持ちを甘く見ないで！」

「リサ……」

そしてリサは友希那を優しく抱き締めた。

「友希那……貴女が背負っている物……アタシにも背負わせてよ……。その為ならアタシは……汚れたって傷付いたっていいから」「……有り難うリサ……ご免なさい」

「キキヤア！」

2人は叫び声の方を向く。

「行こう友希那！」

「でも……貴女「私に任せて！」」

その時、ララモンがリサの隣に現れる。

「リサには指一本たりともアイツらに触れさせないわ！」

その様子を見たハーピモンとサラマンダモンは嘲笑の様子を浮かべた。

「笑うな！ リサは……相手の事を理解し思いやれる優しい女の子よ！ アンタ達みたいな下品で乱暴な奴ら、リサの足下所か、全身にすら及んでないわよ！」

「ララモン……」

「私はこの子の……パートナーだもん！」

その時リサの目の前に眩い光が現れ、彼女が目の前の光を掴むと、光はカーマインの縁取りのディーアークへと変わった。

「これ……友希那や紗夜の物と同じ……」

不意に悪寒を感じて視線を向くと、ハーピモンとサラマンダモンが先程と違い、殺気立った様子で此方を睨み付けていた。

「リサ。改めて聞いわ。デジモン達との戦いは危険な物よ。これから先、今の状況以上に危険な状況に遭う事だってあるわ。貴女はそれでも私達と一緒にの道を行く勇氣はある？」

「……何当たり前の事を聞いているの。そんなの既に決めているよ」

「私はリサのパートナーよ！ リサは私が守ってみせるもん！」

「……貴女達の想い、しっかりと感じたわ」

友希那がブイドラモンの方を見ると、ブイドラモンもリサとララモンの想いに対して、肯定を示す様に頷いた。

「キキヤアア——！！」

「キュオオオー！」

友希那達が振り向くと、ハーピモンとサラマンダモンが叫び声を上げていた。

「行くわよ皆！」

「ああ！」

「ララモン！ 準備は出来てる？」

「うん！」

— EVOLUTION

「ララモン進化！」

デイーアークから放たれた光に包まれたララモンが姿を変えていく。

小さな肉体は大きくなり、そして光が収まると、太い尻尾と背中に葉を付けたヒマワリの様な姿をしたデジモンへと変わっていた。

「サンフラウモン！」

「ララモン……」

「サンフラウモン。 成熟期。 植物型デジモン。 データ種。 必殺技は『サンシャインビーム』と『スマイリービンタ』、『カクタステイル』……」

リサはサンフラウモンの姿に呆然とし、友希那はデイーアークでサンフラウモンのデータを調べる。

「此処からは私も参戦するわ、ブイドラモン」

「サンフラウモン……ああ、共に戦おう……！」

2体はハーピモンとサラマンダモンに視線を向ける。

「ブイドラモン、ハーピモンは私が引き受けたわ」

「分かった。 行くぞ！」

そしてブイドラモンとサンフラウモンはそれぞれの相手へと向かって行った。

「ウオオオオ——！」

ブイドラモンは駆け出す。

サラマンダモンは口から炎を吐いて攻撃するも防戦一方だった先程と違い、ブイドラモンは怯む事無く向かって行く。

「マグナムパンチ！」

「ギユル!？」

ブイドラモンの拳がサラマンダモンの顔面に直撃し、サラマンダモンは大きく吹っ飛ばされる。

「さて……ここからは俺とお前のタイマン勝負と行こうぜ」

「ギユ……ギユアアア——！」

「ブイブレスアロー——！」

サラマンダモンは再度口から灼熱の炎を吐き出すが、ブイドラモンは口から放った高熱の熱線でそれを打ち消し、両者の間に煙が湧き上がった。

「キキ——ッ！」

「クツ……！」

一方では、ハーピモンが放った真空刃をサンフラウモンが両手をクロスして防ぐ。

「ハアアアア——！」

サンフラウモンは自身の尻尾を伸ばすも、ハーピモンは距離を取る

様に空中に回避する。

「やっぱり空を飛べる分、あっちの方が有利みたいだね……」

リサは空中のハーピモンを見て眩く。

「リサ、大丈夫よ」

「サンフラウモン?」

「飛行能力はアイツだけの『専売特許』じゃない……今から見せてあげるわ」

そう言つてサンフラウモンは背中の葉をパタパタと少しずつ動かし、次の瞬間、空中へと舞い上がって行った。

「え……えええええっ!?!」

リサ自身、背中の葉を単なる飾りだと思つていた為、まさかサンフラウモンが空を飛べるとは思つておらず、驚きの声を上げた。

「キキヤア!?!」

「お返しよ! スマイリービンタ!」

リサと同じ様に驚愕して動きを止めたハーピモンに対し、サンフラウモンは両手で往復ビンタをお見舞いした。

「キキヤ! キキヤ! キキヤ!」

「ヤアア……ハアア——!」

「キキヤイイ——!」

最後に全力の籠もつた右手のビンタを顔面に受けたハーピモンは、バランスを崩して地面に墜落して行く。

「キュルル!？」

そこには先程の煙に紛れて逃走を図ろうとするサラマンダモンの姿があつたが、突然墜ちてきたハーピモンに気付くも避ける事も出来ず墜落したハーピモンの下敷きになる。

「見つけたぞー！」

しかもその時丁度煙が晴れた事もあって、ブイドラモンに見つかつてしまう。

「キキイ………!」

「キュキュ………!」

「カクタステイル!」

サンフラウモンは尻尾の様に生えた茎を振り回してトゲを放ち、2体の動きを封じた。

「キキヤア!？」

「キュル!？」

「サンフラウモン!」

「ええ!」

「ブイブレス………」

「サンシャイン………」

「アロー(ビーム)!!」

ブイドラモンの熱線とサンフラウモンの光線による同時攻撃がハーピモンとサラマンダモンの2体に炸裂する。

「キキヤアア——!?!」
「キュルルオオオ!?!」

そのまま2体は苦痛の叫び声と共に、データの粒子となって消えていった。

「ふう……」

「リサ、大丈夫?」

「うん、何とかね。　　ララモンもお疲れ様」

リサは進化が解けて此方に来たララモンに労いの言葉を掛ける。

「くっ……」

「ブイモン!?　大丈夫!?!」

「結構キツいけど……何とか生きてるよ」

「友希那!」

「私は大丈夫……ただブイモンの方が……」

「それなら私に任せて!」

「ララモン?」

「友希那とリサは少し耳を塞いで。　　ブイモン。　　ちよつと我慢して

ね。　　シング・ア・ソング!」

ララモンはブイモンに対し、優しく歌い出す。

「ん……んう」

数分後、ブイモンは静かに眠りに付いた。

「ララモン。　　一体何をしたの?」

「ブイモンに私の歌を聞かせて眠らせたのよ。　　後はゆっくり休めば大丈夫よ」

「有難う、ララモン」

そして友希那はリサに向き合い、自身の右手に持つ董色の縁取りのディーアークを掲げ、それを見たりサも右手に持ったカーマインの縁取りのディーアークを掲げて重ね合わせる。

そんな2人の姿を太陽の光が祝福する様に照らしていた。

☆☆

「おっ待たせ〜！」

数日後。

人が行き交うショッピングモールの広場に友希那とリサがいた。

リサからの誘いを受けた友希那は、気分転換とこの前のお詫びを兼ねて、今日は彼女と共に外出をしていたのであった。

「ゴメンね友希那」

「いえ。 私もついさつき来たばかりよ」

「それじゃあ行こっか！」

「待ってリサ」

そう言つて歩き出そうとしたリサを友希那が呼び止める。

「友希那？」

「今日着ているその服……とても素敵で似合っているわ」

「っ……あ、有り難う友希那……（友希那が……アタシのファッション

見て『似合っている』って言ってくれた……!」

リサは照れ臭そうな様子を見せながらも、内心嬉しさとドキドキを抑えられない様子だった。

「それじゃあ行きましようか」

「あつ、あのさー!」

数秒程意識がトリップしていたリサは気を取り直し、友希那を呼び止めた。

「リサ?」

「もし良かったなら……アタシと手を繋いでくれないかな……?」

リサは自身の右手を差し出して言う。

2人の間を沈黙が支配する。

(やっぱり……そんな都合良く行かないよね……)

リサが顔を伏せながら内心そう思い掛けた時、右手に柔らかい感触が走る。

振り向くと其処には自身の右手を左手で優しく握る友希那の姿があった。

「友希那……」

「さあ、行きましよう」

「! うん!」

そして2人は共に歩き出した。

『はあああ！ 良かったわねリサ！』
『ララモン……何だか嬉しそうだね……』
『ブイモンはあれを見て何とも思わないの!?!』
『いや……2人が仲良し何だなあ〜つとは思うけど……』
『リサ！ 私、リサの幸せの為なら全力でバックアップするわ!』
『ララモンが燃えている……』

デーアークの中の2体の会話を余所に、リサと友希那は会話をする。

「友希那、この喫茶店行ってみない？」

「! 『黒猫亭』……?」

「うん! 此処、可愛い黒猫がいるし、偶に小さなコンサートをやっていたりするから、アタシも気になっていたんだけど……どうかな？」
「(黒いにゃくんちゃん……)……そうね。 偶には変わった所に行くのも悪く無いわ」

「有り難う友希那! じゃあ行ってみようか!」

そして2人は目的地に向けて再び歩き出した。

(友希那……可愛い)

リサは口では冷静でいながらも内心そわそわした様子を隠しきれない友希那を微笑ましい気持ちで見ている。

(……友希那の言う通り、これから先も楽しい事だけじゃ無く、辛い事や悲しい事もあるかもしれない。 でも、例えどんな事があってもアタシは友希那の手を絶対に離したりはしないよ。 だから友希那。 一緒にこの道を歩いていこう)

リサは内心そう思いながら、友希那と共に歩いて行った。

☆☆

「皆さん、今日は黒猫亭へようこそ！」

桃色のショートヘアの少女が、開口一番に口を開く。

「まだこの歌謡ショーを初めたばかりではありますが、皆さんを私達の歌や踊りで楽しませていきたいと思えます。それではお聞き下さい！」

そして音楽が流れ出した。

「へえ、結構良い感じじゃん」

『あつ、次の曲よ』

(さつきから思ってたけど……あのピンクの子と司会の蒼い髪の女人、何だかララモンとリサにそっくりな物を感じる……)

リサとパートナーデジモン達は、思い思いの様子で楽しんでいる。

(にゃくんちゃんも可愛い……それに料理も美味しいし、歌も踊りも素敵……こういうのも良いわね)

友希那も満足そうにショーを鑑賞中、幾つか本人も納得のいく歌詞が浮かんで手帳に書き込む中、ふと手を止めて歌詞を見返す。

(この歌詞……何だか『Roseliaの曲』と言うより『リサの曲』と言う感じね……)

ふと視線をリサの方に向けた友希那は思う。

(そう言えば前にリサは、Roseliaの為に作詞に挑戦してたわね……。Roseliaの各メンバーの曲……。思い切って作ってみようかしら)

そんな事を内心で考えながら、友希那は手帳を閉じ、再びショーを鑑賞し始めた。

その後暫くして、珍しく緊張気味な様子でリサに何かの紙を渡す友希那とそれを見たりリサが嬉しそうな様子で友希那に抱き着く姿が目撃される事になったのは、また別の話である。

第13章 海月とペンギンと青い迷宮心（ラビリンス
ハート）

「ふええ……」

ある日の事。

目的地の店に用事があつて出掛けた花音は、予定よりも早く用事が
住んでしまった事もあつて辺りを散策するも、自身の癖である方向音
痴によつて道に迷つていた。

「あれ？ 花音さん？」

声の方に振り向くと其処にいたのは、ましろとハックモンだった。

「ましろちゃん、ハックモン……」

「若しかして……道に迷つてしまったのか？」

「う……うん……そ、そうです……／＼」

ハックモンからの問い掛けに花音は、少し恥ずかしさと気まづさが
混ざつた表情で返答した。

「若し良ければ、私達と一緒に行動しませんか？」

「あ、有り難う……ましろちゃん」

花音はましろからの申し出を迷う事無く受け入れ、2人は共に行動
し始めた。

（そう言えば……花音さんとこんな風に二人きりつて初めてかも）

ましろ自身の花音に対する印象は、『ガールズバンドの先輩』と言う物である。

ましろの記憶する限り、花音とはそもそも所属するバンド、通っている学校や学年などあらゆる面が違っていている事もあって、今まで交流をする事などあまりなかった為、逆に新鮮に感じられた。

「ましろ？… どうかしたのか？」

ハックモンの呼び掛けに、ましろは我に返る。

「ううん、ごめんね。 少し考え事していたの」

「そうか……」

「ふふっ……ましろちゃんとハックモン、本当に仲良し何だね」

「はい。 彼とはデジタルワールドに行った時からの仲ですから……」

「ああ……こうして人間界で再び一緒に過ごしていると……ましろのこんなに大きく成長した姿を見て、私も嬉しく思うんだ」

ましろとハックモンの脳裏に、デジタルワールドの時の事が思い浮かばれる。

初めて会った時の事。

状況が分からず戸惑うましろを慰めた時の事。

初めて進化し、敵を倒した事。

初めて友達になったデジモン達の事。

その友達の死に泣いた時の事。

デーモンとの最後の戦いの時の事。

そして——別れた時の事。

「楽しい事や悲しい事、辛い事も沢山会ったけど……でもあの冒険があつたからこそ……今の私達が在るんです。私だけじゃない。香澄さんや有咲さん、紗夜さんや日菜さんも……皆自分達のパートナーには、返しきれない程沢山の物を貰つたんです。だから……例えばどんな事があつても……ハックモン達を信じて味方でいようって、再会した日の夜に5人で誓い合つたんです」
(ましろちゃん……見た目に反して、芯が強いんだな)

花音はましろの言葉と姿勢から、彼女の内心に秘められた強い想いを感じ、息を呑んだ。

「うわあああ——！」

「！ あつちだ！」

「行こうましろ！」

「ふええ!? 待って〜！」

突然の悲鳴を聞いたましろとハックモンは駆け出し、花音も慌てて追い掛けた。

☆☆

「止めて！ 痛いよ！」

「コイツは面白い！ オラア！」

ましろ達の目の前に飛び込んで来たのは、紫色のペンギンとそれを面白がって乱暴する長い耳と鋭い爪を持つ紫色の獣の姿だった。

「止めろ！」

其処へ両者の姿を見たましろとハックモンが割り込んで来る。

「何だテメエらは？」

「どうしてこんな酷い事をするの!？」

「これ以上乱暴を行うなら、私が相手をするぞ」

「五月蠅え！ このガジモン様に指図するってんなら、痛い目に味併せてやるぜ！」

そう言つて紫色の獣——ガジモンはハックモンに襲い掛かる。

しかしハックモンはその攻撃を最低限の動きで交わす。

「何!？」

「ファイフラッシュ！」

「グアアアー！」

ハックモンの前足の爪による強烈な一撃を浴びたガジモンが吹っ飛ばされる。

「手加減はした。　まだやるのなら、お前が納得するまで何回でも相手をしてもいいぞ?。」

「お……覚えてろく！」

ガジモンは情け無い声を出して逃走して行った。

「ふう……」

「ハックモン、お疲れ様」

ましろがハックモンを労う。

「大丈夫？」

一方花音は紫色のペンギンに声を掛けて無事を確認するが、相手は警戒している為か怖がっている様子だった。

「大丈夫だよ……。 何もしないから、少し落ち着いてね？」

「……うん」

花音の言葉と姿勢を受け、紫色のペンギンは警戒心を解き、彼女が差し出した手を取って起き上がった。

「あ……有り難う……」

紫色のペンギンはお礼を述べた。

「花音さん！」

「ましろちゃん、ハックモン。 この子の方は特に大きな怪我とかは無いから、大丈夫だよ」

「そうですか……」

「本当に……助けてくれて有り難う……」

「気にしないでいいよ。 私は松原花音。 そしてこっちが、倉田ましろちゃんとハックモンだよ」

「宜しくね」

「ハックモンだ。 此方こそ宜しく頼む」

「ほ、僕……ペンモンです……」

紫色のペンギン——ペンモンも自己紹介をする。

「ふふっ……宜しくね、ペンモン」
「う、うん……」

一方でましろは自身のデューアークでペンモンを調べる。

「ペンモン。 成長期。 鳥型。 ワクチン種。 必殺技は『無限ビ
ンタ』」

「それでペンモン。 君はこれからどうする?」

「ボ、ボクは……」

ハックモンの問い掛けに、ペンモンはしどろもどろとした様子を見
せた。

「あ、あの……若し良かったら……私の家で良いかな?」

「花音先輩?」

「こんな状態のこの子をこのまま此処に放置する何て、私には出来な
いよ」

「そう言えばましろ。 今日確か『CIRCLE』が休みではなかつ
たか?」

ハックモンの言葉でましろはこの前、まりなから自身の用事の関係
で『CIRCLE』が休みになるのを聞かされた事、そして今日がそ
の日である事を思い出した。

「……分かりました。 花音先輩、御迷惑をかけて本当に済みません
……」

「ううん。 これは私が決めた事だから、ましろちゃんが謝る事何て
無いよ。 それじゃあ行こっか」

「うん……」

花音はペンモンを抱き締めるとそのまま自宅の方へと歩いて行き、ましろとハックモンも静かに見送った。

だが双方は全く気付いていなかった。

先程から自分達の様子を別方向から観察している存在がいた事に。

「……なる程。あの強さなら『あの方』が『救世主』と評するのも納得ですね……」

観察している存在の正体である少女——パレオは自身の懐から小さな機械——黒いボディとパステルピンクの縁取りのディーアークを取り出し、先程の光景に対して一言呟く。

「では『先程の子』にアプローチを掛けましょうか」

そう言うパレオは、こっそりとその場を離れたのだった。

☆☆

翌日、花音はペンモンと共に近くの広場に来ていた。

「ふええ……ごめんねペンモン……私が方向音痴なばかりに迷惑を欠けちゃって……」

「そんな……。花音という迷惑何て……そんな事全然思っ

よ」

「……有り難うペンモン」

花音はペンモンの言葉を聞き、安心した様子を見せる。

「ボク……花音みたいな優しくして良い人間に会えて良かったんだ」

元々デジモンワールドの小さな集落で過ごしてた事。

ある時目の前に、急に大きな黒い穴が現れ、気が付けば人間界にいた事。

最初に出会った人間はペンモンの姿を見て、『水族館から脱走したペンギン』と思つて保健所に通報され、慌てて逃げ出した事。

そこからペンモンはポツポツと今まで自身に起きた出来事を話し出した。

「……とつても大変な目に遭つたんだね……」

「ボク……人間界つてとつても怖い所つて思つていたの……。でも花音やましろ、ハックモン達と出会つて見たら……。少しだけど『人間の事を信じてもいいかな』つて思えたんだ……。有り難う花音」

「そんな……。私は別にそんな褒められ様子な人間じゃないよ……」

「花音……っ？」

花音の脳裏に、ふと数日前の会話が浮かび上がる。

〃 『美咲！ こっちよ！』〃

〃 『早く早く！』〃

〃 『うわーん！ 置いてかないでよこころ〜！』〃

〃 『ちよ……ちよつと待つてよ！ 2人共！』〃

「『美咲ちゃん、大変そうだね……』」

「『ええ……何だかところが2人になった感じですね……この間だつてころと出掛けた先でデジモンに遭遇したんですけど……ころ、いきなり最初の時みたい』『そんな怖い顔をしないで、あなたも笑顔になりましょう♪』つて歌つたりしてたら、相手のデジモンも一緒に歌つたり踊つたりし始めたんですよ……』」

花音自身、美咲が口ではそんな呆れた言い方をしつつも、その様子からは悪感情など全く感じて無いのが分かった。

(「ころちゃん」と美咲ちゃん、何だか楽しそう……)

元々ハロハピ結成時の頃から仲が良かったころと美咲だったが、ここ最近はその距離がより一層と近くなっている様だと花音は思っていた。

(「やっぱり『あの子達』と出会った事も大きかったのかな？ それに……))

脳裏に浮かぶのは2人のパートナーの存在、そしてあの時の美咲の姿。

「『アンタを見ているとね……あたしの大切な子の事が頭に浮かぶんだ』」

「『無邪気で好奇心旺盛でいつも目をキラキラ輝かせていて……だけれど人の事を良く見ていてね……。特にあたしの事何か……ほぼ的確に言い当てていて、その度にドキツとしていた』」

「『……最初は無理矢理付き合わされて……はつきり言つて内心迷惑つて思っていたけど、一緒に過ごしていく内に……花音さんやはぐみや薫さん、他のガールズバンドの皆と出会つて、当たり前毎日が不思議

と楽しいと思える様になって…その子に感謝しているんだ”

”それを聞いた時のその子の様子を見たら…あたしもその子の想いを一緒に叶えたいって、内心想ったんだ……”

(美咲ちゃんはそこまでこのろちゃんの事を……)

花音にとっての美咲の印象は、この一年で大きく変化していた。

最初の頃は自分を変える切っ掛けを与えてくれたところの存在が大きく占めており、美咲に対しては『同じ学校兼バンドの後輩メンバー』と言う印象であったが、この1年間でハロハピの活動を始めた様々な形で一緒の時間を過ごす中で美咲の人柄や内面を知っていく内に、彼女の中で美咲の存在が大きな物となっていた。

だからこそあの言葉を聞いた時、花音は内心で敗北感を感じてしまった。

(私はどうやっても、美咲ちゃんの隣に立てないんだね……)

そして2人がパートナーデジモンを得た事が切っ掛けで、花音自身はこころと美咲との間に距離を感じる様になってしまっていた。

あの時花音がペンモンを自宅に保護したのも、ペンモンを放って置けなかった以外に、少しでもこころや美咲達に近付きたかったと言うのも少なからずあったのだった。

しかしペンモンと一緒に過ごしている内に気持ちが悪くなり落ちてきた花音は自身の中の邪な思いに自覚すると、同時にペンモンを保護と言う形で利用してしまった事への罪悪感に苦しんでいた。

「私ね、少し前から気になっている子達がいてね……。その子達との遠くなっちゃった距離を少しでも縮めたい為にあなたを利用したの。だから……。私は感謝なんてされる資格なんて無いの……」

花音は俯きながら、自身の胸中を吐露した。

「花音」

不意に知らない感触に気付き、花音に視線を向けると、自身に手を当て此方を見るペンモンの姿があった。

「そんな暗い顔をしないで。ボクは利用された何て少しも思っただかいよいよ」

「ペンモン……?」

「例え若しそうだったとしても、花音がボクを助けてくれた事には変わりはないもん。……それに花音は自分から悪いつて素直に認めてこうやって謝ったんだよね? そんな花音を悪い人だなんて、ボクは全く思わないもん!」

「……有り難う」

ペンモンの言葉に、花音は自身の中の問えていた物が優しく落ちる様に感じていた。

「プラスチックコフィン!」

その時突然叫び声が聞こえ、花音とペンモンの周りを衝撃と爆音が襲った。

「キヤア——!」

「花音！」

「だ、大丈夫……」

花音は自身の無事をペンモンに伝え、何とか落ち着かせた。

「今のは態と外してやったんだ。　思い知ったか？」

煙が晴れ、唐突に聞こえた声の方を向くと、其処には此方を嘲笑の様子で見る一匹の狼がいた。

「フフフ……今度は直接当ててやるよ」

「デジモン!？」

「彼奴はフアングモンだよ！」

花音とペンモンは警戒した様子を見せる。

「オイオイ……警戒してんのを承知で言わせてもらうが、俺はお前達とは初対面って訳でも無いんだがなあ？」

「ボク達は君の事何て全く知らないよ！」

「はあく……この前虐めてやった奴の顔を忘れる何て、随分お気楽な頭してるとしか思えねえなあ……」

花音はその言葉でハッと何かに気付いた様子を見せる。

「貴方若しかして……この間のカジモン？」

「漸く気付ikyやがったか……。　あの時は邪魔が入っちゃったが、お前らをボコボコにしがてら貰った『この力』を試す事にしたって訳だ」

フアングモンはそう言って、一歩ずつ近付いて来る。

「ふ……ふええ……」

「さ……下がって！ 花音！」

ペンモンは花音の手から抜けて、彼女とファングモンの間に立つ。

「何だ？ やるのか？」

「か……花音は……ボクが守る！ ワアアアア！」

ペンモンは叫び声を上げながら、ファングモンに向かって行く。

「フンツ！」

「ふぎやう……！」

しかしペンモンの懸命の抵抗は、ファングモンの右足の一振りですぐ気なく振り払われてしまう。

「ま……まだまだだ——！」

「しつけーぞ！」

「あうっ……！」

尚も食らい付こうとするペンモンをファングモンは再度振り払う。

「どうしよう……このままじゃペンモンが……」

花音の心配した通り、相変わらず無傷のファングモンに対し、ペンモンの体はボロ雑巾の如く傷だらけになっており、最早立っているのがやっと言う状態だった。

「ううっ……まだ……ま……アウツ！」

ペンモンは再度立ち上がろうとするも直ぐに崩れ落ちてしまう。

「っ！ ああもう！ 正直面倒臭くなってきたぜ！ そんなに死に
てえんなら、楽にしてやるよ！」

そう言つてフアングモンは止めを刺そうと攻撃の態勢に移ろうと
する。

コトツ……コロコロ

「？ 何だ？」

「ふえええ！」

不意に聞こえた音にフアングモンは視線を向けると、其処にはペン
モンを守ろうとして、花音が必死に石を投げていた。

しかし懸命な努力も虚しく、彼女の投げた石はフアングモンに届く
前に失速して緩やかに落ちて行くだけであつた。

「ブハハハ！ コイツは傑作だわ！ 攻撃がちつともこつちに届いて
ねえ！ これならチビ共の方がまだマシな攻撃が出来るぞ！ お前
もこんなヘツポコで青瓢箪な女が相方何てとことんダメなデジモン
だなあ〜？」

フアングモンはペンモンに対し、嘲笑を浮かべながら侮蔑の言葉を
吐き捨てる。

「ダメー！ これ以上ペンモンを苛めないで〜！」

しかし花音の投げた石は、先程と変わらずな状態であった。

「……其処まで痛い目に会ってえんなら……その通りにしてやるよ！」

フアングモンは標的を花音に切り替え、口にエネルギーを溜め始めた。

「花音！」

「ブラストコフィン！」

フアングモンの口から衝撃波が放たれ、それを見てペンモンは全身の力を振り絞って花音の下へと駆け出した。

「止めろおおお——！！」

すんでの所でペンモンは花音を押し出す。

「ウアツ……！！」

押し飛ばされた花音の目に、自身を庇って衝撃波に貫かれたペンモンの姿が映った。

「ペンモン！」

駆け寄った花音はペンモンに必死に呼び掛ける。

「ペンモン！ しっかりしてペンモン！」

「女ア……！！ 心配しなくてもテメエも直ぐにソイツの後を追わせてやるよ！」

フアングモンはゆっくりと花音とペンモンの下へ近付いて行く。

「バーンフレーム！」

その時、横から大きな火球が飛んでいき、フアングモンは咄嗟に回避する。

「花音さ——ん！」

「ましろちゃん！」

其処へましろがバオハツクモンと共に駆け付けて来る。

「大丈夫ですか？」

「私は大丈夫！ でもペンモンが！」

花音は泣きながらペンモンの事を伝える。

「つ……こんなにボロボロになって……」

「チツ……前の時と言い、今回も良いタイミングで邪魔しやがって……」

「……言いたい事はそれだけ？」

一言だけ言ってましろは立ち上がり、フアングモンを見据えた。

「あなたは……そうやって自分が気に入らないと思った相手をただ傷付けて苦しませる事に対して……何とも思わないの？」

「ハハハ！ 随分間拔けな事を聞くなあ？ アイツが嫌い！ アイツが気に食わない！ アイツより有利な立場に成りたい！ 『戦い』つてモンはそうやって始まるんだろぅが!？」

「……バオハックモン」

「……ああ。ペンモンの悲しみと悔しき。私達が代わって晴らしてやろう!」

「ほぎけ!」

「バーンフレイム!」

フアングモンの衝撃波に対し、バオハックモンも口からの大きな火球を放って相殺し、両者の視界を白い煙が覆う。

「バオハックモン!」

ましろの声を受け、バオハックモンは静かに目を閉じる。

「馬鹿が! 噛み千切ってやるぜ!」

「それは……どうかな?」

次の瞬間、体に鋭利な物が刺さった様な音になる。

「フフフフ……! ……? ウオツ……!?!」

してやったと言う表情を浮かべたフアングモンの顔が、急に苦しみに満ちた物に変わる。

「あっ……」

花音の口から小さな声が漏れる。

其処にはギリギリでフアングモンの攻撃を躲し、そのボディに片方の鋭い爪によるカウンターを浴びせたバオハックモンの姿があった。

「ガア……何だ……と!？」

「例え視界が悪くて目を瞑ったても、貴様の殺気と腐った性根の雰囲気嫌でも感じられるからな……。 ……ファイフクロス!!」

「グア、ア、ア、ア!!」

其処から一気に力を込めた爪による斬撃で両断されたファングモンは、その身をデータの粒子に変えて消滅していった。

☆☆

「アラアラ……せつかく『無駄遣いせぬよう励みなさい』って注意もした上で進化させてあげたのに残念ですね……」

公園の上空。

2本の杖を所持し、白いドレスに纏った妖精の姿をした存在が、先程の様子を見ながら呟いた。

「……まあ、所詮はチンピラデジモン。 期待何てしてなかったんですけど」

その時ふと自身のスマホが着信音を鳴らしているのに気付く。

この姿でスマホを弄る姿は些かシユールに見えるが、そんな事を気にせず妖精は右手に所持してた杖を消し、スマホを手取る。

「もしもし……あつ、ハイ。 ……了解しました〜♪ ……さて、今日は特売日ですから急ぎませんと!」

会話を終えた妖精は、自身の今日の目的と仕える『主』からの急な用事を果たす為、急いでその場から去って行った。

☆☆

「ペンモン……死なないでペンモン……」

「か……花音……」

花音は泣きながらペンモンに呼び掛け、ペンモンは臆気な様子で彼女に見る。

一方でましろとハックモンは悲しそうな様子で2人を黙ったまま見守っている。

2人はこの時点で、ペンモンの命が尽きようとしているのに気付いていた。

そしてそれを示す様にペンモンの体は少しずつデータの粒子へと変わっていつていた。

「泣かないで花音……花音は笑顔の方が似合っているから……」

「でも……!」

「ましろとハックモン……2人は……花音、そしてボクの想いを守ってくれた……本当に有り難う」

「ペンモン……」

ましろとハックモンはただペンモンの言葉を聞く。

「花音……ごめんね。花音のライブを見る……約束……守れなく……なっちゃった……」
「そんな事気にしないで！ 私待っているよ！ ペンモンの事、何時までも待っているから！」
「あ……り……が……どう」
「嫌あ……嫌だよペンモン……！」

その言葉を最後に、ペンモンはデータの粒子となって消えていき、花音も堪えきれず、その場に泣き崩れた。

「ペンモン……ペンモン……」

「……！ ましろ！」

ハックモンが何か気付いて声を上げる。

するとペンモンのデータの粒子が集まって淡い光を放ち、やがて光が収まると其処には白い水玉模様の入った青紫色の卵が現れた。

「これ……」

「デジタマです、花音さん」

「ペンモンは……デジタマからまたやり直すんだ」

「ペンモン……」

ましろとハックモンの言葉を聞き、花音は優しくペンモンのデジタマを温もりを感じる様に優しく抱き締める。

その姿をましろとハックモンは、優しく見守っていた。

☆☆

「ペンモン、今日はとっても良い天気だね」

数日後。

公園のベンチにペンモンのデジタマを抱えた花音の姿があった。

あの後、ペンモンの卵はましろとハックモンとまりなの3人で話し合い、花音に一任すると言う結論になった（因みにその際、一緒にいる事を考慮して花音のスマホを少し改良し、ましろ達のデューアークにもある格納機能を付けた）。

「あつ……」

青空を見る花音の目に1つの雲が映る。

他の雲と比べ、少しだけ小さいその雲は何処かペンモンの姿にそっくりだと花音には思えた。

（ペンモン……私は頑張るよ。『ハロー、ハッピーワールド！』の一員として……。世界中に笑顔を届ける為に……）

花音はペンモンのデジタマに視線を向ける。

（あなたに逢えるのはまだ少し先かもしれないけど……その時が来たら、ハロハピの音楽を聴かせてあげるからね）

心中で語りながら、花音はペンモンのデジタマを優しく撫でる。

『うん。 約束だよ花音！』

その時花音は自身の耳に、ペンモンの声が聞こえたように感じていた。

第14話 発酵恐竜2020

賑やかな雰囲気と明るい声が響き渡る。

「さあ、しよーたいむだ！」

「ものがたりのけつまつはおれがきめる！」

「フハハ、返り討ちしてやろう！」

「ドルモン！ 怪我させ無い様に気を付けてね！」

「しっぽ——！」

「それはわたしのおいなりさんだ」

「ちよつと待て!? そんな言葉何処で覚えたんだ!？」

「有咲……変態だ」

「誰が変態だ——!!」

「わーい！」

「まって〜！」

「あ〜っ！ 其処は危ないから駄目だよ〜！」

「あまーい」

「ふふふっ……チョコレートが口に付いてるよ」

「沙綾ちゃん、とつても上手だね」

「この子供を見てると、紗南や純が小っちゃかった時の事を思い出しちゃってね……」

「皆御免ね……。いきなりこんな事に巻き込んだんじやって……」

「大丈夫ですよまりなさん。皆可愛いから、誰も気に何かしてませんよ」

「元凶の1人のオメーが偉そうに言うな！」

『CIRCLE』の近くの広場の一角で、香澄達ポピパの面々は今、幼年期のデジモン達の御世話をしていた。

☆☆

事の発端は2時間前に遡る。

「こんにちはー!!」

その日香澄達はバンド練習の為、『CIRCLE』を訪れていた。

「あ、皆……」

「? どうしたんですかまりなさん?」

「実はね……」

そしてまりなに案内されて、『CIRCLE』の一室に案内された香澄達が見たのは、赤や青、水玉模様や四角模様など様々な配色や模様が施されたデジタマだった。

「コレってデジタマじゃねーか……」

「『デジタマ?』」

「文字通りデジモンの卵の事だよ。基本的にデジモンは皆、このデジタマから生まれて成長し、死んだらデジタマに戻ってまた生まれるんだ……」

ワームモンはデジタマの事を知らない沙綾達に簡単に説明をする。

「一体何があったんですか?」

「それがね……」

まりなの説明によると、彼女が『CIRCLE』の開店準備をして

いる際、ふと何かしらの気配を感じて空を見ると、空が割れ、其処からこのデジタマ達が落ちて来たのだと言う。

「私もこれだけのデジタマが現れた事もあって、もう大変だったの……」

「あく、お疲れ様です……」

「あれ、そう言えば香澄とおたえは？」

「あ、あれ……」

りみが声の先に有咲達が視線を向ける。

「わ——っ！ 見てみてドルモン！ このデジタマ、星の模様が入っているよー！」

「そうだね。 よしよし、元気に生まれるんだよ」

「ウサギのデジモンのデジタマはこの中にあるかな？」

其処には香澄とドルモンとたえが、室内のデジタマを片っ端から触り始めていた。

「ちよっ……オメーら何やってんだ！」

「あっ……デジタマが」

そして数分後、『CIRCLE』の一室に大音量の泣き声が響き渡った。

☆☆

「で、オメーら何か言う事はあるか？」

「二申し訳有りません……」

「あ、あーちゃん……抑えて抑えて……」

数分後。

有咲がドスを利かせた声で問い掛け、頭にたんこぶを作った香澄達は涙を浮かべて返事を返す。

「……つたく……さて、問題は……コイツらの方だな……」

「あわわわわ……」

「あははは……」

「こんにちはー」「おつす」「おいつす」「こにやにやちわー」「にーはお」「ごはんー」「おなかすいたー」「ぴらふくいてー」「コレクツテモイイカナ」「おねえちゃんにまかせなさい」「ちのちゃんとられるー」「あそぼー」「ごろごろー」「まんまるー」「はなげしんけんおうぎ」「につこにこにー」「らぶあろーしゅーと」「ぶつぶぶーですわ」「すやぴー」「ヒトリダケナンテエラベナイヨー」「きたえてますから」「わたしのせいだ」「こぶく」「ばんかい」「あーにや、ぴーなつつすき」「はっぴーあらうんど」「ぴきぴーきー」「なんだばしやー」「ごとーしごとーし」「まかんこうさつぽうー」「きえんぎーん」「まるまるもりもり」「おっぱいきーんし」「ていろふいなーれ」「ねらいうつぜ」「だぶすたくそおやじ。きみはでんじぐりーんとなって、ベーだーいちぞくとたたかうのだ」「てんにかがやくいつつぼし」「ぶるーえんじえるりさ」

有咲達は目の前にいるデジタマから孵化して無邪気にはしゃぐ沢山の幼年期デジモン達に視線を向けながら、揃って困った様子を浮か

べるのだった。

そしてその後まりなど話し合った結果、今日は『CIRCLE』を臨時休業にし、ポピパの面々も練習を休んで、幼年期デジモン達の御世話をする事になったのだった。

「あ痛あああ——!!」

突如聞こえてきた悲鳴に、沙綾の意識が引き戻される。

「わ——！・ドルモン——ン！」

悲鳴の方向を見ると、其処には全身が真っ赤な色をした四足型のデジモンに尻尾を噛み付かれて悲鳴を上げるドルモンと慌てる香澄の姿があった。

「あわわ……ど、どうしよう……」

「……りみ、この子をお願い！」

沙綾はりみに世話をしていた幼年期のデジモンの事を頼むと、直ぐに香澄達の方に向かって行った。

「コ——ラ——！」

「さーや！・ 御願い手伝って！」

「痛い！・熱い！・痛い！・熱い！」

そして数分後、2人はドルモンの尻尾に噛み付いていた真っ赤なデジモンを何とか引き離したのだった。

☆☆

「駄目だよ……ドルモンの尻尾に噛み付いたり何かしちや……」

「はくい」

「ドルモン、大丈夫？」

「ギギモン怖いギギモン怖いギギモン怖いギギモン怖い……」

ドルモンは尻尾を噛まれた事がよっぽどトラウマになっているのか、その元凶であるギギモンへの恐怖心をまるで壊れたラジカセの如く繰り返していた。

「ごろごろ〜」

沙綾は複雑な様子を浮かべる一方、ギギモンは呑気に沙綾の膝で転がっていた。

「もう……。香澄、ドルモンの方は？」

「うん……ドルモン……さつきからずっとこんな調子なの……」

香澄は少し困った様子でドルモンを見ている。

「何か……本当にゴメンね」

「それにしても……そいつ沙綾に物凄く懐いているな……」

「うん！ さーや、とっってもおいしそうなおいがするんだもん！」

ギギモンは嬉しそうに有咲の問い掛けに応える。

「分かる！ 私も初めてさーやと会った時、『パンの匂いがする』って思ったんだもん！」

「ふふっ、懐かしい。あの時は私も『変わった子』って思ってたなあ」

香澄と沙綾は、懐かしさに思いを馳せながら出会った頃の事を語り合っていた。

「パン？ さーやパンつくるの？」

「うん。家がパン屋をやっているからね……」

「ギギモン、さーやのパン食べたい！ 食べたい！」

「もう……じゃあ今度来た時に持って来てあげるからね」

「わーい！」

ギギモンは喜んだ様子で沙綾の膝の上でコロコロ転がった。

「さーや！ かすみもさーやのパンたべたい！」

「香澄の奴、何やってんだ？」

「ギギモンの真似じゃないかな？」

だが香澄の必死のアピールは、ギギモンとのやり取りに集中する沙綾にはすっかり無視されてしまい、香澄は目に小さな涙を浮かべながら見ているのだった。

☆☆

「皆、今日は有り難う！」

「おいおたえ。そろそろ帰……」嫌だ！ ピョンモンを花園ランドに連れて行くって決めたもん！」子供かお前は！」

「……っ、疲れた……」

「ワームモン……お疲れ様」

「さーや！ やくそくだよ！ さーや！」

「分かっているよ、ギギモン」

「うう……さーや、何か冷たい……」

「よしよし香澄ちゃん」

「うわーん！ りみりーん！」

その後終了時間を迎えたポピパの面々はそれぞれ色んな反応を見せながら、『CIRCLE』を後にしたのだった。

☆☆

その夜、沙綾は家の自室でギギモンとの約束の件について考えていた。

「さて……どんなパンにしようかな？」

ギギモンの性格的に『ベーカリー』の自家製パンなら種類は気にしない様子であるけど、食べ物を作る立場である以上、出来ればギギモンにただ『食べて貰う』だけでなく、『喜んで貰いたい』と言う思いが沙綾を突き動かす要因になっていると同時にどんなパンをプレゼントするか悩ませる要因にもなってしまうっていた。

「ん？ 待って……若しかしてこれならイケるかも。 ……よし、こうなったら『当たって砕けろ』だね」

やがてアイディアを思い付いた沙綾は即座に自身のノートにレシピ案を書き出していくのであった。

☆☆

「沙綾ちゃん、その袋は？」

「これ？ これはギギモンへのプレゼント。 私なりに精一杯考えて作ったんだ」

「ほほう。 袋越しからでも良い匂いが漂ってきますなあ」

「はわわ……」

それから数日が経って『CIRCLE』に向かう道中、りみの問い掛けに沙綾が答える。

今日は香澄と有咲が私用、たえがバイトと言う事もあって、沙綾とりみ、そして事情を聞いて興味を抱いて付いて来たモカとロツクの4人のみで『CIRCLE』に行く事になったのだった。

「モカ……一応言っておくけど、これはモカの物じゃないから、食べよう何て考えないでね」

「いえす、あいあむ」

漫才の様なやり取りをしながら数分後に、沙綾達は『CIRCLE』に辿り着いた。

「こんに……」「さーや〜!!」……キヤー！」

『CIRCLE』に入って声を掛けようとした沙綾に『真っ赤な何か』がぶつかって来た。

「もう誰なの……」

視線を向けた沙綾の言葉が止まる。

「さーやく、会いたかったよ」

彼女の目の前には、先程ぶつかって来た物の正体であると思われる真つ赤な体色の『恐竜の子供』と言う表現がしつくりくる様な生物がいた。

「……本物の」

「あ、あなた一体……」

「さーや、忘れちゃったの？ 昨日膝枕してくれたりパンの事約束してくれたのに……」

赤い恐竜の語る言葉を聞いてピンときた沙綾は、恐る恐る問い掛ける。

「あなた若しかして……ギギモン？」

「うん！ 今はギルモンだよ！」

ギルモンは沙綾の問い掛けに『正解』だと答える様に、嬉しそうに答える。

「大丈夫沙綾ちゃん!？」

其処へタイミング良くまりなが現れ、ギルモンも沙綾から離れる。

「まりなさん……」

「本当にごめんね……。 ギルモン、いきなり走つちやダメだよ」

「ごめんなさい……」

「あのまりなさん……これって……」

沙綾に尋ねられてまりなが語り出した話によると、彼女が何時も通り『CIRCLE』に着いて早々、何やら黒い影が見えたので気になって見るとその正体がギルモンで、本人曰わく『朝起きたら今の姿に

なっていた』との事だった。

「本当に最初見た時は驚いたわよ……。」

「そ、そうですか……。」

「? さーや、それ何」

「あつ、そっか。今準備するね」

そう言つて沙綾とギルモン達は、『CIRCLE』内の客席のテーブルに移動した。

「はい。これはギルモンへのプレゼントだよ」

沙綾は持っていた紙袋を開け、中の物を取り出してギルモンに与えた。

「わああ……。このパン、ギルモンの顔している……。」

彼女がギルモンにプレゼントした物……それは、ギルモンの顔そっくりに焼かれたパンであった。

「名付けて『ギルモンパン』! さあ、食べて見て」

「うん!」

沙綾に促され、ギルモンは『ギルモンパン』を食べた。

「! 美味しい! さーや! ギルモンパン美味しいよ!」

「良かった。味とか特に何も言われなかったから、一応シンプルに甘めにしといたんだけど、そう言つて貰えたと作った甲斐があるよ」

沙綾はギルモンの喜ぶ姿を優しい眼差しで見付め、りみ達もそれを

微笑ましい様子で見ている。

ドゴオオオ——ン!!

「ヴオ、オ、オ、オ——!!」

「ピャアアア——ン!!」

突然衝撃音と大きな叫び声と悲鳴が、『CIRCLE』に響く。

「ヒイイ——!!」

「今のは!?!」

「きつと外であの子達に何かあったんだわ!」

異変に気付いたあまりながら外に駆け出したのを見て、沙綾達も彼女の後を追って行った。

☆☆

「ヴヴヴヴ……!!」

「ピャアアアン!」

「ピイイイ……」

悲鳴の間こえた現場に沙綾達が駆け付けると、其処には毒々しい程の紫色の肉体をしたライオンの様な見た目の獣人とそれに怯える幼年期デジモン達の姿があった。

「あれは……マッドレオモン!」

「マッドレオモン!？」

「かなり凶暴なデジモンよ！ 皆逃げて！」

まりなは大声で呼び掛けるが、幼年期デジモン達は恐怖のあまりに動く事が出来ないでいた。

「ヴオ、オ、オ、……」

やがてマッドレオモンは低い唸り声と共に、右腕を大きく振り上げようとした。

「！！ピイイイイイイ!!！！」

幼年期デジモンは目を瞑る。

「ファイヤーボール！」

その時、マッドレオモンの顔に小さな火球が命中する。

「ヴヴウ………?」

「今のつて……」

マッドレオモンと沙綾達が火球が飛んで来た方向へ視線を向けると其処には鋭い視線でマッドレオモンを睨み付けるギルモンの姿があった。

「ギルモン……」

「ヴオ、オ、オ、オ、———!!」

「グルオオオオオ———!」

そしてマツドレオモンとギルモンはそのまま戦闘を始める。

マツドレオモンの鋭い爪による攻撃を回避したギルモンは、逆に口から再び火球を吐き出してマツドレオモンに攻撃をする。

「ヴオ、オ、オ、オ！」

「グウウ……！」

火球はマツドレオモンの顔に当たるが、マツドレオモンはまるで平然とした様子で右腕に殴りかかり、直撃を受けたギルモンは大きく吹っ飛ばされた。

「グウウ……グアツ！」

「ギルモン！」

するとマツドレオモンは右腕でギルモンの首を掴み上げ、そのままゆっくりと締め上げる。

「グツ……グウウ」

「ど、どうしよう……!? このままギルモンが……！」

「……止めてえええええええっ!!」

「!?」

りみ達が慌てる中、沙綾はマツドレオモンの方へ駆けて行く。

「止めてよ！ ギルモンが苦しんでいるじゃない！ それに此処にはまだ小さいデジモン達だっているんだよ！ 如何してこんな酷い事が平気で出来るの!？」

「さ……さーや」

「ヴオ、オ……！」

しかしマッドレオモンには目障りな存在に思ったのか、今度は空いた右腕の方を彼女に振り上げ様とした。

「沙綾ちゃん!」

「ギギ……ロックブレイカー!」

沙綾の危機を目にしたギルモンは、有りつ丈の力を強靱な前爪に込め、自身を拘束しているマッドレオモンの左腕の掌に強力な一撃を浴びせる。

「ヴオッ!?」

突然の不意打ちに苦痛な様子を見せたマッドレオモンは思わず左腕を離し、今度は右足でギルモンを思い切り蹴り飛ばした。

「ウワアアア……!」

「ギルモン!」

沙綾は慌ててギルモンの下に駆け寄った。

「大丈夫ギルモン!」

「う……ううん」

幸い命に別状は無い事を知って、沙綾は少し安心する。

「ヴヴヴ……!」

振り返ると、マッドレオモンが先程よりも殺気立った様子で此方を

見ているのが見えた。

「さーや、逃げて。 ギルモン……戦わないと」

「待って！ アイツにはギルモンの攻撃が全く効かなかったんだよ！
それに……若しもギルモンに何かあったら……」

沙綾の脳裏に過ったのは、中学時代の苦い記憶。

嘗て所属していたバンドのファーストライブの日に母親が倒れて
しまい、結局彼女はライブに出られなくなってしまった。

彼女の目には今のギルモンの姿が、あの時の自分の母の姿と重なっ
て見えていた。

「さーや……有り難う。 でもギルモン逃げるの出来ない。 さーや
の悲しい気持ち分かるよ。 ……でもこのまま逃げたら、今度はさー
や達が傷付いちゃう。 ギルモンそんなの嫌だ。 だからギルモン
戦う。 さーやや皆を守る為に」

「ギルモン……」

ギルモンの言葉に沙綾は目を見開いた様子を見せる。

「ヴヴヴ……！」

「ギルル……！」

そして沙綾は意を決した様子でギルモンの隣に立つ。

「だったら……私にも手伝わせて」

「さーや？」

「まだ知り合って短いけれど、私もギルモンともっと一緒にいたい！
だから……ギルモンの隣に居させて！」

「……うん！」

「ヴオ、オ、オ、オ、オ、ー!!」

それと同時に、マツドレオモンが沙綾とギルモンに向かって飛びかかって行った。

「『沙綾（ちゃん）（先輩！）』」

その時双方の間に眩い光が現れ、マツドレオモンは思わず両腕で目を覆って、動きを止める。

「これって……」

沙綾が目の中の光を掴むと、光はクロムイエローの縁取りのデイーアークへと変わった。

「あれって香澄ちゃん達が持っていたのと同じ……」

「そ、それじゃあ……」

「パートナー成立……だね」

「きつと、沙綾ちゃんの想いがデジヴァイスと言う形で具現化したのね……」

その様子を見たりみ達はそれぞれ言葉を零す。

「沙綾……」

「ギルモン……」

沙綾はギルモンに対して視線を向け、一拍置いて語り掛ける。

「私は……香澄みたいにかリスマ的な物を持っている訳でも無いし、有咲並に頭が良い訳でも無い。」

……2人や他の人と比べたら、まだまだ遠く及ばない所はあるけど……貴方を大切に思う気持ちは誰にも負けないつもりだよ。こんな私を信じてくれる?」

「ギルモン……難しい事良く分からない。でも……沙綾と一緒にいたい!」

沙綾の問い掛けに、ギルモンは自身の真っ直ぐな想いをぶつける。

「ヴオ、オ、オ、オ、オ、オ、オ!!」

沙綾とギルモンは視線をマッドレオモンの方へ向ける。

「マッドレオモン。成熟期。アンデッド型。ウイルス種類。

必殺技

は『獣王墮拳』と『腐毒爪』……」

沙綾は自身のディーアークでマッドレオモンの情報を調べて読み上げた。

「ヴオ、オ、!!」

「行こう! ギルモン!」

「うん!」

デューアークから放たれた光が、ギルモンを包み込んだ。

「ギルモン進化！」

光に包まれたギルモンの姿が変わっていく。

赤い体はより一層と大きくなり、両肘には鋭い刃が生えてくる。

「グラウモン!!」

やがて光が収まってくると、其処には頭部に二本の角を生やした全身真っ赤な恐竜の姿があった。

「これが……ギルモンの進化……」

「ヴオ、オ、オ、オー!!」

グラウモンの姿を見たマツドレオモンは叫び声と共に襲い掛かり、グラウモンの方もそれを全力で受け止めた。

「グルルルル……!」

「グオ、オ、オ、オ……!」

両者の拮抗は尚も続き、沙綾やりみ達もそれを固唾を飲んで見ている。

「負けないで！ グラウモン！」

沙綾の必死の思いが込められた叫び声が辺りに響く。

「グ……オオオオ——!!」
「ヴウ!? ヴオ、オ、!!」

沙綾の声を聞いたグラウモンは更に力を込め、そのままマッドレオモンを押し返した。

「グウウ……いー！ グオ、オ、オ、!!」

怒り狂ったマッドレオモンは、力を込めた右腕から獅子の顔の形をした『気』を放つ。

「おお……ライオンが出て来たね〜」

「いけない！ マッドレオモンの必殺技、『獣王墮拳』だわ！」

「こ、このままじゃ沙綾先輩達が……」

「沙綾ちゃん！ グ라우モン！」

りみ達が慌てる中、沙綾とグラウモンは慌てず静かな佇まいで、此方に向かって来る『獣王墮拳』を見付ける。

「グラウモン……」

沙綾は視線をグラウモンに向ける。

グラウモンも視線を沙綾に向けて、静かに頷く。

「……分かった。 私はグラウモンを信じるよ」

そして視線を再び『獣王墮拳』の方に向け、口の中にエネルギーを溜めていく。

「行っけ——!!」

沙綾の叫び声を合図に、グラウモンは溜めていたエネルギーを強力な火炎に変えて、爆音と共に吐き出した。

「エキゾーストフレイム!!」

グラウモンの吐き出した火炎はそのまま『獣王墮拳』と衝突するも、直ぐに押し返して、そのままマッドレオモンの方へと一直線に向かつて行った。

「ヴオツ!? ヴオ、オ、オ、オ——!!」

驚愕で動きが止まったマッドレオモンはそのまま火炎の直撃を受け、苦痛の叫び声と共にデータの粒子となって消えていった。

マッドレオモンが完全に消滅したのを見届けると同時に、グラウモンもギルモンの姿へ退化し、そのまま座り込んだ。

「ギルモン! 大丈夫?」

沙綾はギルモンの下へ駆け寄り、ギルモンの無事を確かめる。

「沙綾……」

「何処か痛い?」

「……減った」

「へ?」

「お腹……減った……」

「は……ははは」

ギルモンの言葉に沙綾は肩の力が抜け、苦笑いを浮かべていた。

「沙綾ちゃん！」

其処へりみ達が駆け寄って来る。

「大丈夫!？」

「うん。私もギルモンも何とか平気だよ」

「もうっ！心配したんだらね！」

「御免ねりみりん……」

そう言つて沙綾は、泣いてるりみを慰める。

「沙綾ちゃん……」

「まりなさん。あの子達は？」

「大丈夫。皆無事よ」

「良かったあ……」

沙綾は幼年期デジモン達の無事を聞き、安堵の息を零す。

その後沙綾達はまりなと共に、幼年期デジモン達のケアを行うのであった。

☆☆

「皆——！今日のライブ、本当に有り難う！」

数日後、香澄の声と共に観客達の歓声が『CIRCLE』の会場内

に湧き上がる。

「有っ咲〜!」

「だーっ! 一々抱きつくんじゃねー!!」

「有咲……ツンデレ?」

「誰が『ツンデレ』だー!!」

控え室に戻って来て早々、香澄が有咲に抱き付き、有咲はそれを全力で拒否しようとする傍らでたえの言葉にツツコミを入れている。

「今日のライブ、とても大成功だったね。 沙綾ちゃん」

「うん。 そうだね」

『さーや! さーや!』

「ギルモン、良い子にしてた?」

『うん。 ギルモン、ちゃんと待ってたし、さーやもドラム凄かったよ!』

「ふふ……有り難う。 ギルモン」

沙綾はデジヴァイスの中のギルモンに優しく語り掛ける。

「沙綾ちゃん、何だかギルモンのお母さんみたいだね……」

「ええっ? そ、そうかな?」

「確かに……雰囲気的にそう見えるかも」

有咲のデジヴァイスの中にいるワームモンも思い当たる部分があったのか、りみの発言に同意の姿勢を見せる。

「それなら私も……さーやママ〜!」

「ひゃあ!」

其処へ香澄が沙綾に抱き付いて来る。

「香々澄々！」

「だって、沙綾はポピパの一員だから、『ポピパのお母さん』って事だもんー！」

「あのなあ……」

「はいはい。 香澄、お疲れ様」

沙綾はそう言って香澄の頭を優しく撫でる。

『あく、ズルい！ ギルモンも〜！』

すると沙綾のデイーアークからギルモンが勝手に飛び出して来て、沙綾に抱き付く。

「ちよつ……ちよつと2人共……お、重い……」

「オイイ——！ お前から沙綾からさっさと離れろ——！」

「有咲……お父さんだ……」

「誰が『お父さん』だー！！」

有咲のツツコミが控え室内に響いた。

(ギルモン……私は戦うよ。 あなたと一緒に大切な人達を守る為に)

沙綾は優しさと決意の籠もった視線を香澄と共に抱き付くギルモンに向けながら、内心で語り掛けた。

☆☆

「それじゃあ、私はこれで。 お疲れ様でした」

レイヤは今回のライブでサポートしたバンドの面々に労いの言葉を掛けて、スタジオを後にする。

「ふう……」

暫く歩いて1人になったタイミングで緊張が解け、一息を吐く。

「ん……？」

ふとレイヤの視線が一点に集中する。

その先にあつた建物は、以前レイヤも訪れた事があるライブハウス。

其処から出て来たのは、ライブを終えたPoppin' Partyの面々。

レイヤの視線は、その中の1人に向けられていた。

「花ちゃん……」

メンバーの中で一際目立つ背の高い黒い長髪の少女。

レイヤにとって彼女——花園たえは、今の彼女を形作る切欠となつた存在。

「やっと……『あの時の約束』を果たせる時が来た……」

そしてレイヤはジーンズのポケットに手を入れ、其処から自身の所持している物——黒いボディとヴェネチアンレッドの縁取りのデューアークを取り出して見つめる。

「待っててね……花ちゃん」

そう小さく呟くと、レイヤはこっそりその場を去って行く。

その時、彼女の影がほんの一瞬だけ、翼の生えた異形の物と化す。

それを見ていたのは、夜空に輝く満月と小さな星々だけだった。

ドン15話 ちさとのみちもいっぽから

「私って……汚物みたいな女なのかしら？」

羽沢珈琲店。

今其処には酷く重苦しい様子の千聖と彩と花音、それを見守るつぐみとイヴとつくしの姿があった。

「ち、千聖ちゃん……どうしたの？」

『目が完全に死んでいるわよ……』

「……もう嫌アアアアアアアアアア!!」

「千聖ちゃん!？」

「お、落ちて着いて下さい!」

「ふええええ!」

すると千聖は珍しく場を弁えずに叫び出し、彩達はどうか千聖を落ち着かせ様とした。

「コホン……少し取り乱しちゃったわね……」

数分後、如何にか落ち着いた千聖は珈琲を一口飲んだ。

「あの……千聖先輩。若しかしてさっきの『汚物みたいな女』って台

詞と……関係があるんですか？」

「……その通りよ」

つぐみが先程の様子に至った原因に付いて問い掛けると、千聖は咳を切った様に語り出した。

『ウへへ……。ねえお姉ちゃん。俺、この世界に来て偶々見掛けた時から、お姉ちゃんへのファンになっちまった…。だから俺とデートしない?』

『イヤアアアアア——!!』

事の発端は彩がテイルモンをパートナーにした日の少し前に起きた『ヌメモンスターカー事件』が切欠だった。

『千聖ちゃん! オラのお嫁さんになってくれよ!』

『キヤアアアアアア——!』

『千聖ちゃん! オイラの愛、受け取ってくれ!』

『ヒイヒイヒイヒイ——!』

ゲレモン、スカモン……。それ以降千聖は何故か『汚物系デジモン』との遭遇が多くなってしまっているのが悩みの種となっていたのだ。た。

「それは……。災難ですね……」

「もう『災難』なんてレベルじゃないわ……。これは私の……。『沽券』的な問題よ!」

「『沽券』……。ですか?」

「だって……」

そう一言切ると、千聖は彩の方を見て叫ぶ。

「最近彩ちゃんや日菜ちゃんに、私のポテンシャルが奪われている感があるんだもん!」

「ええっ!?!」

『ポテンシャル?』

千聖のカミングアウトに彩は驚きの声を上げ、テイルモンはポカんとした様子を見せる。

「だって……彩ちゃんと日菜ちゃんは最近その……可愛さと格好良さが目立って来てる様に見えるのよ……」

「そ、そんな事無いよ！ 私何て今でも噛んじゃうし、歌詞も間違える事もあるから、千聖ちゃんにはまだまだ遠く及ばないよ！」

「……彩ちゃん。貴女の謙虚なその姿勢は確かに良い所よ……。でもね、今の私にとってはそれが……ちよつと苦しいの……」
「え……？」

千聖の言葉に彩は言葉を止めてしまう。

「……御免なさい。先に私の分だけ会計を御願ひするわ」

そう言つて千聖は自分の分の料金だけを払うと、そそくさと店を出て行つた。

「千聖ちゃん！」

彩の叫び声が虚しく店内に響いた。

☆☆

「はあく。ダメね。これから彩ちゃんとどんな顔で向き合えばいいのかしらっ…」

彩達と別れた後、気持ちが落ち着いた千聖の脳裏に、数日前の一件

が思い出される。

『白鷺い……テメエ、女優を舐めてんのか?』

数日前、新作ドラマの出演者の1人に選ばれた千聖はそのドラマの撮影中に監督から不意に問い詰められていた。

『そんな……! 私は全力で取り組んでいます!』

『ああ……。確かにテメエは全力で取り組んでいるよ。清楚な面

の演技の方(……)はな!』

『……如何言う意味ですか?』

『白鷺……今回のテメエの役はどんな感じのキャラだ?』

『……表向きは清楚な感じだけど、内面がド変態で暴走するとそつちの面が強く現れる少女です』

『……ちゃんと設定を覚えていたのと噛まずに言えたのは誉めてやろう。だがな、テメエは本気の変態の演技がまるで出来ちゃあいねえんだよ!!』

『なっ……!』

『白鷺、これはあくまで俺なりの考え方だが、『役者』って言うのはな、どんな役に対しても自身の全力を持って演じる物って思うんだよ。

例えばそれが、見ている連中から『頭可笑しい』だの『下品』だの『気持ち悪い』だの思われている役だとしてもな』

『……』

『白鷺。お前が以前インタビューで語ってた『尊敬する女優』と俺は、一緒に撮影で仕事した事があるが、お前の知る彼女は清楚なキャラばっかしか演じてこなかったか? 違うだろ。時には悪役や下品な感じ、変態役もやっていたが、それでも全力で演技に取り組んでいたぞ』

千聖は監督の言葉に何も言い返せず、ただ黙っている。

『はつきり言って、今のお前の変態的な演技からは、心まで『変態一色』に染まっているのが演技から感じられねえ。綺麗過ぎて逆に周囲がドン引きする様な物が感じられねえんだよ』

監督の言葉が千聖の心に、まるで矢の如く刺さりまくる。

『テメエの綺麗な感じの演技は確かに凄い。だが、時には箱の中の物を乱暴に扱う様な演技が周りに良い影響を与える事もあるんだぞ。取り敢えず今日はもう帰れ。これ以上撮影は時間の無駄だ』

そう言って監督は立ち上がって、その場を後にしたのだった。

☆☆

(『変態一色』って……どう表現すれば良いのよ)

千聖は悶々と悩み続けていた。

白鷺千聖と言う少女にとって、『黄色』と言う色は自身のイメージカラーでもある一方、コンプレックスの1つであった。

その切欠は子役時代の頃に遡る。

当時まだ小学生だった千聖は、戦隊物の特撮作品のサポート役の少女キャラの役で出演していた。

「そっかあ……千聖ちゃんも『黄色』何だあ……。じゃあ、同じイエロー同士頑張ろうな!」

共演者のイエロー役の役者からそう声を掛けられ、まだ幼く、芸能界の事も詳しく無かった千聖はただ純粹に撮影を頑張ろうとしていた。

しかし、いざ撮影が始まった途端、彼女のイエロー役の心象は180°変わってしまった。

イエロー役の彼は普段は好青年だったのが、いざ撮影が始まった途端、まるで設定した役のキャラが現実世界に飛び出したかの如く、見事なまでの変態的な演技を披露して見せたのだ。

同時の千聖はまだ、子役の経験が演技に慣れていたとは言え、まだ幼かった千聖は彼の変態的な演技に『凄い』よりも寧ろ『怖さ』の方が勝ってしまい、撮影中にも関わらず泣き出してしまったのである。

更に拍車を掛けたのが、イエロー役の設定である。

作中での彼はコミカルな性格であり、同時にメンバーの中でコメディリリーフ的な立ち位置でもあった為、大概作中で酷い目に遭うなどの損な役回りをさせられていた。

その後この彼は、この作品が切欠でブレイクし始め、今では『若手名バイプレイヤー』と認知される程、数多くの作品に出演する俳優となったのだが、それでも千聖にとって彼の変態的な演技と作中の立ち位置が、『自分も『変態』の仲間』『黄色は不憫』と言う印象を抱かせる一種のトラウマとなっており、それが彼女の『黄色』に対してのコンプレックスの要因でもあった。

その為千聖は、なるべく周りが自分にそんな変な印象を持たない様に徹底的なまでに努力をしたのである。

千聖自身、本音を言えば『『可愛さ』と『クール』な感じを合わせ持った女の子』をずっと維持したかった。

けどそれが綻びを見せる切欠が起きた。

それが彩と日菜のパートナーであるテイルモンとコロナモン達の存在であった。

そもそも千聖にとって2人の印象は、『同じパスパレの仲間』と言う物であった。

しかしパートナーデジモンと出会った&再開してからの彩と日菜の2人の姿が、千聖にとっては『隔たり』と『眩しさ』を感じる物に見えていた。

テイルモンやコロナモンと一緒にいる時の2人は、それ以前からパスパレにいた時には全く感じたり見た事が無かった雰囲気や表情を見せる事が多くなった。

『ねえ！ 最近パスパレの彩ちゃんと日菜ちゃん、何だか最近良い意味で変わった感じしない？』

『確かにそうだね。最初の頃は2人共ベクトルは違うけど、『コミカル』な印象があったけど、最近はそれぞれ『コミカルさ』に加えて『可愛さ』と『カッコ良さ』にも磨きが掛かった感じがあるよね〜！』

『俺さ、最近パスパレの日菜ちゃんにすげえハマってたんだよ』

『意外〜。お前この前までアイドルとかそこまで興味無さそうな感じだったけど？』

『確かにそう言う部分は今でも多少はあるけど、でも日菜ちゃんに関しては『別格』って言うか……時たま見せる『カッコ良さ』が良いって思わせるんだよね〜』

この前の休日、偶々馴染みのショッピングモールに行った先で聞いた他の客の会話は、千聖の心に突き刺さる所が、その中には千聖が到底許容出来ない物があった。

『なあ、最近思っただけだし、『面白さ満載』の千聖ちゃんって……有りじゃないか?』

『何だよ急に。お前あんなに千聖ちゃんの事推していたのに、浮気か?』

『違えよ! いや……何と言うか、千聖ちゃんって『クールな感じ』をメインに押し出しているじゃん? それも良いんだけど……偶には変わった感じも見たいなあって思ってた……』

『例えは?』

『ギャグ漫画並みにコミカルな千聖ちゃんとか! 普段のイメージのギャップも相まって、個人的に有りかなくなって思うんだよ』

(私は……『笑い物』になる為に、この世界に入ったんじゃない!)

勿論、彼がそんな気持ちで発言したのでは無いのは分かる。

だが千聖にとっては、今まで築いてきた『白鷺千聖』のイメージを根本的な面から否定された感じがあって、堪らない程嫌だった。

そして千聖は、逃げる様に早足でその場を去って行った。

☆☆

「あれ、千聖ちゃん?」

突然声を掛けられたので振り向くと、其処には日菜とコロナモンの

姿があつた。

「日菜ちゃん……コロナモン……」

「千聖こそ如何したんだよ、そんな表情して？」

「……そう言う2人は何をしているの？」

「んくとねく……今日は御姉ちゃんとルナモンがRoseliaの練習でいないから、何か楽しい事探してコロナモンとお散歩！」

「んでその最中に、千聖と出会ったって訳だ！」

「そうなのね……」

「……千聖ちゃん、何か元気無いね」

「そう……かしら？」

「ああ。何か何時も違って雰囲気か淀……よど……？」

「『淀んでいる』？」

「そう！ そんな感じの顔しているぜ」

「あなた達にもそう見えるのね……」

そんな千聖の様子を見た日菜は『んくつ』と何か考え込み、そして何かを思い付いた様にキラキラした様子を見せた。

「ねえ！ 千聖ちゃんって、この後何にも無いよね？」

「え……ええ。そうだけど……」

「じゃあ其処の広場でお話しよ！」

「ええ……？」

「そうだな！ 俺もパスパレ関連でしか千聖と話をした事が無かったから、もつと話をしたいぜ！」

「と言う訳で千聖ちゃん！ レッツゴー！」

「ちよ……ちよつと日菜ちゃん!？」

千聖の言葉を見無視して日菜は彼女の手を掴んで、コロナモンと共に駆け出した。

☆☆

「はい千聖ちゃん！」

「あ、有り難う……」

広場に付いた日菜は近くの自販機で買った紅茶の入った小さいペットボトルを千聖に渡し、千聖は渡されたボトルのキャップを開けて一口飲む。

「落ち着いたか？」

「ええ……一応は……」

「良い天気だよね。御姉ちゃんもお外で一緒に『るんっ♪』ってすれば良いのに……」

千聖は日菜の『ある物』の事を見て、不意に問い掛ける。

「日菜ちゃん。日菜ちゃんのデジヴァイスって……」

「ああ、これね」

そうやって日菜はポケットから、自身の持つライトイエローの縁取りのデヴァイスを取り出した。

「何と言うか……。意外な配色ね」

日菜のデヴァイスを見た千聖は、そう言葉を零す。

千聖の中の日菜のイメージは主に、『パスパレのブルー担当』と『姉の紗夜が好きな女の子』と言うのが大きかった。

その為、不謹慎ながらディーアークの色と氷川日菜のイメージカラーが全く噛み合って無い様な印象を抱いてしまっていた。

「ええ、そう?」

「だって日菜ちゃんって、青系のイメージがあるから……」

「私が青系かあ……」

「確かに出会った頃の日菜何か、デジヴァイスの色の事でワガママや文句言ってた事も多少あったからなあ……」

千聖の発言にコロナモンも思い当たる節があったか、過去を振り返る発言をする。

「まあ、そう言う事も少しはあったけど、今は私は『黄色』って大好きだよー!」

日菜の表情からはとても嘘偽りは無く、本音で言っていると千聖は感じられた。

「……日菜ちゃん。『黄色』って、不憫とか思った事は無いの?」

「何で?」

「ほら……『黄色』って、グループとかだと、結構『コメディリリーフ』って言うか……『そんな役回り』ばっかさせられるとか、感じない?」

千聖の問いに日菜は『んゝつ』と考えた後、はつきり答えた。

「アタシはそう考えた事は無いかな。寧ろ逆に『凄い』と思うよ」

「如何してそう思うの?」

「だって『黄色』ってさ、『縛りが無くて、何でも自由になれる』んだもん」

「『何でもなれる』……?」

そう言つて、日菜は空にある太陽を指差す。

「千聖ちゃん。太陽つて何色だと思う?」

「……バカにしているの? 『赤』に決まっているじゃない」

「確かに千聖ちゃんの答えも間違つてはいないけど……じゃあ1000人の人に同じ事を聞いたら、1000人全員が『赤』つて答えると思う?」

「……それは……」

千聖は言葉を濁す。

『太陽は赤い』と言うのは、飽くまで千聖自身の考えであつて、1000%の正解では無い。

若しかしたら、同じ様に『赤』と答える人もいれば、『金』や『黄色』はたまたま全く違う考え方をする人だつているかもしれないのだ。

「それにね……」

「おっ」

日菜はコロナモンを抱き上げて、頭を撫でる。

「アタシの名前の漢字つて、お日様の『日』が入っているでしょ? それにコロナモンだつて『太陽』だし、そう意味では、『黄色』つて『アタシ達2人のパーソナルカラー』つて思うんだ!」

『日菜ちゃんとコロナモンのパーソナルカラー』……」

「後黄色には、『サンライトイエロー(山吹色)』と『ムーンライトイエロー』つて言うのがあつてね、前者が『私とコロナモン』なら、後者は『御姉ちゃんとルナモン』を表しているつて事じゃん! そう考えたら、『黄色』つて『私と御姉ちゃんのパーソナルカラー』つて感じがあつて、好きになつたんだ!」

日菜の無邪気な様子から語られる言葉は、千聖にとって考えさせられる物に思えた。

「私ね、千聖ちゃんの『黄色』って千聖ちゃんらしさのある色に思うの」「私らしい?」

「千聖ちゃんって女優さんでしょ? 『黄色』だって、千聖ちゃんが言った『コメディリリーフ』もあれば、『可愛い』や『力強い』感じもあって、何だか役者さんみたいだね? 千聖ちゃんは如何して『この世界』に入ろうと思ったの?」

千聖の脳裏に幼い頃の事が過る。

小さい頃、偶々見たテレビに映っていた女優の演技。

彼女の演技を見た千聖は衝撃を受けると同時に思った。

『自分もこの人みたいになりたい』

その後は、両親に頼んで劇団に入り子役としてデビューをした。

初めて演じた役は、ほんの短い台詞しか無い脇役だったけど、それでも千聖にとっては『憧れの女優さんと同じ道を歩いている』と言う気持ちが強くて、幼なじみである薫にも自慢する程嬉しかった。

でも成長するに連れ、幼少期のトラウマに加え、芸能界の黒い一面を知ってしまい、何時しかそんな『演じる事の楽しさ』を忘れ、『あんな下劣なイメージ何て付けられたく無い』と言う思いで演技をしていた。

冷静に考えれば、普通そう考えるなら、その時点で『芸能界を引退する』と言う方法があった筈。

でもそれをしなかったのは、千聖自身の心の中に『女優への愛着』が残っていたからだ。と、日菜とコロナモンとの会話で気付かされた。

同時に千聖はあの監督が言った言葉の意味を悟っていた。

(……監督は私に、『演じる役を全力で楽しめ』って言いたかったのね)

『清楚な面のみで、『変態一色』な感じが全然無い』と言う言い方も、監督自身が千聖が役に全く成りききれていない事を見抜いた上での発言だったのだと、気付かされる。

「有り難う日菜ちゃん、コロナモン」

「へっ？」

「何だよ急に？」

「ううん。何でも無いわ」

千聖は微笑みを浮かべるだけだった。

その時、突然日菜達の周りに火花と煙が散る。

「キヤア！」

「千聖ちゃん、大丈夫!？」

「日菜！ あれを！」

コロナモンの視線の先を見ると、其処には雀蜂を機械化させた様な

「大丈夫コロナモン!？」

「な……何とか……な。あのまま……突っ込んでいたら……正直ヤバかったぜ……」

幸いダメージを受けてはいたが、身に纏った炎がレーザーの勢いを相殺していた為、致命傷を避けたコロナモンは息も絶え絶えになりながらも、無事な反応を見せ、日菜達は安堵する。

「ジジジジ……!」

だが直ぐに相手の方を振り向くと、其処には余裕な様で此方を見ている雀蜂の異形の姿があった。

(さて……如何しよっかな? この様子じゃ、コロナモンを進化させるのはリスクが高いし……せめて千聖ちゃんだけでも安全な所へ逃がさないと……!)

日菜は脳内で考える。

だが相手は此方を待たずに、突撃して来て、日菜達は咄嗟に身構える。

「ブシドーーーーー!!」

その時、雀蜂の異形の方に目掛けて何かが飛んできた。

「ネコパンチ!」

そして飛んできた何かは雀蜂の異形の顔を思い切り殴り飛ばし、相
手は横へ吹っ飛ばされた。

「今の……」千聖ちゃん!! 日菜ちゃん!!」

声の方を振り向くと、其処には彩とイヴ、花音の3人が此方に駆け
寄って来た。

「彩ちゃん! イヴちゃん!」

「ま……間に合った……」

「怪我は有りませんか?」

「何とかね……」

「コロナモンは大丈夫?」

「当たたり前だ! ……アタツ!」

「もう……無理しちやだめじゃない」

コロナモンの方も先程来た黒い影の正体であるテイルモンに呆れ
た様子で接しられる。

「3人共、如何して此処へ?」

「あの後、私と花音ちゃんも心配になって、つぐみちゃんに頼まれて来
たイヴちゃんと3人一緒に千聖ちゃんを探していたの……」

「そしたら凄い音が聞こえたから此処まで来たら、さっきの大きな雀
蜂が千聖ちゃん達の方へ突進して来るのが見えたんだ……」

そして状況を察したテイルモンが3人の中で身体能力が高いイヴ
に自身を相手の方へ思い切り投げる様に指示をして、了解したイヴが
砲丸投げの要領でテイルモンを投げ付け、後はテイルモンが相手に強
烈な一撃をお見舞いして今に至る訳であった。

「千聖ちゃん……あのね「御免なさい!」……え?」

千聖の突然の謝罪に彩は困惑の様子を見せた。

「私ね、自己中な思いから、彩ちゃんや日菜ちゃんの『成長する姿』に……少し『嫉妬』してた。……そして同時に怖かったの。周りの彩ちゃんや日菜の評価と自身を比べている内に、『自分のイメージが変わってしまう』って思いが強くなって……それで……」

その時、不意に千聖は温もりを感じる。

視線を向けると、彩が自分を抱き締めている事に気付いた。

「御免ね。私……千聖ちゃんがそんなに悩んでいるのに、全然知らなかった……」

「彩ちゃん……」

「でもこれだけは信じて。私『丸山彩』にとって『白鷺千聖』ちゃん
は、Pastel*Palettesの大切な仲間であり、同時に最も尊敬する女の子です」

彩の言葉に千聖は大きく目を見開き、視線を向けると、其処には穏やかな眼差しを向ける彩の姿がいた。

「……私、怒ると怖いわよ」

「知ってる。でも、それは私の事を思つての事だよね」

「……絵を描く事と電車の乗り換えが苦手なのよ」

「大丈夫。私もダンスや歌、トーク何かまだまだ苦手な面があるから」

「……納豆だって苦手なのよ」

「私もたこが苦手だから、お互い様だよ」

「……本当にこんな私なんかでいいの？」

「うん。どんな千聖ちゃんだって受け入れるよ。だって、それほ

ど千聖ちゃんの事が大好きなんだもん」

「……やっぱり彩ちゃんには敵わないわね」

そう言って微笑む千聖の表情は先程と違い、晴れやかな物だった。

「ジジジジジ!!」

突然激しい唸り声が響き、その方向に視線を向けると、先程の雀蜂の異形が敵意の籠った視線を向けていた。

「ワस्पモン。 成熟期。 サイボーグ型。 ウイルス種。 必殺技は『ターボステインガー』と『ベアバスター』」

千聖を自身の後ろに移し、彩は自身のデイーアークで相手の情報を調べた後、テイルモンと共にワस्पモンに相対する。

「ジジジ!!」

「テイルモン!!」

「ええ!!」

その時、彩のデイーアークに眩い桃色の光が放たれ、テイルモンを包み込んだ。

— DERIVATION EVOLUTION

「テイルモン進化!!」

光に包まれたティルモンの姿が変わっていく。

背中に巨大な白い翼が生え、前足首には宝石の装飾が施された鎧が身に付けられ、体も一層と大きくなっていく。

やがて光が収まると、其処には白い翼を生やした女性のスフィングスのような姿をしたデジモンがいた。

「ネフェルティモン!!」

「ティルモンが……」

「進化した……」

「大丈夫、2人共? 怖かったかしら?」

「……そんな事無いよ」

「ええ。 とつても綺麗よ」

「ネフェルティモン。 アーマー体。 聖獣型。 必殺技は『カースオブクイーン』と『ロゼッタストーン』」

「ジジジ!!」

「下がって2人共!! カースオブクイーン!!」

ネフェルティモンの姿に脅威と感じたワस्पモンは下半身の大口径のレーザー砲からレーザー光線を放ち、それに気づいたネフェルティモンは彩と千聖を下がらせて、額の飾りから赤い光線を放って相殺する。

「ジジジ……!!」

「逃がさないわ!!」

するとワस्पモンは距離を取る為に飛行し、ネフェルティモンもそれを追って飛行する。

「ジジ!!」

「ロゼッタストーン!!」

ワспモンは再びレーザー光線を放ち、ネフェルティモンも古代碑文の巨石を召喚して放って相殺する。

「如何やら……威力は互角みたいですね……」

「ふええ……でもこれじゃあ、決着が付かないよお……」

「せめてアイツのあのレーザー砲さえ封じりやあ……」

2体の戦いを観戦してたイヴと花音とコロナモンが見たままの様子を語る。

(レーザー砲を封じる……)

千聖は周りを見渡し、『ある物』に注目する。

それは、先程の攻撃で粉々に砕けた巨石の残骸だった。

(あれなら……!)

「千聖ちゃん!!」

そして千聖は巨石の残骸の下へ駆け寄り、その中のかなり大きめの残骸を持つとするが、千聖自身とほぼ同じ位の大きさもある為、非力な彼女一人の力では、到底持ち上げるのは不可能であった。

(御願……! 動いて!)

「千聖ちゃん!! 私も手伝うよ!!」

「彩ちゃん……」

「困っているなら、私も手伝うよ……」

「有難う……」

「じゃあ行くよ……!」

「セーの!!」

2人は全身の力を込めて持ち上げる。

「アヤさん!? チサトさん!？」

「行くよ!!」

「ええ!!」

「そおく……れ!!」

2人は其処から一気にワस्पモンへ向けて巨石の残骸を投げ付けた。

「ジジ?!」

ワस्पモンも突然の残骸に動揺して動きが鈍ってしまった事もあって、残骸の直撃を受けた事で発生したレーザー砲のエネルギーの爆発に巻き込まれる。

「ジ……ジ……ジ……!」

爆発と煙が収まると、其処には全身がボロボロになったワस्पモンの姿があった。

特に下半身のレーザー砲に関しては損傷が酷く、使い物にならない状態なのは誰の目にも明らかだった。

「彩ちゃん! 今だよ!」

「ネフェルティモン!!」

「スカーレットストーム!!」

彩の叫びを聞いたネフェルティモンは、額の飾りからの赤い光線と

古代碑文の巨石を召喚しての一斉攻撃をワСПモンにお見舞いする。

「ジ…ジジ…ジ…ジ!!」

其の仮全身に一斉攻撃を浴びたワСПモンは、モチーフの如く『蜂の巣』となった後に爆発し、そのまま消滅したのだった。

「やったね千聖ちゃん……」

「ええ……」

安堵した2人は其の仮崩れ落ちた。

「彩!! 千聖!!」

其処へ進化が解けたテイルモンが駆け寄る。

「2人共……こんなに泥だらけになる程無茶しちやって……でも有難う」

テイルモンは疲れて気を失った2人に優しくお礼を述べたのだった。

☆☆

『フフフ……直ぐ秀ぐ(まくほぐ)ちやぐん♡……私の可愛い可愛い直ぐ秀ちゃん♡……貴女は如何してこんなに、魅力的なのかしらあゝ?』

数日後。

その日、日菜の提案でお泊まり会をしていたパスパレの5人は千聖が出演したドラマの最新話の初回放送を、千聖の家の大広間のテレビで鑑賞していた。

『真秀ちゃんはねえ……私の……母親になってくれるかもしれない女の子なのよ……!』

「あわわわ……千聖さんが……!」

「あはは! 麻弥ちゃん、もうこれで三回も同じ台詞を言っているよ!」

「でも、これ全国で放送されてんだよな……」

(チサトさん……映像越しからでも、凄いオーラを感じます)

「も、もう……皆つたら……」

「だ、大丈夫! 可愛くても変態さんでも私は千聖ちゃんの事、大好きだから!」

「彩ちゃん……それ、恋人を誉めているの? それとも貶しているの?」

やがてドラマのクライマックスが近付く。

『貴女死にたいんだって? さあて、害虫掃除の御時間よ♡』

「千聖の演じる千坂(ちさか)と言う少女、画面越しからでも表情の圧を感じるわ……」

「……これが所謂『千坂スマイル』の誕生だね……」

(日菜ちゃん……後でお説教が必要かしらね?)

(日菜……生きろよ)

やがてドラマが終わり、メンバー達はそれぞれ思い思いの感想を語り合う。

「圧巻でした……」

「いやあ何と言いますか……今までの千聖さんの演技とは、180・異なった感じの演技でしたね……」

「個人的に、絶対今回のドラマの『目玉』になりそうなヤツだと思っただけ……。」

「うんうん！ 結構ハマリ役に見えたり、特撮とかだったら、絶対に『悪女』や『悪の女戦士』とか形で出演しそうだよね！」

その一方で当の本人である千聖は、魂が抜けた様子で顔を逸らしていた。

『大丈夫、千聖？』

「もうお嫁に行けない……」

「ち、千聖ちゃん！ その時は私が責任持つて、千聖ちゃんを貰って行くから、元気出して！」

彩の言葉に、千聖ちゃんは顔を真っ赤にして彼女の方を向いた。

「……本当に？／＼」

「うん！ だって私は千聖ちゃんの事がそれ程までに好き何だもん！」

「……彩ちゃん。 気持ちは嬉しいんだけど……／＼」

「向こうの方を見て」

「へ？」

テイルモンの言われた方へ視線を向けると、其処には此方にニヤニヤした眼差しを向ける日菜とコロナモン、キラキラした眼差しのイヴ、苦笑いの麻弥の姿があった。

「あわわわわ……／＼」

「いやあ、彩ちゃん大胆だね♡」

「俺、彩の事見直したぜ……」

「天晴れです！ アヤさん！」

「／／／／」

緊張と恥ずかしさから、彩は表情を真っ赤にして倒れた。

「彩（ちゃん）!?!」

千聖とテイルモンは慌てて彩へ駆け寄った。

「彩ちゃーん!! 御願ひ、気をしっかり!!」

「千聖さん落ち着いて下さいッス!!」

麻弥が必死に千聖を抑える。

その後5人はそのまま就寝するしたが、翌日千聖が目を覚ますと何故か隣の布団にいた彩が彼女の隣で一緒に寝ている状態になっていて、それを先に早起きして目撃されたイヴと彼女経由で知った日菜とコロナモンと麻弥とテイルモンから、温かい視線を彩と共に送られる事になったのであった。

第16話 完全襲来2020

とある場所。

其処に置かれた王座に座りながら、チュチュは目を閉じて思考していたが、やがて目を開けて一言声を上げる。

「ブギーモン」

「ハッ。如何致しましたか?」

チュチュの言葉を聞いたブギーモンが彼女の下に現れ、問い掛ける。

「……完全体の力の解禁をするわ」

「!……はい。了解しました」

すると同時にブギーモンの体が禍々しい光の渦に包まれ、暫くして光の渦が収まると、其処には血の様に赤い三つ又の鎗を持った貴族のような恰好をした墮天使がいた。

「それとブギーモン……いや、フェレスモン。君にプレゼントを贈るよ」

チュチュの片割れ的な存在であり、『主』と呼べる影の言葉に呼応する様に、暗闇から黒い影が現れる。

「この者は……?」

「今回チュチュが久し振りに良い物が作れたみたいでね……君の好きに使いたまえ」

「ハハッ! 有り難き幸せ、感謝致します! では準備が整い次第参

ります！」

そう言って、フェレスモンは黒い影と共にその場を後にするのだった。

☆☆

「本当にリアルな夢だったなく！ 私も何時かポピパの皆で大きなドームでのライブをしたいよ〜！」

ある日の『CIRCLE』のラウンジの一角に香澄、蘭、彩のボーカル組3人が集まっており、香澄が興奮した様子で周りの面々に昨日見た夢を語っている。

「ドーム、か……。アタシもモカ達と偶にそんな話をするけど……結構がつつりくるよね」

「私も推しのアイドルユニットのドームライブの映像を見た事があるけど、あの興奮は今でも忘れられ無い程だったよ！」

『テイルモンと一緒に見たんだよね？』

『ええ。彩と一緒に見させて貰ったけど、あの興奮は初めて見る私にも素敵な物に見えたわ』

『俺、アイドルとか全く分からないけど、彩とテイルモンの様子を見ると、何となくだけど凄えのが分かるよ』

香澄の夢の話聞いた蘭、彩、そして彼女達のパートナーデジモン達もそれぞれのドームライブに対する思い思いの感想を述べていく。

「そういえば、今日って確か近くの会場で『ガールズバンドカーニバル』が行われるんだよね」

彩が思い出した様に呟く。

『ガールズバンドカーニバル』

それは、現在人気のあるガールズバンドの事をより多くの人達に知って貰おうとする為のイベントである。

「ええ。結構大きなイベントになるみたいだそうです」
「でも私、チケット結局取れなかったんですよ……」

香澄は尚も残念な様子で、自身の心情を語る。

「戸山さん？ それに美竹さんに丸山さんも何を話しているのかしら？」

声の方向を向くと其処には友希那の姿があった。

「あ、友希那先輩！」

「実は今、ドームライブの話をしていた所なんだ！」

「ドームライブ？」

「ええ。香澄が昨日、ドームライブの夢を見たって大はしやぎして
いて……」

「戸山さんらしいわね……。確かに夢を見るのは簡単よ。でも叶えるには、相当な努力が必要なのも事実よ」

そう語る友希那の脳裏に、純粹に音楽を楽しんでいた幼少期の頃の自分の姿が浮かぶ。

「湊さん？」

「……………ご免なさい。　少しきつい言い方をしてしまったわ」

友希那はそう言ってその場を去ろうとする。

「皆〜！」

其処へ更に現れたのはこころであつた。

「こころん！」

「如何したの突然？」

「話は聞かせて貰つたわ！　さつ、行きましょう！」

「ちよ、ちよつと待って！　行くつて何処に？」

「勿論…………『ガールズバンドカーニバル』を見にドーム会場よ！」

蘭の問い掛けに、こころはまるで買い物に行くかの様な感覚で応えた。

「ちよつと待って。　彼処はチケットが必要だから、そう簡単には入れないわよ」

「それなら…………ハイ！」

友希那の問い掛けに、こころは懐から5枚の細長い紙を取り出した。

「あーっ！　会場のチケット！」

「こころちゃん、そのチケットどうしたの？」

「この間ハロハピ遊園地でライブを行った時に、園長さんが御礼でこのチケットを下さつたのー！」

「こころは貰つた経緯を語る。

「本当はハロハピの皆で行きたかったんだけど……他の皆が予定もあって、結局私1人だけになっちゃったのよ。そんな時、今の香澄達の話聞いたの……。今此処には5枚のチケット。そしてこの5人。数的に丁度合うし、何より折角の園長さんの御厚意を無碍に扱う何て出来ないわ」

「はい！ 戸山香澄、こころんと一緒に行きまーす！」

「うん。私も今日はオフだから大丈夫だよ！」

こころの発言を聞き、香澄と彩が真っ先に参加の意を示す。

「蘭と友希那も一緒に行きましょう♪」

こころは残りの2人にも、無邪気な様子で誘い掛ける。

「えっ……でも」

『俺も行くー！』

「ちよつとアグモン！」

「美竹さん」

「湊さん……」

「他のバンドの音楽を聴いて見るのも、参考の1つよ」

「……分かりました。こころ。その申し出、受け取るよ」

「決まりね！」

「随分物分かりが良いわね、美竹さん」

「勘違いしないで下さい。切欠を作った園長さんの御厚意を無駄にしたく無いだけです。そう言う湊さんも、やけにすんなり誘いを受けましたね？」

「私達 Roselia は、常に頂点を目指している。自分達の技術を磨くのもそうだけど、このイベントも観戦も今後の糧の参考にしようと思っっているわ」

『友希那、この間そのイベントに参加する『Lyrical Cat』つ

て言うグループの事、妙に気にしてたんだよ』
「ちよつとブイモン」

その言葉に、蘭は暖かい視線を向ける。

「意外と可愛いですね」

「如何言う意味よ」

友希那はジト目で蘭を見るも、蘭は意に介さない様子で対応する。

「友希那ちゃん！ 蘭ちゃん！ ころちゃんの家車が来たよー！」

彩の呼び掛けを聞き、既に他の3人がこの場にはいないの気付いた2人は、急いで3人の下に向かって行ったのであった。

☆☆

それから数分後、香澄達ボーカル組は『ガールズバンドカーニバル』の会場前に来ていた。

『わあ、人が沢山……』

友希那のディーアークの画面越しからブイモンは、沢山の人の姿を驚きを隠せない様子で見る。

『こりやスゲーな！ アフグロのライブの時以上の多さだ！』

『それほど皆、このイベントに注目しているのね』

『確かにこんな大きな会場でライブをしたら、その分盛り上がりも大

きくなりそうだね』

他のパートナーデジモン達も、初めて見るドーム会場の大きさとイベントの様子に、それぞれの感想を語り合う。

「あっち側の列……あれ、何なんだろう？」

「えーつと……グッズ列最後尾……？ どうやら物販の列みたいだね」

「ええっ!? グッズ!？」

彩の言葉を聞き、香澄が大きく反応する。

『香澄……まさかと思うけど、あの列に並ぶ気じゃないよね?』

「うん! 折角来たんだし、グッズも欲しいもん! と言う訳で……レッツゴー!」

『ちよつと!? 香澄!?!』

ドルモンの問い掛けに、香澄は『当たり前だ』と言う様に言って、そのままグッズ列最後尾に向かって行った。

「香澄ちゃん!？」

「ねえ! あれパスパレの彩ちゃんじゃない?」

「本当だわ! それにRoseliaの友希那樣もいるわ!」

「Afterglowの蘭ちゃんにハロハピのころちゃん……人気ガールズバンドのボーカル組が揃いぶみよ!」

更に今の騒ぎで、香澄以外の4人に観客達が注目し始めた。

「皆ー! ハッピー! ラッキー……ムグ」

「落ち着いてころ……!」

『友希那……』

「拙いわね……皆、行くわよ」

「でも、香澄ちゃんが……」

『彩。 気持ちは分かるけど、今は逃げましょう』

「テイルモンの言う通りよ。 それに戸山さんにはドルモンがいるから、若しもの時は何とかなるわ」

「……必ず合流しようね、香澄ちゃん」

（何だろ……このツツコミたいけど突っ込んだんじゃ行けない状況……）

そして友希那達は、その場を後にしたのだった。

「ふむ……見事に別れてくれたな。 では、始めようか」

そして先程の状況を見ていたフェレスモンも、そのまま行動開始した。

☆☆

「わくん！ 如何しようドルモン！」

『香澄…… 『自業自得』 だよ……』

それから3、40分後、何とか気に入ったグッズの購入を終えた香澄は元の場所に戻るも、友希那達がいらない事に気付き、慌てて探している状況だった。

「だって……気に入ったのが沢山あったんだもん……」

『あはは……。 でも、何だか懐かしいな。 デジタルワールドを冒険してた時も、こんな風に香澄が気になった方へ進んで行って、それ

でトラブルに巻き込まれる何て事もあったから』

「……ソウダツタケ？」

『香澄。カタゴトで言っても、僕ちゃんと覚えているからね』

「あうう……」

当時の事を思い出したのか、香澄は恥ずかしそうに顔を隠す。

『でも、ついこの前のポピパのライブを見た時、僕感動しちゃったんだ。あの香澄がこんなに大きくなったんだなあ』つて……』

「ドルモン……」

『香澄。あの時は結果的に離れ離れになっちゃったけど、こうしてまた僕達はまた会えた。だから……今度は絶対に離さないからね』

「……うん。私も絶対に離さないよ」

『……さ、早く友希那達の所へ行こう！』

「うん！」

そして2人は、再び歩き出そうとした。

ドオオオーーン！

その時、突然轟音が響く。

「キヤアアアー！」

「！ドルモン！」

悲鳴を聞いた香澄はドルモンをリアライズさせた。

「あっちだ！」

2人は悲鳴の聞こえた方へ駆け出した。

☆☆

「ウワアアアー！」

「やれ！ 暴れるのだ！」

香澄と既に進化したドルガモンが駆け付けると其処では、貴族のよ
うな恰好をした堕天使トーフェレスモンと彼の命令を受けて暴れる
全身が青い炎の様な見た目のデジモンがいた。

「待って！」

「漸く着ましたか」

「貴方は何者なの!?!」

「この姿で会うのは初めてだな。 私はフェレスモン。 最も君達に
としては、ブギーモンと言えば分かり易いかな？」

「その姿……進化したのか？」

「進化？ 違うな。 元々持っていた力の一端を少し解放しただけ
さ」

「フェレスモン。 完全体。 堕天使型デジモン。 ウイルス種。

必殺技は『デーモンズシャウト』と『ブラックスタチュー』」

そして香澄はもう一体の青いデジモンの情報もディーアークで調
べる。

「ブルーメラモン。 完全体。 火炎型デジモン。 必殺技は『アイ

スファントム』と『コールドフレイム』……」

「それでは私は用事があるから、失礼させて貰うよ。 ……ああ、それ
と」

去ろうとしたフェレスモンは動きを止めて、香澄達に語る。

「完全体は私達だけでは無いぞ」

「！ まさか！」

香澄とドルガモンはフェレスモンの言葉の意味を察して、会場の方に視線を向ける。

「そう言う事さ。 ではな」

「！ 待て！」

「アイスファントム！」

そう言って去ろうとするフェレスモンを追おうとする香澄達だったが、ブルーメラモンの攻撃に気付いて回避する。

だが代わりに、フェレスモンとの距離はより遠ざかってしまう。

「ククク……」

「香澄……！」

「そうだね。 まずはこっちを如何にかしないと……！」

「アイスファントム！」

ブルーメラモンは再度超低温の冷気を放った。

「バーンフレイム！」

その時、真横から巨大な火球が飛んでいき、ブルーメラモンの冷気を打ち消した。

「香澄さーん！」

「ましろちゃん！ バオハツクモン！」

声の方を向くと、其処にはましろとバオハツクモンの姿がいた。

「此処は私達に任せて下さい！」

「香澄とドルガモンは早く友希那達の方へ！」

「分かった！ 香澄！」

香澄はドルガモンの背に乗って、その場を去る。

「ウオオ……！」

「ファイクロス！」

ブルーメラモンが香澄達を攻撃しようとするも、バオハツクモンが即座に全身強化した爪による攻撃を炸裂させる。

「貴様の相手は私達だ」

「バオハツクモン！ 一気に行くよ」

それから数分後、巨大な光が放たれた。

☆☆

一方、友希那達の方も異変が襲っていた。

「ウオタアアー!!」

「そうさ！ 今は進化してフェレスモンだがね」

フェレスモンはブギーモンの時と違い、紳士的な言い回しで発言する。

「如何してこんな事を?!」

「ハツハツハ、愚問だね。 勿論、君達を叩きのめす為さ。♪ 大好きな音楽のイベントで死ぬる何て君達も本望だろう?」

「その為に無関係な人達を巻き込んだと言うの……?」

「そうさ。 ついでに言っておくが、君達のお仲間1組は少々厄介だから、先手を打たせて貰ったよ」

フェレスモンの物言いを聞き、蘭達は己のパートナー達に呼び掛けた。

「二」ブイモン (アグモン) (テイルモン) (パタモン) !!」三」

「行くよ!!」

「二」ああ (ええ) (うん) !!」三」

——EVOLUTION (DERIVATION) EVOLUTION (ON)

「二」ブイモン (アグモン) (テイルモン) (パタモン) 進化!!」三」

ブイモン達は一斉に進化する。

「ブイドラモン!」

「ジオグレイモン!」

「ネフェルティモン!」

「エンジエモン！」

「そんな虚仮威しで勝てるとても思っているのか？」

「舐めるな！ メガフレイム！」

ジオグレイモンが先制的に、口からの巨大炎の球体を放つ。

「……フン！」

「何だと……!?!？」

だがオーレモンは両手に持った剣の右手の一振りでジオグレイモンの火球を、まるで豆腐を切るかの如く簡単に切り裂いてしまった。

「エンジエモン！」

「ああー！」

「ブイブレスアロー（ヘブンズナックル）!!」

次にブイドラモンとエンジエモンが同時に技を放つも、それも通用しなかった。

「皆離れてー！」

その時ネフェルティモンの叫びを聞いた3体がオーレモンから離れ、それと同時にネフェルティモンが技を放つ。

「スカーレット……ストーム!!」

ネフェルティモンの一斉攻撃は真っ直ぐオーレモンの下に向かって直撃し、爆音と爆煙が起こる。

「……今、何かしたか？」

そして爆音と爆煙が収まり……其処から無傷のオーレモンが現れた事でブイドラモン達は大きく動揺する。

「そんな……」

「全く通じていない……」

「おやおや……如何やらこれで終わりみたいですねえ。 それでは今度は此方の番ですよ、オーレモン!」

「ウオタアアア!!」

フェレスモンの命を受けたオーレモンは両手に持った剣を振って、斬激波を放つ。

「グワアアア〜!」

「ワアアアア〜!!」

斬激波を浴びたネフェルティモン以外の3体は容赦無く吹き飛ばされ、次にオーレモンは2本の剣をクロスさせて光線を放つ。

「ツインサンダー!」

「! ロゼツタストーン!」

其処から放たれた光線をネフェルティモンは相殺しようと巨石を放つも、オーレモンの光線は巨石を破壊し、威力を殆ど落とす事無くネフェルティモンに命中し、彼女を撃ち落とした。

「ウワアアアア〜!!」

「テイルモン!!」

撃墜されたネフェルティモンはそのままテイルモンの姿に戻り、彩は慌てて駆け寄った。

「しつかりして！ テイルモン！」

「彩……。 ご免なさい……」

「貴様……。！ よくもテイルモンをー！」

「待つんだエンジエモン！」

傷付いたテイルモンの姿を見て激昂したエンジエモンが、ブイドラモンの制止を無視してオーレモンに突っ込んで行く。

「フンツ！」

「グハツ……！」

しかしオーレモンは逆にエンジエモンの鳩尾に強烈な左腕の拳の一撃を浴びせると、そこから思い切り蹴り飛ばした。

そして蹴り飛ばしたエンジエモンは、そのままパタモンに退化して気絶した。

「パタモン！」

「情けないなあ……。 『パスパレ』と『ハロハピ』の名が泣くぞ」

「メガ……。バースト！」

その時、オーレモンの下に強力な爆炎が放たれたるもオーレモンはパタモンから視線を外す事無く、右手の剣で放たれた爆炎を斬り伏せ、そのまま今度は爆炎が放たれた方に視線を移す。

「クソツ……」

其処には悔しげな様子の子オグレイモンの姿があり、オーレモンは呆れた様子で語り掛ける。

「不意打ちとは良い根性してんなあ……。 だがな、攻撃って言うの

はこうするんだよ！ ガトリングパンチャー！」

オーレモンは剣を捨て、両手首に装備されたガトリングから無数の砲撃を放った。

「ウワアアアアー!!」

「ジオグレイモン！」

蘭の叫びも虚しく、数分後に其処には力尽きて倒れるアグモンの姿があった。

「やれやれ……ガールズバンドのボーカル共は、どいつもこいつも雑魚ばっかりなのか？」

「落ち着きなさい。彼女等は言わばタイマーで言えば、まだまだ『あの5人』の『腰巾着』や『金魚のフン』みたいな物です。それでも完全体の我々を相手に必死にやっているから、そう言うのも酷な物ですよ」

フェレスモンとオーレモンの会話に、友希那達は愕然とした表情を浮かべていた。

「完全体……ですって……!?!」

「そうですね。姿が変わったりしたただけの見掛け倒しだと思いますか？ だとしたら、とんだ見間違いですね。そんな考え方をする辺り、貴女達『ガールズバンド』の奏でる音楽と言うのも、高がしれますね」

「そうか……。つまりコイツ等の音楽も、さぞゴミみてえな雑音で事か！ ハッハッハ！」

「……友希那を……Roseliaを……馬鹿にするなああー！」

「ブイドラモン！」

ブイドラモンはオーレモン達に突進して行く。

「はあ……芸の無い奴だな。ガトリングパンチャー！」

「私も加勢しますよ。デーモンズシャウト！」

2体の完全体デジモンの攻撃が、無情にもブイドラモンに炸裂した。

「ブイドラモン！」

やがて攻撃が収まると、其処には退化したブイモンが力無く倒れていた。

「そんな……全滅……だなんて」

「これが……完全体の力」

「パワー、耐久力、能力……あらゆる面で私達のデジモンを上回っている……。これじゃあ、勝ち目が無いよ……。」

蘭とこころと彩の眩きが虚しく響く。

「さて……次は貴女達の番ですよ」

「パートナー共々、仲良くあの世に送ってやろう」

友希那達4人は一步も動けずに、止まったままである。

「まずは湊友希那さん。貴女からだ」

「美しい見た目しか取り柄の無い御前が、死ぬ時にどんな表情を浮かべるか見物だな」

オーレモンは剣の先端を友希那に向ける。

「死ねえええー！」

「二湊さん（友希那ちゃん）（友希那）!!!」

友希那の頭上に、オーレモンの剣が振り下ろされ様とする。

「パワーメタル！」

その時オーレモンに大型の鉄球が命中し、オーレモンはバランスを崩す。

「グオツ……い！」

「今のは……皆〜！」

声の方を4人が向くと其処には、此方に向かってくるドルガモンとその背に乗る香澄の姿があった。

「二戸山さん（香澄）（香澄ちゃん）!!」

「馬鹿な……。 お前達の相手はブルーメラモンに任せた筈……」

「信頼出来る強力な仲間の助けで、此処まで来たんだ！」

フェレスモンの動揺に、ドルガモンは自信のある返答をすると、そのまま戦闘を開始する。

「大丈夫？」

「気を付けて香澄……。 アイツ、アグモン達の攻撃が全く通用しなかった……」

アグモン達を抱えた蘭が香澄に、先程の状況を語る。

「大丈夫だよ。事情は既に分かってるから」

その時、一端距離を取ったドルガモンが香澄達の下に戻る。

「ほお……さっきの4人と比べて、少しはマシな攻撃をする奴がいるじゃないか。……成る程、御前達が『あの方々』が警戒している者の1組達か……。これは張り合いがありそうだな」

そう言つてオーレモンは両手の剣を構える。

「戸山さん……。此処は危険だわ」

「そうだよ。香澄ちゃんも逃げないと……」

友希那と彩が香澄に呼び掛ける。

「……出来ません」

香澄はそう言つてドルガモンの方に向かって歩みを進め、隣に立つ。

「ドルガモンが戦っているのに……。……タイマーの私が逃げるわけにはいかないんです！」

強き意志を持って友希那達に言い放った。

「でも、そんな事を言つてる場合じゃ……」

「パートナーを最後まで信じ、パートナーを最後まで支え、共に歩む！

それが……。本当のデジモンタイマー何です!! 若し此処で逃げたら……。私はドルガモンのタイマーとして失格だし、あの冒険の日々を過ごした皆を裏切ってしまう事になるから」

更なる言葉に秘められた香澄の強い決意と想いに、友希那達は黙るほかなかった。

「ドルガモン……」

「行こう……香澄」

— MATRIX EVOLUTION —

その文字が香澄のディーアークの画面に表示され、同時にディーアークが光を放ち、その輝きに呼応してドルガモンも光に包まれた。

「ドルガモン超進化！」

光に包まれたドルガモンの姿が変化していく。

獣竜の姿から徐々に竜人の様な姿に変わると同時に、その身を金色に輝かせ、青いマントをはためかせる。

やがて光が収まると、其処には黄金の鎧を纏った騎士の様な見た目のデジモンが立っていた。

「グレイドモン!!」

「ドルガモンが……進化したわ……」

「これが……ドルガモンの完全体……」

「この感じ……只者じゃない」

「グレイドモン。 完全体。 戦士型デジモン。 ワクチン種。 必殺技は敵を十字に切り裂く神速の必殺剣『クロスブレード』と、上段より二刀を敵の頭上に叩き落す豪快な剣『グレイドスラッシュ』……」

他のボーカル組4人は、初めて見るグレイドモンの姿に思い思いの反応を見せる。

「ハッ！ 無駄にキラキラした見た目しやがって！ 俺の剣で五体バラバラにしてやる！」

そう吐き捨ててオーレモンはグレイドモンに切りかかって来る。

あの剣による一撃を味わった香澄以外のボーカル組4人は目を瞑る。

そして次の瞬間、切断音が響く。

「な……何……だと……!?!」

その次に聞こえたのは、オーレモンの驚愕した声だった。

友希那達4人が目を開けると、其処には自身の武器である双剣『グレイダルファア』を両手に構えたグレイドモンと、驚愕した様子で先の切断された剣の柄を両手に持つオーレモンの姿があった。

「嘘……あの剣があんな簡単に……」

彩の口から驚嘆の声が零れる。

「クソがあああー!」

そう叫びながら、オーレモンは剣を捨てて、今度は右腕の拳でグレイドモンの顔を殴り付けるも、グレイドモンは回避せずにそれを受ける。

「クツ……」

それと同時に香澄が、まるで右頬を殴られたように仰け反り、その際口を切ったのか、口元からうっすら血が流れる。

「えっ!？」

「香澄!？」

その瞬間を見た彩や蘭が声を上げる。

その一方でオーレモンは拳による連続攻撃をグレイドモンに浴びせる。

「ぐっ……くうっ……あぐう……」

グレイドモンが攻撃を受けるたび、香澄の身体が仰け反り、ふらつく。

「……若しかして、グレイドモンの受けたダメージが、戸山さんの身体にも通っているの?」

「その通りですよ、友希那さん」

香澄の様子を見た友希那の考察を肯定する様に、ましろとハックモンが現れる。

「ましろ……ハックモン」

「彼女は……ブルーメラモンめ、しくじったな……」

ましろとハックモンの姿を見た友希那達は先程グレイドモンが言った『信頼出来る強力な仲間』の正体、フェレスモンはブルーメラモンの戦死を悟った。

「パートナーを完全体まで進化させると……ティマーとデジモンはより一心同体に近くなります……」

ましろは説明を続ける。

「そんな……!?!」

蘭が驚愕した様子を見せる。

「でも……だからこそ勝てる!!」

香澄が強き意志を持ってそう言った瞬間、グレイドモンがそれに呼応する様に双剣の片方を持った右腕を振るう。

「グワアアアアアア!!」

その瞬間、オーレモンの左腕が切り飛ばされた。

「グウウ！」

咄嗟に残った右腕の手首のガトリング砲による攻撃を放とうとするが、それより先にグレイドモンがもう片方の双剣を持った左腕を振るい、オーレモンの右腕を切り飛ばした。

「ギヤアアアアア!!」

オーレモンの苦痛の声が響く。

「(私)(僕)達デジモンとタイマーは……一緒に笑って、一緒に泣いて、時には喧嘩しながら！ 互いを理解して、共に進化して！ だからこそ、何よりも強い絆が出来る(の)(んだ)!!」

香澄とグレイドモンの声が重なり合う。

「おのれえええー！」

その時、フェレスモンが赤い三つ又の鎗を構えて襲い掛かる。

「クロスブレード！」

しかしグレイドモンは意にも介さず、神速の必殺剣による一撃をフェレスモンに炸裂させる。

「グアアアアアアー！」

切り飛ばされたフェレスモンは、そのまま出現させたゲートの中に消えて離脱する。

「グオオオ……！！」

「行くよ……グレイドモン」
「ああ」

グレイドモンはグレイダルファアを持って構え、其処にエネルギーを集中させる。

「ウオオーー！」

オーレモンは全身の力を振り絞って立ち上がり、そのままグレイドモン目掛けて突進する。

「グレイド……スラッシュユ!!」

その瞬間、グレイドモンは上段より両手のグレイダルファアをオーレモンの頭上に豪快に叩き落とす。

「グオツ……馬鹿……な……」

強烈な一撃で両断されたオーレモンは、そのままデータの粒子となつて静かに消滅したのだつた。

やがてオーレモンが完全に消滅したのを見届けたグレイドモンは、そのままドルモンの姿に退化し、香澄も同時に崩れ落ちた。

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

そして真つ先にましろとハックモンが、それぞれ香澄とドルモンに駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 香澄さん？」

「うん……。 久し振りに完全体の進化をしたから……。少し疲れちゃった」

「立てるか？ ドルモン？」

「有り難うハックモン。 僕は大丈夫……」

双方の言葉を聞き、ましろ達は安堵の様子を見せる。

「ましろちゃん……これからの戦い、きつと厳しくなるよ」

「はい……」

「きつと『あの力』を使う日も、そう遠く無い様に思えるの……。だから……」

その時、ましろは優しく香澄を抱き締める。

「香澄さん。一人で抱え込まないで下さい。私達の事も頼って下

さい」

「……有り難う」

2人は遠くを見詰めながら思い耽る。

その目には、5体の存在のシルエットが映っていた。

☆☆

その後、騒ぎの状況も相俟って『ガールズバンドカーニバル』はそのまま中止になってしまい、香澄達6人は帰路を向かっていた。

「皆御免なさい。私が迷惑掛けたばかりに……」

「ううん。香澄ちゃんは何も悪くないよ。『グッズも欲しい』つて言う香澄ちゃんの良い気持ち、私も分かるから……」

「あうう……ましろちゃん！」

「ええっ!? ど、如何しようハックモン？」

『ましろ、一端落ち着こう』

『ましろ、本当に香澄が御免……』

「香澄とドルモンはとつても仲良しね♪」

そして香澄達から少し離れて歩く友希那と蘭は、4人のやり取りを見ながら考えていた。

『パートナーを最後まで信じ、パートナーを最後まで支え、共に歩む。

それが本当のデジモンテイマー何です』……か」

「如何したんですか湊さん？」

「私がRoseliaの音楽に全てを賭ける覚悟で取り組んでいる様に、戸山さんも『デジモンテイマー』に対して全てを賭ける覚悟で向き合っているのね……」

「……私、あの時『逃げたい』って一瞬思ってしまった。でも、香澄のあの時の目や姿勢を見てたら、自分が情けなく思えちゃったんです……」

「美竹さん。それを言ったら、私も同罪よ。悔しいけど結局私達、テイマーとしてはまだまだ戸山さんに倉田さん、それに紗夜達を含めた『あの5人』と比べるとまだまだ未熟だったって事ね……」

「……もつと強くなりましょう湊さん」

「……ええ、そうね」

「友希那さくん！ 蘭ちやくん！」

その時、香澄が2人に呼び掛ける。

「あの！ 今、4人で会話していませんけど、若し宜しければ、これから私達6人で一緒に御食事会をしませんか？」

「香澄……」

「こんな機会、滅多に無いのでつい突然の事になっちゃったんですけど、大丈夫ですか？」

友希那は蘭は少し呆気にとられた様子を見せるも、直ぐに笑ってし

まった。

「あの……2人共？」

「御免なさい。食事会の件だけど、参加させて貰うわ」

「アタシも参加するよ」

「有り難う御座います！ それじゃあ……」

そう言つて、香澄は2人の真ん中に入って手を繋ぐ。

「香澄（戸山さん）!?!」

「エへへ……レッツゴー!」

そう言つて、ましろ達の下へ歩き出す。

最初は戸惑った様子の2人も、直ぐに穏やかな様子を見せ、香澄と共に歩みを進めて行く。

6人の穏やかなやり取りを、沈みゆく夕焼けと少しずつ現れた小さな星々だけが、静かに見守っていた。

第17話 昆虫パーソナリティ2020

「そっか……等々『完全体』まで出やがったか……」

その日の夜。

有咲は香澄から、今日の『ガールズバンドカーニバル』での一件をスマホ越しで聞かされていた。

『紗夜さんと日菜さんとまりなさんには、ましろちゃんが連絡を入れて伝えたから……有咲とワームモンも気を付けて』

「分かった。そっちも充分休めよ」

労いの言葉を掛け、有咲はスマホの通話を切った。

「あーちゃん……」

「ああ……事態は深刻になってきたな……」

有咲は香澄からの通話を通して、事態の深刻さを感じとっていた。

「今までは成熟期やアーマー体だったから心配は無かったけど……これからの戦い、厳しくなって来るぞ」

「うん……そうだね……」

「完全体だけじゃねえ。最悪『究極体』までやって来たら……」

そう語る有咲とワームモンの脳内に最悪の光景が浮かぶ。

『ホハハハハハ!!』

『『ウワアアアアアアアアアア!!』』

『『グアアアアアアアアアア!!』』

『キヤアアアアー!!』
 『『『『(ギルモン)(ブイモン)(ララモン)(アグモン)(テイルモン)(パタモン)(ベアモン)!!』』』』
 『次は貴様らだ!!』
 『『『『キヤアアアアアアー!!』』』』』
 『ハアアア!!』
 『ウワアアア(キヤアアア)ー!!』
 『ウワアアア(キヤアアア)ー!!』
 『『『ウワアアア(キヤアアア)ー!!』』』
 『『キヤアアアアー!!』』
 『『ウワアアアア!!』』』
 『『『キヤアアアアー!!』』』』

敵に容赦無く消されていく3代目ティマー達とそのパートナーデジモン、そしてたえやりを初めとした他ガールズバンドのメンバー達。

「あーちゃん……」

「ワームモン……つい引き締めるぞ」

「うん」

有咲の言葉に、ワームモンは短くも力強く頷く。

そしてその後は何事も無かったかの様に、2人は何時ものルーティンを過ごしたのだった。

☆☆

「ふあああ〜」

「市ヶ谷さん？」

「あつ、すみません燐子先輩……」

「いえ……お疲れ様です」

翌日、有咲は生徒会室にて午前中から花女の生徒会長である燐子の手伝いを行っていた。

有咲自身、デジモン関係に加え、ポピパや生徒会の一員としての活動等もあつて、忙しい身でもあつた。

「市ヶ谷さん、大丈夫ですか？」

「え？」

燐子の発言に、有咲は手を止める。

「いえ……先程から作業の傍らで少し思い悩んでるのが気になったので……」

「ああ、すみません。少しだけ考え事を……」

「いえ、全く気にしてはいませんよ。市ヶ谷さんは決して、仕事に対しては手を抜かずにこなしている事は充分理解しているので……」

燐子は有咲の様子を咎める事は無く、受け入れる。

『あーちゃん、あの頃と比べると随分精神的に成長したね』

『そうか？』

『うん。最初の頃は少し不安定な面があつたから……』

「確かにあの時は、私も精神的に参つていたからなあ……」

有咲とワームモンの脳裏に出会った頃の記憶が過る。

香澄達2代目ティマー組の5人の最初の関係は、苦労の連続だつ

た。

いきなり見知らぬデジタルワールドに飛ばされてしまった挙げ句、世界を救う様に言われてしまった事もあり、戸惑いを隠せなかった。

有咲は5人の中では戸惑いが大きかった内の1人であり、それも相まってワームモンの関係も、最初はぎこちない物だった。

そんな彼等の関係を変えたのは、とある一件だった。

冒険の最中のある時、敵の策略によって2人の中に亀裂が入ってしまった事があった。

『これがあーちゃんの本当の気持ちなの!?!』

『……何だよ。何とかしなくちゃいけないならしょうがねえじゃねえか!!』

『!?!』

『大体どいつもこいつも私の気持ちを知らずに勝手何だよ! いきなりこんな訳も分からない所に連れてこられた挙げ句に『世界を救え』何て無茶苦茶な事言われて、おまけに何の考えも無く『何とかなるよ!』何て言いやがって! そんな感じで上手くいったら、最初から苦労何てしねーんだよ!』

ワームモン自身、今でもあの時の有咲の様子はハッキリと覚えてい

る。
同時に有咲と『形だけの関係』しか作れなかった自身を悔やんだ。

だからお互いに真正面からぶつかって、最終的に理解し合った。

それ以降2人の関係は、少しずつ変わっていった。

ワームモンが知らない事を有咲が教えたり、有咲が困った時はワームモンがフォローをする。

こうして『形だけの関係』の2人は、何時しか『本当の意味で支え合う関係』へと変わっていった。

『あのお祖母ちゃん、如何して僕の事を簡単に受け入れてくれたの?』
以前、ワームモンは有咲の祖母の万実に自身をすんなり受け入れてくれた理由を聞いた事がある。

『そうだねえ……。強いてあげるなら、『有咲の様子』だね』
『様子』?』

『小学生の頃、あの子が泣きながら帰って来た事があってね、訪ねたら『大切な子とお別れした』って言ったの。失礼な言い方になっちゃうけど、有咲はあんまり友達がいらない子だったから、あそこまで悲しむ辺り、よほど大切な友達なんだって思ったの』

万実はその時の事を懐かしむ様で語った。

『そしてあの子が貴方を私に紹介した時、最初は驚いたけど、貴方の事に付いて真剣な様子で語る有咲の姿と『あーちゃんを怒らないで下さい!』って必死な貴方を見たら、とても『悪い子』だなんて思えなかったわ』

『お祖母ちゃん……』

『ワームモン。有咲とこれからも仲良くしてね』
『はい』

ワームモンは万実の言葉に優しく返答した。

突如、空気を切り裂く様な悲鳴が響き渡る。

「今の声……家庭科の夏木先生……！」

『あーちゃん！』

「市ヶ谷さん！」

有咲は頷いてワームモンをリアライズさせると、直ぐに悲鳴の方向へ向かって行き、燐子も慌ててその後を追いかけた。

☆☆

有咲とワームモンが現場に駆け付けると、其処にいたのは花女の用務員である玉城と言う男性であった。

先程悲鳴を上げた夏木先生は避難したのか、既に姿が無かった。

「玉城さん！」

「市ヶ谷さん、逃げなさい！ 此処は……グワアア！」

その時、有咲とワームモンの目の前で玉城は斬撃に切り裂かれ、次の瞬間、その場所には五体バラバラになった彼の無惨な死体が転がった。

「玉城さん……！」

有咲は悲痛な様子を浮かべる。

有咲自身、彼とは其処まで交流は深くは無かったが、彼が学校の皆

から慕われる程、人柄の良い人物だった事は知っていたので、突然の死には悔やむ思いがあった。

「市ヶ谷さん！」

「燐子先輩、来るな！」

すると突然燐子の方へ目掛けて、複数の鋭い斬撃の刃が飛んでくる。

「ヒツ……」

咄嗟の事に燐子は動けず、思わず目を瞑る。

「ムーンシューター!!」

その時、無数の光弾が複数の斬撃の刃を相殺した。

暫くして何とも無い事に気付いて燐子が目を開ける。

「大丈夫か燐子？」

「ステイングモン……有り難う御座います」

燐子は自身を助けた正体であるステイングモンに、御礼を述べた。

「来るぞステイングモン！」

有咲の呼び掛けと同時に黒い影が現れて襲い掛かり、ステイングモンも両手のパイルを伸ばして応戦し、やがて暫く激突した後、相手は距離を取る為に一旦下がった。

やがて相手の正体が明らかになり、燐子は眩く。

「デジモン……?」

それは全身を桃色の体毛に覆われ、額に菱形の模様と両手が鋭い鎌になっている魑の様な見た目のデジモンであった。

「アイツは……」

有咲は自身のデューアークで、相手の情報を調べる。

「キュウキモン。完全体。妖獣型。ウイルス種。必殺技は『ブレイドツイスター』と『三連星』……よりもよって完全体かよ……!」

有咲は自身が恐れていた事が現実になった事への理不尽さに、悪態を吐く。

「キキヤアアアー!!」

キュウキモンは今度は有咲に狙いを定め、彼女の方へと襲い掛かって行った。

「クッ!」

ステイングモンは急ぎ有咲の元へ戻り、キュウキモンの鎌に自身のパイルを伸ばして応戦する。

「有咲には指一本触れさせはしない……!」

「キキキキ……!」

両者の拮抗は続く。

「カースオブクイーン!!」

その時、突如キュウキモンに目掛けて赤い光線が飛び、気付いたステイングモンは回避し、光線はキュウキモンに命中する。

「キキヤ!!」

「今のは……「有咲ちゃん!!」彩先輩!」

声の方を向くと、其処にはネフェルティモンとその背に乗った彩の姿があり、彩はネフェルティモンから降りて直ぐに有咲達の下に駆け寄り、ネフェルティモンは加勢に入った。

「大丈夫!」

「私と燐子先輩は何とか……。でも……」

有咲の視線の方向に彩とネフェルティモンが目を向けると、彩は驚きの余り腰を抜かしてしまう。

「ヒッ……あれって……」

「用務員の玉城さんです……。私達の目の前で……」

彩は見知った相手の死体を前にショックを受けていた。

「ウワアアアッ!」

衝撃音と声の方を振り向くと、其処にはキュウキモンに倒され、退

化したテイルモンの姿があった。

「テイルモン！」

「彩……………免なさい……………」

「キキヤキヤキヤキヤ!!」

キュウキモンは不気味な声を挙げながら、嘲笑の意を込めた笑い声を挙げた。

彩とテイルモンと燐子はその笑い声から、破壊と殺戮を楽しむキュウキモンの悪意の気持ちをはひしひしと感じ取っていた。

「……………ってんだよ……………」

「市ヶ谷さん……………?」

「何笑ってんだよ!!!」

有咲の大きな怒声が響く。

彩と燐子はかなり驚いていた。

2人の知る限り、有咲は確かに大声を出す事はあったが、それは主に周りの言動に対してのツッコミの意味合いによる物が殆どであった。

だが、今の有咲の姿からは何時ものツッコミの時とは違って、文字

通り『本気の怒り』を感じていた。

「有咲……」

「ステイングモン。私はアイツを絶対に許さない。だから……力を貸してくれ」

「ああ。俺達之力、アイツに見せ付けてやろう」

ステイングモンは静かに頷き、キュウキモンを見る。

—— MATRIX EVOLUTION ——

その文字が有咲のディーアークの画面に表示され、同時にDアークが光を放ち、その輝きに呼応してステイングモンも光に包まれた。

「ステイングモン超進化！」

光に包まれたステイングモンの姿が変化していく。

全身がプリズムの様な鎧に包まれ、同時に鋭い槍が現れ、それを右手で掴む。

やがて光が収まると其処には虹色の輝きを放つ昆虫型デジモンの姿があった。

「ジュエルビーモン！」

「ステイングモンが……更に進化しました……」

「ジュエルビーモン。完全体。昆虫型デジモン。ワクチン種。必殺技は『スパイクバスター』」

燐子は初めて見る完全体の姿に呆然としており、彩は自身のディーアークでジュエルビーモンの情報を調べる。

「ジュエルビーモン！」

「キキヤアア！」

有咲の呼び掛けにジュエルビーモンはキュウキモンに仕掛け、一方のキュウキモンも額の菱形模様から青い光線を放つも、ジュエルビーモンは鋭い槍を両手で持ち、そのまま鎗裁きでそれを弾き、そこから強力な突きをキュウキモンに炸裂させ、相手は吹っ飛ばされる。

「キキヤア！」

そしてジュエルビーモンは、ゆつくりとキュウキモンの下へ進んで行く。

「キイイイ……キヤアアアアー!!」

キュウキモンはジュエルビーモンの周りを回り始める。

するとジュエルビーモンを中心に竜巻が起こり始め、徐々に大きな物となっていく。

そして竜巻の中心にいるジュエルビーモンに無数の真空刃が襲い掛かるも、ジュエルビーモンは落ち着いた様子のまま、全身に身に纏った鎧で防御する。

「っ！」

同時に有咲の制服にも少しづつ切り傷が出来始める。

「え!？」

その瞬間を見た燐子が声を上げる。

「大丈夫です燐子先輩……くっ……パートナーを完全体まで進化させると……ツ……テイマーとデジモンは……ぐっ……一心同体になくなるんです……くうっ……」

有咲はダメージを受けながら説明を続ける。

「市ヶ谷さん……」

燐子はそんな有咲の姿を心配そうな様子で見附める。

(ジュエルビーモン……耐えてくれよ……!)

真空刃の攻撃は尚も続くも、ジュエルビーモンは全身の鎧で防御する。

(まだだ……)

ジュエルビーモンは『その時』が来るのを静かに待つ。

「キキヤアアアー!」

やがて何時までも倒れないジュエルビーモンに業を煮やしたキュウキモンが、直接切り裂こうと右手の鎌を振り下ろし、それがジュエルビーモンの左肩に命中する。

キュウキモンは手応えを確信し、そのまま切り裂こうとしたその時、ジュエルビーモンが左手でキュウキモンの右腕をガツシリと掴んだ。

「キツ!？」

「この瞬間を待っていた……!？」

そしてジュエルビーモンは、右手に持った槍でキュウキモンを思い切り貫いた。

「キキヤアアアー!？」

突然の激痛に、キュウキモンは大きな悲鳴を上げて苦しむ。

「行けえええー!？」

有咲の叫びを聞き、ジュエルビーモンは右手に力を集中させ、そのまま槍を振るった。

「スパイク……バスター!!」

次の瞬間、槍からの衝撃波がキュウキモンを縦真つ二つに両断した。

「キ……キヤ……」

そのままキュウキモンは小さく短い悲鳴を上げると、そのままデータの粒子となって消滅していった。

やがてジュエルビーモンも、元のワームモンの姿へと戻る。

「あーちゃん……」

「ワームモン……お疲れ様」

「うん……」

ワームモンは静かに返答する。

敵は確かに倒した。

しかしだからと言って、亡くなった玉城が生き返る訳では無い。

不意に何か当たる。

「雨……」

彩が気付くと同時に雨が降り出す。

「市ヶ谷……」

燐子は声を掛けようとして止まる。

何故なら、先程戦闘があつた場所を見る有咲の表情が悲痛な様子である事に気付いたから。

雨がより一層と強くなり、有咲とワームモンの体を濡らす。

燐子達にはそれがまるで、泣こうとするのを堪えようとする有咲とワームモンの代わりに空が2人の分も涙を流している様に映った。

☆☆

「そう……キユウキモンがDefeatedされたのね……」

自身の住むマンションの一室にて、チュチュは先程、フェレスモンからの報告を聞いていた。

『その割には、あまりショックな感じを抱いて無いねえ?』

「ええ。 漸く『究極体』の件に解決の目処が付きそうになった上に、『予想外の戦力』が見付かったからね」

「ああ……確かに『彼女』の抱えている闇は、僕も中々興味深かったからね。 でもこれで『ギター』が2人(…)も入る事になるけど、良いのかい?」

「その点に関しても、手を抜かずに全力で当たるわ。 まあ……駄目だった方に関しても、『此方の方の戦力』として、RASに利用させて貰う予定よ」

そう語るチュチュを見ながらも、『もう1人の存在』は隣の巨大なカプセルの中にいる存在にも視線を向け、内心語る。

(どんな光も何時かは闇に吞まれて消えていく。 僕の本当の目的(……)の成就の為に、君の力も適任者と共に大いに利用させて貰うよ)

激しさを増した雨音だけが、2人の会話と心情を感じ取っていた。

☆☆

「玉城さん。御久し振りです」

数日後、有咲と燐子の2人はキュウキモンによって殺害された玉城の墓を訪れていた。

「玉城さん。何時も学校の皆さんのより良い生活の為に身を尽くしてくれて、本当に有り難う御座いました」

燐子はそう言って、持ってきた花束を彼の眠る墓に供え、有咲はその様子を静かに見守る。

その時、有咲のデイーアークからワームモンが現れ、有咲と一緒に墓前に行く。

「玉城さん。私は貴方とは殆ど交流がなかったけど、花女の皆の為に貢献してくれて、有り難う御座いました」

「初めまして玉城さん。僕、ワームモンと言います。あーちゃんが御世話になりました。僕は殆ど交流は無かったけど、それでもあーちゃんや燐子さんの話を聞いて、貴方が学校の皆から親しまれているのが、良く分かりました。本当に有り難う御座いました」

そう言って有咲とワームモンは、共に静かに黙祷をする。

数分後、黙祷を終えた有咲達は静かにその場を後にした。

「あの……市ヶ谷さん、ワームモン」

「燐子先輩？」

『如何したの?』

燐子の呼び掛けに有咲は足を止めた。

「私自身、対してお役に立てないですけど……2人だけで抱え様としないですわい」

「隣子先輩……有り難う御座います」

有咲は静かに礼を返す。

5月の日差しだけが、彼女達のやり取りを空から見付けていた。

第18章 才女の受難、白の完全乱舞

「ふう……まったく、深夜の見回りって言うのも厳しい物だよ」

とある深夜。

現在、1人の警察官が見回りをしていた。

「にしても寒いなあ……。 あそこの公園でコーヒーでも買うか」

若い警官はそう言ってコーヒーを購入する為、近くの公園にある自販機の前に立ち寄った。

怪しい光が此方を見ている事に気付かずに。

そして公園の自販機でコーヒーを購入すると、警官は中身を一気に飲み干した。

「ああ………生き返るなあ………」

警官は自販機で購入した缶コーヒーを一口飲み、満足な様子で一息付いた。

トントン

「? 誰だいな急に……?」

不意に肩を叩かれた感覚を感じた警官は其方に視線を向け、言いか

けた言葉を止める。

其処には自身の倍の大きさもある黒い影がいた。

「ワーツ！ か、怪物だー！」

すると黒い影は、口から藤色の煙を吐き出した。

「グエツ！ グウウウ……！」

それを吸い込んだ警官は呻き声と共に苦しみだし、そのまま倒れる。

そして煙が収まると、其処にはドロドロの液体のみが残されていた。

「中々強力な物を持っているではないか」

別の方向から現れた影——先程から様子を闇夜に隠れて伺っていたフェレスモンが賞賛の言葉を掛ける。

「パレオ様と●●●●様からの伝言。『期待していますよ』との事だ」

フェレスモンはそう言つて、再び闇夜に姿を消そうとして、思い出した様に動きを止める。

「それと『彼女の事』だが……『其方は貴方の御自由にお任せします』だそうです」

伝えたい事を伝え終えたフェレスモンは、再度闇夜に姿を消した。

そして黒い影も目の前の敵が完全に消えた事を確認すると、再び暗闇の中へ消えていった。

☆☆

「……うくん。こんな感じかな？」

七深は悩みながらも、目の前の作業に取り組んでいた。

現在彼女がいるのは、月ノ森の庭園。

何故彼女がこの場にいるのかと言うと、美術の授業での課題の写生の為であった。

「最後はこうして……よし、完成♪」

そして5分程経って、七深は等々課題を完成させた。

「おーい！ ななみー！」

「あつ、透子ちゃん！」

其処へ丁度タイミングを見計らったかの如く透子が駆け寄って来た。

「ヤバいやバいやバいや！ めっちゃスゴい神作が出来上がっちゃったよー！」

「と、とーこちゃん……お、落ち着いて〜」

透子はまるで珍獣を発見した学者の様に興奮気味に語り、七深はそんな透子を落ち着かせようとする。

「いやあゴメンゴメン！ でもこれ見てみなって！」

「おお……大胆だけど結構上手に描かれているねえ〜。色使いの方も繊細且つ丁寧だし……広町的にこの校舎の屋根の色は好きだな〜」

七深は自身の見て感じた感想を、透子に伝える。

「そつか！ 実はアタシもこの校舎の屋根は他の所よりも力を入れて描いたんだ〜！ いやあ〜、同じ部分に注目する辺り、何だかアタシ等、『以心伝心』してるみたいじゃん♪」

「と、透子ちゃん〜……痛い、痛いってば〜」

嬉しさのあまり、透子は七深の背中をバシバシ叩き、七深は再び透子を落ち着かせようとした。

「あはは！ ななみの方は如何なった？」

「う、うん。 こっちも今終わった所だけど……」

「本当!? なあ、若し良かったら、ななみのも見せてよ！」

「……分かった。 はい、これ何だけど……」

そう言って七深は透子に、完成したデッサンを見せた。

「は？ 何これ？ 輪郭がグニヤグニヤじゃん。 校舎の壁とか、形めっちゃ崩れちゃってるし」

「あはは……。 何だか上手くいかなくて……」

「この花壇？ にある白い塊は？」

「それはあそこにある梔子の花だよ。 綺麗だよね〜」

「へえ……。確かにグニヤグニヤだけど、何だか見てたらこれはこれ
れでイケてるかも。ななみの絵も悪くないんじゃないかね？」
「有難う、透子ちゃん」

七深は透子に礼の言葉を述べる。

「……そうだ！ 今日放課後空いてるし、若し良かったら、あたしが
絵の描き方を教えるよ！」

「ごめんね。気持ちは凄く嬉しいけど、今日は予定が……」

「……ああ！ 前に行つてたファミレスの『アレ』か！ 頑張れよく、
応援しているから！」
「うん」

それと同時に昼休みの時間を告げるチャイムが流れた。

「やっと昼休みか！ 教室行こうよななみ」

「待って。まだ片付けが終わってないから」

「それじゃあ、アタシも手伝うよ」

「ふふっ。有難う」

そして片付けを終えた2人は、その足で教室に向かっていた。

2人が去って、誰も居なくなった庭園。

不意にその中の1体が、唐突に動き出した。

その植物は、先程透子と七深がいた時には見せなかった不気味な口
を開いて呟く。

『絵の描き方を教える』……か。七深の絵を外面でしか判断出来ない単細胞な金髪女め。もう直ぐだ……もう直ぐで俺は生まれ変われる……」

口の生えた植物は、その儘地面の中へ潜って行く。

そしてその場には、腕一本が丁度入れる程の小さな穴のみが残されてるだけだった。

☆☆

「でき、この校舎の屋根の所とかもマジ神っぽくね？」

「もう透子ちゃんったら……もうその話、5回位は聞いたよ」

「透子ちゃん……よっぽど嬉しいんだね……」

『何だか彼女の辞書には、『ネガティブ』と言う言葉が無い様に思えるな……』

「嬉しいのは分かるけど、これ以上はしゃぐのはお店にも迷惑よ」

透子のハイテンションに、ましろ達も様々な反応を示している。

翌日の放課後。

現在、彼女達は近くのカフェでティータイムの真っ最中である。

あの後も透子は他のモニカメンバー達にも、自身のデッサンした絵の事を自慢気に話していた。

「だってアタシも自分のブランドのデザインのデッサンをする事があるからさ。この校舎の屋根の所の神があった描写を見ると、自分

の関わっている事の要素を身近に感じちゃって嬉しいんだもん！」
「そう思うなら、普段の学校の授業もそんな感じで受ければ良いのに……」

「ウエ!? い、いやあ……その点はちよつと……」

「もう……透子ちゃんったら……」

つくしは呆れた様子を浮かべていた。

ズボツ

『ん……?』

「如何したのハックモン?」

『今一瞬、何か妙な気配が……』

「若しかして……デジモンかしら?」

『解らない。本当に一瞬の事だったからな……』

ましろと瑠唯の問い掛けに、ハックモンは曖昧な返答を返す。

「分かった! きつとアタシらのファンか何かだよ! この所、M
Orfonicaの名前も徐々に浸透していつてるから、きつと私達
の姿を見る為にこつそり隠れてたんだよ!」

「もう……透子ちゃんったら……」

（それに若しそうなら、さっきの『ズボツ』って音はどう説明付ける気
だったんだろう?）

透子の発言につくしは呆れ、ましろは内心疑問に思いながら彼女を
見る。

その後5人は喫茶店を出て、それぞれの帰路へ向かって行った。

☆☆

(『ファン』……か)

七深は1人帰り道を歩きながら、先程喫茶店での透子の台詞を思い返していた。

(そんなの……今まで考えた事無かったなあ……)

七深は視線を上に向ける。

“『広町さんって、本当に何でも出来て良いよね』”

“『『普通』って言うけどさ、貴女の『普通』は私達の『普通』とは違うのよ。馬鹿にしてるの?』”

“『貴女には、才能が無くて苦しい思いをする人の気持ち何か分かんないわよ』”

突然脳裏を過った台詞。

それは、七深が嘗て言われた周囲からの発言。

広町七深は一言で言えば、『才能』に愛された少女であった。

幼い頃から成績は常に上位な上に、彼女本人もそれを鼻に掛ける様子も無く、人当たりの良い性格だった事もあって周りからも好印象な様子で見られていた。

特に『絵の才能』に関しては、元々両親の血を強く受け継いだ事もあって、同年代の子達の中では飛び抜けた腕前の持ち主であった。

そんな彼女の周囲の関係が変化したのは、中等部の頃の事。

ある時母に薦められて、七深は自身の描いた絵を絵画コンクールに出展し、最優秀賞を獲得した。

此処までならハッピーエンドと捉えられるのが普通なのだが、七深にとってこの一件は不幸への片道キップであった。

中等部の友人達も、最初の頃は今までと同じ様に七深の絵の才能を褒めてくれていた。

しかしある日を境に、周りの七深を見る目が変わった。

『広町さんって、何かズルいよね〜』

『本当。何時も成績上位。おまけに絵の才能だってピカイチ。良い御身分よね〜』

『あれだけのハイスペックを持っていて、『普通だよ〜』って……馬鹿にすんじゃないわよ!』

ある日の放課後、偶々忘れ物をして教室に戻った七深は、教室に残っていたクラスメイトの話の聞き、激しいショックを受けた。

『て言うかさ。広町さんって、そもそも人間なのかしらって思うのよねww』

『あのハイスペックぶりを見ると、あの人は『人間の皮を被った化

け物』何じゃないの?』

『仮に若しだったたら、コンクールの件だって、本当に実力で勝ち取ったのかも疑わしいわね』

『御両親の力を使ったか、若しくはお偉いさんを色仕掛けで誑かしたんじゃないの?』

『有り得そうww』

『広町さん、AV女優でもやっていけそうだしww』

学友達の嫉妬や陰湿な悪意を目の当たりにした七深は結局、そのまま教室に入る事無く自宅に帰って行った。

この一件を切欠に七深は『普通』と言う事に強い願望を抱く様になった。

学校生活においても、テストの時は態と中間的な点数になる様になり、美術の時も敢えて下手に見える様に描き崩したりと、手を抜いて過ごす様にした。

若しまた本気を出して、皆が自分の事を恐れる様になってしまったら。

七深にとって、それは恐怖以外の何物でも無い事であった。

(大丈夫……私さえ我慢すれば、大丈夫だから……)

七深は湧き上がる恐怖を抑える様に、早足で自宅までの帰路を歩いて行った。

☆☆

「グエツ……オエエエエ……！」
「ンンン……！」

夜の広場。

少女達は苦悶の声と激しい嘔吐をしながら絶命し、そのまま跡形も無く溶けていった。

「フン。これは天罰。七深につまらぬ嫉妬と悪意を抱いた事を公開しながら、あの世で懺悔するんだな」

黒い影は先程自身が裁いた月ノ森の女子生徒達の姿を、侮蔑の表情で見ながら呟く。

この月ノ森の女子生徒達は、中等部の頃に七深に対して陰口や悪意をぶつけていた者達であり、この日も広場で七深に対して陰口や悪意を話していた結果、この黒い影の怒りを買い、無惨な死を遂げたのであった。

「七深……俺の七深……もう直ぐ俺とお前との新しい未来が待っているぞ……！」

黒い影はそう言うと、再び闇夜の中に消えていった。

☆☆

「さて……今日中には作詞を完成させよう……」

数日後。

今日が土曜日と言う事もあって、ましろは自分の家の自室にて新曲の歌詞の作成に取り掛かろうとしていた。

ヴーヴー。

「ましろ。 スマホが鳴っているぞ」

「有り難うハックモン」

ましろはハックモンに礼を言っ、自分のスマホを手にとると、つくしからの着信だった。

「つくしちゃん……？」

疑問に思いつつ、通話する。

「もしもし？」

「あつ、ましろちゃん!? 良かったあ〜……それより大変なの!」

「!……何があったの?」

つくしの言葉で、ましろはただ事で無いのを察し、冷静に問い掛ける。

「ついさつき、七深ちゃんと透子ちゃんが……変な植物みたいな怪物に浚われて……それで……」

つくしは余程ショックを受けたのか、先程から喋る声が涙ながらな様子だった。

「落ち着いてつくしちゃん。 今そっちに向かうから」

「うん……分かった」

そう言つてつくしは連絡を終え、通話を切った。

「ハックモン！」

「ああ！」

母に出掛ける事を伝え、ましろはハックモンと共に家を出て、現場の広場へ向かつて行つた。

☆☆

ましろ達が現場に行くと、其処にはつくしとましろと同じ様に呼ばれた溜唯、そしてリサとララモンの姿があつた。

「おーい！ つくしちゃんーん！」

「！ ましろちゃん！」

「御免！ 遅くなつちやつた」

「ううん。 私……怖かつたよ」

つくしは少し落ち着いたのか、何時も様子を見せていた。

「所でリサとララモンは、如何して此処に？」

「うん。 アタシも出掛けていたら悲鳴が聞こえてきて、こっちに聞こえて来たんだ……」

「残念だけど、私達が来た時には2人は浚われた後だったわ……」

ハックモンの問い掛けに、リサとララモンは此処に来るまでの様子を語つてた。

「それで二葉さん。もう一度、状況を話してくれるかしら？」
「うん……」

瑠唯に促され、つくしは同時の状況を語り始める。

その時つくしは自身の用事を済ませた事もあって、帰路を歩いている道中だった。

「あれ……？ 透子ちゃんと七深ちゃん……？」

その途中、何やら深刻な様子の透子と七深を見たつくしは、気になってこつそりその後を追った。

やがて、広場のベンチに座った2人は先程と違って穏やかな様子で会話をしていた。

つくしは自身の気にし過ぎと今の2人の間に入るのには良くないと考えて、その場を離れたと言う。

「キヤアアア……！」

しかし離れてから5分程経った後、突然七深の悲鳴が聞こえ、つくしが慌てて戻ると其処で見したのは、地面から現れたと思われる大きな口の付いた植物の様な見た目の化け物に締め付けられる七深と、彼女を解放しようとする透子の姿であった。

「コラー！ ななみを離しやがれ！」

「透子ちゃん！ 私はいから逃げて！」

「馬鹿な事言うなよ！ ななみを置いて自分だけ逃げる何て出来るか！」

すると再び地面が割れ、透子の背後から何かがやって来る。

「！ 透子ちゃん！」

「ワッ！」

七深の叫び声を聞いた透子は、ギリギリの所でもう一本の触手による攻撃を回避する。

幸い大怪我は免れたが、着ていた服の左の袖の部分が鋭利な刃物で切られた様な状態になり、透子の素肌が露出していた。

「キヤアア！」

やがて七深を捕らえた植物と透子を襲った植物は目的を果たしたと言わんばかりに七深を捕らえたまま地面に潜ろうとしたが、その時咄嗟に透子が見付き、そのまま2人は地面の中に消えて行ったのであった。

「私……怖くて何も出来なかった。これじゃあ、『M o r f o n i c a』のリーダー失格だよ……」

「つくし……怖かったんだね」

「落ち着いて。二葉さんは何も悪く無いわ」

リサと瑠唯はつくしを優しく慰める。

「ハックモン」

「2人を攫った相手……間違い無くデジモンだろうな。それに……」

ハックモンは2人を攫った植物の消えた穴を見る。

「この感じ……私がこの前喫茶店で感じた物と同じだ。同一の相手と見ていいだろう」

「……早く2人を見付けないと」

「でもどうやって?」

「私に任せてくれ」

溜唯の問い掛けにハックモンは穴の方に向かい、そのまま目を閉じる。

(執着心、独占欲……。 凄い負の感情を感じる……。 否、此処までの強さ……。最早『執念』と呼ぶべきか……)

「ハックモン……さつきから目を閉じてるけど、何をしているの?」

「私のハックモン、昔から殺気とか悪意って言うのかな? そう言っただ悪い雰囲気何かに敏感なんだ」

「つまり……その雰囲気を読み取って、其処から後を追おうとすると言う事かしら?」

「うん」

つくしと溜唯の疑問に、ましろは分かり易く説明をする。

暫くしてハックモンが目を開ける。

「如何、ハックモン?」

「ああ。こっちだ!」

「行くこう皆!」

ハックモンとましろの後を追って、つくし達も駆け出した。

☆☆

不意に『冷たい何か』が当たる。

「ん……んんっ」

それによって七深は意識を取り戻した。

「此処は……そっか、私……」

七深はこれまでの事を思い出す。

カフェの一件の翌日、自宅のアトリエで透子に中等部の頃に絵画コンクールで最優秀賞を取った絵を見られた事を機に、彼女に自身の過去を話した七深。

そんな彼女に対して透子は、良いアイディアがあると言って来た。

その為に2人きりで話がしたいと言う誘いを受け、今日2人は秘密の会議と言う事で先程の広場に来ていた。

そして5分程たった時、2人は妙な音に気付いた。

「一体何だよこの音？」

そして次の瞬間。

ボゴオオ!

地面から突然現れた触手の様な物が、七深を捕まえた。

「キヤアアアーーー!」

「七深!」

気付いた透子は咄嗟に駆け付け、七深を触手の拘束から解こうとする。

その最中、拘束されている七深は、再び地面が割れて、透子の背後から何かがやって来るのに気付く。

「! 透子ちゃん!」

「ワッ!」

七深の叫び声を聞いた透子は、ギリギリの所でもう1本の触手による攻撃を回避した。

「透子ちゃん!」

すると触手達は用が済んだと言う様子に七深を捕まえたまま、元出た穴の中に潜ろうとする。

「透子ちゃん! 透子ちゃん!」

それを最後に七深の意識は途絶えた。

「透子ちゃん……大丈夫かなあ……ふえ？」

そして七深は自身の状況に気付く。

何故なら今の彼女は手足を植物で縛られている状態で、上から吊さ
れていた。

「えっ!? 何これ!?!」

「漸く目が覚めたか?」

突然耳に届いた見知らぬ声に、七深の体が固まる。

やがて奥の方からゆっくりと声の主が現れた。

「ヒツ……」

七深は思わず声を漏らす。

其処に現れたのは、毒々しいまでの紫色の顔と何本もの触手を生や
したカーキ色の身体が特徴の植物の様な異形だった。

「ああ……。こうして直接見て触ると、本物は違うな」

そう語って植物の異形は、自身の触手で七深を丁重に触るも、七深
の中にあつたのは生理的な嫌悪感だった。

「……っ! 透子ちゃんは……透子ちゃんは何処なの!?!」

「そんなに会いたいなら会わせてやろう。最も、少し仕置きをさせ
てもらったがな」

七深の必死の問い掛けに、植物の異形は視線で促し、七深も其方に視線を向ける。

「イヤアアア―！ 透子ちゃーん！」

七深の叫びが響く。

植物の異形の言った通り、其処には確かに透子の姿はあった。

だが今の彼女は抵抗したのか、まるでぼろ雑巾の如くボロボロに痛めつけられ、傷や痣だらけな上に軽い出血の後が見られる状態だった。

また着ていた服も完全に無くなり、上下の下着だけが彼女の身体を守っている有り様となっていた。

「透子ちゃん！ 透子ちゃん！ しっかりして！」

「安心しろ。 死んではないさ。 あっちが勝手に抵抗してきたから、それ相応の対応をしたままでだ」

植物の異形の異形は侮蔑な視線を透子に向けながら、更に言う。

「全く馬鹿な女だ。 大人しくしてれば痛い目に遭わずに済んだ物を……。 それとも此奴の体は、胸や尻ばかりに栄養が行って、脳味噌には行き届いてないと言う事か。 だとしたら、とんだ阿婆擦れ女だな」

「透子ちゃんを……透子ちゃんを悪く言わないで！」

「だが安心すると良い七深。 お前は俺と共に1つの存在となり、新世界の頂点に立つ存在となるのだから……」

七深は植物の異形の言葉に、困惑とショックの混ざった様子を浮か

べていた。

（何？ 『新世界の頂点に立つ存在』って？ そんな訳の解らない物何かになる為に、あんな化け物に私の全部をあげるの？）

“狂っている”

目の前の植物の異形に対して、七深はそんな印象を抱いていた。

「恐れる事は無い。俺は七深の可愛い容姿、才能、声、耳、目、手足、鼻、髪の毛、脳味噌、臓器……全てを受け入れ、受け止める自信を持っている。……もう苦しむ事は無い。七深の事を悪く言う奴は老若男女問わず、俺が抹殺してやるから……」

七深は植物の異形の言葉を、呆然とした様子で聞きながら思う。

（ああ……これは広町への『罰』なんだな……）

無意識に自身の才能で、周りの人々を傷付けた『罪』。

そして『Morfonica』のメンバー達に才能を隠して、のうと楽しい日々を過ごしていた事への『罪』。

七深は今この一時が、自身の犯した『罪』に対する『罰』の執行されるまでのカウントダウンの様に思っていた。

「さて……お喋りは此処までにして、早速始めよう」

植物の異形は、自身の触手を七深に少しずつ迫らせて来る。

(しろちゃん……つーちゃん……るいるい……そして透子ちゃん……
広町は皆とお別れになるみたい)

七深は全てを受け入れた様に目を閉じながら、内心でメンバーに対して自身の本心を語る。

(でも若し叶うなら……皆ともつと、M o r f o n i c a をやりたかったな)

触手が七深の下に刻々と迫ろうとする。

「バーンフレイム！」

その時突然大きな火球が飛来し、植物の異形は咄嗟に自身の触手で防ぐ。

「今の……」「七深ちゃーん！」

七深が振り向くとその先から、ましろとバオハックモン、そしてリサとサンフラウモンに守られる形でつくしと瑠唯がやって来た。

「七深ちゃん！ 怪我は無い!？」

「私は対した事は無いけど……透子ちゃんが！」

七深の言葉でましろ達が透子の方に目を向けると、痛めつけられてポロポロの彼女の姿が目に入った。

「透子ちゃん……」

「2人共！　これを透子に！」

バオハックモンは自身の赤いマントを外してつくしと瑠唯に渡し、透子に掛ける様に言う。

「己えええ……！　良くも俺の邪魔をしてくれたなあ……！」

そして植物の異形が正体を現した。

「貴方……ブロッサモン？」

「否、似ているが違う」

敵の姿を見たましろは5年前の冒険で出会ったデジモンの事を言及するが、バオハックモンは直ぐに否定する。

何故ならブロッサモンに酷似したそのデジモンは、ましろとバオハックモンの知るブロッサモンと違い、顔色が毒々しい程の紫色、周りの花びらが水色、背中葉っぱと植物はカーキ色に変色しており、明らかに別のデジモンである事を示していた。

「唯のブロッサモンじゃねえ！　ダークブロッサモンと呼んで貰おう！」

「ダークブロッサモン……」

「ダークブロッサモン。　完全体。　植物型。　ウィルス種。　必殺技は『スパイラルフラワーII』と『ポイズンブレス』……」

リサは自身のデーターでダークブロッサモンのデータを調べる。

「如何して七深ちゃんを狙ったの!？」

「そんな物、七深が欲しいからに決まってるであろう!」

そう言っただークブロッサモンは語り出す。

ダークブロッサモンは自信の直属の上司によって、この人間界に送られた後、密かに潜伏活動をしていた。

転機が訪れたのは、ひよんな切欠だった。

その日、彼は自身のエネルギー補給をし終えていた。

『何だ?』

その時騒がしい音に気付き、自身の触手を使ってその騒がしい音の出所を調べさせた。

「『それでは聴いて下さい』」

ダークブロッサモンの気付いた音の正体——それは偶々見たM o r f o n i c a のライブだった。

そしてその瞬間——ダークブロッサモンの世界は一瞬で変わった。

「その時俺はデジモンとしての生を受けて、生まれて初めて『美しい』と言う感情を抱いた。音楽もそうだが、中でも一際心を揺さぶったのか、七深の存在だった……」

周りの観客達の殆どがボーカルのましろの歌声に聴き惚れる中、

ダークブロッサモンの心を掴んだのは七深の姿だった。

ベースを演奏する七深の姿や表情を見たダークブロッサモンにとって、彼女の姿はまるでこの世に舞い降りた人の姿をした『美しい別次元の存在』に映った。

気付けばダークブロッサモンは触手越しと言う形であれ、七深の存在の虜になると同時に強い感情を抱いた。

“ 『彼女を自分だけの物にしたい』 ”

それと同時に、ダークブロッサモンの脳裏に過去にデジタルワールドで聞いた話が浮かぶ。

“ 『嘗てデジタルワールドにいた救世主と呼ばれる人間達は、自身のパートナーデジモンと全てを1つにして得た力で世界を救った』 ”

半信半疑に思えたその話も、今は事実と納得したダークブロッサモンは同時に確信した。

“ 『この少女こそが、自身の新たな存在へと導いてくれる』 ” ーと。

「七深は……七深は俺の物だ……！ 俺は七深と全てを1つにし、新たな存在へと生まれ変わる！」

ダークブロッサモンの告白を聞いたましろ達は戸惑う物、困惑する

物と様々な反応を見せた。

特にましろとバオハックモンに至っては、人一倍戸惑いの様子を見かねていた。

「勝手な事言わないでよ！ 七深ちゃんは貴方の物じゃない！」

「そっちこそ、七深が内心の気持ちを理解して無い癖に随分上から目線な発言をするでは無いか！」

「七深ちゃんの内心の気持ち……？」

「天才的な才能を持っていて、それを当たり前の如く発揮しただけなのに、まるで化け物を見るかの様に蔑み、離れられていった故に『普通』に固執する事しか出来無かった七深の気持ちを！ ……最も其処の金髪女は七深から直接聞かされてたけどな……」

ましろ達は七深の過去とその苦しみを知り、何とも言えない様子を見せた。

「だから……御前達を始末し、七深の全てを貰う！ スパイラルフラワーII！」

ダークブロッサモンは同時に触手の先に付いている花を手裏剣のように飛ばして来る。

「バーンフレイム！」

「カクタステイル！」

バオハックモンとサンフラウモンは迫り来る花を自身の技で打ち消して行くも、あまりの数の多さに苦戦してしまう。

その最中、ましろはダークブロッサモンの様子を見て叫んだ。

「！ バオハックモン！」

「ポイズンブレス！」

バオハックモンが避けると同時にダークブロッサモンの口から紫色の煙が吐き出され、回避し損ねたサンフラウモンは煙の直撃を受けた。

「ウワアアアアー！」

サンフラウモンは苦しい声を挙げると、そのままララモンへと退化した。

「ララモン！ ララモン！」

「御免なさい、リサ……」

リサの呼び掛けに、ララモンは弱々しくも申し訳無さそうに応えた。

「さて次は御前達だが……その前に」

ダークブロッサモンはつくし達の方に視線を向け、その意図を察したバオハックモンが駆け出すと同時に、ダークブロッサモンが行動に移した。

「スパイラルフラワー！！」

「クツ……」

全力で駆け出したバオハックモンは何とかつくし達の所に立つも、技を出す暇も無く攻撃の直撃を受けた。

「ウワアアアアー！！」

「バオハックモン！」

遅れて来たましろはバオハックモンに駆け寄って呼び掛ける。

「フハハ……愚かな奴め」

ダークブロッサモンはバオハックモンの行動を嘲りながら近付き、ましろ達は身構えるも、ダークブロッサモンは途中で動きを止め、彼女達に言い放つ。

「チャンスをやろう。七深を俺に差し出すと言うのなら、見逃してやろう」

「そんな……！ 無茶苦茶だよ！」

「なら俺の餌食になるしか道は無いな」

つくしの反発を、ダークブロッサモンは情け容赦無く一蹴する。

「私が行けば、皆を助けてくれるの？」

そう言って一歩踏み出したのは、七深本人だった。

「広町さん、貴女自分が何言ってるか分かっているの？」

「私が行けば皆が助かるんだよね？ だったら……」

「駄目だよ七深ちゃん！ そんな事したら……！」

「でも！ 私の所為で、透子ちゃんやシロちゃんが……！ 私……これ以上堪えられないよ」

七深の叫びにつくしも溜唯も何も言えない様子を浮かべ、そして七深はダークブロッサモンに問い掛ける。

「本当に……皆を見逃してくれるんだよね？」

「当然だ。俺が今言った言葉に嘘は無い」

「シロちゃん……ハックモン……透子ちゃん……つーちゃん……るい……短い期間だったけど……有り難う」

「駄目！ 七深ちゃん！ 七深ちゃん！」

つくしの制止を無視して、七深は向かおうとするー。

「行くなよ……七深」

その時間こえた声に、七深は足を止めて振り返る。

其処には、バオハックモンのマントで身体を隠した透子の姿があった。

「透子ちゃん……」

「ほお……あれだけ痛め付けたのに、まだ立つ力があつたのか……」

透子はゆっくりとした足取りで、七深の元へ寄った。

「七深。お前は……アタシ達Morfonicaのベースだ。だから……あんな野郎の所へ何か行かせねえ」

「透子……ちゃん」

「ハッ！ それが如何した！ 幾ら七深の一面を知ったからって、所詮「黙れ変態ストーカー植物！」」

透子はダークブロッサモンの言葉を遮る様に叫ぶ。

「例え七深が天才だろうが何だろうが、アタシは七深と一緒にM o r f o n i c aをやりたいんだ！ これはアタシのワガママで、願いたい事何だ!!!」

「透子ちゃん……」

「……如何やら本気で死にたいみたいだな」

「最後にハッキリ言っておくよ。『力づくで振り向かせよう何座、モテねえ野郎のする事だぜ』」

「なら……死ねええええー!!」

ダークブロッサモンは2人に向けて、再び触手の先に付いている花を手裏剣のように飛ばして来た。

「透子ちゃん！ 七深ちゃん！」

つくしの悲鳴が響き、透子と七深は目を瞑る。

「ファイフロース!!」

その時、透子と七深の前に影が現れ、そのまま迫り来る花を全て切り裂いた。

「何だ?!」

ダークブロッサモンの驚きの言葉で透子と七深は目を開ける。

「大丈夫か、2人共？」

「バオハックモン……」

「透子ちゃん！ 七深ちゃん！」

「シロ（しろちゃん）……」

「己ええええ……!」

ダークブロッサモンは先程の攻撃を妨害したバオハックモンと2人に駆け寄ったましろの姿を忌々しげに見る。

「七深ちゃん。私もつくしちゃんも瑠唯さんも……透子ちゃんと同じだよ。『Morfonica』のベースは七深ちゃんだけなの。変わり何ていない。『Morfonica』は……このメンバーで『Morfonica』何だよ」

「七深。付き合いの短い私が偉そうに言えた義理では無いが、ハッキリ言おう。君がいなくなつて、悲しむ人の気持ちを考えるんだ! 私もましろ達もそんな事を望んではない……!」

「透子ちゃん……しろちゃん……バオハックモン」

ましろとバオハックモンの言葉に、七深は静かに泣き崩れた。

「クソオオオオ……! 七深は……七深は俺の物だ……!」

ダークブロッサモンは憤怒と怨みの籠もつた言葉を吐き出した。

「ダークブロッサモン。貴様はさっき言ったな。『嘗てデジタルワールドにいた救世主と呼ばれる人間は、自身のパートナーデジモンと1つにして得た力で世界を救った』と……」

「それが何だと言うのだ!」

「そんなに貴方が望むのなら……その一端、見せてあげるよ。バオハックモン!」

ましろの叫びにバオハックモンは頷く。

その文字がましろのディーアークの画面に表示され、同時にディーアークが光を放ち、その輝きに呼応してバオハックモンも光に包まれた。

「バオハックモン超進化！」

光に包まれたバオハックモンの姿が変化していく。

4足歩行から2足歩行と化し、両腕と尻尾に紅の刃が生まれる。

そして胸にはクリスタルが施され、同時に背中に真紅のマントが施される。

やがて光が収まると、全身刃の攻撃的なスタイルとなった白い竜人が現れた。

「セイバーハックモン!!」

「バオハックモンが……また進化した……」

「綺麗……」

「セイバーハックモン。完全体。竜人型デジモン。データ種。

必殺技は跳び蹴りの姿勢から足の刃で敵を突き刺し貫く『レッツジストレイド』、マシンガンのように口から炎弾を連射し敵を焼き尽くす『メテオフレイム』、尻尾と両腕に装備された三つの赤い刃で斬りかか

る『トライデントセイバー』……」

セイバーハックモンの姿を初めて見たましろ以外のM o r f o n i c aの4人とリサは、様々な反応を見せる。

「カツコ付けやがって……喰らえく!!」

忌々しげな表情を浮かべながら、ダークブロッサモンは再び触手の先に付いている花を手裏剣のように飛ばして来た。

「危ないー!」

七深は叫ぶも、セイバーハックモンは両腕と尻尾の赤い刃を振るい、ダークブロッサモンの飛ばした花を全て一蹴した。

「な……何い!?!」

「凄……さつきまであんなに苦勞して裁いてた花が一瞬で……!」

セイバーハックモンは無言のまま、ゆっくりダークブロッサモンの下へ歩いて行く。

「クソ!・クソ!・クソ!」

ダークブロッサモンはセイバーハックモンに触手の先に付いている花による連続攻撃を浴びせるも、セイバーハックモンは攻撃を受けてるにも関わらずに歩く事を止めない。

一方ましろの方も、セイバーハックモンにダークブロッサモンの攻撃が当たる度に所々傷付く。

「何で?・何でましろちゃんが傷付いてるの?」

「トライデント……セイバー!!」

其処からセイバーハックモンは、尻尾と両腕に装備された三つの赤い刃で一瞬の内にダークブロッサモンの全身を切り裂いた。

「グワアアアアー!!」

「メテオフレイム!」

「ギャアアアアー!!」

そして振り返り様にマシンガンのように口から炎弾を連射し、ダークブロッサモンを焼く。

この瞬間、勝敗は誰の目にも明らかだった。

「やった! シロとハックモンが勝った!」

「シロちゃん……」

「大丈夫だよ七深ちゃん。 私は無事だから」

ましろとセイバーハックモンの姿を見た他のM o r f o n i c aの面々とリサとララモンから歓声上がる。

「フツ……ハハハハハ……」

その時、全身を炎に包まれたダークブロッサモンが不気味に笑う。

「そうか……お前とそこの白髪の女、『あの話の救世主達』の1組か……!」

「そうだとしたら何だ?」

「救世主として持て囃されて……さぞ良い御身分だなあ……! 所詮、持っている物を持っている奴等に……持っていない者達の……苦しみや悔しさなど……一生分かる筈もない! お前達……はいずれ

……味わうだろう……！ 持っていない者達の持つ……闇を……」

呪詛の様な言葉を吐いたダークブロッサモンは、そのままデータの粒子となって消えた。

ましろとセイバーハックモンは、静かにダークブロッサモンの消えた後を見ていた。

☆☆

「はよー！ ごめんごめん、遅くなった！」

「透子ちゃんくん！」

一週間後。

七深の家のアトリエにて、透子の元気な一声が響き、七深が嬉しさのあまり透子に抱き着く。

「透子ちゃんや七深ちゃんが元気になって良かった……」

「元気なのは良い事だけど……無理はしない様に心掛けなさい」

つくしも2人の様子に安堵し、瑠唯は無表情ながらも2人を思いやる様に声を掛ける。

ダークブロッサモンの一件から暫く経った後、七深は透子と共にバイト先のファミレスでましろ達とリサに対して、透子の語った良いアイデア——七深のコンクールの絵をプリントした新作Tシャツを披露した。

新作Tシャツは4人やパートナーデジモン達からもとても好評であり、その後透子がSNSで発表した事でかなりの反響を呼ぶ事となった。

その翌日の練習時に、七深は意を決して自身の過去をましろ達に話し、彼女達はそんな七深を知って純粋に褒めて且つ改めて受け入れた事で、Morfonicaの結末は更に深まる事となった（因みに絵の件は、七深本人の希望でMorfonicaの5人とハックモンの秘密と言う事になった）。

一方ましろは少し離れた所から4人のやり取りを見ながらも、少し浮かぬ表情をしていた。

『救世主として持て囃されて……さぞ良い御身分だなあ……！ 所詮、持っている物を持っている奴等に……持っていない者達の……苦しみや悔しさなど……一生分かる筈もない！ お前達……はいずれ……味わうだろう……！ 持っていない者達の持つ……闇を……』

ましろの脳裏にダークブロッサモンの言葉が、消えては浮かんでいた。

デューアークの画面越しからハックモンも、ましろの様子を気にかけていた。

彼女達はダークブロッサモンの語った『自身のパートナーデジモンと全てを1つにして得た力』を聞いて、直ぐに『あの力』の事を言っていると同時に気付いてしまっていた。

それはー『このデジモンをここまで歪めてしまったのは、自分達を含めた『あの冒険』を共にした5組である』と言う事。

確かにダークブロッサモンが七深を襲った切欠は偶然的ではあるが、結果的にそれを加速させてしまったのは、自分達の『あの力』の存在である事を考えると、結果的に複雑な感情がましろの心中を支配していた。

『ましろ』

「ハックモン？」

『ましろは……あのままダークブロッサモンと七深が1つになっても良かったと思っっているのかい？』

「……っ！ そんな事は無いよ！ 七深ちゃんは……大切な『仲間』だから。見捨てる何て出来ないよ」

『それでいいんだ』

ハックモンはましろの気持ちを聞き、優しく温かい眼差しを向ける。

『正直、こんな事を言っても慰めになるかは分からないのは自分でも分かっている。……でも、それを承知の上で聞いてほしい。ましろ、君は本当に心優しい少女だ。だからこそ、君と私は七深や皆を守る為に奴と戦った』

ましろはハックモンの言葉を黙って聞いている。

『ましろ。私は君に自分の信じる気持ちの儘に歩んでほしいと思っている。若し悩んだり困ったりするなら……共に探して行こう』

「ハックモン……有り難う」

ましろは少し落ち着いた様子で、ハックモンに礼を述べる。

「しろちゃん！ そろそろ練習、再開するよ！」

「うん。今行くよ」

ましろは七深達の方に向かう。

(ましろ……その優しさを忘れないでくれ)

ハックモンは内心でそんな気持ちを抱きながら、ましろ達の練習風景を見守っていた。

☆☆

とある高層マンションの近くの広場のベンチにて、六花は物思いに考えていた。

(香澄さん……やっぱり凄いなあ……)

“ 『『グレイド……スラツシュ!!』』 ”

“ 『グオツ……馬鹿……な……』 ”

(それに……ましろちゃん)

“ 『セイバーハックモン』 ”

“ 『レツジストレイド!!』 ”

“ 『グエエエー!?!』 ”

脳裏に浮かんだのは、少し前に行った『ガールズバンドカーニバル』の一件で隠れて見ていたデジモン騒ぎと、それをパートナーデジモンと共に鎮圧する2人の姿。

その時の姿があ那时的六花にとっては、まるで『英雄』の様に見える

ていた。

(でも……私にはどうあつたつてなれない)

しかし今の六花にとって、2人の姿は『憧れ』であると同時に、『己の惨めさ』を痛感させられる程に、眩しくて手の届かない、遠い存在となっていた。

(私にも……『あの力』があれば……)

そして六花の脳裏に、その後に出会った2人の存在が浮かぶ。

『貴女がアサヒ・ロツカさんね?』

『あのどちら様ですか?』

『申し遅れました。私はガールズバンド、『RAISE|A|SUILEN』のプロデューサー、チュチュです。そして……』

『僕はアンジェロ。RAISE|A|SUILENのマネージャーを担当しているよ』

『わ、私に一体何の様で……』

『貴女の事は、マスクングから聞いているわ』

『ますきさんから?』

『ああ。彼女の話聞いて、僕もチュチュも君に興味を抱いてね。こうして声を掛けた訳さ』

『御言葉ですけど……私は其処まで大した腕前の人では無いです。それじゃあ……』

『トヤマ・カスミとクラタ・マシロ』

立ち去ろうとした六花の足が止まる。

『貴女は疑問に思っているでしょう? 何故彼女達が、彼処までに強

いのか?』

『……あなた達は香澄さん達の何を知っているんですか?』

『『全て』……と言ったら?』

チュチュの言葉に六花の瞳が揺れ動く。

そしてアンジェロは、六花に一枚のメモ用紙を渡す。

『これ……』

『其処には僕とチュチュの住んでいるマンション、彼女のスマホの電話番号が書いてある』

『本当はもう少しTalkをしたいのだけど、私達にも貴女にもSomethingがあるし、改めて機会の場を設けて話した方が良いと判断したのよ』

『まあ、これは強制と言う訳では無いから、興味が無いなら無理に來なくても良い』

そう言うと、2人は踵を返して六花の下から離れて行き、途中で足を止めて振り返る。

『最後に少しだけ。君はもう少し、自分の感情のコントロールの仕方と、自分の意志を徹底的に貫く事を覚えた方が良い』

アンジェロはそう言つて、再びチュチュと共に立ち去って行つた。

(『自分の感情のコントロールの仕方と、自分の意志を徹底的に貫く事を覚えた方が良い』……か)

アンジェロの言葉が六花の中で強く反響している。

やがて意を決した六花は、自分のスマホを取り出して、登録した番号に掛ける。

『その様子……Answerは見付けたみたいね』

「……はい。今、チュチュさんのマンション近く前まで来ている所です」

『OK. 丁度部屋には他のMemberも揃っているから、付いたらパレオの案内で此方に来なさい。待っているわ』

チュチュの連絡が切れる。

(私は変わりたい……！ このままこんな所で終わりたくない！)

それを確認した六花は迷う事無く、チュチュのマンションへと進んで行ったのであった。

第19話 進撃、発酵紅竜2020

「う……ううん……」

深夜。

自室のベッドで眠る沙綾は酷く魘されていた。

『ギャオオオーー!!』

『ウワアアーー!!』

『グラウモン!!』

『ウワアア(キヤアア)ー!!』

『父さん! 母さん! 純! 紗南!』

やがて爆発が収まる中、目の前の光景が沙綾の視界に飛び込んで来る。

『あ……あ……』

それは正に、『地獄』とも呼べる凄惨な物だった。

原型を留めない程に激しく焼かれた父の遺体。

上半身が消し飛んだ母の遺体。

五体バラバラの状態になったり、岩に押し潰され、潰れたトマトの様な状態になった弟と妹の遺体。

『父さん……母さん……純……紗南』

同時に沙綾の意識が覚醒する。

ベッドから上半身を起こした沙綾は、ふと部屋の時計を見る。

「まだ2時か……」

それと同時に喉の渇きを感じた沙綾はベッドから起き上がり、そのまま下のリビングの方へ足を進めた。

「ふう……」

リビングに付いた沙綾は、冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを出して、中身をコップに入れてそれを1杯飲み、そのままペットボトルを冷蔵庫に戻した後、再びベッドに入ると一息付いた。

彼女の脳裏に浮かぶのは、先程見たあの悪夢。

今の沙綾にはリアリティが強く感じられて、唯の夢として片付けられ無かった。

ふと沙綾は数日前の事を思い出す。

沙綾が『ガールズバンドカーニバル』の一件を知ったのは休日明けの月曜日の事であった。

当事者であった香澄と彼女から話を聞いた有咲から、『完全体』の事を聞かされた沙綾が真っ先に心配したのは香澄の事だった。

嘗ての経験もあって大した怪我では無かったとは言え、それでも沙綾にとって、高校生になって最初の友達でもあり、同じポピパのメンバーである香澄の怪我は見過ごす事が出来ず、不安な気持ちを抱いて

しまっていた。

更にその数日後には彼女の通う花女で完全体デジモンが出現し、犠牲者も出てしまった。

有咲も怪我をし、その事を語る有咲とワームモンの悲しみの混じった表情は、今も沙綾の脳裏に焼き付いている。

「ギルモン……」

沙綾は自身のディーアークを見て、パートナーの名前を小さく呟く。

夢で見た右腕だけの状態になったギルモンの姿が脳裏を過る。

(私……これから先、皆を守れていけるのかな?)

沙綾の内心の問い掛けはそのまま、小さく霧散していった。

☆☆

「さーや、疲れてるの?」

翌朝、何時も通り学校に登校し、午前中の授業を終えた後、昼休みの時間になったので、沙綾は他のポピパのメンバーと共に校内の庭で昼食を食べている最中、前述の言葉を香澄に投げ掛けられる。

「えつと……如何したの香澄？」

香澄の発言に沙綾は不思議そうな様子を見せる。

「だって今日の沙綾、少し難しそうな顔をしている事が多いんだもん」
「そんな風に見えてたの？ 今日の私って……」

『僕も少し気になっていたよ』

「御免ね沙綾ちゃん……実は私も香澄ちゃんと同じ事思ってたの」
「若しかして……有咲とおたえも？」

「うん」

「ああ……何時も違うなあって言うのが、顔の様子からはっきりと伝わってきたぞ」

『うん。僕も皆と同じだったんだ……』

沙綾の問い掛けに香澄達ポピパの面々もパートナーデジモン達も全員、同調する様子で返答する。

『さーや、何処か痛いのか？』

「ううん……。そう言う訳じゃないの……」

ディーアークの中のギルモンの問い掛けに、沙綾は空元気な状態であるが受け答えをする。

「さーやちゃん、無理しちゃだめだよ」

「さーや……有咲の玉子焼き、食べる？」

「いや、何で私の何だよ!？」

「りみ、おたえ、有咲……有り難う」

「さーや」

沙綾が香澄の方を向くと、香澄は普段と少し違う真剣な様子で見えており、沙綾はそんな香澄の様子に内心戸惑いっつも応じる。

「若し今さーやが言いたく無いのなら、無理には聞かないよ。でもこれだけは覚えていて。さーやは1人じゃないから」
「……香澄、有り難う」

その後は特に何事も無く学校生活を終えた沙綾は、そのまま自分の何時ものルーティンを過ごし、その日を終えたのだった。

☆☆

翌日、沙綾はモヤモヤとした気持ちを抱えながら、歩いていた。

今日は有咲が家の用事でいなくて蔵が使用出来ず、実家のパン屋も両親が親戚への用事で弟と妹を連れて今日から3日程家を空けてしまっている為、こうして沙綾はドラムの練習の為に、『CIRCLE』に向かっていた。

「こんにちは。今日は「ワアアア！」……な、何!？」

『CIRCLE』に到着した沙綾の耳に悲鳴が入ったので、慌て現場に向かう。

「大丈夫です……か……?？」

現場に駆け付けた沙綾の言葉が途切れ途切れになる。

「ぷぷぷぷ」

「ぷぷぷぷ」

「ぷぷぷ」

「あわわわ〜」

「さよこ〜」

「やられた〜」

「2人共大丈夫？」

沙綾の目の前には、沢山の幼年期のデジモン達の泡攻撃を受けて、目を回してる香澄とドルモン、心配するまりなの姿が飛び込んで来た。

「……………！ 香澄！」

一瞬ポカンしてた沙綾だったが、直ぐに気を取り直し、慌てて香澄達の所に向かって行った。

☆☆

「もう……………吃驚しちゃったよ……………」

「御免なさい……………」

あの後、香澄とドルモンは沙綾にかなり心配されてしまい、幼年期のデジモン達がお昼寝の時間に入ったタイミングになって、こうしてお互いのパートナーを交えての会話をしていた。

沙綾は悩みながらも、意を決し香澄に自身が見た悪夢の事を話した。

「そっか……………そんな事があったんだね……………」

「……………香澄とドルモンは……………平気なの？」

「ん〜？」

「デジモンと戦う事に対して……怖くは無いの？」
『怖くない』って言えば、嘘になるかな……。 デジタルワールドを冒険してた時は、トラブルや危険な目に遭う事何て、殆ど日常茶飯事だったから……」

沙綾の問い掛けに対して、香澄はドルモンの方に視線を向けて語る。

「でもね……ドルモン達と出会って一緒に冒険してく内に、このデジタルワールドが『第2の故郷』って思える様になってきて……。『元の世界に帰りたい』って気持ち segments、『皆と過ごすこの世界を護りたい』って言う物に変わったんだ……」

「香澄……」
「勿論、今でも『怖い』って思う事はあるよ。 ……でも怖いからって、何もしいまま護れなくて失っちゃう事の方が……もつと辛いんだよ」

香澄とドルモンの脳裏に、デジタルワールドの冒険の中での戦いの記憶がまるで昨日の事の様 to 浮かんでくる。

「だから私とドルモンは闘うよ。 だって……冒険やバンドを通じて出会った皆の事が、とっても好きだから」

沙綾とギルモンの目には、香澄とドルモンの姿がとても大きく映っていた。

「……香澄とドルモンは強いね」
「……それは大きな間違いだよ」
「……僕達だって、最初から彼処までの強さを持っていた訳じゃない。中には救えなかったデジモンだっているよ」

「沙綾。 私は有咲や紗夜さんや日菜さんみたいに頭が良い訳じゃない」

いいし、偉そうに上手な事は言えないけど……これだけは言うよ。大切なのは『自分が如何したいのか』って事だよ」

「『自分が如何したいのか』……」

「覚えている？ 去年の文化祭ライブの前に、沙綾の家に泊まった時の事」

沙綾自身、忘れる訳が無い。

沙綾にとってそれは、自身がポピパに加入する切っ掛けに関わる思出なのだから。

「今更な告白になっちゃうけど……私ね、ポピパをやっている時に沙綾の過去の事を知った時、沙綾を誘う事に迷っちゃってたんだ……」

香澄からの意外な告白に、沙綾は目を見開く。

「でもね……。有咲にその事を話した時、『お前は本当にそれで良いのか？』って真っ直ぐに言われて、そして自分なりに考えて、『私は沙綾と一緒にバンドをやりたい』って決めたの。だから私は、こうやって一緒にポピパの活動をする未来を手に入れた」

沙綾は香澄の話をただ黙って聞いている。

「きつと沙綾にもあるはずだよ。『自分なりの答え』が」

沙綾は香澄の言葉を聞いて思案する。

「香澄ちゃん！ 沙綾ちゃん！ ちょっと手伝ってー！」

「！ 行こうさーやー！」

「う、うん！」

香澄達は、まりなの下へ掛けていく。

(『自分なりの答え』……か)

沙綾は先程の香澄の言葉が、自身の内心で反響しているのを感じていた。

☆☆

翌日、沙綾はカメラを持って出掛けていた。

このカメラはつい最近になって始めた沙綾の趣味である。

その為、時々こうして時間を見付けては、街の色々散策しながら気に入った物や風景などを撮るのが、沙綾の日課となっていた。

「あれは……りみ！ 蘭！ モカ！」

道中見知った相手達の姿を見付けた沙綾は、そのまま声を掛けて近づく。

「あつ、沙綾……」

「チヨコオオ……」

「おおお……心の女神よおお……」

「りみとモカ……何かキヤラ崩壊してない？」

モカの様子の違いが気になった沙綾は、蘭とアグモンに問い掛ける。

「2人共、沙綾の家のパンが食べられないショックで、昨日からずっとあんな状態なの……」

「ああ……」

りみとモカが普段から『山吹ベーカリー』の常連客である事は、沙綾を始めとした山吹家の面々やガールズバンドのメンバー達には周知の事実である為、沙綾は実家のパンが食べられ無い事に落ち込む2人の様子に、半端申し訳無い気持ちの含んだ苦情を浮かべていた。

「パン〜。パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン……」

「チョコココロネチョコココロネチョコココロネチョコココロネチョコココロネ……」

「2人共落ち着いてー！ー！」

『りみ！ それチョコココロネじゃねえよ〜！』

その後沙綾はギルモンや蘭達と協力して、何とかりみとモカを落ち着かせる為に、近くの広場で向かう事になった。

りみとモカの2人も、道中で沙綾と蘭が可能な限りの範囲で購入した大量のパンやチョコココロネを食べる事によって、広場に着いた頃には、大分落ち着いた状態になっていた。

「有り難う沙綾ちゃん〜」

「モカちゃん、復活〜♪」

「いや、これ位対した事無いよ」

パンを頬張るりみとモカの姿に、沙綾は安堵の浮かべて見ている。

「モカ……アンタ本当は前世でパンだったんじゃない？」

「まさか……いや、有り得ない話でも無いかも」

蘭はパンを頬張るモカを見ながら一言眩き、沙綾も一瞬否定しそうになりつつも、モカの普段の様子を見て、ある程度の同意を示す。

その時ふと、沙綾は気付く。

(ああ……そっか。この日常が私にとっての居場所なんだ)

実家で焼いたパンを沢山の人に届ける事。

高校生活の傍ら、香澄達と共にポピパとして活動をする日々。

そして、ギルモンと一緒に過ごす時間。

1つ1つは小さい物だけど、自分にとってはどれも掛け替えの無い宝物。

(私、今過ごすこの時間が……一番楽しくて、大好き)

沙綾は内心でその想いを噛み締めながら、持っているカメラのレンズ越しから、りみ達を見ていた。

しかし次の瞬間、沙綾の表情が必死な物になる。

「危ない！」

2人の下に来る黄色いレーザーの存在に気付き、咄嗟に叫ぶ。

「アグモン！」

「応！」

咄嗟に駆け出した蘭とアグモンが2人を抱きしめて回避した事により、黄色いレーザーは先程までりみとモカがいた所に命中し、爆発した。

「りみ！ モカ！ 蘭！ アグモン！ 大丈夫!？」

「な、何とか……」

「蘭とアグモンが来たから、こっちも何とか……」

「アタシも大丈夫……」

「俺も生きてるよ……」

ギルモンをリアライズして駆け付けたの沙綾の呼び掛けに4名は無事を伝える。

安堵する沙綾と同時に、先程黄色いレーザーが飛んで来た方角から巨大な何かが現れる。

それは金色の角と紺色の体色の恐竜と見違えんばかりの巨大な体をしたカブトムシであった。

「ライノカブテリモン。 ハイブリッド体。 昆虫型。 ヴァリアブル。 必殺技は『コンデンサストーム』と『サンダーレーザー』……」

するとライノカブテリモンは、自身の巨大な角から超高压電流を空に向けて放ち始める。

そして放たれた超高压電流はそのまま、ライノカブテリモンと沙綾達のいる辺り一帯を包み込み、巨大なドームの様な物を精製する。

「と、閉じ込められちゃった……」

りみがショックな様子で眩く。

「蘭！」

沙綾の言葉に蘭は頷く。

「ギルモン（アグモン）！」

「うん（ああ）！」

—EVOLUTION

「ギルモン（アグモン）進化!!」

ギルモンとアグモンは、光と共に一斉に進化する。

「ブイドラモン！」

「ジオグレイモン！」

進化した2体は、ライノカブテリモンへと向かって行く。

「プラズマブレイド！」

「ホーンインパルス！」

それぞれ両肘のブレイドと巨大な角による一撃を浴びせるが、ライノカブテリモンは平然とした様子である。

グラウモンは咄嗟にライノカブテリモンを押さえつけるが、相手の強力な力を前に徐々に押され始める。

「フンギギギギギ……！」

しかしグラウモンも沙綾達を守ろうと、自身の力を必死に込め続ける。

「グラウモン……！」

沙綾は不安そうにグラウモンを見つめている。

『大切なのは『自分が如何したいのか』って事だよ』

(そうだ……弱気なっちゃ駄目。此処でグラウモンを信じてあげなきゃ、りみ達を守れないし、何よりグラウモンの想いを裏切っちゃやう！)

沙綾の脳裏に昨日の香澄の台詞が通り、それによって沙綾は気を持ち直し、自身のディーアークを両手で握り締めながら強く願う。

(グラウモン……。 貴方の痛みや苦しみ、私にも背負わせて！)

「ウオオオオオオオー!!」

「グラウモooooooooooon!!」

沙綾とグラウモンの叫び声がリンクし合った。

その文字が沙綾のデイーアークの画面に表示され、同時にデイーアークが光を放ち、その輝きに呼応してグラウモンも光に包まれる。

「グラウモン超進化！」

光に包まれたグラウモンの姿が変化していく。

体はより大きく巨大化し、上半身は超金属『クロンデジゾイド』でメタル化されていく。

両腕は鋭い刃の付いた金属製の物となり、両胸には砲門、両肩には2基のバーニアが備わり、背部の部分から帯の様な金属、『アサルトバランサー』が伸びる。

やがて光が収まると、其処には鋼の鎧を纏った赤き機械龍の姿が現れた。

「メガログラウモン！」

「これが……グラウモンの完全体……」

「メガログラウモン。完全体。サイボーグ型デジモン。ウィルス種。必殺技は両腕の『ペンデュラムブレイド』で敵を切り裂く『ダブルエッジ』と両胸の砲門から放つ『アトミックブラスター』……」

沙綾達はメガログラウモンを見ながら、各々の反応を見せる。

「ウオオオオオオー！！」

メガログラウモンの叫びに呼応する様に両肩の2基のバーニアから火が噴き、そのままライノカブテリモンを押し返して行く。

「……！」

ライノカブテリモンは驚きの様子を見せながら押し返され、自身の作り出した超高压電流のドームを突き抜けて行った。

そして態勢をライノカブテリモンは、そのままメガログラウモンに向かつて突進して行き、メガログラウモンも迎え撃つ。

激しいぶつかり合いの中で、ライノカブテリモンの巨大な角の一撃が、メガログラウモンのボディに刺さる。

「クツ……！」

メガログラウモンの表情が歪む。

「ウツ……！」

同時に沙綾も僅かに体勢を崩す。

「グウウ……！」

「ウウウ……！」

更にライノカブテリモンは角から電撃を放ち、直撃を受けたメガログラウモンは苦痛の声を漏らし、沙綾の体にも痛みと痺れが襲う。

（これが完全体の力……！ 香澄達はこんな痛みを受けながら、戦っ

ていたんだ……!」

沙綾は心中でその力の大きさに驚きながらも、必死に耐える。

「沙綾ちゃん……」

沙綾の様子を、りみが心配な様子で蘭達と共に見ている。

(私は……ううん、私達は……絶対に守ってみせる!!)

沙綾はダメージを受けても尚も諦めず耐え、そして行動に出た。

「行っけー!」

沙綾の叫び声を聞いたメガログラウモンは、目を力強く見開く。

そしてライノカブテリモンの角の一撃が、再び迫ろうとする。

「ダブルエッジ!」

しかしメガログラウモンは、両腕の『ペンデュラムブレイド』で、迫り来るライノカブテリモンの角を力強く切り裂いた。

「……!!」

自慢の角を両断されたライノカブテリモンは、苦痛の表情を浮かべる。

「ウワアアアア……!」

更にその隙を付いて、メガログラウモンは背部の部分から伸びる

『アサルトバランサー』を伸ばし、ライノカブテリモンのがら空きのボディに連続で貫き刺して行く。

「……………」

やがて暫くすると、其処には最早限界の様子を見せるライノカブテリモンの姿がいた。

「メガログラウモン！」

「一気に決めるぞ……………」

そしてメガログラウモンの両胸の砲門に紅い光が集まって行く。

「アトミック……………ブラスター!!」

沙綾とメガログラウモンの叫び声と同時に、両胸の砲門から真紅の光線が放たれる。

「……………!!!」

直撃を受けたライノカブテリモンは、驚愕の様子を浮かべながら、そのままデータの粒子と化して消滅したのだった。

ライノカブテリモンの完全な消滅を確認すると、メガログラウモンは退化してギギモンの姿と化す。

「ギギモーン!!」

沙綾は自身の痛みなど気にも止めず、ギギモンに駆け寄って抱き締

めた。

「さーや……ギギモン、みんなまもった……」

「うん……！　そうだよ……！　有り難うギギモン……！」

「さーや……だいじょうぶ？　ギギモン、ちゃんとここにいるから……」

ギギモンの言葉を余所に、沙綾はギギモンを抱きながら終始泣いていたのだった。

☆☆

「そっか……。　ギルモンも完全体に進化したんだね」

後日の花女の中庭。

現在昼休みと言う事もあって、ポピパの面々は昼食を食べている最中であつた。

「うん。　香澄の御陰だよ」

「へっ？」

沙綾の突然の御礼に、香澄がキョトンとした様子を見せる。

「あの香澄の言葉が無かったら、私……絶対に折れちゃつてた。　だから、有り難う」

香澄と彼女のディーアークの中にいるドルモンは、優しく微笑み返した。

「……それにしても」

チラツと2人は視線を向ける。

「うまうまだよ〜!」

其処には普段より倍の量のチョココロネを食すりみの姿があつた。

「りみりん、何だかとっても御機嫌だね」

「3日ぶりに、家のチョココロネを食べられたんだからね」

「しかも、その所為か何時もよりもチョココロネの量が多いな……」

『このままだと、体がチョココロネになっちゃうんじゃない?……?』

ワームモンの言葉に、香澄達はその様子を想像する。

『御免ね……。私、体がチョココロネになっちゃって、もう演奏が無理だから、ポピパを辞めるね』

香澄は顔を青ざめさせると、『りみり〜くん!!』と叫んでりみに抱き付く。

「ひゃあ!? か、香澄ちゃん……?」

「例えりみりんがチョココロネになっちゃっても、りみりんはポピパのベースだからね。だから、早まっちゃ駄目だからね〜!」

「えっ……と、取り敢えず落ち着いて……」

沙綾は苦笑しつつ、見守る。

(ああ……皆と過ごすのは、本当に楽しくてー大好き)

「さーやく！ りみりんが！ りみりんが！」

「ほくら、落ち着いた落ち着いた」

「沙綾……お母さんだな」

「沙綾ママ」

「キヤア、おたえも落ち着いて！」

ポピパの5人の穏やかで長閑な様子を、他の生徒も優しく見守っていた。

☆☆

無数の星が瞬く夜。

レイヤは1人、夜の帰路を歩いている。

「もしもし其処の御姉さくん？」

そんな彼女の目の前に現れたのは、茶髪の嫌みな感じのレイヤより少し年上の男を筆頭とした如何にも柄の悪い風貌の3人組の若者だった。

「何か用かな？」

「へっへっへ……実はアタシら、ちょーっと困った事になっていて……」

「俺等にちよつと金を恵んでくれよ？」

茶髪の男の右側の黄色いメッシュを入れた派手な服装の女と左側の短髪の凶体のデカイ男が、下衆な視線を此方に向けていた。

「悪いけど、アンタ達に渡す金はこれっぽっちも無いわ。 さつさと消えて」

「そく言わずにさあく、そんなに怒ると綺麗な顔が台無しだよ♪」

「じゃあさ、金は良いから一発やらせてくれよ！ 御姉さん、結構スタイル良いしさー！」

茶髪とデカイ短髪の言葉の台詞を無視して、レイヤは改めて言い放つ。

「失せろ。 アンタみたいな屑共に渡す物は一つも無い」

呆気にとられる3人を無視して、レイヤは立ち去る。

「……舐めんじゃねえぞ糞アマアアー！」

「その代わり」

次の瞬間、無数の何かが貫く音が鳴る。

「アンタ達には、これをあげる」

そう言ったレイヤの目の前には――突然空から現れた無数の剣に貫かれた3人の若者達の姿だった。

レイヤは、異形の物となった自身の右腕とその手に握られた剣を一瞥して見る。

『フン……品行の欠片も無い奴らな事だ』

レイヤの持つデューアークの画面に映る影が、侮蔑の言葉を投げる。

その瞬間、3人の若者達の全身が灰となって、一齐に地面に崩れ落ちた。

レイヤは3人の若者達が完全に灰化したのを確認すると、手っ取り早く自宅に戻る為に、己の姿を異形へと変え、夜空に飛び立つ。

(花ちゃん……若し今の私のこの姿を見たら、如何思うかな？ 花ちゃんと一緒に慣れるなら、私、どんな事だつてする覚悟は出来てるんだよ……！)

幼馴染に対しての強い決意を胸に秘め、レイヤは自宅へ向けて、夜空の中を飛び進んで行くのであった。

第20話 姉妹の満開

「御姉ちゃん！ 早く早く！」

「日菜、そんなに急かさないの！」

日菜の陽気な声に、紗夜は注意しつつもその表情は楽しそうな物だった。

現在2人が来ているのは、東京の都市部から離れたとある山奥。

何故2人がこんな場所にいるのかは、2日前に遡る。

☆☆

「御姉ちゃん！」

氷川家の紗夜の部屋に突然、日菜が飛び込んで来る。

「日菜……部屋に入る時はノックをしなさいって、言っているでしょ……」

「それは謝るけど……それよりも大変何だよ！」

「一体何なの……？」

「今日商店街で福引きがあつてね。私も面白そうやってみたら、これが当たっちゃったの！」

そう言って日菜が見せて来たのは、2枚のチケットだった。

「『ペアで行く2泊3日の温泉旅行』……？」

『そつ！ しかも1等賞だぜ!!』

「ねっ？ 一緒に行こうよ〜！」

「随分唐突ね……。大体、私じゃなくてもパスパレの皆さんや他の人を誘えばいいじゃない……」

「それが彩ちゃんも千聖も御仕事で無理だし、麻弥ちゃんもイヴちゃんも用事や部活の大会に向けての練習があつて無理なの……」

「そうは言っても……。私にもRoseliaの練習があるから……」

その時、突然紗夜のスマホが鳴ったので、紗夜は手に取る。

「湊さん？」

紗夜は直ぐにRoseliaのグループChatを確認すると、其処には『此処の所、喉の調子が悪くて病院に行ったら、『暫くの安静が必要』と医師に言われた為、少しの間練習を休みにする』と言うメッセージが来ていた。

「湊さん……」

紗夜は直ぐに様子を気にしてメッセージを送ると、『今回は少し重くて、完治には短くても4、5日は懸かる』との返信が届いた。

これによつて、Roseliaは実質数日間の活動休止を余儀無くされてしまったと言う事である。

友希那からは謝罪のメッセージが来ており、紗夜は丁寧に『完治の為に、ゆっくり休んで下さい』と言う主旨のメッセージを送ると直ぐにスマホを置き、ルナモンと相談する。

『どうするの紗夜?』

「そうね……。折角だし行ってみようかしら?」

「本当!?! やった〜!」

紗夜の言葉を聞き、日菜が大きく喜ぶ。

「大げさね……」

「だって此処の所、家と学校以外で一緒に居られる時間が無かったんだもん。嬉しいに決まってるじゃん!」

紗夜は日菜の言葉で此処最近を振り返って、思い直す。

『旅行かぁ……楽しみだぜ』

『確かにこの世界に来てから……私達、あんまり遠い所とかに行つた事無いもんね』

コロナモンとルナモンの言う通り、ガールズバンドメンバー達のパートナーデジモン達は、パスパレの芸能活動の関係で遠方のロケなどに同行するコロナモンとテイルモンを除けば、基本的に人間界での行動範囲がこの都内位しか無い者の方が多い。

ルナモンもその中の1体である為、人間界に来てから、少し遠くの方に行くのが初めてなのもあって、内心嬉しさを隠しきれない様子だった。

そして翌日、つまり前日に万全な準備を終えた2人と彼女達のパートナーデジモンは、こうして今に至るのであった。

☆☆

「それにしても、此処は空気がおいしいわね」

「ええ。それに都市部と違って、静かで落ち着くわ」

歩きながら周りの景色を見るルナモンは、この場所の澄んだ空気と心地良い雰囲気堪能している。

「……紗夜。日菜の事……」

「有り難うルナモン。……でも良いのよ。仮に結ばれたとしても、それでハッピーエンドで終わる程、現実は甘くない」

「……確かにそうだけど……でもそれじゃあ、紗夜が可愛そうよ……」
「あの子の幸せの為なら、私はこの位傷付いても構わないわ」

そう語る紗夜の姿を、ルナモンは切なそうに見ている。

氷川紗夜と氷川日菜。

この双子の姉妹の関係は少し特殊であり、同時に複雑な物であった。

幼い頃から紗夜の事をとて慕っていた日菜は、紗夜が興味を持つて始めた物事には殆どと言って良い程に関わっていた。

しかし『努力型』の紗夜に対し、『天才型』の日菜はその持ち前の才覚で、あっさり紗夜の積み上げてきた物乗り越えて行った。

（私が何をやっても、日菜は直ぐに私の築いた物を壊して、一歩先に向かってしまう）

何時しか紗夜は日菜の天才的な才覚に対して、強烈なコンプレック

スと恐怖を抱く様になっていた。

そしてある日を境に、紗夜は日菜の事を避ける様になり始めた。

日菜の方も、紗夜が避ける原因が自分である事を知ってからは、姉との接し方に戸惑う様になり、2人の関係はより拗れていった。

そして2人がデジタルワールドに飛ばされ、それぞれのパートナーデジモンであるムンモンとサンモナーラー後のルナモンとコロナモンに出会ったのは、そんな時であった。

日菜は持ち前の明るさで自身の使命を受け入れる一方で、紗夜は冷静さを装いつつも、日菜との関係性に加え、『いきなり見知らぬ世界に連れてこられた挙げ句、世界を救って欲しいと言う無理難題を押し付けられた事』や『元の世界に帰れるのか』と言う不安を抱えていた事もあって、情緒不安定な面を見せる事が度々あった。

2人はデジタルワールドの冒険に於いても、度々揉めてしまう事もあったが、パートナーデジモンであるコロナモンやルナモン、そして同じ様に出会った香澄達の助けや支えもあって、最終的に和解した。

その後、デジタルワールドの冒険を終えて戻って来た2人は、まるで今までの空白を埋めるかの様に、今まで以上の仲の良い関係となっていた。

しかし、その関係に再び変化が訪れたのは、高校生になってからの事だった。

それは2人が高校1年の時の事。

その日2人は、日菜の提案で外に出掛けたのだが、その道中で柄の

悪い男達に絡まれた。

その時は何とか撒いたのだが、去り際に男達の1人がこんな言葉を吐き捨てたのだった。

『うわあ……君達2人共、姉妹でそんな関係なの？ 気持ち悪いわ』
『女は男に抱かれてナンボってもんだろ！』

あの時は怒りで気にも止めなかったのだが、男達を撒いた後に気持ちが悪く落ち着いた途端、急に周囲の人間の視線に恐怖を感じてしまい、結局様子を察した日菜と共に、2人は帰宅した。

その後、日菜がパスペレの一員として芸能界デビューをした際、紗夜も喜んだ反面、過去の一件から不安な面を抱いていた。

（日菜は良くも悪くも純粋な子。でも若し私の『この想い』が原因で、日菜が傷付けてしまったら……）

日菜が良くもない輩の悪意に傷付き、壊されてしまう事は、紗夜にとって耐えられなかった。

だから紗夜は、自身の中の『日菜への想い』を封印しようとした（最も、ルナモンには直ぐにバレてしまったと言うのもあったが）。

（日菜の幸せな様子は、私にとっての幸せ。私が今まで傷付けてしまった分、あの子には幸せでいて欲しいの。その為なら、私は……！）

「御姉ちゃん！ 早く〜！」

「え、ええ！」

日菜の言葉で我に帰った紗夜は、直ぐに彼女の後を追って掛けていく。

(紗夜……。 紗夜だって、幸せになっても良いのに……)

ルナモンも複雑な表情を見せるも、直ぐに気を取り直して駆けて行ったのだった。

☆☆

「ようこそ。 当館にお出でいただき、誠に有り難う御座います」

暫く歩き続けて、漸く目的地である旅館に辿り着いた2人は受付で手続きを済ませると、指定された部屋へ向かう。

そして部屋に着くと、2人は自分達の荷物を置き、ゆっくり寛いだ。

「大きい部屋だね！ 御姉ちゃん！」

「そうね……」

『如何したんだ紗夜？ 調子悪いのか？』

「いえ……何でも無いわ」

コロナモンからの問い掛けに、紗夜は少し歯切れが悪そうな様子で答える。

「ねえ御姉ちゃん！ 一緒に温泉入ろう！」

「え、でも……」

「旅行に来て温泉に入ら無い何て損だよ！ さあ行こう！」

「ちよ……日菜ってば！」

紗夜は入浴の道具を準備して、日菜に半ば強引に誘われる形で彼女の後を追った。

☆☆

「うくん。 やっぱり旅行の醍醐味と言えば、温泉だね〜！」
「ええ……そうね」

日菜の言葉に紗夜も、静かに同調の意を示す。

(日菜……大きくなったわね)

紗夜は日菜まじまじと見ながら思う。

身長は自分より少し低いけれど、タオル越しから覗かせるその裸体は、多少の幼さを残しつつ、全体的にすっきり『女性』としての丸みを帯びた体となっていた。

「きゃ〜御姉ちゃん、エッチ〜♪」

「だ、誰が『エッチ』よ!」

紗夜は自身の中の煩惱を必死に抑えようと、内心で素数を数えた。

そして気持ちがある程度落ち着いていた紗夜は、そのまま温泉に浸かった。

「ふう……」

一息付いて紗夜は、天を見る。

〃『でもそれじゃあ、紗夜が可愛そうよ……』〃

(……何を弱気になっっているのよ。私は日菜の幸せの為なら、『この想い』を封をするって決めたのに……！)

紗夜は厳しく自身に言い聞かせる。

「ねえ、御姉ちゃん」

「日菜……！」

次の瞬間、日菜の唇が紗夜の唇と重なった。

やがて唇が離れ、紗夜は突然の事に呆然とし、日菜はゆつくりと口を開く。

「御免ね御姉ちゃん。突然こんな事をしちやって……。私、本当は気付いていたんだ。御姉ちゃんが『何かに悩んでいる事』に……」

日菜は更に言葉を続ける。

『私、御姉ちゃんに何か悪い事しちやったのかな？』、『御姉ちゃんは私の事、本当はもう嫌いになったのかな？』……そんな気持ちを抱きながら、この日まで過ごしていたの……」

「日菜……」

パートナーデジモン達と再会してから、日菜自身、其処まで思い悩んでいる様子を見せた事がなかった為、紗夜は驚いていた。

「私……悔しくて、苦しかった。折角『あの冒険』で御姉ちゃんと仲直り出来たのに……御姉ちゃんの苦しむ姿を助けて上げられない自分が嫌で……ついこんな乱暴な事しちゃった……」

「違うわ日菜！ 貴女は……！」
「……本当に御免ね」

日菜は浴槽から出ると、頭だけ軽くシャンプーで洗い、その場を後にした。

（日菜……違うの。 貴女は何も悪くない。 悪いのは……私の弱さなの）

本心を伝えられずにすれ違ってしまった事への後悔を前に、紗夜は静かに涙を流した。

☆☆

『日菜、落ち着いたか？』

「まあ……ある程度はね」

『俺も日菜と一緒に謝る！ だから……そんな悲しそうな顔はしないでくれよ……』

あの後温泉から上がった日菜は、自身のスマホと財布、コロナモンの入ったデューアークと共に、少し遠くの森の中に来ていた。

「……私、また同じ過ちを繰り返しちゃった」

日菜は続ける。

「前の冒険の時も……御姉ちゃんの気持ちを分かっていたのに、ちゃんと向き合わなかった所為で、御姉ちゃんにあんな『残酷な罪』を背負わせてちゃった……」

日菜の脳裏に、過去の記憶が蘇る。

『イヤアアアアアアアアアー!! ルナモン! ルナモーン!』

『あの時の紗夜』の悲痛な様子を、日菜は今でもはっきりと覚えている。

だからこそ、日菜は『あの冒険』で紗夜と和解して移行、『自分とは違う相手や周囲の状況を考えない発言や行動をしてしまう』事を多い自身なりに、『紗夜の気持ちだけは理解し合える様になりたい』と、少しずつ努力を重ねて行った。

その中で芽生えていった『紗夜への本当の想い』。

日菜はそれを受け入れ、紗夜に歩み寄ろうとしていた。

「……結局、私の独り善がりだったのかな?」

『……そんな事言うなよ』

日菜の言葉に、コロナモンが口を開く。

『俺は不器用だから上手く説明する事何て出来ねえけど……でも、これだけははっきり言えるぜ。日菜、お前はあの時と比べてちゃんと心身共に成長しているぞ』

「コロナモン……」

『確かに姉ちゃんである紗夜と比べりや、短い付き合いかもしれないけど……日菜の事は大切に想う気持ちは誰にも負けてねえぞ』

日菜はコロナモンの言葉に、大きく目を見開いた儘、聞いている。

『だから日菜。明るく元気な様子でいてくれよ。若し崩れそうなら、俺も一緒に支えてやるからよ』

「……有り難う。 コロナモン」

日菜の言葉にコロナモンも微笑む。

意を決した日菜が紗夜達の所に戻ろうと一步踏み出したその時だった。

キユオオオ!!

「! キヤア!」

突然、何処からともなく現れた無数の糸の様な物が日菜の体を縛り上げた。

『何だこの糸!?!』

「コロナモン……キヤツ!」

日菜はコロナモンをリアライズしようとしたが、更に飛んできた糸に弾かれ、自身のディーアークを落としてしまう。

『日菜!・ 日菜!』

「コロナ……モン……キヤアアアア!!」

『日菜!』

コロナモンの叫びも虚しく、無数の糸に拘束された日菜は強力な力に引つ張られ、そのまま森の更に深い所に姿を消したのだった。

☆☆

「日菜、いるかしら？」

温泉から上がった紗夜が部屋に戻るも、其処に日菜の姿は無かった。

「いないわね……」

『紗夜、探してみましよう』

「でも……私は……」

『……紗夜の気持ちも分かるわ。でも若し今放置してたら、後悔するよ』

「……そうね。有り難うルナモン」

ルナモンの言葉に、紗夜は意を決すると直ぐに着替えを済ませて、日菜の搜索に当たるのであった。

館内を捜すもない事を確認した紗夜は旅館の外へ出て、搜索の範囲を広げる。

「駄目……見付からないよ」

「スマホにも連絡したけど……全く繋がらないわ」

紗夜とルナモンは途方に暮れた様子を見せる。

『……！ ……！』

「あれ？」

ルナモンの長い耳が、ピンと立った。

「ルナモン？」

「今、微かに何か聞こえたわ」

ルナモンの言葉を信じ、紗夜も黙って耳を傾けた。

『……夜！ ……モン！ 紗夜！ ルナモン！』

「コロナモンの声だわ……！」

「こっちだわ！」

ルナモンが声の聞こえる方に先行し、紗夜もその後を追って向かう。

「あれは……！」

紗夜とルナモンが見付けたのは、日菜の持つライトイエローの縁取りのデューアークだった。

「コロナモン！ 大丈夫!？」

『！ 紗夜！ ルナモン！』

紗夜は日菜のデューアークを起動させ、コロナモンをリアライズさせる。

「何があったの？」

「済まねえ……！　日菜が……日菜が攫われた！」

「日菜が……!?!」

紗夜はコロナモンの言葉に、動揺を隠さずに詰め寄る。

「日菜は……日菜は大丈夫なの!?!」

「分からねえ……！　突然の不意打ちと物凄え不快感に襲われちゃって、まともに戦えもしなかった……！　俺が付いていながら、情けねえぜ……!?!」

紗夜はその場に崩れ落ちた。

「私の所為だわ……。　あの時私があの子の気持ちにちゃんと向き合っていたら……!?!」

「落ち着いて紗夜！　コロナモン。　さつきその相手と遭遇した時、他に変わった様子は感じなかった？」

ルナモンの言葉にコロナモンは、自身の頭を稼働して思い出す。

「そう言えば……アイツにあった時、鈴の音がしてたんだよ。　そっから急に物凄え不快感に襲われちゃったんだ」

「鈴の音……」

ルナモンは少し思案した後、紗夜に呼び掛ける。

「紗夜！　……？　紗夜！」

「日菜……日菜……」

ルナモンの呼び掛けに何の反応も示さず、紗夜は小さく日菜の名前を呼ぶだけであった。

「……………！ ティアーシュート！」

次の瞬間、意を決したルナモンは紗夜の顔に向けて水球を放つ。

紗夜は水球で濡れた顔のまま、ルナモンを茫然と見ている。

「ルナモン……………？」

「少しは頭が冷えた？ そんな所でポーツとしていたって、日菜が戻って来る訳が無いでしょ。今日菜を助けられるのは、紗夜だけのよー！」

「……………でも私、あの子の『私への気持ち』……………拒絶しちゃって……………」

「私は『恋愛』に対しては、あんまり良いアドバイスは出来ない。けど、これだけはハッキリと言うわ。紗夜の本当の気持ちは如何なの？」

「私の本当の気持ち……………？」

「言っておくけど、『世間体』とかそう言うのは今は無しだからね」

ルナモンの言葉に紗夜は考える。

(私にとっての日菜……………)

紗夜の脳裏に浮かぶのは、今までの人生の中での日菜との思い出。

それを思い出す度に、露わになっていく『本当の思い』。

日菜の幸せを想い、ずっと押し殺していた気持ち。

ふと周りの風景が、黒一色に染まる。

『御姉ちゃーん！』

無数の黒い糸に何重にも拘束される日菜と、彼女に伸びてくる黒い手。

『……日菜——！』

紗夜は駆け出す。

そして手に所持していた嘗て扱った事のある武器（ハーケン）を振るい、日菜を拘束していた糸と伸びてくる黒い手を切り裂く。

『御姉ちゃあん……』

一糸纏わぬ姿の日菜を、同じく一糸纏わぬ姿となっていた紗夜は優しく受け止める。

（私は……もう逃げない……！）

眩い光が2人を包み込んだ。

数分経って、紗夜は口を開いた。

「私は……日菜の事が……好き……！ 『妹』としても、『1人の女性』としても……愛しているわ！」

紗夜の真剣な眼差しと強い意志の籠もった言葉を、ルナモンはただ黙って見ている。

「御免なさいルナモン。そして有り難う。私はこの気持ちを偽る事はしないわ。だから、力を貸してくれる？」

「紗夜。 私は紗夜のパートナーデジモンよ。 何時如何なる時も、私は紗夜の傍にいるわ」

紗夜はルナモンの言葉を受けて立ち上がる。

「行くわよルナモン！」

「ええ！」

「あつ！ 俺を置いてかないでくれよー！」

そのまま3人は駆け出して行った。

☆☆

「ん……んうう……？」

日菜は暫くして意識を取り戻した。

「此処は……？」

体を思う様に動かせない事に気づき、視線を向けると自身の体が太い糸で何重にも縛られているのに気付いた。

「これは……」

その時、重い足音が耳に届いたので、振り向くと其処には、上半身は牛、下半身が蜘蛛の様な見た目の巨大な異形の姿が存在していた。

(デジモン……！)

日菜は咄嗟に身構えるが、身動きが取れない上に相棒のコロナモンはディーアークと共に今はこの場にいない為に、日菜は打つ手無しが無い状況であった。

その時、足に何かが当たる感触を覚え、其方に視線を向けた日菜は息を呑んだ。

彼女の足に当たった物……それは、頭部の人骨だった。

「ルフォフォ……オンナ……ヒサシブリ……！」

目の前のデジモンの言葉に、日菜は大方の背景を察した。

恐らくこのデジモンは人間界に来た時から、自分と同じ様に迷い込んだ人間を捕らえて、その身体を貪り尽くしていたのだろう。

(……何だか、『冒険してた頃』を思い出すなあ……)

日菜は内心で呟く。

日菜自身、デジタルワールドでの冒険と戦いを共に経験した他の4人と同様、『死』に対してはある程度達観している面があった。

若し今の日菜に心残りしている事があるとすれば、それは唯一つ。

(御姉ちゃんと仲直りしたかったな……)

最もそれも叶わないだろうと自嘲し、日菜は抵抗を諦めて目を閉じる。

異形の大きな右手が、日菜に目掛けて伸びようとした。

「ティアーアロー！」

その時、何処からともなく、美しい氷の矢が飛んできて、敵のボディに命中する。

「今の……「日菜ー！」御姉ちゃん！」

日菜が視線を向けた先には、レキスモンと紗夜、コロナモンが此方に向かってくる姿があった。

「ヴオオオ……！」

相手のデジモンは、荒々しいで視線を紗夜達に移す。

「ギユウキモン。完全体。魔獣型デジモン。ウイルス種。必殺技は八束染縛（やつかせんばく）に魔塵瓢箪（まじんびょうたん）、千砲土蜘蛛（せんほうつちぐも）……」

紗夜は自身のティアーアークでギユウキモンの情報を調べる。

「紗夜！ 此処は私に任せて日菜を！」

「分かったわ！」

レキスモンに促され、紗夜とコロナモンは日菜の下へ向かって行

く。

「ヴオオ……「ティアーアロー！」 ヴオ!？」

紗夜とコロナモンを狙おうとしたギユウキモンであったが、即座にレキスモンが氷の矢を放って牽制する。

「貴方の相手は私よ！」

レキスモンはそのまま、ギユウキモンと交戦を再開し始める。

「日菜！・ 大丈夫!？」

「日菜、少し待ってろよ……!？」

一方日菜の下へ駆け寄った紗夜とコロナモンは、彼女を拘束する何重もの太い糸を協力して解き、日菜を開放する。

「御姉ちゃん……!？」

彼女の無事を確認し、2人は安堵を浮かべる。

「キャアアア……!？」

悲鳴の方を振り向くと、レキスモンが吹っ飛ばされる姿があった。

「レキスモン!？」

「! 日菜!？」

「う、うん……!？」

— EVOLUTION

「コロナモン進化！ ファイラモン！」

コロナモンは進化するとレキスモンの下へ加勢に行く。

「日菜、こっちを向きなさい」

紗夜の声に日菜の体がビクンと跳ね、彼女は恐る恐る体を向ける。

そして振り向いた次の瞬間——日菜は紗夜に抱き締められていた。

「御姉……ちゃん？」

「御免なさい。でも聞いて欲しいの」

紗夜は続けて語る。

「正直に言うところの気持ちを自覚した時、私は怖かったわ。女の子である事に加えて、実の妹である貴女をそんな目で見てしまっただけで自分が。それによって周囲から貴女が差別や迫害を受けてしまう事が……とても怖かった。傷付くのは私だけで充分だし、何より……貴女には幸せになって欲しいと思って、この気持ちをずっと封印するつもりだった。だからさっきの温泉での貴女の行動にもつい乱暴に対応してしまったの」

でもね、と紗夜は更に続ける。

「貴女が行方不明になって……探しても見付からない中で、私の心の中に後悔と同時に堪えられない程、貴女への想いがどんどん強くなっ

ていて……『ああ。私はこんなに貴女の事が大事なんだなあ』って
思えた。 日菜、今この場で伝えるわ」

紗夜は改めて日菜と真正面に向き合い、口を開く。

「私、氷川紗夜は……氷川日菜をこの世の誰よりも愛しています」

日菜は紗夜の言葉に大きく目を見開き、恐る恐る問い掛ける。

「御姉……ちゃん。冗談じゃないよね？」

「この状況の中、冗談や嘘でこんな事を言う訳無いでしょ？」

その言葉に日菜の目から、涙が流れてくる。

「わた……っ！ ……私も、御姉ちゃんが好き……！ 愛してる……
！ これから……も……御姉ちゃんと……一緒にいたい！」

日菜は涙と嗚咽混じりになりながらも、自身の気持ちを伝える。

「御免なさい日菜……。 私が臆病だった所為で、貴女には辛い想いを
させてしまったわね……」

「そんな事無いよ……！ 御姉ちゃんは私の為を想ってたから、あんな
様子だったんでしょ？ 御姉ちゃんは……この世で1番大切に
……最高の御姉ちゃんだもん！」

日菜の言葉に、紗夜は目頭が熱くなるのを抑える。

「ウワアア（キヤアア）ー！」

2人が振り向くと、其処には倒れるファイラモンとレキスモン、そして獰猛な笑みを浮かべるギユウキモンの姿が映った。

「レキスモン！」

「ファイラモン！」

するとギユウキモンは標的を紗夜と日菜に定め、右腕を伸ばそうとし、紗夜は日菜を守ろうとする。

「ティアーアロー！」

「ファイラボム！」

その時、ギユウキモンの右腕に強い衝撃が走り、視線を向けると其処には辛うじて立っている状態のファイラモンとレキスモンの姿があった。

「ハアハア……ハア……2人の幸せを……壊させはしねえぞ……！」

「紗夜達は……ハア……私達が……守るわ！」

「……御姉ちゃん」

「ええ」

紗夜と日菜はそれぞれのパートナーの隣に立つ。

「有り難う2人共。あなた達のお陰で私は漸く本当の気持ちと向き合い、答えを見付けられたわ」

「ヴオヴオヴオ……！」

「ギユウキモン！ 私達の本当の力、見せてあげるよ！」

「ヴオオオオオー！」

「行くよ、御姉ちゃん！」

「ええ！」

「やるわよ！ ファイラモン！」

「ああ！」

— MATRIX EVOLUTION —

その文字が紗夜と日菜のデューアークの画面に表示され、同時にデューアークが光を放ち、その輝きに呼応してファイラモンとレキシモンが光に包まれる。

「ファイラモン（レキシモン）、超進化！」

光に包まれた2体の姿が変化していく。

ファイラモンの方は体が一回り大きくなり、威風堂々とした鬣を蓄えた逞しい物へと姿を変えていく。

そしてレキシモンの方も仮面と甲冑を纏い、左腕に三日月の意匠が施された盾、右手にもハーケンが装備されていく。

「フレアモン！」

「クレシエモン！」

やがて光が収まると、其処には仲間のためにはどんな困難にも立ち向

かう心の強さを持った二足歩行の獣人と、より一層美しくなった見た目の魔人の姿が現れた。

「ヴオオオオー！」

激昂したギユウキモンは左腕に装備された大筒をぶつ放そうするも、先にそれを察知したフレアモンとクレシエモンはそれぞれのティマーを守る様に抱き締めながら砲撃を回避すると、即座に空いた穴から外へ脱出する。

一方ギユウキモンも、直ぐに2体の後を追って這い出てくる。

「2人は下がって！」

「此処なら、存分に戦えるぜ！」

「ヴオオオオー！」

そして戦闘が再開する。

お互いに完全体と言う事もあつてか、そのぶつかり合いは激しく、紗夜と日菜の体にもそれぞれのパートナーの戦闘ダメージが反映されて、傷が付いていく。

「クツ……！ あの巨体に似合わず、随分器用に動く……！」

「悔しいけど……状況は此方の方が不利ね……！」

本領を發揮して戦っているフレアモンとクレシエモンも、一方的な物と化したギユウキモンの攻撃に苦戦を強いられていた。

「御姉ちゃん……！」

（あの一方的な攻撃の絡繰りを如何にかしない限り、此方に勝ち目は

無いわ)

紗夜は冷静に状況を見ながら内心思案し、目を見開く。

「日菜」

「……！」

紗夜は日菜に視線を向けると、日菜も紗夜の言いたい事を察して頷いた。

「クレシエモン（フレアモン）！」

クレシエモン達は紗夜達の方に視線を向けると、2人の目を見て察した。

「フレアモン！」

「分かった！」

その隙を付く様に、ギユウキモンが左腕の大筒から攻撃を放つ。

「紅蓮獣王波！」

フレアモンは拳に獅子の鬨気と火炎を集中させて作った獅子を象ったエネルギー波を放ち、ギユウキモンの攻撃を相殺する。

それによって発生した煙幕が、互いの姿を隠す。

「ヴオオ……！」

「喰らえー！」

ギユウキモンの真正面から、フレアモンが突撃をしようと現れる。

ギユウキモンも下半身の口部を開いて対応しようとする。

「ダークアーチエリー！」

その時、突然反対側から飛んで来た漆黒の矢が、ギユウキモンの右側の角の先にぶら下げた鈴を破壊した。

「ヴオオ!?」

「紅蓮獣王波！」

ギユウキモンは突然の事に動きを止め、その隙にフレアモンが獅子を象ったエネルギー波を放ち、もう片方の角の先にぶら下げた鈴を破壊した。

「ヴオオオオ!?」

「貴方の角の先の鈴は攻撃の時のみ、音を発する。それによって発生する不協和音が私達の感覚を狂わせていた……。だから貴方の攻撃を一方的な物にして有利な状況にしていた……」

「これでお前の無敵の絡繰りも使えないな」

「ヴヴヴ……！」

「今度は私達のターンよ！」

「倍返しにさせてもらう！」

「ヴオオオオオー！」

ギユウキモンは左腕の砲台から砲弾を放つが、先程のギリギリだった時とは違い、フレアモンとクレシエモンも余裕を持って交わす。

「ルナティックダンス！」

クレシエモンは舞う様なステップで間合いを詰め、両手に持った武器――『ノワ・ルーナ（ラテン語の『新月』）』を使った斬撃をギユウキモンに浴びせる。

「グオオオオ!? グオオ……!」

ギユウキモンは体勢を何とか立て直すと、下半身の口部を開いて攻撃をしようする。

「紅蓮獣王波!」

しかし、それより先にフレアモンが獅子を象ったエネルギー波を放ち、下半身の口部を封じる。

「ヴオ……ヴオ……!」「こつちよ!」!

ギユウキモンが視線を向けると、其処には『ノワ・ルーナ』を1つに組み合わせ、ボウガンのような形態に変化させて構えるクレシエモンの姿があった。

「アイスアーチェリー!」

「ヴオオオオ!?!」

其処から氷の矢がギユウキモンの眉間を貫通し、ギユウキモンの体を凍結させて、巨大な氷像と化した。

「フレアモン!」

「止めだ! 清々之……咆哮! ウオオオオ!」

フレアモンが自身の火炎によって浄化力を込めた衝撃波を、咆哮と

共に口部から放つ。

直撃を受けたギユウキモンは自身の最期を理解する事無く、粉々になって、静かにデータの粒子と化して霧散したのだった。

ギユウキモンが完全に消滅したのを見たフレアモンとクレシエモンは再び光に包まれ、元のコロナモンとルナモンに戻る。

「コロナモン（ルナモン）！」

其処へ紗夜と日菜が駆け寄って来る。

「つ……疲れた……」

「有り難うコロナモン……」

「ルナモンもお疲れ様」

「紗夜……ボロボロだね」

「それは……お互い様でしょ」

「でも……何だか良い表情してるわ」

「……有り難うルナモン」

「見て御姉ちゃん！」

日菜の言葉に紗夜とルナモンが空を見上げると、其処には大きくて綺麗な満月が浮かんでいるのが見えた。

「綺麗ね……」

「うん……」

満月の神秘的な雰囲気と光が、まるで戦いを終えた紗夜とルナモン、日菜とコロナモンの2組を優しく労る様に照らしていた。

☆☆

チュンチュン……チュンチュン

「んう……」

鳥の囀りと明るい日差しの刺激で、ベッドで眠っていた紗夜の意識が覚醒する。

「此処は……「御姉ちゃん」？」

隣を見ると其処には、一糸纏わぬ姿の日菜の姿があった。

「日菜……？」

ふと見てみると、自身も日菜と同様に、一糸纏わぬ姿である事に気付く。

それと同時に、紗夜の脳裏に昨日の記憶が蘇ってくる。

(そうだわ……。あの後、旅館に戻った私達は食事を済ませた後、で再び温泉に浸かって……。その後、日菜の提案で一緒のベッドに寝て……)

その後の事を思い出し、紗夜の顔が真っ赤に染まる。

「アハハ。御姉ちゃんってば、真っ赤な顔して『るんっ♪』てする程可愛い！」

日菜の発言に、紗夜は慌て布団を体に掛ける。

「ふふふ……。私も御姉ちゃんと思いつ切り『あ〜んな事』や『こんな事』したりで、結構楽しかったもん！」
「い……。言わないで……。／＼」

紗夜は昨日の夜の様子を更に意識してしまい、恥ずかしさのあまり顔がより一層と紅潮していつていた。

「でも、嬉しかったよ」

不意に背中越しに温もりを感じて振り返ると、同じく布団に入り込んだ日菜が此方を見ている。

「私の心や体に、御姉ちゃんの愛情がいっぱい注ぎ込まれていくのが分かって、本当に御姉ちゃんの妹であり、恋人になれて良かったもん」
「日菜……」

「御姉ちゃん。私はもう、御姉ちゃん無しでは生きていけない。だから……。連れてって。御姉ちゃんの世界へ。私、御姉ちゃんやコロナモン達と一緒になら、どんな所にだって付いていくよ」
「……。日菜。この世界は常に残酷よ。全ての人が私達の間接関係を認めてくれるとは限らない。これから先、迫害や差別を受ける事だつて、あるかもしれないわ。それに私だって、結構歪みのある人間よ。そんな私でも、本当にいいの?」

「覚悟はとつくに出来ているよ。私はどんな時でも、御姉ちゃんを愛して、信じているよ」

そう語り終えると、2人はお互いの唇を重ね合わせ、絡み合う

『私、決めたわ。紗夜と日菜、2人と2人の幸せの為に、私自身の全

てを捧げて守りたい。 コロナモン、貴方は如何？」

『愚問って奴だな。 俺も2人が信じて選んだ道を全力で支えるぜ』

『……コロナモンの口から、『愚問』って言葉が出たのは意外ね……』

『ウオイ!? 其処は普通、格好良い雰囲気で締めるだろ!』

そんな2体のパートナーデジモンの会話を余所に、紗夜と日菜は暫く甘い時間を過ごしていた。

☆☆

そして残りの旅行期間を楽しんだ2人は、丁度今旅館をチェックアウトして、帰路に立っていた。

「ううーん、楽しかったー!」

「温泉や旅館の食事に景色……何だか名残惜しいぜ……」

日菜とコロナモンの様子に、紗夜とルナモンはほっこりとした様子で見ている。

「あっ! そーだ!」

すると日菜は紗夜に近付き、左手を差し出し、紗夜は首を傾げる。

「手だよ手! 恋人繋ぎしよ!」

その言葉に、紗夜は自身の右手を出し、日菜の左手を掴んだ。

「えへへ〜♪」

「それで日菜、どっちの方向に行くの?」

「東！」

日菜は即答で答える。

「……如何してかしら？」

「お日様が昇る方向だから！」

「……分かったわ」

その時、太陽の日差しが強くなった事に気づき、2人と彼女達のパートナーデジモンは、日差しに視線を向ける。

その瞬間、4人の瞳に黄金に輝く人型の『何か』が一瞬だけ写る。

「あれは……」

しかし次の瞬間には、その『何か』はスーッと消えていった。

「御姉ちゃん……今の見た？」

「ええ……」

「……あれって、『神様』か？」

「でも……綺麗だったなあ」

そしてその瞬間、日菜は弾けた。

「……『るんっ♪』て来た〜〜！」

「日菜!？」

「行こう御姉ちゃん！」

「ちよ……ちよつと待ちなさ〜い！」

そして2人と2体のパートナーデジモンは、その儘駆け出して行った。

その様子を、太陽がまるで2人の幸せな関係と信じる道を突き進む姿を、祝福している様に見えるのだった。